つながりという豊穣さ

―「はじめに」に代えて―

牧野 篤

岸田國士に「飯田の町に寄す」と題する詩がある。

飯田　　美しき町
山ちかく　水にのぞみ
空あかるく風にほやかなる町

に始まるこの詩は，飯田の風景と人情を歌いながら，最後の節へと駆け上っていく。そこにはまた，岸田の飯田に寄せる思いが込められているといってよいであろう。

飯田　　天竜と赤石の娘
おんみ　さかしくみめよく育ちたれど
いま　新しき時代に生きんとす
よそほひはかたちにあらず
美しく　　静かに
ゆかしく　豊かに
おんみの心をこそ　新しくよそほひたまへ

（1947 年 6 月 26 日　飯田市報第 1 号）

1947 年 4 月 20 日，飯田は市街地の 7 割を焼失する大火に見舞われた。岸田のこの詩は，この大火などまったくなかったかのように扱いながら，うるわしい自然の中で，伝統を守って生きる人々に，人の手がつくった構造物などたいしたことはないのだといわんばかりに，新たな希望に向けて歩み出すことを願っている。

この年の前年，当時の文部省は，戦争で疲弊した人心を恢復し，荒廃した国土の復興のために，「郷土」を重視し，その振興の中核機関として公民館の設置を提起した。そこでは，公民館はこう位置づけられている。

「公民館は社会教育機関である」「公民館は社会娯楽機関である」「公民館は町村自治振興の機関である」「公民館は産業振興の機関である」「公民館は新しい時代に処すべき青年の育成に最も関心を持つ機関である」「要するに公民館は社会教育，社交娯楽，自治振興，産業振興，青

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

年育成の目的を総合して成立する地域の中核機関である」。(寺中作雄『公民館の建設』，1946年)

公民館は地域住民が，学び，交流し，つながって，自治を鍛え，産業を振興し，次世代を育成していく中核「機関」として構想され，新たな時代の希望を紡ぎだそうとしていた人々を，その地域におけるアクターとして，鼓舞するものであった。

1929年の世界恐慌以降，生糸産業が大打撃を受け，国策に乗って分村という形で大規模な満蒙開拓団を送り出し，結果的に辛酸をなめることになった飯田・下伊那の人々の心に，公民館は，新たな郷土づくりへの思いの火を灯すことになったに違いない。そして，飯田の人々は，それこそ愚直に，この公民館の構想を守り，今日，飯田型公民館と呼ばれるような仕組みをつくってきたのだといえる。それは，いわゆる文化教養の殿堂としての施設ではなく，機関つまり機能であり，主役は飽くまで住民であり，行政職員が公民館主事として住民を支えつつ，住民の学習と交流を通して自治を鍛え，それが地元のまちづくりにつながって，小さな経済を興し，人々の生活を安定させるという「つながり」を基本とした郷土振興の核となるものであった。

それはまた，「新たなよそほひ」を実現していくものとしてあったといってよいだろう。

飯田を含めた下伊那地方は，また伊那谷に深く抱かれた土地でもある。谷は，森を抜けて，山の栄養を海につなげることで，豊かな海の恵みをもたらしてくれるものとしてある。そして谷はまた様々なものを沈殿させ，融合し，発酵させて，新たな文化を生み出す場所としてもある。この土地にある「風土」という言葉には，自らを「土」にたとえ，谷にへばりついて生きていながらも，常に「風」を感じ，外来の文化を喜び，外来の人をもてなし，その人々がもたらす文化や技術を独自に発展させる豊穣さを人々，つまり「土」が持っている，そういう寡黙な人々のひらかれた生活の営みを示す力がある。

谷は決して閉鎖的な空間などではなく，「風」をまちながら，風がもたらす恵みを沈殿させて，発酵させ，豊かな「土」をつくりだし，その「土」が「水」によって運ばれることで，海にそして多くの土地に豊かな恵みをもたらしてくれる。谷は外と，閉じられながらつながっているのである。

これらはまた人々の生活の営みの姿そのものであり，その営みの中で，人々は常に変化し続けながら，その変化の中にこそ変わらないものを営々と積み上げ，引き継いでいく。本来的な意味での不易流行であり，変化し続けることこそが変わらないことでもあるという，谷の本質を，生活が体現することになる。

この谷の本質とは「つながり」そのものであり，つながりそれそのものが変化しつつも，つながっていることで変わらない，つまりつながり続けることで変わり続ける谷の在り方を表象するものとして存在する。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

その「つながり」の中には，飯田に生きる人々の，過去から未来へとつながる思いが沈殿し，その思いを受け継ぐことで，さらに次の世代へとそれをつなげていこうとする営みが組み込まれている。そこでは人は，いまに生きながらも，過去そして未来とつながっている。

飯田を訪れて，私たちがその人々の「よそほひ」に魅せられるのは，その「よそほひ」こそが私たちをも含み込んだ在り方として，常に変わり続け，そこに私たち自身が巻き込まれていくからなのではないだろうか。岸田は上記の詩の中で，次のようにいう。

飯田　ゆたかなる町
財に貴賤あれども
身に貴賤ありとおぼへず
一什一器かりそめになく
老若男女，みなそれぞれに詩と哲学とをもつ町

さらにこう続ける。

家々みな奥深きものをつゝみ

「よそほひはかたちにあらず」なのである。

社会教育学ゼミの調査実習で飯田にお世話になって 6 年になる。今年度の実習で学生たちが惹きつけられたのは「つながり」であった。それはまた，岸田のいう「よそほひ」であり，静かで，ゆかしく，それでいて豊かで，美しく，さらに新たなものへと動き続けないではいないものとして，そこにある。それは，「土」としてとどまっていながらも，「風」を受け入れ，縦横無尽に地下茎をはりめぐらせ，人を結びつけないではいない。そこでは，人々は図らずも当事者となって，自分の生を楽しんでいる。こういう豊穣性として，それはある。
この豊穣性を明らかにしようとしたのが，今年の実習報告書である。学生たちは飯田に触れることで，自分の豊かさに気づき，その豊かさに触発されるかのようにして，飯田訪問を繰り返し，その内実を明らかにしようと試みてきた。それはまた，彼ら自身が新たな自分へと自分の「よそほひ」を豊かにし続ける営みでもあった。
私たちはこの報告書をこう受けとめている。

今年度も，私たちの思いを受けとめて，学生を受け入れ，楽しく豊かな生活を共にして下さった飯田市民の皆さん，学生たちのために受け入れプログラムの準備をして下さった飯田市役所の皆さん，そして学生たちの要望を聞き入れて様々な場面でお力添えを下さった飯田市役所総合政

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

策課・長谷川裕介さんに心からの感謝を申し上げる。この報告書が，皆さんの思いにどこまで応えることができているのか，忌憚のないご意見をお願いしたい。

ありがとうございました。そして，今後ともよろしくお願いいたします。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

―目次―

つながりという豊穣さ..... i

調査実習の概要..... 1

序 4

〈第Ⅰ部　“飯田”の市民活動の源流〉

第 1 章　下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方 8
1.1　はじめに
1.2　下伊那テーゼとは
1.3　下伊那テーゼ作成の背景
1.4　下伊那テーゼの見つめ直し
1.5　飯田型公民館活動の伝播
1.6　おわりに

第 2 章　プロとアマチュアの交流が市民の心を育てる飯田の人形劇 17
2.1　はじめに
2.2　飯田の人形劇文化の概要
2.3　本報告書について
2.4　飯田におけるプロの人形劇人の活躍
2.5　プロとアマチュアをつなぐ存在
2.6　おわりに

第 3 章　飯田市美術博物館が作る“飯田”というつながり 28
3.1　はじめに
3.2　研究の方法
3.3　地域住民の主体的な活動の場としての美術博物館
3.4　地域住民へ広くふるさと意識を伝えていく場としての美術博物館
3.5　リニア時代をどう迎えるか
3.6　まとめ
3.7　おわりに

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 4 章　飯田の文化活動を支えるもの..... 44
4.1　はじめに
4.2　「オーケストラと友に音楽祭」までの歩み
4.3　飯田の文化活動を支える意識とは何か
4.4　おわりに

第 5 章　りんご並木まちづくりネットワークに所属する団体やその活動の将来像にみる“飯田”というつながり 55
5.1　はじめに
5.2　本研究の問いと本研究の目標
5.3　調査概要および調査結果
5.4　まとめと考察　～筆者が思う，“飯田”というつながり～
5.5　おわりに

〈第Ⅱ部　“飯田”の教育・行政〉

第 1 章　飯田 OIDE 長姫高校における地域人教育の広がる素地 70
1.1　問題関心
1.2　調査方法
1.3　考察
1.4　まとめ

第 2 章　リニア中央新幹線開通を見据えた地域人教育の在り方 76
2.1　はじめに
2.2　調査概要
2.3　調査結果
2.4　考察
2.5　終わりに

第 3 章　職業高校における地域人教育とその影響 79
3.1　はじめに
3.2　地域人教育について
3.3　類似する事例との比較
3.4　調査の概要
3.5　調査結果
3.6　考察

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 4 章　進学校における地域意識 102
4.1　はじめに
4.2　先行研究
4.3　調査の概要
4.4　調査結果
4.5　まとめ
第 5 章　U ターン就職された市役所職員へのインタビューと，ムトス飯田事業について 114
5.1　はじめに
5.2　U ターン就職された職員へのインタビュー
5.3　ムトス飯田事業
5.4　まちづくりの広まり
5.5　考察
5.6　終わりに
第 6 章　住民の自主自立の時代に向けての市役所のあり方.....121
6.1　はじめに
6.2　飯田市自治基本条例
6.3　市役所の取り組み
6.4　飯田のこれからの姿，それに向けた活動の方向性の考え方
6.5　市役所のこれから
6.6　終わりに
第 7 章　中山間地域振興について 130
7.1　はじめに
7.2　飯田市の財政状況と方針
7.3　中山間地域振興について
7.4　上村・下栗の里
7.5　まとめ
第 8 章　飯田型社会教育の応用性 137
8.1　はじめに
8.2　調査方法
8.3　地域的応用性
8.4　将来的応用性
8.5　おわりに

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

〈第Ⅲ部　多彩に広がる“飯田”のつながり〉

第 1 章　川路通学合宿―地域の方々のお世話になることを成立させる「つながり」 160
1.1　はじめに
1.2　川路通学合宿の概要
1.3　調査の概要
1.4　保護者の川路通学合宿への姿勢
1.5　保護者の川路通学合宿への姿勢に影響を与えているもの
1.6　考察
1.7　おわりに

第 2 章　地域福祉と「つながり」 170
2.1　はじめに
2.2　先行研究と調査課題
2.3　縦糸―飯田市と飯田市社会福祉協議会のつながり―
2.4　横糸―地域住民間のつながり―
2.5　考察
2.6　おわりに

第 3 章　Ｉターンという「生き方」 183
3.1　はじめに
3.2　問題関心および先行研究
3.3　調査概要
3.4　調査結果
3.5　考察
3.6　おわりに

第 4 章　飯田における民泊という活動.....207
4.1　はじめに
4.2　調査の概要
4.3　調査結果
4.4　考察

第 5 章　「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」についての報告.....215
5.1　はじめに
5.2　「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」の概要
5.3　今年度の活動報告
5.4　本プロジェクトの特質と展望

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

5.5　おわりに
補論　飯田風越高等学校との交流から.....234
結び.....241

飯田を訪れての感想・メッセージ.....243
伊那谷の風にふれて：飯田実習の感想.....252
謝辞.....255
執筆者一覧.....256

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

調査実習の概要

永野 恵・丹田 桂太

飯田市調査実習は，2015 年 8 月 26 日～29 日の計 4 日間にわたって行なわれた。参加者は，牧野教授，李准教授，新藤講師，松山助教，そして，大学院生 4 名，学部生 27 名の合計 35 名であった。

実習初日の 26 日は，各自飯田市に到着した後，午後 1 時から飯田市公民館にてオリエンテーションを受け，飯田市企画課の長谷川氏より実習全体のスケジュールや内容についての説明をしていただいた。その後，飯田市長の牧野氏から「地方創生に向けた人材サイクルの構築」についての講義を受けた。ここで飯田市公民館から千代公民館に移動し，この日宿泊させてもらう農家の方々との顔合わせをする「農家民泊対面式」が行なわれた。対面式の後はグループごとにお世話になる農家の方々のお宅に移動し，郷土料理の作り方を教わったり，農家ならではの体験をさせていただいたりとそれぞれに楽しい時間を過ごした。

2 日目はまず千代公民館に集合し，お世話になった農家の方々に感謝の気持ちを伝え，農家の方々とはそこで名残惜しくもお別れとなった。その後午前中は大会議室にて，川路地区での通学合宿の取り組みについて，川路通学合宿準備委員会座長の長谷部氏，川路小学校校長の小川氏，川路公民館館長の今村氏よりお話を伺った。この日の昼は「農業寄宿舎 ごんべえ邑」に移動し，五平餅やウインナーづくり体験をしたり，川魚を焼いたりして，自分たちで作ったものを昼食にした。ここから再び移動し，学生は飯田高校と飯田風越高校の二手に分かれ，高校生との交流の場を持った。そこでは，地元の高校生たちが自分の将来や自分たちの郷土についてどのようなことを考えているのか垣間見ることが出来た。次に，ライブハウス CANVAS にて，りんご並木ネットワークコーディネーターの桑原氏より，「まちづくりの新しいカタチ」という内容でお話を伺った。その後各自での夕食を挟み，引き続き CANVAS で「りんご並木ネットワークとの交流」について，桑原氏やりんご並木ネットワークに関わっている方々より，それぞれの活動や関わり方についてなど伺うことが出来た。地元で色々な活動をしている高校生も話をしにきてくれ，率直な思いを聞くことができ，最後には高校生によるバンドのライブを楽しんだ。2 日目の宿泊はシルクホテルであった。

3 日目は再び飯田市公民館にて，飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課の近藤氏と飯田市公民館副館長の木下氏より，「飯田市公民館・飯田市の社会教育行政の取り組み」について，講義を受けた。そして，各自で昼食を取った後に飯田 OIDE 長姫高校に移動し，浅井教諭より，飯田 OIDE 高校で行われている「地域人教育」の取り組みについて，お話を伺った。我々からの質問に答えるため，授業の合間に高校生も参加してくれ，地域人教育を受ける高校生の生の声を聞くことが出来た。その後，飯田市美術博物館に移動し，学芸員のみなさんより「伊那谷の自然と文化」についてお話をしていただいた。質疑の後には，飯田市美術博物館が伊那谷の自然や文化を

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

紹介するために制作したプラネタリウムのオリジナル番組を鑑賞し，その後美術博物館の展示の見学もした。この日の夕食は飯田の名物の焼肉で，天龍峡温泉交流館に宿泊した。

4 日目の朝も飯田市公民館にて，いいだ人形劇センター理事長の高松氏より，「人形劇を通じたまちづくりの取り組み」についてのお話を伺った。人形劇の祭典の 37 年の歩みについて振り返りながら，目指す「人形劇のまち飯田」への目標や課題などについても話してくださった。次の時間は，飯田市文化協会副会長・オーケストラと友に音楽祭企画運営委員長の井坪氏より，「オーケストラと友に音楽祭の取り組み」について講義をしていただいた。こちらも，現在の音楽祭の前身となる「アフィニス夏の音楽祭」からの歩みや，飯田の文化活動の特徴などについてお話をしてくださった。実習は午前中までで，その後各自で昼食を取ったりお土産を買ったりして現地解散となった。

以上が，2015 年度飯田実習の全体的な概要である。これはあくまで大枠であり，ここでは記しきれない参加者それぞれの見方や感じたこと，考えたことについては，この後の本章にて各自が記したものを是非見ていただきたい。

ここで改めて，飯田実習に関わってくださった方，その後の追加調査にご協力くださった全ての方々に心より感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

H27　東京大学体験活動プログラム 日程表

日	開始時間	終了時間	時間(分)	内容	講師等	会場
8月26日（水）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	○オリエンテーション	[illegible]	[illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	1 [illegible] ※文化経済自治都市の[illegible]（[illegible]）	[illegible]（[illegible]）	[illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
	[illegible]			2 [illegible]	◆[illegible]	
8月27日（木）	[illegible]			[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）に移動		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	3 [illegible]	[illegible] （[illegible]）	[illegible] [illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	4 [illegible]		[illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	5 [illegible] （[illegible]）（[illegible]）		[illegible] （[illegible]）
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	6 [illegible]	[illegible] （[illegible] [illegible]）	CANVAS
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	7 りんご基本ネットワークとの交流	[illegible] （りんご基本ネットワーク [illegible]）[illegible]	CANVAS
	[illegible]			[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）（[illegible]）		
				[illegible]	◆[illegible]	
8月28日（金）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	8 [illegible]・[illegible]の社会教育行政の取組	[illegible] ・[illegible] ・[illegible]・[illegible]	[illegible] [illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	9 [illegible]	[illegible]（[illegible]）	[illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	10 [illegible]	[illegible]　[illegible]	[illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）	◆[illegible]	
8月29日（土）				[illegible]		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]（[illegible]）から（[illegible]）		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	11 [illegible]	[illegible] （[illegible]）	[illegible] [illegible]
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	12 オーケストラと[illegible]	[illegible] [illegible] オーケストラと[illegible] [illegible]）	[illegible] [illegible]
	[illegible]			[illegible]・[illegible]		

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

序

名倉 早都季

飯田の「つながり」とはなにか。

この報告書はゼミ生のもった，この問いから出発しています。

8 月の飯田合宿で人のあたたかさに触れ，私たちはそこにいる人たちが町づくりを通して人と人との「つながり」を大切にしていることを漠然と感じました。しかし，同時に疑問も生まれました。町に積極的に関わる人がいる反面，そこにはもっと多様な人，それほど町のイベントや何かに積極的に参加する，というわけではない人も多くいるのではないか。だとしたら，私たちが感じた飯田の「つながり」とはどのようなもので，どんな風に人を巻き込んでいるのだろうか。この問いに対して，私たちは当初，飯田の「つながり」は同心円のようなものだと仮定していました。公民館やりんご並木ネットワーク等「核」となる人たちがいて，そのひとつ外側で行政がその活動を支え，さらにその周辺に巻き込まれる人たちがいるのではないか。同心円状の「つながり」を描き出そうと，各々の追加調査を始めました。

しかし飯田の「つながり」は私たちが思っていたよりもずっと多様で，ダイナミックなものでした。

昨年までこの報告書はあるテーマごとに大別しながら，全体としてある飯田の姿を描き出してきましたが，「つながり」に注目して調査をするうちに，飯田に暮らす人の飯田との関わり方は一人ひとり多様で，関わりの濃度もそれぞれ違っていることに気が付きました。それは，とても大きなくくりでまとめきれるものではなかったのです。そこで今回は論集という形で，ゼミ生一人ひとりが様々な人の様々な飯田とのつながり，飯田での人とのつながりを描き出しています。

とはいえ，読みやすさも考慮し，関わり方別に大きく三つにグループ分けされています。

第Ⅰ部＜“飯田”の市民活動の源流＞では，飯田の文化を牽引する人に注目した報告を集めています。公民館，美術館，人形劇，オーケストラと友に音楽祭，りんご並木ネットワークなど，飯田の文化や風土の根幹をなす人たちがどのように活動しているか。これまでどのように人を巻き込み巻き込まれ，つながりをつくっているのか。そしてさらに今後はどうなっていくのか，について考察しました。

第Ⅱ部＜“飯田”の教育・行政＞では，教育と行政に関わる人たちに焦点を当てました。地域人教育や社会教育を進める方々，地域人教育を受けた高校生，市役所に勤める方々がどのような思いで飯田に関わり，どんな影響を受け，今後飯田がどんな風になっていくと考えるのか。このような問いに答える形で，飯田のつながりが今後どのように他地域に広がり，将来どのように発展していくのかというところまで踏み込んでいます。

第Ⅲ部＜多彩に広がる“飯田”のつながり＞ではⅠ部・Ⅱ部で書ききれなかった「飯田に暮らす普通の人」に迫りました。それは川路地区の保護者の方であったり，農家民泊を運営する方で

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

あったり，飯田にＩターンしてきた方であったりと，まさに様々です。飯田に暮らす人たち，特別なにかの団体に所属しているというわけではない方々がどのように飯田と関わり，どのような思いでいるのか，に調査のスポットライトを当て，飯田の「つながり」を重厚に描き出そうとしました。

飯田に暮らす一人ひとりが時にそれぞれの所属で，時に個人として，飯田と多様な関わりをもつことで，一歩引いてみてみるとその多様な関わり全体が“飯田”という大きなつながりになっている。そしてそれは他地域にも広がりを見せ，また過去から続く風土文化の文脈をうけながら未来へ発展していく，横にも縦にも広がったダイナミックなものなのではないだろうか。これが本報告書で私たちが描き出した飯田の「つながり」です。この論集を通して，多様な人の飯田との多様な関わりのあり方と，そうしたあり方が織りなす人々の関係性・つながりを感じていただけたら幸いです。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第Ⅰ部　“飯田”の市民活動の源流

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 1 章　下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方

福森 敏也

1.1　はじめに

1.1.1 課題意識

私が本報告書の作成に参加するのは，昨年度に引き続き 2 回目となる。昨年度は「飯田で飲食店を営む人々の暮らし」と題して，飯田で暮らす人々の〈こころ〉の有り様を明らかにした。一方今年度は，何度足を運んでも感じさせられる飯田の「すごさ」の恐らく根幹をなしていると思われる，公民館活動の核心にふれてみたいと感じた。

飯田に限らず長野県全体が，戦前の自由大学運動などにも見られるように高い学習意識をもった地域であるが，飯田下伊那地域に関しては，いわゆる「下伊那テーゼ」が，盛んな活動のひとつ大きな原点となっているといえる。昨夏のフィールドスタディでは，飯田の公民館活動について再び学んでいた折，資料の中に含まれていた「下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム『いま，改めて公民館の役割を考える』」という案内の紙が目にとまった。少子高齢・人口減少時代に突入し，課題山積の現代において，古きをたずね新しきを知ることは重要な意義を持つと思われる。そういった関心から，今年度の報告書では，下伊那テーゼを検討の中心に据えつつ，飯田の公民館活動の姿を描き出そうと思うに至った。

1.1.2 本章の概要

本章の目的は，昭和 40（1965）年に発表された「公民館主事の性格と役割」（いわゆる「下伊那テーゼ」）が，発表から 50 年を経た今，その内容が現在にどう活かされようとしているのかを明らかにすることである。より具体的には，下伊那テーゼの作成当時の時代背景と今日の飯田下伊那地域をとりまく背景，その共通点と相違点を明らかにし，下伊那テーゼのどういった点が現在にも適用できる，あるいは適用されようとしているのか，そして下伊那テーゼの上に成り立つ飯田型の公民館活動が，今後どういった形で波及されようとしているのかについて，明らかにすることを目的とした。この目的のため，平成 28（2016）年 1 月某日に飯田市公民館の木下巨一副館長にお話を伺うとともに，いくつかの資料をいただいた。加えて，下伊那テーゼに関連するいくつかの文献にあたった。木下氏の話や関連資料・文献から明らかになった内容を，以下整理してゆく。

1.2　下伊那テーゼとは

昭和 40（1965）年，飯田下伊那主事会は，日本社会教育学会年報『現代公民館論』の中で，「公民館主事の性格と役割」と題した文章を公にした。飯田下伊那地域の公民館活動の方針を示すものとして提示されたこの文章は，戦後社会教育の大きな支柱となるものとして全国的にも有名に

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

なり，「下伊那テーゼ」と呼ばれた。 下伊那テーゼは，昭和 38（1963）年の大阪府枚方市における「枚方テーゼ」，昭和 48（1973）年の東京都三多摩地域における「三多摩テーゼ」とともに，公民館活動の指針を示した社会教育史上重要な意義をもつ文書として並び称される。

下伊那テーゼは，公民館主事の性格を社会教育専門職と自治体労働者の二面において捉えるとともに，その役割を「働く国民大衆の運動から学んで学習内容を編成する仕事」「社会教育行政の民主化を住民とともにかちとっていく仕事」とした。ここには，共同学習運動[1]の中で培われた地域・生活台に立つ学習観や教育観，社会教育思想がひきつがれている[2]。このテーゼの内容を受けて，例えば下伊那の松川町では，公民館研究集会や婦人集会を土台に地域・生活課題を学習課題化し，学習の成果を実践につないでいく活動，中でも公民館主事と保健婦が協働して健康づくりの主体形成をめざす健康学習など，地域生活に根ざす公民館実践を自治的につくりだす取り組みが，1960 年代以降行われるようになった[3]。

平成 27（2015）年は下伊那テーゼの発表から 50 年という節目の年にあたり，下伊那テーゼは今ふたたび注目を浴びている。

1.3 下伊那テーゼ作成の背景

1.3.1 産業構造の変化

下伊那テーゼが発表された 1960 年代は，終戦後 20 年が経ち，日本社会が高度経済成長により空前の好景気に沸いていた時代であった。その華々しい成長の陰で，これまで社会が経験したことのない新たな問題も数多く現出していた。

高度経済成長がもたらした最たる変化は，産業構造の変化である。大規模な工業化・二次産業化が進み，東京・大阪・名古屋の三大都市圏への人口集中が始まるとともに，全国で公害問題が表面化した。一方で農村地域からは，それまで一次産業を生業としていた層，中でも青壮年期の男性層が，労働力として都市に吸い上げられるといったことが起こるようになった。農山村に残ったのは，女性や高齢層ばかりであり，ここから農村地域の長期にわたる人口流出・過疎化の道のりが始まった。人々の暮らしにおいても，それまで農村部において食と住とは切っても切れない関係にあったが，そういった農村部にまでも貨幣経済が一部浸透し，都市労働の賃金をもって食糧などを購入する，すなわち食と住とが分離した，従来とは異なる生活のあり方への大きな変化が起こることとなった。

1.3.2 当時の飯田下伊那地域

当時飯田下伊那農村地域が抱えていた，人々の生活の地平の具体的でリアルな問題は，当時の

---

[1] 昭和 28（1953）年の青年学級振興法を受けて日本青年団協議会が展開した，学習の自由と自主性を基調とする運動。

[2] 長澤成次「社会教育職員と専門職問題」，小林文人・伊藤長和・李正連『日本の社会教育・生涯学習』第 6 章，大学教育出版, 2013, p.47.

[3] 松下拡『住民の学習と公民館』，勁草書房, 1983, p.1-15.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

公民館報に詳しくみられる。喬木村公民館報「たかぎ」を例として，その一部を抜粋する[4]。

昭和 39 年 8 月 1 日（土曜日）たかぎ 第 55 号「農家の主婦は疲れている」

…「婦人が積極的に農業経営に参加してきた」というのでなく，うちつゞく農産物価格不安定の波が，男子を農外収入の道へおいやり婦人を農業経営の中心に据えたのである。▼婦人の訴えるいろいろな病状もなれない耕運機の運転と無関係ではあるまい。常識的にみても母体保護によいはずはない。▼忙しさは，はっきり健康をむしばんでいる。…

昭和 39 年 12 月 15 日（火曜日）たかぎ 第 57 号「町や村の政治を住民の手に」

…町村にとつては，地方交付税は充分くれない。国の仕事なのに町村におしつける。災害復旧や開発事業にも地元負担の金額が多い，等，仕事の面や予算の面のやりくりがむずかしくなつているのは事実である。このため村独自の仕事ができない，村民のためになる仕事が仲々できないということになつてくる。▼しかし，そうした中でも，理事者がもつと考えなくてはならないこと，職員がもつと研究しなくてはならないことがあるのではないか。…

昭和 40 年 4 月 15 日（木曜日）たかぎ 第 58 号「公民館建設の気運高まる」

「喬木村にふさわしい公民館を建ててほしい」「設備，備品のととのった公民館で学習がしたい」「村民が気軽にはいれて自由に本を読んだり，レクリエーションの出来る部屋がほしい」集会の席上で，立ち話の中でこうした声が出されるようになってからもう何年にもなる。三年程前，公民館運営審議会，分館長主事会ではこの問題をとりあげて，村理事者あてに公民館建設促進の陳述書を提出したことがあった。これに対し，村側では，公民館施設の重要さはよくわかるが，村財政の苦しいおりでもあり，あらためて考えたいとの解答があった。その後公民館では，各町村の様子をききながら，わが村にふさわしい公民館の青写真をえがきつづけてきた。…

昭和 40 年 4 月 15 日（木曜日）たかぎ 第 58 号「農業だけでは食べられない」

…木炭の売行不振，こんにゃくの価格変動，家畜飼料の値上り，乳価，農産物価格の値下り等，農業だけでは村内のほとんどの農家が食べられない現状が大勢の人たちから話された。そうした中でこれからどうしたらよいのかという深刻な問題が出され，ある人は工場誘致をして現金収入を得る道を考えたらとか，農業だけで食べていかれるような政策を考えるべきだとか，さまざまの意見が出された。▼…赤石林道と阿島橋の進捗状況とか龍東一貫水路と弁天発電所の関係とそれに対する反対運動の問題などが出された。その他出稼ぎがだんだん遠くへ行かなければ働き場所がなくなってきたが，何とか村内か近くで働けるように村会で相談してもらいたいという切実な訴えも出された。…

[4] 館報「たかぎ」縮刷版編集委員会編『たかぎ 公民館報縮刷版』, 1979.（飯田市中央図書館 蔵）.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

これらの文章から，高度経済成長の荒波の中で，農業を中心とした従来の生活への危機感や疲労感のようなものが感じられ，他方でそういった事態を自分たちの力でなんとか乗り切っていかねばならないという気概，あるいは焦燥感も感じられる。そんな中で住民自治の中心となる公民館への大いなる期待が寄せられ，また自治体職員が村民に寄り添い，村民のために汗水を流すべきことが期されていたことも読み取れる。

当時まだ旧来の封建的な性格をとどめていた農村社会において，公民館を拠点として民主的・自治的な地域に変えて行きたいという思いは，青年層や婦人層の中で強かった。しかし，1960 年代の急激な産業構造の変化の中で，青年層の都市労働者化や婦人層の農業の負担増加などから，青年団や婦人会などの組織は力を失いつつあった。当時までにある程度公民館の活動が根付いた地域であっても，従来と同じような事業を行ってみたところで，事業そのものへの参加者数が減少し，地域で暮らす人々に公民館が寄り添ってゆくことができず，地域の要としての公民館は求心力を失い始めていた。このような状況を憂えた当時の飯田下伊那の公民館主事たちが，これからの時代の公民館の職員がどういった考え方や仕事を行っていけばよいのか，議論を重ね結実したのが下伊那テーゼである。

1960 年代は高度経済成長の時代であるとともに安保闘争の時代でもあり，政府や社会を批判的な目で捉え，対峙してゆく風潮が全国を席巻していた。その雰囲気の中で，飯田下伊那地域にも自らを取り巻く社会を自らの力で変えてゆくエネルギーに満ちた有力な存在が数多くいた。特に東京大学の宮原誠一教授のもとで理論的かつ実践的に社会教育を学んだ人材の多くが長野県内に就職し，飯田下伊那においては喬木村の島田修一社会教育主事が強いリーダーシップを発揮して，下伊那テーゼの作成における多大な功績を示した。他にも強い熱意をもった多くの有力な人材が，欠かすことのできない存在として転換期にあたる公民館活動を支える役割を果たしていた。

1.4 下伊那テーゼの見つめ直し

1.4.1 現在の飯田下伊那地域

下伊那テーゼの発表から 50 年を経た現在は，日本社会が少子高齢化・人口減少という未曽有の事態をむかえた時代である。人口 10 万人の地方都市・飯田，およびその周辺の町村も，全国の他の地方都市や町村と変わらない過疎化の波の中にあり，域内の一部でいわゆる「限界集落」と呼ばれるような地域も現れてきている。平成 26（2014）年には日本創成会議が，全国 896 の市町村を過疎化の進行により「消滅する可能性のある自治体」として指摘し，大きな波紋を呼んだが，下伊那郡の 13 町村の中でも，阿智村，根羽村，天龍村，豊丘村の 4 村が消滅可能性自治体のリストに挙げられている[5]。そのような中で，過疎化の進行を食い止めて活気を取り戻し，自分たちの町や村をどう次の世代へ繋げてゆくかが喫緊の課題とされている。

[5] 増田寛也『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』，中公新書, 2014.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

1.4.2 学習会と記念フォーラムを通じて

眼前の新たな課題を前に，公民館のあり方を今再び問い直すために，下伊那テーゼ発表後 50 年を迎えた平成 27（2015）年の 7 月より，「下伊那テーゼを学ぶ」という学習会が飯田・下伊那の主事会たちの間で行われるようになった。木下氏によると，阿智村の公民館主事の下伊那テーゼ 50 周年に関する些細な会話を皮切りに，飯田下伊那地域の公民館相互のつながりがあまりなくなっている現状や，主事会であまり得るものがなくなっている現状なども打開する，ひとつのきっかけにできればということもあって，学習会が始まったのだという。木下氏は，学習会を行った感想として「主事たちが学習会を重ねていく中で，50 年前の話とはいえ全く他人事ではなく，現在に通じる部分は多々あることが共通認識として出来てきた」ということを述べていた。しかし，やはり現代との共通点よりも相違点の方が圧倒的に多いことから，その文章を落としこんでゆくことになかなか困難を感じたこともにじませていた。

同年 10 月には「下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム『いま，改めて公民館の役割を考える』」と題したフォーラムが開催され，社会教育職員・研究者など，長野県内外から 62 名が参加した。フォーラムは 3 部構成で行われ，第 1 部「下伊那テーゼを現代に生かす～地方創生時代と公民館～」では，岡庭一雄氏（前阿智村村長）と石井山竜平氏（東北大学）の対談，第 2 部「今日の公民館実践における主事の悩みと役割」では，松下拡氏（元松川町公民館主事）のコーディネートによる飯田市・松川町・阿南町の若手公民館主事の実践報告，第 3 部「下伊那テーゼ—50 年のいま，その実践理念をどう生かすか」では，島田修一氏（元喬木村社会教育主事・中央大学名誉教授）の総括講演が行われた。このフォーラムを通じて改めて確認されたのは，住民の切実な課題を顕在化させ，全村的な課題として共有し，「生活欲求にねざした学習欲求をほりおこしていく」公民館主事の役割であった[6]。フォーラムの参加者からは，

> 今回のフォーラムは，自分自身と向き合う時間になりました。お話をしてくださった皆さんの話を聞いている間，私がこれまで出会ってきた地域の人たちの顔を思い浮かべていました。主事として関わらせてもらった自分は，その人たちにとってどんな存在だったのか。一体，何ができたのか。
>
> うれしいことや小恥ずかしいこともたくさん思い出しましたが，数名の顔を思い浮かべたとき，強烈に後悔の念がわいてきました。それは，その人たちが抱く不安や悩みに気付きながら，静観してしまった自分や，そうするしかなかった自分の力のなさに対しての後悔です。同時に，今からでも遅くない，会いに行きたいという思いでいっぱいになりました。
>
> 地域で出会う人たちが人生の中，生活の中で抱かれている気持，どれだけ寄り添うことができるのか。主事として，そこに触れられるだけの覚悟があるのか。
>
> 下伊那テーゼから 50 年，時代背景や社会状況は明らかに違います。しかし，そんな違いを超

[6] 向井健「下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム いま，改めて公民館の役割を考える」，『所報 社会教育・生涯学習の研究』第 30 号，社会教育・生涯学習研究所，2015, p.3-4

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

えて大切にしていかねばいけないものが見つかった気がしました。

といった感想が挙げられ，下伊那テーゼおよびこのフォーラムが，現在の公民館主事にとって，自らの仕事を俯瞰し問い直す，ひとつの重要な契機となったことがうかがえる。特に，ここに見られる「後悔の念」からは，下伊那テーゼの掲げた理想が現在の公民館主事の活動に十分通じるものであることが見てとれる。他の参加者の感想からも，地域課題への向き合い方についての再考や，自らの無力さの自覚といった内容が散見された。ひとりひとりの参加者にとって，下伊那テーゼを中心として公民館活動のあり方を考えることは大変意義深いことであったようである。

1.4.3 当時と現在の共通点・相違点

木下氏によると，下伊那テーゼが発表された 1960 年代と現在とで共通しているのは，ともに地域社会が未曾有の変化の最中，いわば「時代の節目」にあるという点である。上述のように，当時は高度経済成長による産業構造の変化，現在は過疎化と少子高齢化による地域存続の危機という大きな壁に直面しており，従来の活動ではその危機に対応しえないかもしれない状況にあって，公民館は大きな転換の局面に立たされているといえる。現代を生きる我々が，そういった局面を乗り越えた 50 年前の飯田下伊那の公民館主事に学ぶ意義は大きい。幸い，飯田下伊那地域においては，住民の公民館活動への参加は量的に見て当時も今も変わらない高い水準にあるという。具体的には，人口約 10 万人の飯田市で常時約 5000 人，すなわち約 5%が，地区公民館の専門委員会への所属や分館の運営といった形で，公民館活動に従事している。その中で「公民館を運営するのは自分たちだ」という意識を持った住民層も，変わらず確かに存在している。また，住民の中で学習や活動が活発化するためには，何かしらの危機感や，その危機を問題だと感じる人たちがいることが必要不可欠な出発点となるが，長きにわたって声高に叫ばれてきた過疎化や少子高齢化という問題に対して，ある程度の共通認識もできている。したがって，「時代の節目」の中で，飯田下伊那はまだまだ可能性を秘めた地域であるということができる。

他方，当時と今とで大きく変わった部分といえば，地域や社会のありように対して批判的な目で捉える気風が社会全体で失われてしまったこと，加えて，公民館職員の力量形成が昔に比べて行われにくい環境となってしまった部分があるという。当時は批判的精神をもって熱い議論をかわし，だからこそ強いリーダーシップを発揮できた存在が数多くいた。現在はよりやわらかい目で世間をとらえ議論をしており，地域や社会の変化の状況を受け止めてそれを作り直そうという地域の機能については，昔に比べて弱くなったと言わざるをえない。職員の力量に関して，公民館の活動を住民の側から支えてきた青年団や婦人会の後ろ盾もなくなってしまい，力量を規定する背景の部分も脆弱となってしまった。飯田市では昔も今も，5 年前後の公民館主事期間を自治体職員としての基本的な力量形成の場として位置づけているため，制度面での変化はほとんどないが，下伊那の他の町村については，3 年程度公民館主事として置かれたのちにすぐ人事異動が行われてしまい，また主事会における共同学習もほとんど機能していない現状にあるため，制度

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

的な面において力量形成の土壌がかなり失われてしまったということもある。

下伊那テーゼが発表された当時と現在では，社会が転換点にあるという点では共通しているが，その他の点では異なっている部分の方が圧倒的に多く，特に当時に比べて，現在では失われてしまったものや弱くなってしまったものが多くあるため，下伊那テーゼから何らかの具体内容，方法論を学ぶというよりは，その精神や当時の主事たちの姿，あり方の面を学ぶことが行われようとしていることがわかった。

1.5 飯田型公民館活動の伝播

本書の作成をめぐる議論の中で，私たち学生は，飯田を「同心円」のイメージで捉えた。飯田にはその中心で核となり活動をしている人たちがおり，その周辺には彼らを支える行政がある。しかしその外側には，飯田で暮らしながらもそういった活動に参加していない人・できない人の存在があるかもしれず，また飯田市外という地理的な外側も広がっていて，中心核から周縁へのエネルギーがどのように伝わっているのか，あるいはそもそも伝わっているのかどうか，それを捉えてみたいということが，本書を作成する上でのある程度の共通認識として私たちの出発点となった。

今回私が関心をもった下伊那テーゼは，飯田の公民館活動の根幹をなすもの，いわばひとつの原点たるものである。私たちの同心円のイメージでいうと，円の中心にある活動の，さらに中心の部分を規定しているものに他ならない。では，この上に立って展開されている「飯田型」の公民館活動が，飯田市内外の「外側」部分へどう伝播している／しようとしているのか，下伊那テーゼに関する調査の中でも少しわかってきたことがあった。

1.5.1「マージナル」な人々へ

まずは，飯田市内で周縁に位置する人たち，つまり中心的な活動に参加していない人・できない人について，下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムでは，テーゼを作成した当時の公民館主事から，現在の若手公民館主事に対して「住民の姿が本当に見えているのか」との厳しい指摘があったという。飯田市内の公民館で以前行われた人気セミナー事業の実践報告に対して，そのセミナーでは掬いきれなかった人々へ，主事の目が行き届いていないのではないかという指摘である。確かに，公民館の活動に自ら率先して参加してくれる人というのは，高い興味感心を持っていたり，比較的悩みが少なかったりする人たちであると考えられる。その一方で，例えば介護を要する人など，本当に暮らしの中に悩みや困難があって，それこそ手を差し伸べられることを必要としている，マイノリティやマージナルな人たちの存在があり，そういったところにまで目を届かせることはなかなか難しい。しかし，むしろここが公民館の担うべき役割に他ならず，木下氏も，暮らしの中で課題を抱えた人たちへ届く仕事を行う力が，かつての先輩主事たちに比べて，現在の公民館主事たちは弱くなっているのではないかと，課題を感じている様子であった。

しかし，飯田市内でそういった「マージナル」な人々を巻き込む動きが少なからずあるのも事

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

実である。例えば，鼎地区の上茶屋分館では，公民館に集う女性たちが，昼間ひとりで家に取り残されているお年寄りや独居をしているお年寄りのことを気にかけて，お弁当を届ける活動を始めた。また，飯田の各公民館の中枢である飯田市公民館でも，「平和と人権」を守る取り組みの一環で，外国籍市民へのアプローチを行い，足元からの国際化を実現する事業を展開している。飯田市公民館と外国人集住傾向のある地区公民館との連携のもとに，入り口としてまず日本語教室を開催し，そこから外国籍市民と地域の人々の共生に向けての歩みを進めている。さらに，飯田市公民館が所管している勤労青少年ホームは，3 年前から，いわゆるひきこもりやニートの状態にある若者たちの居場所づくりを行ってきた。飯田下伊那 15 万人圏域の中で，ひきこもりやニートは約 700 人いると推定され，こうした人たちのために，まずは公民館が主導し，少しずつ地域の草の根へ軸足を移していくということを進めている。このように，地域に暮らす元気な住民の立場から，あるいは公民館としての立場から，マージナルな人々へのアプローチが着実に行われている。

1.5.2 飯田から他地域へ

次に，飯田型公民館活動の飯田市外への波及について，2 年前から始まった「解体新書塾」という事業がある。飯田の公民館には，ひとつには，公民館を「やる」風土[7]，もうひとつには，住民に「巻き込まれる」職員[8]，というふたつの大きな特徴がある。しかし，全国的な公民館から見て，飯田型の公民館のこのような特徴はスタンダードではない，いわばガラパゴス化した状態である。これを他地域にも広げていくことを目的とした取り組みが解体新書塾であり，平成 26 年 10 月に第 1 回が行われ，平成 28 年 2 月には第 2 回が行われる。

解体新書塾を通じた飯田型公民館の第一の輸出先は兵庫県尼崎市である。尼崎市は人口が過去 10 年で 55 万人から 45 万人に激減しており，その現状に対する危機意識が強くある一方で，阪神淡路大震災の被災経験から，住民自治を大切にする市民性も持っている。そこで解体新書塾をきっかけに，尼崎市は飯田型の自治形態のどういった点なら転用可能かを考え，一方で飯田市は尼崎がこれから住民自治の土台を作っていくプロセスを見て，飯田で蓄積されてきたものを改めて捉えなおす，といった相互通行の長期的な関係が出来上がっている。尼崎市の動向に，あるいは飯田型公民館・自治形態のさらなる波及に，今後注目していきたい。

---

[7] 第 1 回解体新書塾記録より“（飯田では）住民自身が仕事や暮らしの傍ら公民館を運営することを通して，地域の人材育成を進めている。このことを裏付けているのは，公民館に関わる人たちの多くが「公民館をやる」という言葉遣いをされることに表れている。”（東京大学牧野篤教授）

[8] 第 1 回解体新書塾記録より“飯田市の公民館主事の共通点として重要なことは，住民を巻き込む力というよりは，住民に巻き込まれる力にあるのではないか。皆が集まっている面白いところはどこか，そこに自分がどのように巻き込まれればよいかを把握し，行動に移す力と言えるかもしれない。それはまずは現場に出ることから始まるのではないか。”（九州大学八木信一准教授）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

1.6 おわりに

全国的な公民館最盛期時代に出された下伊那テーゼは，50 年の歳月を経て，それを生み出した飯田下伊那の人々の間でも，意識の水面下に追いやられてしまっているような状況にあった。しかしこのたび，下伊那テーゼは節目の年にあって再度注目を浴びることとなり，その精神に習おうという動きが生まれてきた。ここに至るまでに多少の風化があったことは否めないのかもしれないが，それが完全に過去の遺物となる前に，まだ当時の主事たちから激励を受けられるうちにテーゼが再び日の目を浴びたのは，非常に意義のあることだったのではないかと，今回の調査を通じて感じた。記念フォーラムでは「次世代への発展・継承」が一貫して意識されていたというが，下伊那テーゼが規定した公民館主事の「性格」そして「役割」と，当時の主事たちのエネルギッシュな姿とが，飯田下伊那の誇りとして，次の世代へ，あるいは他の地域へ，脈々と受け継がれていくことを切に願う。

引用文献・資料，Web ページ

館報「たかぎ」縮刷版編集委員会編『たかぎ 公民館報縮刷版』 1979.

長澤成次「社会教育職員と専門職問題」，小林文人・伊藤長和・李正連『日本の社会教育・生涯学習』第 6 章，大学教育出版, 2013, p.47.

増田寛也『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』中公新書, 2014.

松下拡『住民の学習と公民館』勁草書房, 1983, p.1-15.

向井健「下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム いま，改めて公民館の役割を考える」，『所報 社会教育・生涯学習の研究』第 30 号，社会教育・生涯学習研究所, 2015, p.3-4.

謝辞

飯田市公民館の木下巨一副館長を始め，調査にご協力いただきました飯田市の方々に，この場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 2 章　プロとアマチュアの交流が市民の心を育てる飯田の人形劇

若林 陽子

2.1　はじめに

今回筆者が飯田市の特徴的な取り組みの中で人形劇文化の振興を調査の対象とした理由は，おおまかにわけて２つある。ひとつは，地域を巻き込んだ芸術祭や芸術活動の意義に対する関心である。以前旅行で瀬戸内海に浮かぶ香川県の直島を訪れた際，この小さな漁村とも言える島々が「アートの島」と呼ばれ観光地として人気を集めており，草間彌生など著名な現代美術家の作品が島の至るところに置かれている様子を目の当たりにした。その時以来，まちおこしとアートは具体的にどのように親和しお互い高め合うことができるのか，あるいは取り組みが失敗するとすればそれはどういった状況か，ぼんやりと気になるようになった。そのため，昨夏のフィールドスタディで飯田市が人形劇に熱心であることを初めて知った筆者にとって，この人形劇こそ報告書の題材にふさわしいと思われた。他の理由としては，演劇文化に対する個人的な興味関心から，この調査を機会に今まで筆者があまり接することのなかった人形劇という世界に踏み入れ，その魅力を体感したいと考えたためである。

2.2　飯田の人形劇文化の概要

2.2.1　飯田の伝統的な人形劇

飯田には 300 年以上前から農閑期の楽しみとして人形浄瑠璃を楽しむ風習があり，現在にまでその文化は受け継がれている。中でも今田人形（飯田市），黒田人形（飯田市），古田人形（箕輪町），早稲田人形（阿南町）はあわせて伊那谷四座と呼ばれ，国および県の補助金を得て保存の取り組みが積極的に行われている。また，飯田市，箕輪町，阿南町の３自治体が協力して「伊那人形芝居保存協議会」の事務局を組織し保存継承の活動支援を続けている。

飯田市龍江地域に伝わる今田人形は，毎年 10 月に大宮八幡宮神社秋季祭典で奉納公演が行われており，1994 年にはその保存と後継者育成の場として今田人形の館が建てられた。この今田人形芝居は天皇即位を記念した昭和４年の行幸の際にも上演された記録が残っている。他に，飯田市上郷地域に伝わる黒田人形も毎年４月に下黒田諏訪神社の春祭りで奉納公演が行われており，この公演で使われる黒田人形舞台は 1840 年（天保 11 年）に建てられた日本最古の人形劇舞台で国の重要有形民俗文化財にも指定されている。今田人形と同様に，黒田人形もその保存と伝承のため 1999 年に黒田人形浄瑠璃伝承館が上郷に建てられている。

いわゆる人形浄瑠璃の他に飯田では獅子舞も楽しむことができる。中でも大宮八幡神社の東野

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

大獅子は日本一獅子頭が大きいとも言われ，その重さは約 30kg にもなる。飯田市街地を獅子が練り歩く南信州獅子舞フェスティバルも開催され，飯田の伝統芸能の豊富さを物語っている。

2.2.2 人形劇カーニバル飯田

このように人形芝居が地元の人々によって大切に継承されていた飯田の様子に感銘を受けた現代人形劇センター（神奈川県川崎市）の理事長が松澤太郎市長（当時）に対し，飯田を日本における人形劇文化の拠点とするべく人形劇の祭典の企画を働きかけた。これが，現在も毎夏飯田市で開催されている「いいだ人形劇フェスタ」の前身にあたる「人形劇カーニバル飯田」発祥の由縁である。「人形劇カーニバル飯田」は国際児童年にあたる 1979 年に，子どもたちに夢や希望を与えることを目標に行政主導のもと誕生し，市内パレードやウィンドー人形展といったさまざまな独自の企画は特に高い評価を受けた。10 周年にあたる 1988 年には飯田で世界人形劇フェスティバルが開催され，10 周年を記念して全国で 4 番目の公立人形劇場である飯田人形劇場が飯田文化会館に隣接してオープンしている。また，この時にウニマ（国際人形劇連盟）本部が置かれているフランスのシャルルヴィル・メジェール市と友好都市提携が結ばれた。飯田市とシャルルヴィル・メジェール市との友好関係は現在も続いており，ギニョールなどの人形劇が盛んなフランスの同市には Rue de Iida（「飯田通り」）と名付けられた街路が存在する。

2.2.3 いいだ人形劇フェスタ

「人形劇カーニバル飯田」は 20 周年を機に運営体制が見直され，それまでの行政主導から市民主導に体制が大きく変化し翌年の 1999 年からは「いいだ人形劇フェスタ」として新たに蘇った。飯田市と飯田市教育委員会も相変わらず運営には携わっているが，あくまで行政はサポートにまわり，運営の中心は市民ボランティアである「いいだ人形劇フェスタ実行委員会」に移った。「いいだ人形劇フェスタ」は，「みる・演じる・支える　わたしがつくるトライアングルステージ」を合言葉に，観客・人形劇人・スタッフが一丸となって祭典を盛り上げる姿を目指している。

「いいだ人形劇フェスタ」は期間中に約 300 の劇団が集まり，海外から来るプロの公演から飯田の保育園児による公演までその形態はさまざまである。1700 人もの人形劇人が集まり，2000 人にもなる市民ボランティアスタッフがフェスタの準備や運営を支えている。のべ 5 万人の観客が飯田の内外から集まり，前述の飯田人形劇場以外にも市内 20 地区の各公民館や学校，保育園，神社仏閣，飯田の街中に至るまで生活の場のあちこちで公演が行われる。飯田市は公民館活動が盛んだが，フェスタ期間中に行われる 400 もの公演のうち，公民館単位で組織された地区実行委員会の手による公演は 130 を占めるほどである。また，期間中はフェスタの参加証（ワッペン）を購入することで，このワッペンが入場券代わりになり，一部別途有料鑑賞券が必要な公演以外は全て観劇し放題になる。この気軽さもさまざまな公演へのアクセスを自由にする工夫のひとつだろう。

「いいだ人形劇フェスタ」では公演だけでなく，さまざまなイベントも同時に催される。例え

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ば市内のセントラルパークに人形劇が上演される同じ場所で地元の特産物を販売する出店が並んだり，マスコットキャラクターがあしらわれたグッズが販売されたり，人形劇の面白さを伝えるワークショップが開かれたり，幅広い年齢層をターゲットにさまざまなニーズに応える人形劇を中心とした飯田市民の手によるお祭りこそ「いいだ人形劇フェスタ」の本質と言えるだろう。

2.3 本報告書について

2.3.1 テーマ

このように，飯田には伝統文化の歴史に支えられた人形劇への愛着があると言えるだろう。昨今飯田は「りんご並木と人形劇のまち」と呼ばれることも多く，飯田市自身が地域の魅力をアピールする場面でこのフレーズを用いている。では，人形劇という決してメジャーとは言えないエンターテイメントが受け継がれている背景には一体誰のどのような活動があるのだろうか。

飯田の人形劇文化の継承は，個別のフェスタやプロジェクトだけではなくコンスタントに人形劇と関わりをもつ個人や団体，行政の手による。これは本報告書のため筆者がフィールドスタディの後再度飯田を訪れた際見出した飯田の人形劇の特徴のひとつである。地域を離れて存在しえない芸術文化活動において，どのような人々がどのように地域と関わって文化を創りあげているのだろうか。つまり，飯田について当てはめれば，ある文化事業や人的交流を他のどの地域の活動とも違う飯田の人形劇文化たらしめる要因は，人形劇に関わる飯田の人々が現地の人形劇に関する取り組みと多種多様なつながりを継続的にもっている点にあるのではないだろうか。

ややぼんやりとした記述になってしまったが，ここで筆者は飯田の人形劇文化の持続性を支える存在として，飯田を訪れる，あるいは飯田在住のプロの人形劇人の活動に特に注目した。彼らは現地のアマチュアと多様な交流をもつことで地方の文化活動における未熟なアマチュア技術の蔓延を防ぎ活動内容を洗練させると同時に，人形劇文化の広がりを通じて市民の人間形成に寄与し人々の豊かな交流を自然に生み出している。イベントありきに終始しがちで脆弱という地方の文化活動に対する筆者の先入観を，飯田の人形劇人の活動は覆してくれた。

まず，本報告書ではプロの人形劇人が飯田でどのような公演やワークショップを行っているか具体的に紹介し，人形劇の技術を伝える存在としてのプロの役割について述べた後，プロである彼ら自身の技術的精神的成長を促し表現の幅広い可能性を気づかせる飯田のアマチュアの人形劇愛好家や飯田市民の活動の意義について述べる。このように，表現技術を伝達するプロと，周囲から新鮮な影響を受けて表現者としての成長を続けられるプロという二種類のプロフェッショナリズムが生かされ，アマチュアリズムの利点と共存共栄の関係にあることは，飯田に人形劇文化をより根付かせ，自然に飯田市民の心の育ちをもたらすと考えられる。さらに，この共存共栄にも一役買っている，飯田の行政に代表されるプロとアマチュアをつなぐ存在が，飯田の人形劇文化を豊かにする点を見逃すことはできないだろう。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

2.3.2 インタビュー先一覧

本報告書は，2016 年 1 月 24 日に長野県飯田市で筆者が実施したインタビュー調査をもとに構成されている。なお，今回インタビューさせて頂いた方々はみな現在飯田市にお住まいである。そのうち，A さん，B さん，E，F，G さん，H さんは飯田のご出身，さらに D さんは飯田の U ターン者，C さんはもともと飯田のご出身ではなく，飯田の人形劇文化に惹かれ飯田に居を構えた I ターン者である。

インタビューした相手	人形劇との関わり方	インタビューを行った場所
A さん	飯田文化会館人形劇のまちづくり係職員	飯田文化会館
B さん	飯田文化会館人形劇のまちづくり係職員	飯田人形劇場
C さん	プロの人形劇人，パフォーマー，クラウン役者	飯田人形劇場
D さん	プロの人形美術家，NPO 法人いいだ人形劇センター職員	飯田市川本喜八郎人形美術館
E，F，G さん	アマチュアの人形劇ユニット	飯田人形劇場
H さん	いいだ人形劇フェスタ実行委員会メンバー	飯田人形劇場

図表 1-2-1　実施したインタビュー

2.4 飯田におけるプロの人形劇人の活躍

2.4.1 プロ劇団による公演

まず，プロの人形劇団の公演は，前述した「いいだ人形劇フェスタ」期間中はもちろん，フェスタ以外でも飯田で上演されている。例えば，NHK の人形劇番組制作に携わっている人形劇団プークの公演や，フランスの人気劇団であるカンパニー・アや，フランスを拠点に活動するロシア人アーティストであるポリーナ・ボリソヴァの来日公演なども過去に行われた。

上演される場所は専用劇場に限らない。飯田文化会館人形劇のまちづくり係はプロの劇団を飯田の幼稚園・保育園及び小学校に派遣し巡回公演を斡旋している。平成 27 年度は 25 園 3 校の巡回公演が実施された[9]。このように，その道の第一人者の技術や表現を間近に見る機会が用意されていることは，飯田市民と人形劇ひいては舞台表現の洗練された奥深さとの出会いを，生活の中にある身近な体験にすると考えられる。更に，飯田で公演を行うことは市民だけでなく劇団側にも十分なメリットがある。なぜならば，前述のように飯田には昔から人形劇に親近感を持っている人が他の地域に比べて多く，人形劇の公演で集客が見込まれやすいと予想できるからである。

[9] B さんへのインタビューより

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

2.4.2 人形劇を指導し広める活動

飯田におけるプロの人形劇人の活躍は，公演のみならず，アマチュアに人形劇の面白さを広め技術を伝えるワークショップでもみられる。ワークショップの受講者は，人形劇に熱心な熟練者から人形劇に人生で初めて触れる小さな子どもにまで及び，飯田のさまざまな場所で多種多様な普及活動が行われている。例えば，台湾の伝統人形劇である「布袋戯」のプロによる基礎レッスン，飯田とゆかりの深い伝統的糸繰り人形「竹田人形」の公演つきワークショップなど，具体例をあげればきりがないが，このように人形の種類もバラエティに富んでいる。

また，飯田で行われるユニークなワークショップとして学校研修があげられる。飯田市の全ての小学校で 3，4 年生の総合的な学習の時間で人形劇の取り組みが行われているため，教員自身が人形劇のノウハウを知っている必要がある。そのため，教員は年 3 回プロの指導者から人形劇制作の研修を受ける。この研修の主たる目的は人形劇をつくる授業のための技術習得だが，この機会はまた，飯田に赴任してきた小学校の先生方に飯田の人形劇文化を紹介するイベントにもなりうるだろう。飯田で活動するプロの人形劇人はこのように飯田市の教育方針と結びつくかたちで，他でもない飯田の人形劇文化の一端を確実に担っていると言えるのではないだろうか。

また，学校以外で保育園でも同様の研修が行われており，その成果は飯田市子育て支援課と飯田文化会館が主催する「人形劇とうたのお楽しみ会」という保育士人形劇研修発表会で一般に公開されている。ちなみにこのイベントでは，それぞれ別々の保育園から来た保育士たちが人形劇団を組んで発表をするため，普段はあまり無いと思われる保育園間の横のつながりが新たに形成され，保育士自身の職能成長にも影響を与えうると予想される。

2.4.3 プロがアマチュアの人形劇人から受ける影響

プロの人形劇人はアマチュアとの交流を通じて，人形劇の幅広い可能性への気づきと自らの技術的精神的成長がもたらされると感じている。この点について，筆者がインタビューを行った C さんの発言をもとに，単に人形劇の指導のみならずプロがアマチュアの活動からインスピレーションを得る可能性を示唆する。

> やっぱりアマチュアの人がいる良さって，「地元密着」というか。プロってなるとどうしてもいろんなところに行かなきゃいけないし，クライエントや演出家の意向とかもあるし。アマチュアだと抵抗なくできるというか。自由にどう表現するか，ちょっと大げさかもしれないけど生き方につながると思うんです。

もともと東京でクラウンとして活動していたプロである C さんは，師匠が見せてくれたさまざまな形態の人形劇との出会いをきっかけに 15 年ほど前飯田を訪れた。C さんは，人形劇とは「モノに命を与える表現」であることに気づき，今まで自分が実践していた演劇や身体表現との強い連続性を意識したことでその面白さや普遍性に気づいたそうだ。上述の発言からも読み取れるよ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

うに，飯田で活発な公演活動を展開するアマチュアの人形劇に触れることでプロが自らの表現を振り返り幅広く成長するきっかけを得ている。プロとアマチュアの出会いによってようやくもたらされる表現への可能性を広げているとも言えよう。

また，上述の C さんの発言と同様の内容がインタビューを行った飯田のアマチュア人形劇ユニットのメンバー（E，F，G さん）のうちひとりからも言及された。

飯田で（人形劇を）やることの良さってなると，お客さんの反応が良いし呼びやすい。それに，飯田の地域性っていうか，しばりがない良さですね。仕事でやっているわけではないので。

プロの人形劇人だけでなくアマチュアの人形劇人も同様に地域の表現活動の自由さを自覚していることが上述の発言からうかがえるだろう。

2.4.4 プロとアマチュアの交流から生まれる新たな作品

プロがアマチュアの人形劇人の活動から受ける影響が自らの芸の肥やしになるばかりでなく，両者の協同によってプロだけで実現できない作品をつくりあげることも可能である。その実践例として人形劇ワークショップ第Ⅲ期「人魚姫」の制作があげられる。「人魚姫」創作事業は，平成 26 年度の主な取り組みとして，市民アーティストの育成と今後の継続的な上演を目指すものである。本作品はプロの演出家と美術家を招きバレエダンサーや映像制作者の協力も仰いだ，一般的な人形劇よりも大規模なプロとアマチュアの共同作品である。2015 年に台湾で開催された国際人形劇フェスティバル「台湾雲林国際偶戯節」でも公演が行われた。[10]

プロだけでは例えば資金やスケジュールの好条件が整わず，アマチュアだけでは操演技術や演出のクオリティの問題から完成に困難が想定される作品も，プロとアマチュアの合作という第三の道を開くことで新たな創作が実現しうる。この点において，飯田ではプロフェッショナリズムとアマチュアリズムの共存共栄が適切に図られていると筆者は考える。

2.4.5 飯田と強い関わりをもちやすい人形劇のプロ

飯田は長野県の一都市でありながら人形劇のプロフェッショナリズムと親和性が高いと言える。これまで飯田市出身でない人形劇の関係者からも継続的に人形劇を大切にする風土が愛されてきた。

飯田で人形劇をやることの意味について C さんにさらにうかがったところ，以下のようなお返事を得た。

---

[10]「台湾で人形劇「人魚姫」上演 « ミナミシンシュウ.jp」
http://minamishinshu.jp/news/culture/%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E3%81%A7%E4%BA%BA%E5%BD%A2%E5%8A%87%E3%80%8C%E4%BA%BA%E9%AD%9A%E5%A7%AB%E3%80%8D%E4%B8%8A%E6%BC%94.html（アクセス日：2016-2-14）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

「あの子がこんなことやってる！」みたいな。舞台づくりの流れやなんかも通して，対人間では恥ずかしくて言えないようなことが言えるし，頑張りが伝わる。人形劇って，媒体が増えるから，技術があるからある意味難しさもあるけど，とっかかりはつきやすいんじゃないかなと。恥ずかしさがなくなるというか。

飯田で上演される人形劇では，舞台を観る人は観客でありかつ操演者の直接の知り合いでもある場合がある。地域住民のつくる舞台を地域住民が鑑賞することで，人形という媒体を通じて人間の新たな一面に気づくきっかけがあることを C さんは指摘していた。これは地方の文化芸術活動の一般的な特徴かもしれないが，上述の様子からはさらに飯田の人形劇のある特性が観察できる。そもそも市民のこのような発見にプロの人形劇人である C さんが気づいているということ自体，C さんが飯田市民であることと強い結びつきがあり，人形劇という舞台表現が市民の心にもたらす影響を直接感じることで，プロとしても人形劇という舞台表現の奥深さに対する理解が深まると言えるのではないか。プロがただ指導の場としてだけでなく生活の場としてもある地域と結びついていることの利点は，このような点にあると筆者は考える。

他に，筆者がお話をうかがった D さんも，もともと飯田の出身ではなく関東のとある有名プロ人形劇団で人形美術のデザインや操演に携わっていた方だが，人形劇を大切にする飯田の風土になじみ，人形美術館での解説員や 2013 年にたちあがった NPO 法人（2.5.3 で後述）の職員として精力的に人形劇と関わりを続けている。飯田は人形劇と関わりをもち続けることができるだけの人材や観客，施設や行政のバックアップが他の自治体に比べ充実していると考えられる。

今回の調査で筆者が訪問した飯田市川本喜八郎人形美術館には，NHK で放送された人形劇ドラマ「三国志」や「平家物語」の制作で知られる人形美術家の川本喜八郎の作品が多数展示されているが，彼もまた，飯田の出身ではなく東京の出身でありながら，地域に伝わる人形浄瑠璃が住民によって愛されている飯田に感銘を受け，飯田の地に自らの作品を寄贈している。

2.4.6 飯田出身のプロ誕生への期待

飯田に惹かれ飯田に住むようになった飯田出身でないプロや飯田出身のアマチュアは育っているが，飯田出身飯田在住のプロは残念ながらまだいない。“飯田で生まれ育ち，飯田で人形劇に出会ってその魅力に気づき，プロの人形劇人となった人が飯田に人形劇の指導者として U ターンする流れを期待している”と B さんは語っていた。このように，人形劇のプロが飯田で誕生し飯田に帰ってきてその成果が次世代に還元されれば，さらに飯田の人形劇文化の持続性が保障されるだろうと考えられる。

プロの社会的役割は，日本全国や海外を飛び回り公演を通じて自らのパフォーマンスを高めるだけでなく，地域での指導や普遍的な魅力のアピールにもあるだろう。U ターン現象がおきれば飯田という地域の文化振興が促されるのみならず，裾野の拡充を通じて人形劇そのものの価値が守られ育つことにつながると筆者は考える。この考えの根拠は以下の C さんの語りによる。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

人形劇がもっとメジャーになってほしいっていうのはあります。そういうのって，例えば私たちの頃だといっこく堂さんとか，メディアに出てスターになれば早いけど，でもあくまでそういうのは一過性だし。だから，地道なファンを増やす，で，小学校とかでやりたいっていう子も増やすっていう。裾野を広げるのが大事ですね。

2.5 プロとアマチュアをつなぐ存在

2.5.1 飯田文化会館人形劇のまちづくり係

飯田市には人形劇に関わるユニークな「飯田文化会館人形劇のまちづくり係」がある。飯田文化会館内にオフィスを構え，「いいだ人形劇フェスタ」の運営のみならずフェスタ期間以外の人形劇定期公演，学校公演やワークショップの企画，人形劇の国際化推進など，「フェスタ以外も 365 日人形劇が息づくまち」を目指して人形劇に関する業務を幅広く担当する全国でも極めて稀な行政担当部署であると言えよう。この「飯田文化会館人形劇のまちづくり係」は，人形劇を知りたいアマチュアと専門的技術をもったプロをつなぐ窓口としてはたらく点において，飯田の人形劇のプロフェッショナリズムとアマチュアリズムの共存共栄を支える中心的な役割を担っていると筆者は考える。

「飯田文化会館人形劇のまちづくり係」の意義を教育文化振興の施策の観点から支えるもののひとつに飯田市教育振興基本計画[11]がある。本計画は平成 22 年度から平成 28 年度までの 7 年間を対象に教育分野の個別計画として持続可能な地域づくりのため行政の役割を明確化し，市民・関係機関などとの協働・連携を目指すものである。本計画のうち，第 4 章「施策の具体的な展開」中で述べられている 3 つの基本目標のひとつ「多様な文化や価値観を認め合い，共に生きる社会を担う人づくり（共生）」の施策の方向「文化力を高める」の項目内に「人形劇のまちづくり」が具体的にあげられている。さらに，基本目標のひとつ「知・徳・体のバランスのとれた生きる力を育む人づくり（自立）」の施策の方向「豊かな心を磨く」の項目内に「人形劇を活用した情操教育の推進」が提言されている。学校劇団の設置数やフェスタの参加者，フェスタ以外の公演観劇者数や人形劇展示施設観覧者数などについて具体的な数値目標まで設定され，行政のバックアップが充実している様子が読み取れる。

2.5.2 飯田の「小さな世界都市」化を見据えた人形劇のあり方

プロや市民のアマチュアの活動と異なり行政は飯田の人形劇文化の対外発信を積極的に担う。ただし，人形劇を核とした中長期的な飯田のブランディングが，飯田市民の心の育ちを離れて強引に進められるのではなく，市民の賑わいも大切にし，かつ人形劇そのものの魅力が広がるよう全国や海外からアーティストや研究者が集まり交流する国際芸術村の実現を構想しているという

[11] 「飯田市教育振興基本計画【概要】」https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/10149.pdf（アクセス日：2016-2-14）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

[12]。

飯田市は 2027 年目標のリニア開通にあわせて飯田の人形劇について具体的な行動目標を立てている。市民アーティストや指導者となる人材の育成，飯田発のプロ劇団設立構想，人形劇ミュージアムの活性化，人形劇図書館や研究所の設立，人形劇の盛んな海外地域とのネットワーク形成など今後の課題は多いが，これらの計画から読み取れるように，国際化推進は必ず飯田自身の人形劇に関するコンテンツの充実化と平行して行われる予定である。また，学校人形劇の支援や鑑賞事業，いいだ人形劇フェスタといった今後も継続する予定のプロジェクトが，これから人形劇と出会わんとする飯田市民のアマチュアリズムと，国際化に伴いますますの進化が予測されるプロフェッショナリズムに接点をもたせることが重要であろう。このような裾野の拡充は前述のとおり飯田の人形劇の充実だけでなくひいては人形劇文化全体への好影響につながると筆者は考える。

飯田市は小さな世界都市を目指しているんです。飯田って外国人の観光客が少ないとは言われてるんですけど，外国の人来て来て，じゃなくていいんだと，この間，市長も言ってました。

上述の A さんの語り中に登場する「小さな世界都市」という表現からは，国際化を目指し，プロからアマチュアまで裾野を広げつつも，山に囲まれた飯田ならではの小回りを生かして確実なコンテンツの充実化を図る飯田の意識がうかがえるのではないだろうか。

2.5.3 NPO 法人いいだ人形劇センター

NPO 法人いいだ人形劇センターは，行政の人形劇に関する扱うべき仕事量の増加に伴い一部役割を行政から委譲するかたちで 2013 年 4 月に発足した新しい団体である。いいだ人形劇フェスタにはこの団体のメンバーは後援というかたちで関わっており，主催の市民ボランティアである「いいだ人形劇フェスタ実行委員会」と組織図上はやや立場を異にするも，実際には「いいだ人形劇フェスタ実行委員会」のメンバーがこの NPO 法人の職員を兼任しているケースも存在している。[13]

ほかに，この NPO 法人は飯田市川本喜八郎人形美術館の指定管理を任されており，同博物館の人形アニメーション制作スタジオを市民に開放する取り組みも行われている[14]。「飯田文化会館人形劇のまちづくり係」と同様に操演のレッスンやワークショップ，鑑賞プログラムの企画のほか，この団体独自の取り組みとして，人形劇のまち飯田の季刊情報誌『Dogushi』を年 4 回発行し市民に飯田の人形劇や国内外の人形劇に関する情報を発信している点も興味深い。

---

[12] A さんへのインタビューより
[13] B さんへのインタビューより
[14] いいだ人形劇センター公式 HP：http://iidapapecen.com/static/keikaku.html
（アクセス日：2016-2-14）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

2.5.4　いいだ人形劇フェスタ実行委員会

飯田において人形劇のプロとアマチュアが出会う場所として前述の「いいだ人形劇フェスタ」を見逃すことはできないだろう。このフェスタを運営する「いいだ人形劇フェスタ実行委員会」は，市民ボランティアから成り，企画運営に関わる中心メンバーは 80 名ほどである。同委員会がフェスタの運営を通じて人形劇と関わっていることは改めて言うまでもないだろう。こういった大々的なフェスタが毎年同時期に自治体をあげて開催されることで，プロアマ問わず飯田内外の人形劇人たちのネットワークが創出されやすくなる。プロとアマチュアの世界それぞれで人的交流が完結せず，絶えず共同制作やワークショップなどを通じて少しずつ新規参入者も取り込みながら両者が互恵的な関係としてつながるのにこの実行委員会は寄与していると考えられる。

2.6 おわりに

本報告書では，地域の文化芸術活動においてプロフェッショナリズムとアマチュアリズム双方の良さがどのように生かされるか，飯田市の人形劇を題材に観察した。フェスタ以外の場面でも飯田の地にプロが継続的に関わる土壌が形成されており，中には彼らが飯田に住みつくケースもあるほどにプロが活動しやすい点については特記させて頂きたい。しかも，人形劇をただのまちおこしの道具ではなく，継続的に市民の心を育てる文化として守る意識が飯田にはある。そしてこの意識は，人形劇という文化がただそれ自身のために存在するのではなく，人間同士の心の交流を目指す本質的な役割をプロアマ双方に気づかせているのではないだろうか。人形劇を利用した飯田のコミュニティへの強引な巻き込みではなく，人形劇自体がもつ良さに対する信頼に支えられたゆるやかなネットワーク形成がうかがわれる。

2016 年 1 月の第 6 回地域再生大賞において，いいだ人形劇フェスタ実行委員会は関東・甲信越ブロック賞を受賞し[15]，昨今飯田の人形劇はメディアから関心を集めている。さらに，2018 年には世界人形劇フェスティバルが飯田で 10 年ぶりに開催予定であり，飯田の積極的な対外アピールも進むと考えられる。飯田の人形劇の国際化進展が，プロフェッショナリズムとアマチュアリズムの共存共栄を侵食するのではなくむしろ両者が互いに高め合う関係になることが重要であろう。

また，今回の報告書は主にプロとアマチュアの関わり合いに注目したため，人形劇の取り組みが市民間の交流に与える影響についてはほぼ記述できなかった。インタビューさせて頂いた H さんは，人形劇に対する親近感だけ飯田の人形劇は続いているのではなく，人形劇が子どもたちを集め笑顔にし，大人同士もイベント運営あるいは出演を通じて家族や職場とは別の信頼関係を結ぶことができる点にあると思うと語ってくださった。このように，今回の報告書とは異なる角度から飯田市民の心の育ちに人形劇が与える影響についても考察は可能であろう。この点が今回の報告書の残した課題である。

最後に，貴重な時間を割いて今回の報告書のためのインタビューに応じてくださった方々と，素晴らしいパフォーマンスを楽しませてくれた飯田人形劇場の定期公演に出演の皆様方にこの場

[15] 信濃毎日新聞，2016 年 1 月 24 日朝刊「ふるさとの明日を開く　第 6 回地域再生大賞決まる」

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

で厚い御礼を申し上げて本報告書の締めくくりとさせて頂きたい。

引用文献・資料，Web ページ

「台湾で人形劇「人魚姫」上演 « ミナミシンシュウ.jp」
http://minamishinshu.jp/news/culture/%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E3%81%A7%E4%BA%BA%E5%BD%A2%E5%8A%87%E3%80%8C%E4%BA%BA%E9%AD%9A%E5%A7%AB%E3%80%8D%E4%B8%8A%E6%BC%94.html（アクセス日：2016-2-14）
「飯田市教育振興基本計画【概要】」https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/10149.pdf（アクセス日：2016-2-14）
いいだ人形劇センター公式 HP http://iidapapecen.com/static/keikaku.html（アクセス日：2016-2-14）
信濃毎日新聞，2016 年 1 月 24 日朝刊「ふるさとの明日を開く 第 6 回地域再生大賞決まる」
「みる　演じる　ささえる　わたしがつくるトライアングルステージ　いいだ人形劇フェスタ」パンフレット

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第 3 章　飯田市美術博物館が作る“飯田”というつながり

櫻井 美果・志津田 萌

3.1 はじめに

1980 年代は「地方の時代」「文化の時代」「国際化の時代」[16]と言われて地方分権化が進み，多くの地域博物館が作られた時代であった。その中で 1989 年に開館した飯田市立の博物館が，飯田市美術博物館（以下,「美術博物館」と略す場合がある）である。現在,「伊那谷の自然と文化」をテーマとして，美術・人文・自然それぞれの部門において，研究・展示・教育活動が行われている。本報告書を執筆するにあたり，我々はこの飯田市美術博物館の活動に注目した。

考察の結果から，飯田市美術博物館は，飯田について地域住民が理解し，アイデンティティを形成していくための場であると言える。そしてその役割はさらに大きく二つに分けることが出来る。即ち,「(研究を行う）地域住民の主体的な活動の場」であると共に,「(一般の）地域住民へ広くふるさと意識を伝えていく場」である。これらは,「“飯田”というつながり」を地域住民の中に生み出し継承していく役割として注目することができる。

このような役割を担っている飯田市美術博物館が発信している「飯田らしさ」とはどのようなものなのか，そしてそれはどのように伝えられており，今後どのように発展していくのか。全体を通し，この点に注目して考えていきたい。

3.2 研究の方法

8 月末の実習では，プラネタリウムのオリジナル番組を 2 本見せていただき，全員で美術博物館の概要に関する講義を受け，地質調査の研究室を見学した。本報告書を執筆するにあたり，その際に得た知識に加えて更なる追加調査が必要だと判断したため，2016 年 1 月 9 日（土）に飯田市美術博物館に改めて赴き，聞き取り調査を行った。インタビューは以下のように大きく三つの部分に分けられる。この後本文中でインタビュー内容を引用する際には,以下の番号を用いる。

①副館長の飯島氏から全体の概要についての聞き取り調査

②人文・美術・自然のそれぞれの研究室に在籍する学芸員の方への詳細の聞き取り調査

③桜井係長からプラネタリウムについての説明

これに加え，インタビューの間の時間で常設展や特別陳列「かるたで遊ぶお正月」，コレクション展示「春草代表作鑑賞ガイド」,「小中学校郡展等優秀作品展」を見学すると共に，来館者の方二人に聞き取り調査を行った。また，プラネタリウムの番組を新たに 3 本見せていただき，プラネタリウム担当の方からもお話を伺った。飯田市美術博物館を後にしてからは，隣接する柳田國

[16] 日本展示学会展示学講座実行委員会編『地域博物館への提言』より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

男館に赴き，見学をした。実地調査は以上の方法をとり，これらに加えて必要と判断した際には先行研究も参照した。

3.3 地域住民の主体的な活動の場としての美術博物館

地域住民の主体的な活動の場という側面について見ると，飯田市美術博物館はその設立経緯からすでにそのような場であったと言える。設立経緯は以下の表に示す通りで，地域住民の活動が中心となって設立された。当初，「菱田春草の美術館を作りたい」という市民からの要望があり，1983 年に美術博物館の構想が始まった。その間，伊那史学会をはじめとする地域住民によって，伊那谷の自然と文化に関する地域研究が盛んであった。これを契機に，美術館だけでなく自然，歴史，民俗も総合した施設を作ろうという動きとなり，大学，学校の教員，地域の活動家を中心に基本構想が作成された。展示の構想が出来上がり，建設が始まる直前の 1987 年 4 月，ようやく学芸員として桜井氏が採用された。この経緯を踏まえて桜井氏は，「本当のその構想の段階は，学芸員の思いというよりは，地域の人たちの思いでこの建物は出発したんです。[17]」とまとめた。

1983 年 4 月	飯田市美術博物館準備事務局設置
1986 年 3 月	飯田市美術博物館・日夏記念館基本構想まとまる
1986 年 4 月	飯田市美術博物館展示研究委員会発足
1987 年 3 月	飯田市美術博物館実施設計終了
1987 年 4 月	学芸員 1 名（民俗）採用
1987 年 6 月	起工式
1988 年 4 月	飯田市美術博物館発足 井上正館長就任・学芸員 2 名（美術・地質）採用
1989 年 10 月	開館式 常設展示，特別展示，特別講演など開始

図表 1-3-1　飯田市美術博物館設立過程[18]

当初の各関係者の意図は，以下の様だったという。自然分野では，博物館を自らの研究発表拠点として活用したいという地域の人々が，1985 年にいち早く「伊那谷自然友の会」[19]を作った。現在会員数は約 1200 名を数え，美術博物館と協力しながら多様な研究や企画を展開している。美術分野では，春草の作品のみならず自分たちの作品の発表の場にもしたいと思う人々が，長野県美術展を開催できるようにしてほしいと要望した。ロビーはそれが開催できる構造に設計されており，開館後実際に 1989 年に長野県美術展の会場となった。人文分野では，美術博物館の基

[17] インタビュー②より
[18] 『飯田市美術博物館 飯田市上郷考古博物館 年報』第 24 号より
[19] 伊那谷自然友の会　ホームページより（URL：http://inadanishizen.grupo.jp/）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

本構想ができた後に，東京都世田谷区より飯田にゆかりのある柳田國男邸の寄贈が決定した。完成した柳田國男館を拠点に地域住民による柳田國男記念伊那民俗学研究所[20]が現在も活動している。

専門の学芸員はその後，研究活動を重視して採用されたためほとんどが県外から来た方々である。土地に不案内な学芸員を育成していくために，当時盛んに地域研究を行っていた退職した学校教員などが専門研究員として付き，共に調査研究活動を行ってきた。現在は土地に詳しい学芸員の育成という目的は必要なくなったものの，現在も地域の研究家たち，活動家たちと共に調査研究をするという伝統は続いており，館内で開催する教育活動よりも外に呼ばれて講演などに行く回数の方が感覚としては多いくらいだという。

1995 年には，「地域の研究団体が相互に連携しながら研究を推進することが不可欠である」との声の高まりにより，14 団体が集まって「飯田下伊那地域研究団体連絡協議会」（現「伊那谷研究団体協議会」）が結成された。現在は 16 団体が加盟し，毎年定期的にシンポジウムを開催している。シンポジウムでは近年，「地域を様々な切り口や方法で研究する団体・ 個人にとっての共通する地域の課題」がテーマとなっているといい，2005 年の第 10 回シンポジウムでは，「伊那谷学の創造と地育力」が掲げられた。「伊那谷学」は各団体による研究が地域に貢献するためには，研究成果の記録と異分野間，専門家との交流が重要であるとして提唱されたものである[21]。

以上を踏まえれば，飯田市美術博物館は地域住民たちによって作られ，また地域住民たちの活発な研究活動や議論を支える拠点となってきたということができる。その土壌には，自分たちの住む街について知り，街を自分たちが支えていきたいという主体的な地域住民の姿勢があった。これはひとつの飯田らしさと捉えてよく，美術博物館がその活動の結節点として重要な役割を果たしてきたといえるだろう。

3.4 地域住民へ広くふるさと意識を伝えていく場としての美術博物館

次に，積極的に研究活動を行っている 3.3 に述べたような人々も含み，広く一般市民に対して，どのようなメッセージがどのように伝えられているのかについて見ていく。美術博物館のテーマを明らかにしたうえで，来館者に最も影響を及ぼしうる展示活動と教育活動について言及する。

3.4.1 飯田市美術博物館が発信する「伊那谷の自然と文化」

飯田市美術博物館のテーマは「伊那谷の自然と文化」となっている。飯田市の施設であるにもかかわらず対象を「飯田市」ではなく「伊那谷」と広く捉えているのは，飯田市美術博物館が守り発信していくメッセージに関係する。この点に関して副館長の飯島氏にお話をいただいた。以下はインタビュー内容の抜粋である。

---

[20] 柳田國男記念伊那民俗学研究所　ホームページより
（URL：http://inaminkenhome.blogspot.jp/p/blog-page.html）

[21] 伊那谷研究団体協議会　ホームページより（URL：http://inadani-kenkyo.com/）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

先日もある方が来て,『伊那谷の自然と文化っていうのにどうして恐竜の骨が展示してあるんですか』っていうことをおっしゃったのですけども，まあ，人間の歴史から見ればおかしいかもしれない，この地域とは関係ないかもしれないけれど，地球全体の歴史からみたら我々の命につながっているので，やはり大事な展示である。だから，必ずしも伊那谷の自然と文化っていいながらも，そこだけに焦点を当てることをしてしまうと，大事な視点が抜けてしまうかもしれない。だから広い視点で，特に自然では地球っていう広い中からだんだんだんだん自分ていう方にフォーカスをしていって，同じとこは何で，違うとこは何か，それで違うからこそ，日々の暮らしの細かいところが違ってきている，っていうことにつなげていければいいかなと思いますね。（中略）それが飯田のものだっていいながら，どこの地域でもそうですが，いわゆるふるさと意識につながっていく。自分のふるさとを大切にしていく，自分が育ってきた根本的なところがそういうところだっていうのを感じてもらうっていうことだと思いますね。（中略）人って生まれる親と時代と場所選べないです。命ってみんなそうですよね。ですから，それは所与のものなので，そこで生まれたときにじゃあどうアイデンティティを持っていくかっていったら，そういう学びの中でそこにいるっていうことを感じてもらうことをやりたいっていうのが本質的な学芸員の思いですね。それが伊那谷の自然と文化っていう言葉に現れていると思いますね[22]。

「伊那谷の自然と文化」に込められた思いについて以上の引用から言えることは，以下の 3 点に集約される。

①飯田市美術博物館は飯田の人々にふるさと意識をもってもらうための場である。

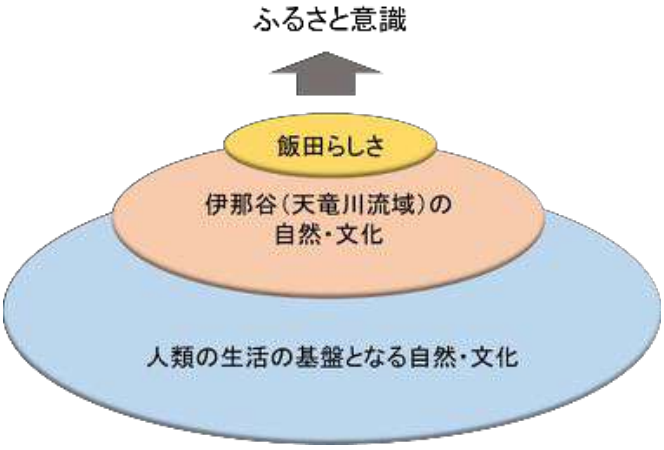
②ふるさと意識とは，他の地域と同じ点・違う点とその要因を学ぶことを通して，自分の生まれ育った場所にアイデンティティを持ち大切にすることである。

③長野県，飯田市などの行政区分は人為的な歴史の浅いものにすぎず，伊那谷，天竜川流域，日本列島など広い視点から自分の生活への影響を見ていくことが重要となる。

また，これらを図式化すると以下のようになる。飯田市美術博物館は，人間の文化，生活の基盤となる自然から伊那谷特有の自然・文化，そしてその上に立つ現在の飯田市があることを，調査・展示・教育活動を通して伝えていることになる。美術博物館では，特に普段の研究活動とその蓄積を重視しており，展示や教育活動を通して，様々な「ものの見方」を伝えていきたいとのことである。では,「伊那谷の自然と文化」が具体的にはどのようなメッセージとして伝えられているのか，常設展示と企画展示の内容から実際に見ていく。

[22] インタビュー①より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室



図表 1-3-2　飯田市美術博物館が伝えるもの[23]

3.4.2 展示・教育活動に表われている「伊那谷の自然と文化」

3.4.1 に述べたようなメッセージは，3.3 で言及したような主体的に研究活動を行う市民だけではなく，美術博物館を訪れた一般市民にも展示や教育活動を通して伝えていく必要がある。以下，（1）では常設展示，（2）では企画展示，（3）では教育活動を取り上げる。

（1）常設展示

まず，インタビューの中で常設展示と企画展示の関係性についてうかがった。3.2 でもすでに述べた通り，飯田市美術博物館はもともと地域住民たちの手で構想されたものである。作品保護の関係で企画展示を回して作品を公開している美術部門は除くが，自然部門，人文部門の常設展示は学芸員が採用される前にすでに構想されたものであり，地域住民たちの手によるものであった。そのため自然・人文の常設展示には，当初の地域住民たちの思いが残っているとも解釈できるが，現在館を運営する学芸員から見て改善したい点も多いという。構造的に大幅な変更をすることが困難なため，調査研究を通して得た新しい視点は，企画展示に活かされている。

開館当初の地域住民たちの思いは，常設展示の内容から読み取ることができるだろう。今回は自然部門・人文部門の常設展示を実際に見学し，そこにどのような飯田像が描かれているのかを考えた。

①自然部門

自然部門はパネル展示，模型，実物資料，で構成される 1 部屋で，展示されていたものを列挙すると次のようになる。

[23] インタビュー①，②を元に筆者作成

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

展示種類	詳細
模型	日本列島中央部のジオラマ
実物資料	富草層群の哺乳類，パレオパラドキシア，デスモスチルスなどの化石
模型	古代ザメの頭部巨大模型
実物資料	阿南町，千代が海であったことを示す魚類の化石
実物資料	伊那谷の花崗岩
模型	飛騨から下伊那にかけて起きた割れ目噴火の火砕流
実物資料	伊那谷によくいるイノシシ，カモシカ，ニホンザル，タヌキなどの剥製・骨格標本
パネル	地殻変動の解説
模型	ティラノサウルスの胴，歩き方の模型

図表 1-3-3　自然部門常設展示品[24]

自然部門では主に，日本列島や中央構造線付近の地形形成過程とその痕跡を中心に扱っている。あくまで地質や植生，生態系の特殊性に焦点を当てており，恐竜や動物は登場するものの人類生活が直接的に扱われていない点が特徴である。人間生活の視点を意図的に外し，地形の形成過程やそれを基盤とする生命活動という広い視点から描くことによって，地球活動の中に自分たち人類を位置づけて感じられることを意図したものだと考えられる。図表 1-3-2 で言えば，「人類生活の基盤となる自然」「伊那谷（天竜川流域）の自然」を網羅していると言える。

展示内容としては大型模型やジオラマ，剥製などを積極的に詰め込んでおり，インパクトが強い。当日の入館者の様子を見ても，特に子どもたちに人気があり，恐竜や動く模型にはしゃいでいる様子が見られた。来館者の方からは，「孫が喜ぶため今までに何度も連れてきている」と伺った。また，大人向けとして，ジオラマは伊那谷の形成過程が特殊であることを視覚的に理解しやすいものだった。一方で，各展示物のつながりが見えづらく，ストーリーとして理解しがたい部分があった。これは，展示物の選択や順番を工夫するか，又は展示物の間をつなぐキャプションを，形式を統一して作成することで，分かりやすくなるように思う。

②人文部門

人文部門では，パネルの説明文が充実しており，旧石器時代からの人間の暮らしを時代ごとに紹介している。豊臣秀吉の権力下では小笠原秀政の城下町となり，飯田市美術館博物館はその跡地に立地している。また，江戸時代には中馬によって栄え，飯田からは煙草，繭，紙，椀，串柿などが特産品として持ち出された。特に養蚕については，川路が日本三大桑園に数えられるほど

[24] 展示の見学をもとに筆者作成

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

有名であり，蚕玉信仰があったという。中馬で経済的に栄えた様子は「小京都」と呼ばれ，多くの文化人を輩出した。文学者の日夏耿之介や博物館の父と呼ばれる田中芳男，民俗学者の柳田國男などである。後半には現代にも残されているお練り祭りの車や淡路の人形使いから伝えられて根付いた人形の頭部などが展示されていた。先述の自然部門の展示では人間の活動とは離れた視点から歴史が概観されていたが，人文部門ではその流れを引き継ぐ形で，人間の文化においても飯田らしい特色が出ていることが読み取れる展示であるといえるだろう。図表 1-3-2 における「飯田らしさ」にあたる。

改善を要する点として挙げられるのは，人文部門の常設展示が現代と直接つながっていないことである。りんご並木や人形劇フェスタなどの現代の活動にも飯田らしさとして素晴らしいところがあり，そのような飯田像までを含めることができていないことが，展示に欠けている点である。この現代の飯田像については，次に取り上げる企画展示の中で扱われている。

（２）企画展示

現在の展示における課題として挙がっているのは，常設展示である。先に述べた通り常設展示が構想される段階では，現在館を運営している学芸員が介入していなかった。さらに，常設展示を改善したいと思っても容易に改修することができない状況にあるという。そのため，企画展の開催に力が入っており，それは 2015 年の一年間でコレクション展示 17 件，特別展示などその他 10 件という企画展の数の多さに表れている[25]。常設展では扱われていなかった飯田に関する展示については，例として今までに 1998 年に「人形の魔術師川本喜八郎」，2007 年に「飯田大火 60 年」，2013 年に「りんご並木 60 年」をテーマに企画展が開催され，来館者にも評判が良かったという。常設展示が動かせない分，日ごろの研究成果や記念の展示として，企画展示が非常に活発に行われているのが美術博物館の特徴だということができる。

近年では，今後リニアの開通などにより大きな社会の変化が起きることを考慮すれば，常設展示も改善が必要であるとの意見がまとまり，今後のリニア開通に向けて常設展示の段階的な変更が行われていく予定であるという。川添（2001）は常設展示の固定化を地域博物館一般の問題点として挙げており，「これまでのような完成品のかたちで展示するのではなくて，絶えず変化し，時代に適応する新しい形へと転換していかなければいけない」と主張している。例えばディスプレイを使って説明や映像を映すような，容易に更新ができる展示の仕組みを考えていく必要がある。その際，一つの方法として可能性があるのが，次に述べるプラネタリウムの利用である。

(3)教育活動

この節の最後に，「ふるさと意識を伝えていく場としての飯田市美術博物館」が主体となって行っている市民教育活動にはどのようなものがあるのかについてまとめていく。活動内容で大人向けのものと子ども向けのものとに分け，活動内容を整理する。そして，何を伝えようとしており，

[25] リーフレット「飯田市美術博物館・上郷考古博物館 2015.4-2016.3」より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

どこに課題があると言えそうかについて考える。

①大人向けの教育活動

〇美術分野

第一線で活躍する研究者を招いて行う「美術講座」というものがある。平成 27 年度のテーマは「春草と現代」であった。また，美術博物館のコレクションを鑑賞する「美術鑑賞の会」，学芸員による連続講座である「春草講座」も年に数回ずつ行われている。

〇人文分野

人文分野の教育活動の代表例である「文化講座」では，伊那谷の歴史や文化について学ぶ講座，伊那谷や全国の民俗・芸能について学ぶ講座，善光寺信仰をテーマに仏像の見方などを学ぶ講座などが開かれている。会場は美術博物館に留まらず，現地に赴いて歩きながら学ぶ機会も設けられているようである。また，伊那谷の古文書をテキストにして読み方を学ぶ「古文書講座」も開設されている。

〇自然分野

展示内容に表れていたことにも繋がるが，基本的には伊那谷の形成過程や南アルプスの生物についてなど，地球全体に目を向けつつも地元の自然の特徴を深く知ることが主な目的となっているようである。一年を通して学び，最終的には「伊那谷自然史発表会」が行われている。

大人向けの講座はどの分野においても系統立ち，専門家の解説により深く伊那谷について学べる内容になっているという印象を受けた。では，子ども向けの教育活動にはどのようなものがあるだろうか。

②子ども向けの教育活動

〇美術学校，科学工作教室

飯田市美術博物館が主体となり行っている教育活動の例として挙げられるのは,「子ども美術学校」と「子ども科学工作教室」である。平成 27 年度は，前者が 8 回，後者が 4 回実施された。このうち美術学校を例にとるとその内容は，美術作品の鑑賞の仕方を知り，菱田春草の生涯について学ぶ等の専門的な学習というよりは，絵画制作の基礎を学ぶなどの体験型学習が中心となっている。

〇特別陳列との連携

追加調査を実施した 1 月 9 日に,「子ども体験教室 百人一首を楽しもう～競技かるたと源平合戦～」というイベントが開催されていた。これは，特別陳列である「かるたで遊ぶお正月」と連動した企画で，競技かるたの模範演技を鑑賞した後，実際に百人一首の源平合戦を体験するというものであった。我々も前半部分を見学させていただいた。

〇展示を観る

美術博物館の性質上，社会科見学で子ども達が学校単位で訪れる際の活動の中心は基本的には

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

常設展示や企画展示を観てまわってもらうことになる。その展示内容については既に言及した。現在では，展示を児童・生徒に自由に見てもらいながら，学校の先生が必要に応じて解説をしていく，という形をとっているということだ。

〇プラネタリウム

最新鋭の設備を利用して，天体について学び，「地域を知る」番組を観ることが出来る。学校単位で利用することを想定し，団体での予約投影も受け付けている。内容については 5 節で詳述するが，幼い子どもにも人気の施設であり，更なる有効活用が望まれている。

以上が，美術博物館が行っている子ども向けの教育活動の例である。この他，上郷考古博物館においても「縄文土器作り」や「勾玉づくり」といった体験学習や，「歴史探検隊」と題して現地に赴いて古代文化の流入ルートを探る活動が行われている。

副館長の飯島氏はインタビューにおいて，「基本的に，ここがやっている市民教育は大人向けです。子ども向けは難しいです[26]」と述べている。現実的な問題として，既に言及された菱田春草の作品のような日本画は，幼い子どもにその魅力を伝えるのが難しい。従って，展示内容そのものの解説というよりは，内容に「興味を持ってもらうための」企画になることが多い。実際，美術学校や科学工作教室を企画している研究員には元々学校の先生だった人が多く，教師をしていた時よりも制約がなく自由に企画出来ることもあって子ども達に「楽しんでもらう」方向に傾きすぎている，という見方があるようだ。今後は，もう少し教育的な内容になるように計画的に内容を決めていきたいが現時点ではまだ難しい，といった意見をうかがった。

また，社会科見学の際の解説の仕方について飯島氏は「本当は，これからは，先生じゃなくて学芸員が子ども向けに解説するっていうのをやらないといけないかなと思っていますけれど，まだちょっとそこまでは[27]」と言及する学校の先生向けの研修も随時行われているようだが，解説の質を学芸員のレベルに合わせていくのは難しいようだ。今後いかにより教育的な内容を導入し，興味を持ってもらうだけに留まらないようにしていくか。展示内容や教育活動をどのようにうまく利用し，より多くの飯田市民，とりわけ子ども達に「ふるさと意識」を伝えていくかが課題となりそうだ。

3.5 リニア時代をどう迎えるか

この節では，より範囲をひろげ，「観光」という視点を導入する。その際に飯田市美術博物館の独自の取り組みであるプラネタリウムでのオリジナル番組に注目し，詳しく言及する。これを通して，飯田市美術博物館は「飯田らしさ」をこの先どのようにより幅広い層に向けて発信していけるのかという点について考えていきたい。

---

26 インタビュー①より

27 インタビュー①より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

3.5.1 飯田市美術博物館と観光

まずは，飯田市美術博物館が飯田市における観光という側面において担う役割について考えていく。筆者が当初立てた仮説では，地元の人のみならず，プラネタリウムのような独自の取り組みを起点として，他市，他県から訪れる人々に対しても積極的に「飯田の良さ」「飯田らしさ」を伝えていく取り組みがなされているのではないかと考えていた。

この点に関して飯島氏に伺ったところ，「あまり観光客向けという意識はしていません[28]」という答えが返ってきた。その理由について，「行政の施設では難しいと思っています。やはり市民の皆さんの税金で基本的にはやっていることですので」と述べた。

飯田市美術博物館は博物館法及び「公立博物館の設置及び運営に関する基準[29]」に定められるところの「公立博物館」であり，地方公共団体である飯田市が設立した施設である。即ち，インタビューで言及されている通り行政の施設であり，利潤追求のために企画展示等を行っている訳ではない。従って，他県から来た人に向けての「観光」を意識した企画は現在行われていないということだ。

一方で，将来に向けての見通しを持った時に，その可能性についての言及もなされている。

> ただこれからはですね，逆にグローバル化したり，リニアが出来たりすると，観光客の皆さんも，あの地域って何だろうか，という関心を持っていただいた時に，伝えられるような展示の仕方っていうのは工夫していかないといけないと思っていますが，基本的にはやはりここのことを伝えるということですので，観光客に向けた展示っていう考え方はまだないですね。来た時に楽しんでもらえるような工夫はしなきゃいけないと思っています[30]

リニアモーターカー開通を視野に入れて，各分野で構想が形作られ始めている段階である。各地域がより短時間で結ばれるようになったとき，その地域の特徴をどう発信していくのかという点は，様々な分野で課題となってくるところであろう。

その突破口の一つとして考えられそうなのが，先にも言及した「プラネタリウム」の有効利用である。実際に，副館長の飯島氏も，「プラネタリウムは，地元の人が見ても観光客の人が見ても，一応入門編として，地域の入門編としては，どっちでも使えるようなイメージで作っています[31]」と述べている。

より広い層に飯田市の魅力，「飯田らしさ」を伝えていくためにはこの先どのような工夫をしていくべきなのか。そこで，次にこの点において有効な手段となる可能性のある「プラネタリウム（オリジナル番組）」について詳しく取り上げる。まずは設立経緯を述べたうえで，現状を確認し，

---

[28] インタビュー①より
[29] 文部省告示第百六十四号「公立博物館の設置及び運営に関する基準」より
（URL：http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19731130001/k19731130001.html）
[30] インタビュー①より
[31] インタビュー①より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

これからの展望を行う。

3.5.2 オリジナル番組作成開始までの経緯

飯田市美術博物館に特徴的な取り組みとして，プラネタリウムの施設である「プラネタリウム天歩 Tempo」を利用して伊那谷特有の自然，文化，伝統等を紹介する「オリジナル番組」を投影していることが挙げられる。

プラネタリウムと聞いて一般的に思い浮かべるものは，星空をドーム全面に投影して天体について学んでいくものだろう。これは「光学式」と呼ばれ，全国的に採用されている。光学式プラネタリウムについては美術博物館設立当初からその構想があり，1988 年に運用が開始された。これは子どもたちを中心に人気があり，美術博物館の一つの特徴となっていた。しかし維持費用の問題が生じたため，次第にプラネタリウムの存続についての議論がなされるようになった。実際，市役所内でもプラネタリウム廃止に向けての意見が少しずつ有力になっていた。しかし人文部門の桜井氏は，「幼い子どもたちに対するものとしては非常に大事なので何とか残したいと思って[32]」おり，何とか続けられる方法がないものか模索していた。

そこで導入が検討されたのが，「デジタルプラネタリウム」である。契機となったのは，和歌山大学が「プラネタリウムを観光とか或いは教育に利用するのに映像で PR するやり方がある[33]」と飯田市美術博物館に進言を行ったことだ。これを飯田市長に提案したところ，快く受け入れられた。この時から導入に向けての準備が始まり，オリジナル番組の制作が開始された。撮影は和歌山大学が担当し，飯田市美術博物館の学芸員がシナリオを書いて，業者を通じてナレーションの吹き込みを行った。実際に運用が開始したのは 2011 年 3 月のことだった。

3.5.3 プラネタリウムの現在

現在までに制作されたオリジナル番組は全部で 15 本ある。以下がそのリストである。

[32] インタビュー③より
[33] インタビュー③より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ジャンル	番組名
伊那谷を特徴づける自然・文化・人間の暮らしの有様	山都いいだ～自然と文化，そして未来へ～
	天龍峡　水の旅路～時をこえて～
	●飯田のりんご並木～子どもたちの夢と希望～
	●飯田さくらものがたり～時代を越えて，今に咲く～
	菱田春草～永遠のときを越えて～
	★菱田春草の青春～日本画誕生への道～
	●人形劇のまち飯田～人形芝居にみる伝統文化～
遠山郷の自然と伝統	★遠山霜月祭～太陽と命のよみがえり～
	しらびそ高原の四季
	遠山川の埋没林～古代の地変を未来の警鐘に～
	山とともに～山林資源の宝庫遠山と森林鉄道～
	Zephyrus（ゼフィルス）～遠山の森で見つけた宝石～
	Chorus（コーラス）～遠山の森に響く歌声～
伊那谷の成立	生きている大地～赤石山脈の中央構造線～
	御池山隕石クレーター～地上で見つけた宇宙の足跡～

図表 1-3-4　プラネタリウム番組紹介[34]

※8 月の実習で鑑賞した番組を★，追加調査時に鑑賞した番組を●で表した。

各々10 分程度の番組で，このように伊那谷の自然や特徴的な取り組みについて学ぶことが出来るようになっている。毎年 2 本ずつを基本に制作していたようだが，制作の負担が大きいためこの先は年に 1 本ずつにすることが検討されているようである。現在，「星空解説」と「アニメーション番組」と「オリジナル番組」とが組み合わせられて投影されている。実際のスケジュールの例は以下のようである。

時間	星空解説	アニメーション番組	オリジナル番組
10:00～	星空解説	ほしのせかいへしゅっぱつしんこう	コーラス（鳥）
11:30～		葉っぱのリーフのものがたり	しらびそ高原の四季
13:00～		星の王子さま	飯田さくらものがたり
14:30～		葉っぱのリーフのものがたり	御池山隕石クレーター
16:00～		星の王子さま	山都いいだ

図表 1-3-5　プラネタリウム上映スケジュールの一例[35]

34 リーフレット「平成 27 年度プラネタリウム天歩番組紹介」をもとに筆者作成
35 飯田市美術博物館 HP をもとに筆者作成（URL：http://www.iida-museum.org/planetarium/）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

アニメーション番組を観る目的で訪れた子どもたち，その保護者にも，星空解説を観に訪れた観光客にも，何らかのオリジナル番組を観てもらえるシステムである。平日は「予約投影」も受け付けており，何か観たい番組があれば担当者の方に声をかけることで観ることも可能である。

また，夏休みのような長期休暇を利用して一日に 2 本ずつ学芸員が解説を加えながら上映する機会を設けたり，桜が咲く季節に「飯田さくらものがたり」を主に上映したりという工夫がなされているとのことである。

3.5.4 映像化の意義と今後の課題について

このプラネタリウムが他の展示と比較して画期的なのは,「モノ」として残すのみならず，それを「映像化」しているという点である。映像化することによって，展示だけでは伝えられないような躍動感や臨場感を与えることが出来るうえ，ストーリー性を伴うために伝えたいメッセージをより印象深く打ち出すことが出来るであろう。そして，プラネタリウムを介して地域の魅力を知るという斬新な体験をすることで，より飯田への理解が深まるきっかけともなりそうである。この点は，地域住民にとっても，外部からの観光客にとっても同じことが言えるだろう。

また，3.4.2 で述べたように通常の展示は固定化しやすく，現在改善に向けた努力がなされているところだ。それに対して映像化することによって，後世に伝えるのみならず定期的な情報のアップデートが可能である。桜井氏もインタビューにおいて言及していたように，これらは伊那谷の地域の自然・文化を知るうえで，親しみやすく「入門編」として最適であり，飯田市美術博物館が「飯田らしさ」をより広く伝えていくうえで有効な手段の一つとなりそうである。この画期的な手段をいかに利用していくか。ここで一つ，他県の事例を挙げて考えていく。

2015 年 3 月に，北陸新幹線が金沢駅まで開通した。その際にプラネタリウムでの映像投影を利用した地元 PR が行われていたことが分かった。「北陸新幹線で行く石川の旅」と題して 3 分程度の番組が 6 本制作されており，制作会社の HP において「圧倒的な迫力と没入感を活かした映像により，まるで石川県の名所・名跡を訪れているような臨場感をお届けいたします[36]」と紹介されている。地元のみならず，東京都や，今回訪れた飯田市美術博物館等，全国的に投影が行われていたようである。これはまさに「観光」を意識した取り組みであり，臨場感を味わうことで実際に訪れてみたいと感じることが期待されている。

今見てきた例は，新たな鉄道の開通による期待感から，観光客の増加を目指して行われた取り組みの例である。これを飯田市にあてはめて考えていくと，今後リニアモーターカーの開通に向けて，プラネタリウムを利用して地元の魅力を全国的に発信することは可能であると考える。そのためには飯田市や美術博物館の常設展示とより深く連携をしていくことが大事であろう。より積極的に全国展開し，各地で上映する機会をより増やすことが出来れば，より広範囲の人々に伊那谷の魅力を伝えることが出来るのではないか。

---

36 「ファミリー層向けの情報発信について（首都圏及び新幹線沿線のプラネタリウムでの PR 映像の放映及び試写会）」（URL：http://www.konicaminolta.jp/planetarium/topics/201504_01.html）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

しかしながら問題点はある。一つ挙げるとすれば,「設備が整わないと上映できない」ことである。これらの映像を投影できるデジタルプラネタリウムはまだ設置箇所が限られており，その上映イベントの存在に気付くことも難しい。この点をいかに克服していくかが課題と言える。

3.6 まとめ

3.3 では，飯田市美術博物館の設立経緯と現在の活用のされ方から，ふるさと飯田に対して主体性を持って活動する地域住民の様子が読み取れた。飯田市美術博物館は，地域住民たちの発案と構想によって設立され，館を担っていく学芸員たちも地域住民との協同によって育てられた。また，現在も地域の自然，人文，美術に関する研究活動や創作活動が盛んであり，美術博物館がその活動に密接に関連し，飯田に関する多様な思いが「つながる」場となっていることがわかった。

3.4 では，飯田市美術博物館で調査・展示・教育活動を行っている学芸員の思いをまとめた。地域や分野を限定せず，テーマである「伊那谷の自然と文化」を広い視点から扱っていくことにより，太古からの自然活動や人間活動の中に自分のふるさとが位置し，その中で伊那谷，飯田という独自の自然，文化が育まれてきたことを地域住民が理解し，ふるさとを大切に思うことができるようにとの思いがあった。これは主に常設展示に表れているほか，活発な企画展示や教育活動，地域との連携の中に貫かれている思いである。今後常設展示や教育活動を通して,「ふるさと意識」をこの先どのように伝えていくことが出来るかについて考えた。

3.5 では，よりひろく飯田の魅力を伝えていくという視点から，プラネタリウムについて詳しく述べた。特に，飯田市美術博物館に特有の取り組みである，最新鋭の設備を利用したオリジナル番組は画期的であると言うことが出来，従来の展示にはなかった魅力もある。近い将来に訪れるリニア開通後の時代を見据え，これを一つの突破口として「飯田の魅力」を発信していく方法がないか考えた。

これまでの議論をまとめていく。研究会などを主体的に開催する地域住民が中心にいるとすれば，その外側には美術博物館に来て飯田についての理解を深めようとする地域住民が存在する。そして，積極的に美術博物館に訪れない大人や子どもたち，観光客はさらにその外側に位置するということになろう。各層により広く飯田の魅力を伝えていくためには，先にも言及した展示・教育活動の改善による飯田市民の「ふるさと意識」の醸成と，リニア時代を見据えた観光客向けの取り組みの強化が必要になるだろう。

3.7 おわりに

本報告書では，飯田市美術博物館が発信している「飯田らしさ」の内容と，そしてそれをよりひろく伝えていくにはどうすれば良いのかという点に注目してまとめてきた。美術博物館と地域住民一人ひとりとの関わり方はそれぞれ違い，一様にすることは厳しいうえその必要性もないであろう。だが，より飯田市美術博物館が発信する「ふるさと意識」への注目がなされ，来るリニア時代をどう迎えていくのか，議論の余地がありそうである。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

本研究は飯田市美術博物館独自の取り組みに注目したため，飯田市美術博物館が他の施設（考古博物館など）と連携して行っている催しも含めて網羅的に言及出来てはいない。また，観光客向けの取り組みの際に言及したプラネタリウムも一つの例に過ぎない。これらを起点とし，あらゆる可能性を模索していくことが期待される。

また，その際に実際に展示を見た人，講演やワークショップに参加した人などの反応を見ることも必要だと考える。展示を見学していた 2 名の方に感想を伺ったところ，「飯田の今後（リニアの是非など）について考えるために，よく訪れている」「自然部門の恐竜の展示などに喜ぶので孫を連れてよく来るが，自分は春草のコレクション展示などを楽しみに来ている」などの答えがあり，来館者によって様々な目的，受け取り方があることを想像させられた。普段は特にアンケート等を行っておらず，また本調査でも一部の来館者に感想を聞くことしかできなかったため，地域住民による受け止め方に関しても機会があれば調査してみたい。

最後に，調査日の決定時からお世話になり当日インタビューの場を設けてくださった桜井様，インタビューに協力してくださった副館長の飯島様，学芸員の皆様に心から感謝の意を申し上げます。

引用文献・資料，Web ページ

日本展示学会展示学講座実行委員会編『地域博物館への提言』ぎょうせい，2001

飯田市美術博物館『飯田市美術博物館 飯田市上郷考古博物館 年報』第 24 号（平成 25 年度）

飯田市美術博物館ホームページ

入手先 URL：http://www.iida-museum.org/（アクセス日：2016-2-11）

伊那谷自然友の会　ホームページ

入手先 URL：http://inadanishizen.grupo.jp/（アクセス日：2016-2-15）

柳田國男記念伊那民俗学研究所　ホームページ

入手先 URL：http://inaminkenhome.blogspot.jp/p/blog-page.html（アクセス日：2016-2-15）

伊那谷研究団体協議会　ホームページ

入手先 URL：http://inadani-kenkyo.com/（アクセス日：2016-2-15）

石川県ホームページ「ファミリー層向けの情報発信について（首都圏及び新幹線沿線のプラネタリウムでの PR 映像の放映及び試写会）」

入手先 URL：https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kisya/h27/documents/0408syutoken.pdf（アクセス日：2016-1-29）

KONICA MINOLTA ホームページ「「北陸新幹線で行く石川の旅」について」

入手先 URL：http://www.konicaminolta.jp/planetarium/topics/201504_01.html（アクセス日：2016-1-29）

文部科学省告示第百六十四号「公立博物館の設置及び運営に関する基準」

入手先 URL：http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19731130001/k19731130001.html（アクセス日：2016-1-25）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

飯田市美術博物館「飯田市美術博物館・上郷考古博物館 2015.4-2016.3」
飯田市美術博物館「平成 27 年度 プラネタリウム天歩 番組紹介」

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 4 章　飯田の文化活動を支えるもの

永野 恵

4.1 はじめに

本章では,「オーケストラと友に音楽祭」の活動に関わる人々やその想いを描き出すことを通して，飯田の活発な文化活動を支えているものは何なのか，その問いの答えに一歩近づくことを目的としている。執筆に当たっては，8 月の飯田市フィールドスタディにおける飯田文化協会副会長の井坪隆氏の講演をもとに，1 月に行った追加調査で井坪氏，飯田文化会館の中島弘貴氏にインタビューをさせていただいた。

4.2 「オーケストラと友に音楽祭」までの歩み

ここでは,「オーケストラと友に音楽祭」について, 飯田市で長年にわたって開催されている「伊那谷文化芸術祭」や，同じく飯田市で開催され現在の音楽祭の前身となった「アフィニス夏の音楽祭」など，その成立の背景にあるものにも触れつつ概説する。

4.2.1 「伊那谷文化芸術祭」について

「伊那谷文化芸術祭」は，飯田・下伊那地域で活動している文化芸術団体がジャンルや世代を超えて一堂に会し，日ごろの練習成果を発表しあうと共に，団体相互の交流を図り，新たな舞台芸術が創生されることを期待し，出演団体が互いに協力しあって運営する，市民の手作りによる年に一度の舞台芸術の祭典である[37]。4 日間にわたり開催され, その参加団体数は 70 団体を超え, 入場者数は 8000 人を超える大規模な市民の芸術祭である[38]。

その運営の特徴は“飯田方式”と呼ばれており，①運営に積極的に関わる「出演者」②出演者でありながら運営を統括する「飯田文化協会」③担い手である市民が生き生きと活動する状況を作ることに専念し, 共に事業を作っていく「飯田文化会館」, の三者が互いに緊張感を持ちながら, 共に運営していく[39]，とある。

1987 年から続く「伊那谷文化芸術祭」で，市民が自分たちの手で全て運営していくという“飯田方式”ができたことが,「オーケストラと友に音楽祭」の活動に少なからず影響を与えているだろう。

---

[37] 第 29 回伊那谷文化芸術祭実施結果概況より

[38] *Ibid.*

[39] 『伊那谷文化芸術祭　20 回記念「響」　ステージのきずな』より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

図表 1-4-1　伊那谷文化芸術祭が開催されるまで[40]

4.2.2「アフィニス夏の音楽祭」について

「アフィニス夏の音楽祭」は，公益財団法人アフィニス文化財団が主催する，国内プロオーケ

[40] 飯田市ホームページより
（URL：https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/41/jigyou-kyoukai-chart.html）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ストラ・メンバーのためのセミナー音楽祭であり，全国のプロオーケストラからの“参加者”と世界の一流オーケストラなどで活躍している“招聘演奏家”が一堂に集い，「セミナー」「コンサート」「音楽交流プログラム」の３つのプログラムに取り組むものである[41]。

飯田市では 1989 年から 2008 年までの 20 年間行われ，プロオーケストラのある地方都市において開催するという財団の意向により 2009 年より広島と山形で交互に開催されている。

広島・山形への移転を受けて飯田では,「アフィニス夏の音楽祭」の実行委員有志が「考える会」を立ち上げ，アフィニスが飯田にもたらしてくれたものを考え，市民主体の『新しい音楽祭』の実現を要望し，それを受けて飯田市教育委員会は,「新しい音楽祭」の実行組織の母体となる「音楽祭を創る会」を設置した[42]。

図表 1-4-2　室内楽演奏会[43]

4.2.3「オーケストラと友に音楽祭」について

前述のように，飯田市を会場に開催されてきた「アフィニス夏の音楽祭」が移転することになったことを受けて，市民を主体とする実行体制により，その後を継ぐ『新しい音楽祭』を開催することとなった。

新しい音楽祭は，その名称を「オーケストラと友に～アフィニスのふるさと飯田音楽祭～」と

---

[41] アフィニス夏の音楽祭 2015 広島 ホームページより
（URL：http://www.affinis.or.jp/summer_j/about/）
[42]『『新しい音楽祭』への提案＝音楽祭を作る会　報告書＝』より
[43] アフィニス夏の音楽祭 2015 広島 ホームページ ギャラリーより
（URL：http://www.affinis.or.jp/summer_j/gallery/photo/index.html）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

し，「アフィニス夏の音楽祭」を通じて得た，「より良い音楽やプロ演奏家とのふれあいと信頼，そして，それを届けてくれたクラシック音楽への親しみ」を大切な財産とし，飯田下伊那の音楽文化の発展に寄与するために，「市民とプロオーケストラとのコラボレーションにより，クラシック音楽を楽しみ，学び，子どもと市民と地域社会に広がっていく市民が創る音楽祭」を基本理念として開催することとなった[44]。

音楽祭は名古屋フィルハーモニー交響楽団と共同して毎年ゴールデンウィーク期間に開催されている。プログラムはフルオーケストラが聴ける「名曲コンサート」や「ポップスコンサート」（2015 年をもって終了），市民がプロの演奏家から学ぶことができる「音楽クリニック」，地元アマチュア演奏家による「そよ風☆コンサート」など，様々なものが用意されている[45]。また「オーケストラと友に音楽祭」は，市民から「オケ友」の愛称で親しまれており，本章の記述の中でも「オケ友」の呼び方を用いていくこととする。

図表 1-4-3 オーケストラと友に音楽祭 2015 プログラムガイド

[44] オーケストラと友に～アフィニスのふるさと飯田音楽祭～実行委員会規約より
[45] オーケストラと友に音楽祭 2015～アフィニスのふるさと飯田音楽祭～プログラムより

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

4.3 飯田の文化活動を支える意識とは何か

ここでは，井坪さん，中島さんへのインタビューでのお話をもとにして，行政側の「音楽祭を“支える”想い」，市民側の「音楽祭を“やる”想い」を描き出すことで，飯田の活発な文化活動を支えるどんな意識が存在しているのかを明らかにしていきたい。

4.3.1 音楽祭を“支える”想い

「音楽祭を支える想い」について予算のお話や，特に行政側のスタンス，行政と市民との関係についてお話を伺った。

井坪さんによると，一般論として文化事業というのは不要不急だといって予算は削られやすい傾向にある。そのため，音楽祭の活動を通してどれだけ市民に還元ができたか，どれだけ市民が生き生きとできたかということに一番気を配り，それを行政側へのアピール，音楽祭実施の担保としているそうである。予算をできるだけ確保するためにも，いかに市民が音楽祭に関わっており，楽しんでいるのかを行政側に理解してもらうことが重要なのである。今のところ市議会による行政評価では，今後の音楽祭については現状維持または規模拡大の評価を受けており，市民に受け入れられていることが認められている一例ではないかという。

また，音楽祭における行政の役割としては，あくまで「黒子」であることが理想であると強調された。ただし，「黒子」と言ってもただ「役者」の言いなりになるわけではなく，「黒子」も「役者」を動かす術を持っている。現状このような行政と市民の，「黒子」と「役者」の関係がうまくいっており，これは文化活動だけではなく飯田の公民館活動などにも同じことが言える。行政は市民が困った時や市民の活動が脱線しそうになった時にはじめて手を出すような関わり方をしている。

また，中島さんによると，飯田の市民は行政が組み立てた形あるものに参加する意識というのはあまりない。自分たちが中心にいて，きちんと考え，責任も負いながら頑張るというのが特徴で，自分たちがそこにどう関わっていくのか，その中でどのような役割を担えるのかというところを大事に考えているという。

自分たちが中心となって，自分たちの手で事を起こしていくことを良しとするような文化が連綿とこのまちに受け継がれているのかもしれないということであったが，その文化というのは何なのであろうか。それはもとあったものでも，突然生まれ出たものでもないだろう。かつての青年団活動などに始まり，飯田というまちの様々な取り組みの積み重ねの中からだんだんと形作られてきたものであるはずである。上のような状態になるまで何十年という長い時間がかかったとお二人もおっしゃっている。

音楽祭の特徴として「実行委員会形式」が挙げられている。そう言うのは簡単だが，それをそのまま他のまちが真似しようとしてもなかなかうまくいかないだろう。形式上のものはできる。行政が形を作り，市民がそこに参加することになるわけだが，そこに市民の主体性というものはなく，結局は行政にやらされる感じになってしまう。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

井坪さんも，これは持論であり少し荒っぽい言い方だと前置きしつつ，俗に言う“市民”とは無責任なものであるとお話しされた。市民の無責任さというのは一方では良いものであるが，他方では脆さを孕んでいるもので，飯田では行政がそれをうまくハンドリングすることでバランスが取れているという。

この市民の無責任さとは飯田に限った話ではない。井坪さんもおっしゃったように悪い意味ではなく，市民という立場なら当然持ち合わせているものだろう。そしてそれこそが，事業の推進力になったり斬新なアイデアを生む源泉にもなっていくものだと思う。

中島さんのお話で出てきた，飯田では上手くいった「実行委員会形式」がほかのまちでは上手くいかない，ということはこの市民の持つ無責任な面とも関係するのかもしれない。飯田では市民の無責任な面の上にも，自分たちで事を起こしていく事を良しとする“主体性”があり，その中で自分で考え，役割を担い，そして“責任”も負いつつ進めていこうとする意思がある。一方で先にも述べたように行政が形を作ってそこに市民が参加するというかたちでは，そこに“主体性”は生まれにくく，“無責任”のままでいられてしまう。“責任”を持ってやろうにも，“責任”を担いにくい形式にはじめからなってしまっているのである。そして“主体性”や“責任”の生まれにくい状況では“満足感”も得られない。自分たちで考え，目標を持ち，自分も役割を担ってそこに向けて努力していくことではじめて大きな達成感や満足感を得られるのではないだろうか。

市民の“主体性”と“責任”の大きさの話をしたが，そこでは行政側の果たす役割も大きいと井坪さんは言う。飯田では前述のように，市民が中心となって行政はそれにうまく寄り添い，共に事業を進めていくということが上手くいっている。しかしそれをほかのまちでやろうとするとき，行政は何か市民が参加できるような形を作ろうとするかもしれないが，それだけでは主体性は育ちにくい。飯田の行政のあり方は非常に学ぶところが多いが，それを真似するのではなく，まず自分たちのまちが今どのような歴史の積み重ねを持っていて，どのような段階にあるのか，市民の主体性を育てるために事業を起こす前にまずやるべきことはないか，よくよく考える必要がありそうである。

4.3.2 音楽祭を“やる”想い

「音楽祭をやる想い」について，「アフィニス夏の音楽祭」の始まりから「オーケストラと友に音楽祭」誕生までの経緯，また２つの音楽祭に共通することと異なるところにも着目しつつ明らかにしていきたい。

中島さんによると，「アフィニス夏の音楽祭」が飯田で開催されるようになったきっかけとして，大きな理由としては，飯田には伊那谷文化芸術祭や公民館活動，人形劇カーニバル飯田（現在は，いいだ人形劇フェスタ）など，市民が積極的に関わる活動があり，面白そうだ，このまちだったら市民が積極的に文化活動に関わってくれ，音楽祭もやっていけるだろう，と考えられていたことがあるという。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

しかし，飯田で行われるようになったのがそういう選定基準だったとはいえ，実際はアフィニス文化財団が実質全てを仕切っていくかたちであったという。今の「オーケストラと友に音楽祭」のように，市民が主体となって運営していくようなかたちではなかった。初めの頃は市民の実行委員会という形だけはありながら，飯田側がやることは“受け入れる”のみであった。建物や施設の整備などを担っているぐらいで実行委員会としてやることはあまり無く，職員が 1 人関わっていれば何とかなるほどであった。

井坪さんも，同じ音楽祭といっても，「アフィニス夏の音楽祭」と「オーケストラと友に音楽祭」は全く性質が違うとおっしゃる。「アフィニス夏の音楽祭」はプロがプロを教えるという財団の事業で，あくまで財団が主体であるということは変わりない。しかし飯田の人々はそこに主体になりきれないもどかしさを感じていた。そしてそこに，「オーケストラと友に音楽祭」が生まれた原動力があるのである。

アフィニス夏の音楽祭は 20 年の歴史があるが，関わる人々の中に「何とかして自分たち市民の関わりが持てないだろうか」という意識が芽生え，10 年目ごろから当時の飯田文化会館の館長を中心として，形だけではない市民による実行委員会形式を作り始めた。ただこの実行委員会も，与えられたものを運営するものであったことは否めないという。組織された実行委員会は市民の参加を見出そうとし，飯田の人々が関われるようなことを組み立ててアフィニス文化財団と相談しながらいくつかのプログラムを用意したが，「プロがプロを教えるセミナー」は財団が，「市民が参加するプログラム」は実行委員会が，というような二重構造になってしまっていたそうだ。前述の通り，「アフィニス夏の音楽祭」の広島・山形への移転を前に，飯田では次のステップへの話し合いがなされた。話し合われたことは，「プロが市民を教える音楽祭」を作ろう，「自分たちが音楽祭の運営主体になろう」ということであった。話し合いの中では，20 年続いた「アフィニス夏の音楽祭」の財産は何だろうかということも検討された。そこで共有されたアフィニスの財産は以下の 2 つであるという。

・クラシックに触れることができたこと
・“学び”の場を大切にしたこと

飯田の人々に音楽やクラシックというものに関心をもたせてくれたことはアフィニスの実績であり，それに感謝し，これからもクラシックを大事にしていきたいという気持ちが感じられる。その一方で，アフィニス時代にもどかしさを感じていた，自分たちが運営の中心になる方式を生み出したいという気持ちが今のオケ友につながっているのである。

「アフィニス夏の音楽祭」が飯田の地から離れて 7 年目となった，2015 年の「オーケストラと友に音楽祭」のパンフレットに，アフィニス文化財団理事長の涌井洋治氏からのコメントが寄せられている。また同年にはアフィニス文化財団による演奏会が飯田で開かれており，財団と飯田のつながりは今でも続いている。アフィニスが飯田に残してくれたものの流れを断ち切ることなく，アフィニスに関わりのあるようなイベント・コンサートなどは随時，企画がされている。またアフィニスとの関係性を途絶えさせないためにも，今でも毎年，広島・山形での「アフィニス

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

夏の音楽祭」には最低 5〜6 人が視察に行っているそうだ。

「オーケストラと友に音楽祭」のサブタイトルには，「アフィニスのふるさと飯田音楽祭」とある。この直接的な語源となったのは，「アフィニス夏の音楽祭」の音楽監督の四方恭子氏，指揮者の下野竜也氏が飯田のことを「ここは私たちのふるさと」だと言ってくれたことである。しかしその裏には，アフィニスが飯田に残してくれたものを大事にしていこう，それを次につなげていこう，という想いが込められているのだという。

アフィニスの残してくれたものへの感謝の気持ち，それを今度は自分たちの手でつなげていきたいという 2 つの気持ちが，オケ友の原動力となっていたのである。

4.3.3 今後のビジョンとは

「オーケストラと友に音楽祭」を続けていくにあたって，今後音楽祭やさらに言えば飯田をどんなまちにしていきたいか，思い描くすがたやビジョンについてお話を伺った。

「オーケストラと友に音楽祭」5 周年を迎えた際，実行委員会による「将来のオケ友を語る会」が開かれ，そこではまだまだ市民への広がりはごく狭い範囲に留まっているという意見が出されたという。今のオケ友は，ゴールを見据えてやっていくというのではなく，まだまだ成長過程であり，市民への広がりを意識してやっていきたいというのが今の思いだと語ってくださった。

クラシックというのは有名人のコンサートとは違って，宣伝してパッと人が集まるようなものではない。井坪さんの言葉を借りれば，“アフィニスはバケツの底に水をためてくれた”が，そこからさらに飯田のまちにクラシック音楽が満ちていくためには，常々市民の中に何かを投げ込んでいくことを続けていかなければならない。

“広がり”に関して言えば，2016 年から小学生のための音楽プログラムが始まるそうだ。小学生に音楽の楽しさ，曲の面白さを体感してもらうようなプログラムになっている。ここで意識されているのは，ただ小学生を集めて，クラシックの名曲を何曲か演奏するようなことだけではダメではないか，それは“広がり”とは言えないのではないかということである。ただ聴くだけではなく，その曲はどういう風にできているのか，どうして感動するのか，どういう背景を持った曲なのかということを意識してもらいたいと，現役の小学校の音楽の先生が集まってプログラムを考えているという。そしてそのプログラムで演奏するのは，名古屋フィルハーモニー交響楽団ではなく，飯田の地元のオーケストラである。地元の演奏家のレベルの底上げにもなるし，地元のオーケストラに興味を持つ子供達も増えるかもしれない…と様々な面から“広がり”というものが意識されているのである。

井坪さんは“広がり”というキーワードで，今後しばらくは全てが進んでいくのではないか，そう力強く語ってくださった。

この論集を執筆していく前段階において，執筆者たちによって飯田のまちは「同心円構造」になっているのではないかという議論がなされていた。公民館活動，文化活動などの中心となって事を起こしていく人々が円の中心に位置しており，それを行政や教育などの制度が支え，さらに

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

外側へと大きな円が広がっているのではないか，つまりその外側部分で今まで参加していなかった人々にまで広がり，あるいはそういう人々を巻き込んでいっているのではないか，というものであった。そしてそれを「広がりと巻き込み」という言葉を使って表現していた。

オケ友の今後の活動のキーワードとして“広がり”という言葉をいただいたため，上のような議論があったことを踏まえて,「オケ友の活動に参加できなかったり，参加しない人にどのように広げていきたいか，どういう風に巻き込んでいきたいか」ということについて伺った。なかなか飯田文化会館まで来られず，音楽祭に参加できていない人に対しては，こちらから出かけて行って小さなコミュニティコンサートのようのものを行っており，大変喜ばれているが，今まで興味がなかった人に広がっているかと言われると，実感としてはまだまだだし，そこにどうアプローチしていくかは難しいという。実際に市民意識調査の結果をみると，昨年 1 年間に，市内外を問わず文化や芸術の鑑賞を 1 回以上行った人の割合は 54.0%とまだまだ低いそうだ[46]。

しかし,“広がり”について考える時，みんながみんなオケ友に参加するようにする，というのは違うとおっしゃる。たくさんの人々がいる中でその全員にクラシックを，というわけではない。文化活動にも多様性があること，またその多様性が奥深いものであることが良いのである。飯田は，都会でないながらも年に 1 回は必ずフルオーケストラが聴ける，その他にも人形劇があるなど，高い芸術性に触れられる機会が豊富にあるという点で恵まれている。“広がり”というのは，参加人数規模など“マス”的なものだけではなく，“多様性”や“選択肢”のことも言っているのである。

お話を聞いていて，今まで参加していなかった人を“巻き込む”というよりも，多様なプログラムを考え，多様な選択肢を提示することを重要視していると感じた。我々が議論していた「広がりと巻き込み」の「巻き込み」は，オケ友の活動に関してはあまり当てはまらないのではないだろうか。無理に多くの人に参加してもらおうとするのではなく，音楽祭が多様性を備えることで自然と多くの人が集まってくるようなイメージである。頑張って「巻き込み」たいと考えていないということは，ポップスコンサートの終了にも表れているのではないかと思う。

2015 年の音楽祭をもって，指揮者のボブ佐久間氏のポップスコンサートが終了となった。今後もポップスコンサートを続けていくのかという問いに，井坪さんは「いつまでもポップスを売りにしていくのはどうなのか，ポップスから離れたいという気持ちもある」と話してくださった。ポップスコンサートは，飯田の人々にオーケストラに親しんでもらうという点では大きな功績があったであろう。アフィニスが 20 年かけて室内楽を広めてくれたように，オーケストラにお客さんを惹きつけてくれた。しかし,「オーケストラと友に音楽祭」の理念は「市民とプロオーケストラとのコラボレーションにより，クラシック音楽を楽しみ，学び，子供と市民と地域社会につながっていく市民が創る音楽祭」[47]であるとされ，あくまで「クラシック」を楽しみ，そして学ぶこととしている。井坪さんは今回のポップスコンサートの終了は，オケ友のこれからの歩み方

---

[46] 平成 26 年度市民意識調査の集計概要より

[47] オーケストラと友に～アフィニスのふるさと飯田音楽祭～実行委員会規約より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

の転換期なのではないかとおっしゃる。たしかに，より広く人々を“巻き込み”，多くの人の参加を目指そうとするならば，ポップスコンサートのような万人受けするプログラムをアピールしていくことが良いのかもしれない。しかしオケ友は，小学生にクラシックの面白さを体感してもらえるようなプログラムなど，地道ではあるが飯田の人々にしっかりと根を張るような内容を目指すことで，音楽祭の理念を実現していこうとしているのである。

4.4 おわりに

本章では，飯田の活発な文化活動を支えているものは何なのか，「オーケストラと友に音楽祭」の活動に注目して，伺ったお話の中から見えてきた「音楽祭を“支える”想い」と「音楽祭を“やる”想い」，さらには「今後のビジョン」について考えてきた。

どうして飯田ではこんなに文化活動が活発に行われているのか，市民が積極的に関わっているのか，その問いの答えを出すことは非常に難しいが，いくつか見えてきたことがある。

１つは，様々な相手との関係性を非常に大切にしているということである。市民と行政の関係でも，市民は行政からの支援を得るために努力を怠らず，行政も市民の意見を最大限尊重しつつも，きちんとコントロールすべきところには手を差し出しているという関係性がある。ここでどちらかが優位に立ち，一方的に指示をするような関係性では今のように上手く行っていなかったのではないかと思う。アフィニスとの関係性もそうである。オケ友の音楽祭でも，アフィニスの残した財産をしっかりと受け継ごうという思いが全面的に打ち出されている。今までの積み重ねを断ち切るのではなく，それを振り返り，今の状況を把握し，その土台の上にさらに積み重ねていこうという姿勢が見える。今まで積み重ねてきた歴史を振り返り，今置かれている状況をきちんと把握するということも，これまでの様々な人たちとの関係性を尊重することだと思う。今もアフィニスの音楽祭に視察に行ったり，財団の協力を得て，アフィニス夏の音楽祭の講師や受講生によるコンサートを飯田で開催したりしているところからも，その関係性の継続，そして深さを感じられる。

もう１つは，無理に円を広げようとしていない，無理に人々を取り込もうとしていないということである。今後の音楽祭の方向性としては“広がり”を意識していきたいと言いつつも，ポップスコンサートを売りにして人を集めたいのではなく，とりあえず多くの人を集めてその人たちの前で演奏会をしたいのでもなく，飯田の人々が本当にクラシックの面白さを体感してくれるようなプログラムを作っていきたい，ということにそれが表れている。そこに“広がり”はあるが“巻き込み”ということはあまり意識されていない。「みんながみんなクラシックというわけではない」という言葉もあったように，オケ友の広がりというのは「多様な選択肢」の充実だと考えたほうが良いのかもしれない。無理に活動を拡大していきたいわけではない，ということは，オケ友がその理念を忠実に追い求めている点にも見出せるのではないだろうか。文化活動を活発にしたいと考える時，例えば新しい音楽祭を開催し始めた時など，思いが強いほど人集めや宣伝に躍起になってしまうこともあると思う。しかし本当にその地域のことを考えた時，その地域に文

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

化活動を根付かせていきたいと考えるならば，参加者増加などの短絡的な目標にとらわれすぎることなく，地域の人が本当に有意義さを感じていけるような地道な活動が必要になっていくのではないだろうか。

「同心円の構造」の話を出したが，オケ友の活動に関して言えばそこに強固な中心があり，そこから手を伸ばして周りを巻き込もうとしている訳ではないようだ。緩やかなつながりがあり，中身も入れ替わりがありながら広がっているイメージだろうか。その形は円ではないかもしれないし，中心だって動いているかもしれないが，少しずつ移動しながら，また柔軟に形を変えながらも「オケ友」の活動や関係性は維持され，受け継がれていっている。

最後になりましたが，お忙しい中インタビューに応じてくださった井坪隆様，中島弘貴様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

引用文献・資料，Web ページ

第 29 回伊那谷文化芸術祭実施結果概況
飯田文化協会 20 回記念事業 あゆみ委員会『伊那谷文化芸術祭 20 回記念「響」ステージのきずな』2007.3.18
飯田市 HP・伊那谷文化芸術祭が開催されるまで 入手先 URL:
https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/41/jigyou-kyoukai-chart.html（アクセス日：2016-2-14）
アフィニス夏の音楽祭 2015 広島 HP 入手先 URL：
http://www.affinis.or.jp/summer_j/about/（アクセス日：2016-2-14）
アフィニス夏の音楽祭 2015 広島 HP ギャラリー入手先 URL：
http://www.affinis.or.jp/summer_j/gallery/photo/index.html（アクセス日：2016-2-14）
音楽祭を創る会『「新しい音楽祭」への提案＝音楽祭を創る会 報告書＝』2008.9.19
飯田市 平成 26 年度市民意識調査の集計概要
オーケストラと友に～アフィニスのふるさと飯田音楽祭～実行委員会規約
オーケストラと友に音楽祭 2015～アフィニスのふるさと飯田音楽祭～プログラム

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 5 章　りんご並木まちづくりネットワークに所属する団体やその活動の将来像にみる“飯田”というつながり

河北 有紀子

5.1　はじめに

昨年夏のフィールドワークで飯田を訪れた際，筆者が興味を抱いたのはりんご並木まちづくりネットワークの活動だった。責任者がいて上下関係があるような団体ではなく，自主性を持ったさまざまな団体が集まり，お互いに情報共有を行うフラットな場としてのりんご並木まちづくりネットワークの在り方は，筆者にとって新鮮なものであった。

ただ，フィールドワークを経て，筆者は次のような思いを抱いた。現在，りんご並木まちづくりネットワークに所属する各団体の活動をはじめ，飯田ではさまざまなまちづくりの活動や楽しいイベント，社会教育活動などがさかんに行われている。しかし，現在りんご並木まちづくりネットワークに所属し，飯田でのさまざまな活動を積極的に牽引している人々の後進は，果たしているのだろうか。りんご並木まちづくりネットワークに所属しているさまざまな団体，あるいはそれらの団体の活動，関わっているイベントなどは，今後，どうなってゆくのだろうか。その将来像について，現在中心的に活動しているメンバーの方々はどのように考えているのだろうか。

以上のような疑問から，今回の調査は出発した。

5.2　本研究の問いと本研究の目標

本節では，調査にあたりどのような問いを設定したかについて述べ，本研究は最終的に何を目指したかについて述べる。

調査に際しては，りんご並木まちづくりネットワークに所属するさまざまな団体において現在積極的に活動を牽引している人々は，その団体や活動の将来についてどのように考えているのか，という問いを立てた。より具体的には，以下のような問いに対する答えを得ることを期待して，調査に臨んだ。その団体や活動は今後どのようにあるべきだと考えているのか，例えば今後も団体や活動を継続してゆきたいと考えているのか。もしそうであるならば，それらを引き継ぐ後継者のような存在についてどのように考えているのか。後継者を探したり育成したりするといった取り組みは行っているのか。あるいは，現在はあまりその団体や活動に積極的に参加していない人々に対して何らかのアプローチを行ったりして，新たな参加者・人材を獲得しようとしているのか。

本ゼミの過去の報告書では，りんご並木まちづくりネットワークの組織や現在の活動の特徴について，あるいはりんご並木まちづくりネットワークのコーディネーターである桑原利彦さんについてまとめたものが多く，りんご並木まちづくりネットワークに所属する団体やその活動の将

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

来に着目した記述は少ない。そこで，上記のような問いを立てることで，過去の報告書では明らかにされてこなかった部分を補足しつつ筆者自身の問題関心にも応えることができると考えたのである。

また，本研究では，りんご並木まちづくりネットワークに所属する団体やその活動，それらが携わっているイベントなどの将来像に注目して調査を行うことによって，本ゼミ全体で共有しているテーマである，“飯田”というつながりを描き出すことを目標とした。

以下では，まずは次節で調査結果をまとめ，続く節にて，そこから浮かび上がる“飯田”というつながりについて記述する。

5.3 調査概要および調査結果

5.3.1 調査概要

2016 年 1 月 13 日および 14 日に調査を実施した。りんご並木まちづくりネットワークの会議に参加なさっている方のうち５名が，インタビュー調査にご協力くださった。お話を聞かせてくださったのは，りんご並木まちづくりネットワークのコーディネーターである桑原利彦さん，長野県飯田 OIDE 長姫高等学校教諭の浅井勝巳さん，株式会社飯田まちづくりカンパニー取締役・事業部長の三石秀樹さん，飯田市産業経済部商業・市街地活性課中心市街地活性化係の西しのぶさん，橋南連合青壮年会会長の宮下勝吉さん（以上，インタビュー順）である。主に前節で述べたような問いを念頭におきながら，これらの方々に，それぞれの活動の将来について考えていることや後継者の問題などについて，ざっくばらんにお話いただいた。

次項からは，インタビューの結果明らかになったことについて，りんご並木まちづくりネットワークや各団体が携わり飯田で数多く実施されているイベントの場合と，飯田 OIDE 長姫高等学校および橋南連合青壮年会の場合とに分けて，それぞれ記述する。

5.3.2 調査結果　～りんご並木まちづくりネットワークやさまざまな団体が携わるイベントの場合～

まず，りんご並木まちづくりネットワークやさまざまな団体などが関わって現在実施されているイベントの将来像や後継者の問題などについて述べる。インタビューから明らかになったことは次の三点に整理することができるだろう。第一に，イベントについては，継続することを特に意識しておらず，具体的な将来像を明確に描いているわけではないこと，第二に，その背景には「楽しいという思いを共有する」という基本的な考え方があるらしいこと，そして第三に，それゆえに，後継者の問題や今のところ活動に参加していない人々の層へのアウトリーチという課題に対しては，何か特別なことをするのではなく，自分たちが現在の活動を楽しむことで，その活動が，楽しいという思いとともに自然に広がってゆくことを期待していることである。以下で，この三点について順に詳述したい。

まず一点目について述べる。現在行われているイベントは，継続することを特に目的として意識しているのではない。また，今後も広がってゆけばいいなという漠とした希望はあるものの，

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

今後どれくらいの規模で何年間続けていこうなどという具体的な計画は特にない。将来的なイベントの在り方をどう構想するか，そもそも継続するかどうかについて，こうでなければいけないという考えはないとのことである。いわば自然の流れに任せる予定であるようだ。桑原さんは，以下のように述べている。

桑原さん：こうしていこうとか，なにしようっていう，強い意志はそんなに持ってないんだよ。

また，三石さんと桑原さんのお二人は，イベントの規模や，今後継続するかどうかについて，以下のように語っており，継続することそれ自体が目的というわけではないとの考えを示している。

三石さん：いなければいないなりに，そのキャパを合わせて活動できる範囲でやる。集まった人に合わせてキャパを考えて。キャパに合わせて人を集めるっていうのはそもそも無理だね。（筆者：続けることが目的でそのために人を集めるっていうのは考え方が逆ということですか？）そう。

桑原さん：時代のニーズに合わないっていうか，その無理するっていうことじゃなくって，自然になくなっちゃうようなことだとすれば，それはそれで仕方ないと思うな。

桑原さん：つなげることが目的になったら本末転倒。やっぱり何か楽しいことがずっと続けられて，それをだからやりたいっていう人がいて，つながっていくんだったら分かるけど。

以上のような語りに見いだせるように，イベントに関しては，無理をしてでも継続させなければという義務感や気負いといったものはないようだ。継続することは本来の目的ではなく，活動を続けたいという思いを持った人々が現れ続けることで，結果として活動が自然に引き継がれていくことを理想と考えているようである。そして，仮に活動の規模が縮小したり，活動が現在とは少し異なるものに変容したりしてゆくとしても，それは仕方がないと受け止めるつもりでいることがわかった。

では，なぜこのような考えに至るのだろうか。恐らくこのような考え方・捉え方の根底には，まちづくりのためのさまざまな活動に楽しさを感じ，だからこそ活動したいという思い共有をすることを基本にしているという特徴が存在するように筆者には思われた。この点について，インタビュー調査から明らかになったことの二点目として，以下でより詳しく述べる。

次に，前述の二点目について述べる。飯田におけるさまざまなまちづくりの活動やイベントなどは，「活動することが楽しい」という思いを共有することのできる人々のゆるやかなつながりを基本としているようであり，参加の強制はなく，参加の度合いは各人，各団体によってまちまちである。また，新たに参加したいと考える人に対しては歓迎の姿勢を持っていて，門戸は常に広

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

く開かれている。インタビューの中でもそのような特徴についての言及がなされた。

三石さん：そのまあ，脱落していくっていうそういう人もいたり，で，何年かしたらまたひょっこりやってきてとかね，それでも受け入れるしっていうことなんだよね。

桑原さん：来る人たちはもちろん拒まないし，仲良くしていきたいっていう気持ちはすごくある。

りんご並木まちづくりネットワークは，まちづくりの活動に参加したいと考えるさまざまな人々・団体を許容・歓迎する，ゆるやかで非常に開かれた場である。そして，りんご並木まちづくりネットワークに集う人々･団体や, 飯田におけるさまざまなまちづくりの活動に参加したり，イベントに参加したりしている人々が共有している思いとは，さまざまな活動を楽しもうという思いであると考えられる。インタビューの中で，「楽しい」「面白い」といった言葉が多く登場したことは非常に印象的であった。

桑原さん：一番思うのはさ，（中略）根底にあるのは，あそこ（りんご並木まちづくりネットワークの集まりなど）に来てやっぱり楽しむっていうことなんだと思うんだよね。で，その楽しいっていうことが，かなり大きな要素になってて（後略）

三石さん：それはもうやりたければ一緒にやろうっていう精神だから，やる側も負担感ない。やりたくてやってくるんだから。楽しいことなら続けたいっていうふうになる。

また，イベントについてのお話の中で，以下のような発言もあった。

三石さん：どうやったら人集まるかなっていうテーマじゃない。どうやったら面白くなるかなっていうことがテーマで。そこが一番大事だと思う。

三石さん：やっぱり町を楽しむっていう。だから，やってる側が楽しくなかったら，イベントに来てくれる人が楽しいわけないし, さらには町の中が楽しいわけがないっていうことだよね。

また，地域に貢献しなければいけないというような意識や義務感があるかどうかについて尋ねた際には，以下のような答えが返ってきた。ここからも，活動に参加する人々に共有されている意識がどのようなものであるかが垣間見える。

桑原さん：みんなで楽しくやりましょうねっていうところから発想してるわけだから，あんま

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

り，その先の飯田の将来のためとかまちづくりがどうのこうのってことを，どんどんこう抱えていくと，難しくなる気がする。

三石さん：まちづくりだとか地域への貢献っていうのは当然その根底にはそういうことはあるんだけど，それよりもこれは，やっぱり面白かったっていう，それの方が大事で，それでこうつながりが成り立ってるっていうのがある。

三石さん：（地域に貢献しなければという意識は）根底にはあるんだよね，きっと。根底にはあるけども，それが前面に出ているものじゃない，それだと続かないんだよね。

これらの語りからは，地域への貢献の意識や使命感のようなものがないわけではなく，恐らく根底にはそのような思いも存在するが，それよりもむしろ，活動を行っている自分たち自身が楽しむということが重要なことであるという認識のもと，さまざま活動が行われていることがうかがえる。もちろん人それぞれ思いに差はあると考えられる。特に行政の立場として携わる人の場合，仕事・義務であるという側面が排除できないということもあり，与えられた仕事を淡々とこなすにとどまる人がいることは否定できないそうだ。しかし，商業・市街地活性課の西さんのように，単なる仕事として捉えるのではなく，自身もそれを楽しみ，仕事プラスアルファの行動がとれる人も存在する。

しかし多くの人にとっては，使命感や義務感よりも楽しさが活動の動機の中心に据えられていることが，活動継続の秘訣であるように思われた。自分たちが楽しいという意識を持って活動しているからこそ，周囲の人にもその楽しさが伝わるのであり，活動に加わりたいと考える人も出てくるというわけである。そして，その活動が楽しいものであれば，人々は負担感を覚えることはなく，それゆえに活動が自然と継続されていくとの考えをお持ちのようだった。楽しいという思いを共有することを大切にしているという背景があるからこそ，一点目で記述したように，「継続することが目的ではない」と断言することができるのだろう。

最後に，三点目について述べる。後継者の育成や今のところ活動に参加していない人々の層への働きかけについては，そのような働きかけを躍起になって行っているということはない。そうではなく，楽しそうに活動している姿を見せたり，門戸を広くして誰でも受け入れるという姿勢を見せたりすることによって，同じ思いを共有できる人たちが自然と増え，活動を引き継ぐ人が現れたり，新たな参加者が集まってきたりすることを期待しているようである。

まず，後継者に関しては，現時点では特に深刻に考えていないというのが正直なところであるようだった。

桑原さん：後継者のこともそうだけど，正直そんなに考えてないんだよ。で，今こんな風にある意味うまくいってるし，もちろん問題はあるだろうけど，でもそれはそれで，その場その場

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

でみんなで考えていけばできると思うし，で，後継者っていうことに切羽詰まってる感覚がそんなに正直あるわけじゃなくて（後略）

三石さん：いよいよそろそろ引退するぞってなったときに，続けたけりゃ続けりゃいいし，嫌ならもうやめるぞっていう。だから，続けたいと思う人たちが，残ってってくれれば（続ける）っていう形でいいと思う。

上記のような発言の背景には，やはり，前述したような，楽しいという思いを共有することのできる人とのつながりを重視する姿勢が存在すると考えられる。自発的に活動を続けたいという人が現れ，思いと活動を引き継いでくれるのならば続けてもらうが，もしもそうでないならば無理に続ける必要はないと考えていることがインタビューから感じられた。やはり思いが伴っていなければ意味がないとの考えが根底にあるようで，だからこそ，何としても後継者を探そうという考えには至らないのだろう。

次に，今のところ活動に参加していない人々の層へのアプローチに関して述べる。こちらについては，三石さんと桑原さんとで，行動の仕方が少し異なっているようだった。

まず，三石さんは，基本的にはそのような層へのアプローチを積極的に行うのではなく，参加したいと言ってやって来る人を待つという姿勢を持っている。しかしこれは決して，イベントが内輪で完結してしまっているということを意味するものではない。前述のように，イベントへの新規参加者は常に歓迎される存在であり，門戸は広く開かれている。今のところ活動に参加していない人々への積極的アプローチをあまり行わないのには，主に二つの理由があるようだ。ひとつは，参加への意欲を図りがたいそのような層へのアウトリーチは現実的に困難であるという事情である。そして，イベントにおける各参加団体の自主性を担保し，事務局に依存せず参加してもらうようにするためには，事務局側から声をかけることは好ましくないというのがもうひとつの理由である。今のところ活動に参加していない人々を巻き込もうという考えがあるかどうか尋ねたところ，三石さんは以下のように語った。まず初めの引用部分は，前述したひとつ目の理由についての語りである。

三石さん：あいつがやりたがってるらしいよって話聞けばね，じゃあ会いに行って，やろうよっていうのはあるし，だけどそんな，やりたいのかやりたくないのかわかんない遠巻きの人たちに一人ずつ一人ずつなんていうのは無理じゃない。だからやっぱりこう紹介者とか，そういう人たちがいてこう集まってくるっていうのは多いね。で，ひょっこり自分で入ってくる人もいるし，それでいいと思うんだよね。

続いて，二つ目の理由について，以下のように語っている。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

三石さん：向こうから，楽しそうだから入れてくださいと言ってくるまで待っている。そうしないと，向こうから（いろいろなことを）要求してきちゃう。

三石さん：どう？結構楽しいけど参加してみない？出てみない？っていうくらいの誘い方にしないと，ぜひ来てよ，なんてなると，車どこ置けばいいの？みたいな話になる。

三石さん：イベントとか，NPO の活動もそうだけど，やっぱし，やろうとする人たちが，責任持ってやりますっていうものじゃないと，続かない。

三石さんがお勤めの株式会社飯田まちづくりカンパニー（以下，まちづくりカンパニー）は，りんご並木で開催される「ゆるキャラ®天国 in りんご並木」をはじめとするさまざまなイベントにおいて，事務局の機能を担うことが多い。そのような場合に，まちづくりカンパニーの側が参加者を積極的に勧誘してしまうと，参加者側からいろいろな要求が出てきてしまうおそれがあるのだ。参加者側が事務局にさまざまなことを頼み，依存してしまうと，そのイベントは長続きしないと三石さんは考えている。イベントに参加する人や団体がそれぞれの自主性を保ち，それぞれの責任において参加するのが望ましい在り方であり，その実現のために，今のところ活動に参加していない人々への積極的なアプローチをあえて控えるようにしていると言えるだろう。

一方，桑原さんの場合は，比較的積極的に，さまざまな活動の輪をいろいろな人に広げる活動を行っているようだ。

桑原さん：俺はこの中（りんご並木まちづくりネットワークの中）では，極めて稀なそういう性格だよ。黙ってる人たちの方にこっちから出向いて，何かしようよっていうのを一杯提案してるから。（中略）普段出会わない人たちを出会わせるっていうことが今，ネットワークだけじゃなくていろいろやってる。

桑原さんは，今のところ活動に参加していない人々との接触が比較的多く，そのような人々に活動を広める機会が多いようであった。このような桑原さんの行動には，りんご並木まちづくりネットワークのコーディネーター役としての働きという意味もあるだろう。ただ，桑原さんの場合，義務としてそのような人々を活動に巻き込むことを明確に意図して行っているというよりはむしろ，もともといろいろな人と出会うことが好きで，その人たちをつなげることも好きであるというコーディネーターらしい性分とも言うべきものが，その行動を促しているように感じられた。実際に，筆者が追加調査で飯田にお邪魔していた期間中，行く先々で出会った方には，必ず筆者のことを紹介してくださった。そのような桑原さんの日常的な行動が，結果として今のところ活動に参加していない人々へのアプローチにもなっているといった具合であるように見える。とはいえ，そのような層との接触が比較的多い桑原さんであっても，彼らを積極的に巻き込まなけれ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ばという義務感を主眼としているのではなく，まずは活動について広く知ってもらい，その楽しさを知ってもらうという点を重視しているように見受けられた。そして，楽しんで活動がされている様子を見て（桑原さんの言葉を借りれば「背中を見て」），後継者になるような人が現れたり，新しく活動に加わってくれる人が現れたりするという自然な流れができることを理想としているようであった。

三石さんと桑原さんのアプローチの仕方の差異は，それぞれの役割の性質や立場の違いなどから生じているものであり，その基本的な姿勢には共通するものがあるように思われる。それはすなわち，後継者や新たな参加者を躍起になって探す，あるいは育てるといったことはせず，そうかといって内輪の人々だけで完結し閉じこもっているというわけでは決してない，その中間の絶妙なスタンスである。活動への意図的・積極的な巻き込みというよりはむしろ，周囲への自然な広がりという表現の方が適切であるように思われる。

ここまで，まちづくりの活動やイベントの将来像・後継者の問題について，インタビューにより明らかになったことを整理してきた。インタビューを通じて強く印象に残ったのは，市民の自主的な団体や自発的に行われるさまざまなイベントは，いろいろな活動をすることが楽しいという思いを共有することのできる人々のゆるやかなつながりが基礎になっている，ということだ。思いを基本とするゆるやかなつながりが根底にあるからこそ，参加を強要することも不参加を非難することもなく，イベントの継続性は目的とされず，また，後継者の問題はあまり深刻に考えられていないのだと思われる。このゆるやかなつながりや，楽しいという思いを基本とするという姿勢に，今までのさまざまな活動の継続の秘訣と今後への希望が見出せると感じたインタビューであった。

5.3.3 調査結果 ～飯田 OIDE 長姫高等学校および橋南連合青壮年会の場合～

次に，長野県飯田 OIDE 長姫高等学校の浅井教諭と橋南連合青壮年会会長の宮下さんのインタビューからわかることについて述べる。このお二人の所属している組織は，学校と青壮年会であり，従来の活動を次へと引き継ぐことが，比較的重視されているといえる。例えば，宮下さんは橋南連合青壮年会の継続について，以下のように述べている。

> 宮下さん：やっぱり，二十何年間続けてきたものを，やめるのは簡単。（中略）だけど，一回やめちゃって，じゃあまた復活しようかって思ったときに，相当なエネルギーが必要なんだよね。だから，なんとか，こう歯を食いしばってでも，繋いでいこうっていう，やっぱり気持ちの強い人間が何人かでもいれば，それを核にしてね，また広めていけると思って，自分たちほんと，とにかく，踏ん張りたいなと思っているんです。

橋南連合青壮年会は，かつては 30～40 人が集まる団体であり，活動も盛んだったそうだが，近年では，縦のつながりが希薄化し若い世代が集まらなくなってきており，現在，実質的な活動人

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

数は 15 人程度にまで減少してしまったという。しかし，上記の語りにも表れているように，歴史や伝統のある組織をできる限り存続させたいという思いは強い。

飯田 OIDE 長姫高等学校の場合も，地域人教育を掲げており，その継続性が求められているといえる。そのような場合に，自身や自団体の活動を引き継いでくれる後継者についてどのように考え，行動しているのだろうか。インタビューを行ったところ，橋南連合青壮年会の場合と飯田 OIDE 長姫高等学校の場合で，以下のような共通点と相違点が見えてきた。

まず，共通点は，今後の活動を牽引してくれる人を育てる際に，自発的に活動する人材が育つようにするため，活動のやりがいを実感してもらえるような工夫をしている点である。例えば，宮下さんは以下のように語っている。

宮下さん：やっぱりね，（橋南連合青壮年会の集まりに）来てくれたら，もうその人に，じゃあこれやってねって言って，（仕事を）任せて，多少うまくいかないこともあるかもしれないけど，それはもう誰だって最初はそうなんだから。任せて，楽しんでもらって，やりがいっていうか，そういうのを感じてもらえれば，それがまた次につながっていくと思うんだよね。（中略）もう，これ楽しんでやりなって言って。

この語りからは，活動を担ってくれそうな人に対してうまく仕事を割り振っていることがうかがえる。そして，特徴的なのは，楽しんで活動するよう促し，やりがいを感じてもらうという点である。このような働きかけをすることで，将来的に活動を牽引する人物が育ってくれることを期待しているようだ。

また，浅井教諭は，自身のように地域に積極的に入っていく教員の仲間を増やす方法について，以下のように語っている。

浅井教諭：で，そういう教員を作り出す作戦としては，まあとにかくいろんな先生たちに，その先生が興味を持ってる領域で地域と関わるものを，その重なる部分を見つけてあげて，そこでやってもらう。

浅井教諭：どれだけ共通項のところにその共通の先生を送りだしていけるか。

このように飯田 OIDE 長姫高等学校においても，活動の楽しさややりがいを感じてもらおうという工夫がなされていることがうかがえる。相手の得意分野と絡めて地域とのつながりをつくることによって，楽しさを感じながら活動しやすくなり，さらに，実際に活動することで地域の人から喜んでもらえたりすることで，地域の役に立っていると感じることができる。そのようなやりがいの実感が，次の活動にもつながってゆくようである。浅井教諭の話によると，現在，このような方法で仲間を徐々に増やしつつあるそうだ。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

二つの組織にこのような共通の工夫が見られる一方で，それぞれの組織の特性の違いに起因すると思われる相違点も見えてきた。

まず，飯田 OIDE 長姫高等学校の場合について述べる。浅井教諭は，学校という組織の特殊性を踏まえ，初めはある程度の強制の要素があったとしても，徐々に自主的に活動してくれるように変化を促すことも可能だとしている。

浅井教諭：入口の第一歩，地域に出す第一歩は，仕組みだともう割り切って，しょうがないです，仕事だから，すいませんね，お願いします，うちの学校こうなっちゃってるんですよ，っていうので，一歩出てもらうんだけど，実は出てもらったからには，最初はいいんだよ，動機は，いやいやで出てもらう。そもそもだって，（面白さを）知らないんだから。で，行ってみたら，あれ，これ面白いかもって思ってもらえるような。だから，最初は強制で，次からは，だんだんそこで自分なりの思いとか，ああこれいいね，なんかいいねっていう，それなりのやりがいとか，あとはまあ，できれば志まで持ってもらえると結構いいんだけど，そういうふうに変えていくっていう，二段構えの。

浅井教諭：だから，入り口は（なんでも）いいんだと思う。そこは動いてしかるべきで，それは内発的な動機づけなんて，ほとんどそれって，人間の中で 100 個あって 1 個あるかどうかなんだから。（中略）外発的なものをいかに意味づけしていってっていう，そこの方がなんか現実的な話だなって。

このように，初めは外からの働きかけや組織の仕組みの一貫として活動に参加してもらうのだが，活動を通じてやりがいなどを実感してもらうことによって，最終的には自主的な活動に結び付けるという方法が現実的であると考えているようだ。そして，外発的動機づけをいかにうまく内発的動機づけへと変容させていくかがポイントであるととらえている。恐らく，相手の得意分野と地域との接点をうまく作ることができるか否かや，活動を実際に体験した後のフォローの仕方などが，動機づけの変容の成否を左右する大きな鍵を握っているのだろう。

一方で，橋南連合青壮年会については少し状況が異なっていると言える。こちらは，長い歴史があるものの，根本的にはやはり参加が義務ではない自主的な組織であるため，参加を強制することはできないという事情がある。宮下さんは以下のように述べている。

宮下さん：もう絶対出て来る，出て来なかったら出不足金を払えとかっていう，そういうもんでもないから，出られるときに，出ればいいよっていうふうに，ちょっとゆるやかな感じで，強制はしてないです。

宮下さんによれば，このように強制はできないような状況の中でも，将来の活動を担ってくれそ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

うな人物が自然と現れるそうだ。それがなぜなのかは明確には分からなかったが，筆者には，橋南連合青壮年会での雰囲気づくりや人間関係の在り方に，その一因があるように思われた。宮下さんの以下のような語りが特徴的である。

宮下さん：自分たちは，年齢はいくらか差があるけれど，上の人間だから上から目線でしゃべるんじゃなくて，たまたま，例えば私は会長なんだけど，新しく若い人が来ても，たまたま，会長っていうだけで，おんなじ仲間なんだから，普通に気楽にね，しゃべって，上から目線でなんていうのは，もうほんと愚の骨頂だと私は思ってるんで。もう友達感覚で，付き合うようにしてますよ。（筆者：フラットな感じのお付き合いがいいということですか？）そうそう。気楽に，お互いなんでも言える環境が大事だと思います。

このように，厳しい上下関係ではないフラットな人間関係を築き，自由闊達に議論することのできる雰囲気を作ることによって，一人ひとりが自主的そして積極的に活動できる環境が整い，それが将来的に団体を牽引してくれそうな人物の出現を促すことにつながっている可能性があるのではないだろうか。

ここまで見てきたように，組織ごとの性質や事情の違いから生まれる相違は一定程度あるものの，有望な人材に対して適切な方法で活動への参加を促すことによって，徐々に自主的に活動を担う人材へと成長することができるように工夫がなされている点は共通していると言えるだろう。そして，後継者や仲間が必要とされる場合であっても，やりがいや楽しさといった，思いが伴っていることが重視されている点が，深く印象に残ったインタビューであった。

5.4 まとめと考察 ～筆者が思う，“飯田”というつながり～

以上で見てきたのが，今回のインタビュー調査から明らかになったことである。お話を伺うことができた方の人数は限られてしまったが，インタビュー全体を通して見えてきたこと，感じたことを述べ，またそれらをもとに，筆者がお邪魔したフィールドから見た，筆者が思う“飯田”というつながりについて，本節で記述したい。

本稿では，りんご並木まちづくりネットワークやさまざまな団体が携わるイベントの場合と，飯田 OIDE 長姫高等学校および橋南連合青壮年会の場合というふたつに分けて，それぞれの将来像についてあるいは後継者についての考え・思いをまとめた。両者の間には，恐らく，団体あるいはその活動の持続への思いの強さに幾分差があると考えられる。つまり，前者に比べると後者の方が，団体や活動を持続させ，次へと引き継いでゆく必要性がより強いと思われるのだ。前項まででまとめた調査結果から，両者の違いを読み取っていただけたのではないかと思う。しかし，このような差のある両者の間にも，共通点が見出せる。どちらの場合でも，インタビューの際に，共通して，「楽しい」という言葉が登場したのである。前述のように，イベントの場合は，楽しいという思いを共有するという基本的な姿勢が見られた。また，飯田 OIDE 長姫高等学校および橋

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

南連合青壮年会の場合でも，その活動を担い，継いでゆく人々に，楽しいという思いや，やりがいが伴っていることが重視されていた。インタビューにご協力くださった方々の口から何度も出てきた「楽しい」や「面白い」といった言葉は，筆者にとって非常に印象深いものである。

飯田には，市民によるさまざまな団体があり，あらゆるイベント・まちづくりの活動・社会教育活動が行われている。それらは多種多様であるが，それらの根底に共通して存在するのは，「楽しい，だからこそやる」という思いなのではないだろうか。もちろん，前述したように，人によって思いには差があると想定され，使命感や義務感を強く持っているという人もいるだろう。しかしやはりそれだけではなく，楽しいからこそ活動するという思いが少なからず存在し，それが活動の重要な要素になっているように思われる。そしてその思いが，さまざまな活動の原動力であり，また，飯田でのさまざまな活動の成功の秘訣，そしてひいては継続の秘訣となっているのではないだろうか。

このように考えてくると，飯田における人々のつながりとは，思いを中心に据えたつながりなのではないかという考えに至る。つまり，“飯田”というつながりとは，楽しいという思いを中心に据えた，多様なつながりであるということができるのではないだろうか。少なくとも，今回の調査で筆者が出会った方々のお話によって浮かび上がってきたのは，そのようなつながりの姿であったように思う。

「思い」については前述したが，「多様な」という部分について，恐らくもう少し説明が必要だろうと思う。飯田にはさまざまな人がいる。飯田というまちで行われるさまざまな活動に積極的に参加する人々，運営に深く携わる人々などもいれば，イベントのときだけひょっこりと顔を出す人もいるだろうし，あるいは飯田で行われているさまざまな活動にあまり積極的に関わらない人々もいるだろう。それはある意味では，当然のことと言える。飯田において特徴的なのは，そのような多様な人々の存在を認め，飯田におけるさまざまな活動との関わり方・つながり方は人ぞれぞれで異なっていてよいのだと許容する，そのような姿勢ではないだろうか。活動に積極的に参加したいという人は深く，濃くつながればよいし，そこまでは望まない人は，ほどよくゆるやかにつながっていればよい。誰もが深く濃くつながる必要はなく，そのようなつながり方を強要されることもない。それぞれが自分の好きな度合いでつながりを持つことができ，またその度合いを好きなときに変えることもできる。例えば，ある時期は都合によりつながりの度合いが弱くなったとしても，またつながりを強めたいと思えばいつでも歓迎される。もちろん，今までつながりがほとんどなかったような人がある日突然やってきても，同じ思いを共有することができる仲間たり得るならば，快く受け入れてもらえる。それが，飯田の人であれ，飯田の外の人であれ，扱いに差はないのである。そして，つながりを強制するのではなく，思いを持った人をうまく育てることで，思いと共に，新たなつながりを自然に次へとつなぎ，広げてゆこうとしている…。

そんな自由で心地の良い，すべての人に開かれた，多様で，そして思いを大切にしたつながりが，“飯田”というつながりなのではないか。筆者は今回の調査を通じて，そう思った。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

5.5 おわりに

本稿の執筆にあたっては，数多くの皆さまのご協力を賜りました。お忙しい中，インタビューに快くご協力くださった 5 名の方々，そして飯田滞在中にお世話になったすべての皆さまに，この場をお借りして厚く御礼申し上げます。貴重なお話，素敵なお話を本当にありがとうございました。皆さまとの出会いによって，本稿は，未熟な部分を残しつつもなんとか完成をみることができました。飯田を訪れ，その空気を吸い，人々のあたたかさに触れ，思いを感じ取ることによって，そして飯田を想いながら本稿を執筆することを通じて，飯田に住まない筆者のような者であっても，ほんの少しでも飯田とのつながりを持つことができたのだとしたら，それはとても嬉しいことです。

飯田がますます素敵なまちとなりますよう心よりお祈りし，本稿の結びとさせていただきます。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第Ⅱ部　“飯田”の教育・行政

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 1 章　飯田 OIDE 長姫高校における地域人教育の広がる素地

小澤 五敬

1.1　問題関心

私は 2015 年 8 月に長野県飯田市のフィールドスタディに参加し，飯田 OIDE 長姫高等学校で実施されている地域人教育という教育プログラムに強い関心を抱いた。この地域人教育プログラムは生徒が地域のイベントへの参加協力などを通して地元愛を育むことを助け，飯田市における若年人口の減少率に歯止めをかけようというものである。しかし私は話を聞いている最中に少々の疑問を持った。教育にはコミュニティの次世代の担い手を育てるという役割だけでなく子どもの能力を高め子どもの自己実現を助ける役割もあるのではないか。地域人教育というのは過分に共同体主義的なイデオロギーを子どもに植え付けて不当に地元に縛り付けることになるのではないか。そこで私は，このような二項対立を乗り越えるためにはどのような思想的基礎づけや状況的・環境的な条件が必要とされるのだろうか，またこうした教育プログラムがきちんと機能している土壌として飯田に特有のものにはどのような点があるのかという問題意識をもって，2016 年 1 月に再び飯田に足を運び追加調査を行った。本稿はその調査の結果を記したものである。

1.2　調査方法

2016 年 1 月 26 日に飯田 OIDE 長姫高校を訪問し，生徒と先生にインタビューを行った。3 人の先生方にインタビューにお答えいただくことができた（本稿では a～c 先生とする）。先方には事前に質問事項を送ってあり，それは以下の通りである。

質問 1.地域人教育と生徒の自己実現との関係についてどうお考えか。

質問 2.グローバル化が叫ばれる現代においてあえて地域人教育をすすめる意義はどこにあるとお考えか。

これらの質問は問題関心の項でも述べた通り，共同体の担い手を育てるという役割と生徒の自己実現とを育てるという役割との対立にいて先生方の考えをお聞きするために設けた。

生徒へのインタビューは地域人教育をカリキュラムの一環として普通のモチベーションでこなしている商業科の一般的なクラスの任意の生徒 6 名と，放課後や休日なども自主的に活動に参加している意欲的な生徒 4 名の計 10 名に行った。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

1.3 考察

1.3.1 対立の有無

まず，私が抱いていた「共同体の担い手を育てるという役割と生徒の自己実現とを育てるという役割には対立があるのではないか」という仮説は真っ向から否定されることとなった。というのも，地域人教育が行われている飯田 OIDE 長姫高校は総合技術高校であり，なかでもその商業科というのはもともと地元就職志向が高い。平成 26 年度の卒業生進路状況は卒業生 76 名のうち 34 名（約 45%）が就職し，その 34 名のうち 32 名（約 94%）が長野県内の地元就職である。そして生徒インタビューの中で印象的だったのが，インタビューした生徒全員が進路を聞かれて地元への就職と答えていたことである。地域人教育プログラムに意欲的な生徒ならまだしも，必ずしも地域人教育に思い入れが深いわけではない一般的な生徒でさえ全員がそう答えていたので，地域人教育の有無に関わらずもともと地元志向が高いことが伺われる。このような状況下では「生徒の自己実現」と「飯田に残る」ということは対立しておらず，むしろこのふたつは合致していると言える。そして地域人教育は，そんな生徒達がただなんとなく他に選択肢がないから地元に残るという消極的な選択をするのではなく，地元への理解を深め愛情を育み自信を持って積極的に地元就職というキャリア選択をするためのキャリア教育の機能を果たしているのである。「タフでグローバルな生徒を飯田に縛り付ける」という見方は誤りで，「消極的ローカルな生徒をタフで積極的なローカル生徒に育てる」とでも言えるだろうか。これらキャリア教育と生徒の自己実現との関係という観点について先生方は以下のように話していた。

> （a 先生）最終目標としては自己実現に向けてということを考えてはいます。当然，社会的承認欲求はすでにもう高校生にはあるわけです。この部分が地域人教育を通して満たされていくんじゃないかと考えます。その承認欲求を満たしながら気づく子というか，行ける子は自己実現に行けるのかなあと。私は本当にこれがしたいんだと強くアイデンティティを出してリーダーシップを発揮するという姿が見受けられます。ただ現状において，自己の実現というところまで達成できている生徒の方が少ない。割合とすると半分は当然いっていない。ただこれをちゃんと数字で観測したりっていうことはまだしていません。自己実現させるためにっていうのを最終目標にしているわけではないっていうのもあって，自然発生的に自己実現に向けていっている生徒もいるなあという感じです。（中略）もうこれは日本全国そうだと思うんですけど，高校生って基本的には自己肯定感が低いんですね。それは，いろいろ理由はあると思うんですけど，ひとつは核家族で育てられていることも関係しているのかなと思います。僕ら世代だと自然発生的に地域っていう人たちとたくさん関わったり学校外のところで活動していて，学校は別にダメでもうまくいくっていうのがありました。ただ割といまの高校生は学校と家しかない。自分を発揮する場面がなかなかないところで，地域っていうところに高校生を出すと自己肯定感っていうのが満たされる。その中で自己実現にむかっていくのかなっていう気はします。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

（b 先生）人はこう，キャリアって生きてから死ぬまでの軌跡でその時々に社会的ないろんな役割を持っていると思うんです。今は職業人としての自分，家に帰れば家庭人としての自分もいるし，地域の中の自分もいるしさらにその余暇として遊びの時のグループの自分，いろんな立場がある中で人って生活していくんだよっていうことを地域人教育を通じて生徒には学んでもらいたい。ワークライフバランスの元となっているやつです。生徒の中にはまあもともと地元に住んでいきたいっていう子たちが多いのですが，その中で自分っていうものをどういう風に確立していくのかっていうところに踏み込めればいいかなと思っています。そのひとつとして，ここは学校のなかでも地元就職に強いと言われてる部分もあって商業の勉強とか就職していくっていうところまではなんとなくできていくんですが，ただそれだけじゃ人生の満足度ってあがらないはずなのでそれ以外の部分にどういうふうにアプローチできるかなと。そのひとつとして地域っていうのもあるのかなと考えています。地域の中の自分のポジションを作っていく。役割をもらうっていう，そういう風に自己実現につながればいいかなと思います。

（c 先生）僕がちょっと感じるのは，いまゆとり世代とか悟り世代とか言われて久しいですけど，意外とやりたいことないですっていう生徒が多い。そもそも実現したい自己がない。その中で価値観の違う人たち，まあここでいうと学校の外の人たちと触れ合うことで自己肯定感といいますか，自分が役に立ったっていう実感が得られるのかなと。そのなかで自分があーこういうところで自分って役に立つんだなとか力を発揮できるんだっていう経験をまずしていって，これってもしかしたら私仕事にしたいかもって思うような，そういうきっかけができたらいいのかなと思っています。

以上のように，地元就職志向が強いが自己肯定感や地元への評価・誇りが弱い生徒が多いという状況において地域人教育は生徒のニーズにあった教育プログラムだと言えるであろうということがわかった。次に，この地域人教育のような取り組みは生徒の特色以外にたとえばどんな土壌があれば支持されるのか，これを成功させている飯田特有の点として何があげられるのかを考えていく。

1.3.2　地域人教育が行われうる土壌

地元就職志向が強いという生徒のニーズ以外に，地域人教育を支持する要因として何が挙げられるか。b 先生は地域人教育と似たような実践をしていた前任校と比較したうえで，次のように述べている。

（b 先生）もちろん学力レベルの違いっていうのはあります。あと影響があるのは家庭環境とかかな。両親の教育水準というか，そのあたりが飯田の子の方が落ち着いてる子たちが多いので。やはりこういうのって本当に感覚なんですよね。地域のおじさんとこれっていいよねっていう感覚を共有できるかって。それがうまく通じるんだよねここの子たちは。おととい街中で子どもまち博っていうイベントをやったのは実はうちの学校から元気にやってるやつらなんですが，うちだけでなく同じような思いを持った他の高校生，たとえば飯田高校の生徒を巻き込んで高校生たちが主体的にやってくっていう感じかな。その中に

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

はやっぱり世界に出て行きたいって子たちも飯田高校にはいると思うんですよ。だけど世界に出て行ってもいいけどでも田舎はあるよ，飯田出身だよって自信を持って言えるような気持ちをもって出て行って欲しい。そして飯田に残る子たちは飯田に帰ることがださいとかかっこ悪いと思わせないような地元で頑張ってる人たちをつくる。そのような感じでやるとできるのかなって思います。

b 先生は家庭環境を要因のひとつとして挙げ，進学校ではあるが飯田 OIDE 長姫高校と同じ地域にあり似たような環境にあると考えられる飯田高校への広がりの可能性にも言及していた。a 先生は全く異なる観点から興味深い要因について以下のように述べている。

（a 先生）もしこの土壌があればうまくいくだろうと考えられるのが，社会教育の視点だと思っています。社会教育っていうのはいわゆる公民館が発信してるところだと思うんですけど，公民館って生涯学習っていうのを言ってるじゃないですか。私も会議に参加させてもらうなかで知ったんですが，ふつう公民館の社会教育の概念に高校って入ってないんですよね。それを入れるっていう仕組みをつくっていくことが重要なのではないかなと思います。社会教育，いわゆる公民館って地域の大人を対象にしてることがほとんどで，ちょっと小中学校っていう感じじゃないですか。いわゆるうちが地域人教育っていう形でやれてるのは，公民館が社会教育っていう枠組みのなかに高校を入れたからなんですね。そういう土壌があって，公民館大会も公民館セミナーなんかいった時はそんな話をされてましたけど，いわゆる高校も外で地域に出るっていうのが流行りなんですよね。しかもそこで私たちは公民館の方から高校にたいしての，高校も社会教育に参加してほしいというニーズがあるっていうのを掴んだ。そういうニーズがある地域に高校が入っていくっていうのはわりかし難しいことではない。うちみたいに全員の生徒が関わるっていうのはいきなりは大変なので小さいところから始めていく，トライアンドエラーを繰り返しながらうちと似たようなことをやっていくっていうことはできると思います。例えばうちはグローバル化できてないけどそれができる所っていうのもあると思うんですよね。たとえば旅行者なり労働者なり外国人がたくさんいるところとか。ただ地区全体として公教育を考えるときに公教育ってやっぱり教育機関だけでは力が足りないのでそこに行政が携わる。これらが同じ社会教育っていう枠組みを考えてすり合わせながらやってるのが今の私たちの現状かな。（中略）こうした学校教育と社会教育の連携は当たり前といえば当たり前のことなんですよね。高校の先生もいち地域の人なので。それをたぶん自然にやってる人もいると思うんですよ，うちみたいな枠組みがなくても地域の人として。でもふつうは，地域に貢献するだとか社会教育について考えるということは一般先生にはとてもじゃないけどできてない。目の前の生徒にいい授業をするっていうのが大事な人もいる。（中略）でも生徒に何を残せるかって考えた時にただ良い授業をしただけというのではもったいないと思うんですよね。そういう意味で，社会教育もしているんだという視点を先生が持つためには公民館とかと接する機会っていうのは必要だと思います。飯田っていう場所で地域人教育をやっていく上では公民館の存在がかなり特異な点ですね。

a 先生は飯田で地域人教育がうまく実行されている要因として学校外での観点から社会教育・

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

公民館活動の活発さを挙げた。これは非常に興味深い語りである。今回の調査のもとになった2015年8月のフィールドスタディでは飯田OIDE長姫高校だけでなく飯田のまちづくりについてのさまざま活動について学習したが，そのなかでもとりわけ公民館活動の活発さというのは強調して語られていたものであった。まさか学校教育と社会教育という概念が結びつくとは思っていなかったが，実際に地域人教育で行われている活動を考えてみればなるほど納得のことではある。子どもに向けての将来の飯田を盛り上げていこうという働きかけと，大人達が現在進行形で行っている飯田のまちづくりとが相互に補完しあいつつ相乗効果をもたらしているのである。これが生徒の自己実現にも地域の活性化にもつながっており，学校教育と社会教育連携のなかでもあるべき姿のひとつとして捉えることができるのではないかと思う。

1.4 まとめ

最初は否定的,批判的な問題意識から出発した今回の調査であったが実際に蓋を開けてみると，地域人教育はもともと地元志向が強いが自己肯定感や地元への評価が低いという生徒のニーズにあった教育プログラムであり，学校教育と社会教育の連携という教育学的流行のひとつの現れ方としてかなり真っ当なものであることがわかった。文部科学省が全国で推進しようとしている教育政策のひとつにコミュニティスクールの拡充というものがある。これは小中学校の運営にPTAや地域協力者が参加し学校教育と社会教育を連携させるというもので，この動きは今後ますます活発になると予想される。地域人教育はそんな学校教育と社会教育の連携という流行を高校のなかに組み込んだ先駆け的プログラムであると言えるだろう。これはまだまだ始まったばかりであって研究成果も十分には蓄積されておらず，今後どのような展開を見せるのか，他の地域・学校に広がるのかについては引き続き注視していかなければならないのはもちろんである。しかしここで最後に，地域人教育活動に熱心な生徒のインタビューを引用しておく。東京へ出たり世界へ出たりしてもっと大きな仕事をしようとは思わないのかと聞かれ彼は以下のように答えた。

> 世界の問題を自分たちが抱えているわけではないと考えています。目の前の地域，この飯田っていう地域の問題を捉えていま実際やっているので，そこである程度のサイクル，仕事をして収入を得て還元していく，お金は少ないけども地域の役には立っているし地域への貢献はしているという実感を得ることの方が重要なのではないかという風に捉えています。世界と戦っているわけではないので。目の前の問題をひとつひとつ解決していく，まずは地元から見て自分がやりたいと思ったことをやる。お金のためではなくみんなに認めてもらうためでもなく，地域のためにやるっていう意識をもってやることが大事だと思っています。

彼はお金や社会的地位といった量的な価値観にこだわるのではなく，いま・ここという唯一かけがえのない代替不可能な場所において当事者である自分にしか果たせない責任を果たすという質的な価値観も守っていくと述べた。一介の高校生にはとてもじゃないができない発言であり，

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

このような優秀な生徒を育てることのできている地域人教育は現状の方向性で間違いはないのではないかと私は思っている。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 2 章　リニア中央新幹線開通を見据えた地域人教育の在り方

水谷　七海

2.1　はじめに

夏に飯田実習に行って，地域で活躍する人材を育成するという地域人教育に関心を持った。自分の住む町に関してプロジェクトを立ち上げて取り組めるということ，地域の大人と関わる機会があるということ，それらを高校生のうちに経験できるということが，単純にうらやましく，どのようなものなのかもっと詳しく知りたいと思い，地域人教育をテーマとした。リニア中央新幹線と関連付けようと考えたのは，実習での経験からである。いろいろな職業，年齢の方にお話を伺う機会をいただいて，一番印象に残ったのはリニアに関する意見が年齢によって異なるように感じられたことだった。町づくりの中心で動いている大人がリニアを話題にすれば，これを利用して飯田にもっと人を呼び込もう，と意欲的な話になることが多かったのに対して，高校生と同じ話題で話をすると，飯田から人がいなくなる，自分もきっと出ていくだろうと負の効果を意識した話になることが多かった。これからリニアが通るのは約 10 年後，そのとき中心となって飯田を盛り上げていくのはこの高校生たちではないのかと考え，特に地域で活躍する人材を育てるという地域人教育ではリニア開通をどのように捉えているのかを調査した。

2.2　調査概要

2.2.1　目的，リサーチクエスチョン，仮説

この調査の目的は，リニア中央新幹線が開通することに関して地域人教育を受けた生徒がどうとらえているのか，またリニア開通向けて地域人教育の在り方は変化するのかを探ることである。そこで，地域人教育を受けた生徒のリニア開通への意識はどのようなものかということをリサーチクエスチョンとし，それに対する仮説として，地域人教育を受けた生徒はリニア開通を機に飯田を活性化しようと考える者が多いのではないかということを立てた。

2.2.2　調査方法

2016 年 1 月 26 日に地域人教育を受けた生徒 37 名にアンケートを実施し，その中から 6 名の生徒に直接インタビューを行った。また同内容のインタビューを意欲的な 2 年生 2 名と 1 年生 2 名に行った。さらに地域人教育を担当されている先生方にもお話を伺った。アンケートとインタビューの質問事項は以下の通りである。

①地域人教育をやって面白かったことは何か。

②リニアが開通したら，したいことはあるか。

③リニアが開通したら，町はどう変わると思うか。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

④自分の将来についてどう考えているか。

①の質問は，地域人教育を受けた生徒自身が地域人教育の魅力についてどのように感じているかを聞くことで，その生徒自身の印象に残る特徴を聞きだす狙いで設定した。②と③はリニアに関するもので，リニア開通に関してどのような考えを持っているのかを知るために設定した。④は地元就職の志向が強いという傾向の確認のための質問である。

2.3 調査結果

2.3.1 先生にインタビュー

先生へのインタビューでは，リニア開通による生活への影響がまだほとんどないということが分かった。約 10 年も先のことであるし，まだ開通に反対している人もおり，本当に開通する実感がないのだという。そのため，リニア開通による町や地域人教育の変化も具体的に思い描くことはないし，その必要は現在のところないようである。

2.3.2 生徒にインタビュー

まず，アンケートについての結果を集計すると以下のようになった。①の問いについて，知らなかった地域の良さを発見したという趣旨の答えが 3 名，授業の自由度の高さを挙げた答えが 11 名，地域の人や班員とのコミュニケーションを挙げた答えが 13 名，空欄が 10 名という結果になった。このことから，地域人教育を受けた生徒から見た地域人教育の魅力は，自分の考えたことが実現でき，その過程で様々な人と触れ合う機会があることだと分かる。②と③の問いについては，リニアに乗って県外に行きたいという趣旨の答えが 15 名で，リニアを利用して飯田に人を呼び込むという答えが 3 名，リニアは開通するべきでないという答えが 2 名，空欄または特になしが 17 名という結果になった。リニアに対して実感がない生徒が過半数で，もう半分は県外へ行くことに期待を持ち，少数はリニアを利用する，またはリニア反対の意見が見られた。④の問いについては，就職に関して地元に残るという答えが 16 名，県外に行きたいという答えが 1 名，空欄その他が 20 名となった。空欄の生徒は時間が足りなかったのだと思われるが，地元就職の志向が強いことは確認できた。

2.4 考察

結論から言うと，リニア開通は地域人教育に対して現在あまり影響を与えていないということが分かった。地域人教育を受けて自分が変わったと思うところについて，コミュニケーション能力の向上など，非認知能力の向上が多く挙げられていたように，この教育では地域の人とのつながりを得ることが大きな収穫の一つであると言える。そのため，今ある問題や直近の催事に力がそそがれる。リニアが通るのは約 10 年後と中長期的な計画であり，開通に反対する人もいるため，生活に直接影響がなく，話題にするのも不自然だということが分かった。地域人教育で生徒が得るのは，遠い将来を頭の中で描く技術というよりも，地域の大人とのふれあいを通して，飯田の町で働くということによりスムーズに入っていけるようになることなのだと考えた。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

また，生徒の意欲によってリニアの捉え方が異なったのも印象的だった。リニアが開通したらしたいことはあるかという質問に対し，地域での活動は授業内だけだった生徒は，あまり使わないと思うと答えたのに対して，課外でも積極的に地域で活動する生徒は，リニアを利用して飯田に人を呼び込みたいと話した。この答えは，私が実習で町おこしの中心となっている大人たちに聞いたものと似ていて，地域に出る機会が多く，地域の大人とふれあい，地域について考える時間が多いからこそ，このような違いが生まれるのではないかと感じた。

2.5 終わりに

地域人教育は地域の人とのつながりを育んだり，それまで気づかなかった飯田の良さに気付くきっかけとなったりするという効果があることが分かった。地元就職志向の生徒が多いため，卒業後スムーズに，より意欲的に地域で仕事ができる資質を身に付ける場所のように感じられた。現在リニア開通に関しては反対している人もまだおり，生徒にも先生にも実際に通るという実感がない状態である。もしインタビューの時期があと 5 年遅ければ，また違った答えが得られたかもしれない。しかし，地域人教育が地域のリーダーを育てるという理念で行われる教育であるなら，10 年後の町のありようを見通す，想像することも大切なのではないだろうか。リニアを使ってどんな町にするかという明確なビジョンを持つことは難しくとも，自分たちや飯田の町にどのような変化が起こり得るのかに考えをめぐらす機会が地域人教育のなかにあってもいいのではないかと感じた。最後に，忙しい中インタビューに応じてくださった先生方や生徒の皆さんに感謝の意を表したい。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 3 章　職業高校における地域人教育とその影響

佐々木 雄大・名倉 早都季

3.1 はじめに

8 月のゼミで飯田を訪れ，「地域人教育」という取り組みを初めて知った。内容の魅力もさることながら，大学生の前でのプレゼンにも全く物おじせず，堂々と夢を語る高校生の姿に非常に感動した。地域人教育にはその目的以上の影響があるのではないだろうか，地域の人との関わりをつくっている，〝飯田〟のつながりに外せない重要なファクターなのではないだろうか。私たちはこうした疑問から地域人教育の影響，特に能力と意識という観点からその効果を検証し，地域人教育とその影響によって生徒がどんな風に変化し，〝飯田〟のつながりがどのようにつくられていくのかを明らかにしたいと考えた。

3.2 地域人教育について

3.2.1 概要

飯田 OIDE 長姫高校（以下，OIDE と称する）は平成 25 年 4 月に飯田工業高等学校と飯田長姫高等学校が合併し県下初の総合技術高校として開校した。「地域人教育」とはこの高校の商業科で実施されている，高校生が地域理解を深め，地域での生き方を考え，郷土愛を育み，地域活性化や地域社会に貢献できる人財を育成するためのプログラムである。飯田市と松本大学と OIDE が三者協定を結び，主に OIDE の先生が中心となって進められている。地域人教育は OIDE 商業科の生徒の半分が地元企業に就職し，進学希望者の多くも卒業後に地元就職するなど地元志向が強いという背景から，高校卒業後の生き方を考える「キャリア教育」，地域に貢献する「人材育成」，地域におけるビジネス教育を実施する「商業教育」を目指すものとして導入された。地域を「愛し」「理解して」「貢献する」人財を地域の教育力を使って育成しようとするものであり，「主体性・自主性」「企画力・実践力」「協働性」「地域理解　持続可能な地域」「郷土愛　誇り」を身につけ自ら行動し，地域の産業，暮らしの中核を担うリーダーを育てることを目的としている。OIDE の中では 3 年間のカリキュラムマップが制定されており，1 年，2 年，3 年と「地域を知る」「地域で活動する」「地域の課題解決に向け行動する」といった風に目標が高次化していく。1 年生ではビジネス基礎という科目の中でフィールドスタディや松本大学教授からの講演を聴く。2 年生では広告と販売促進という選択授業の中で地域のイベントへ年間 6 回程度参加する。そして 3 年生では課題研究という枠組みで週 2 時間をさいて地域課題を発見し，それに向けて実際に地域の方と実践活動を行う。学年末の全校課題研究発表会ではその成果を発表する。地域課題への取り組みは，イベントの開催，トイレ掃除計画，リヤカー行商，商品開発など様々である。また地域人教育の枠には収まりきらない高校生がより自主的に地域課題に取り組んでいこうとする自主的

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

なまちづくり団体「sturdy egg」も発足し，地域の方と協働して各種イベントの企画を行っている。2016 年 1 月 24 日には，地域人教育をうけた商業科の 3 年生が中心となり，飯田高校・飯田風越高校の生徒も巻き込んで高校生が中心となって企画した「こどもまち博 IIDA」が行われた。プログラムの企画から地域の方への講演のオファー，大学生への応援要請，広報にいたるまですべて高校生が企画したものである。このように地域人教育は基本的には OIDE 学校内での必修プログラムをさすが，「sturdy egg」を中心とする有志の高校生はそこから派生して様々な活動を自主的に行うまでに成長している。

3.2.2 地域人教育の課題

課題発表会の午後には生徒の成果の発表の場だけでなく，地域人教育の今後の方向性について考える地域人教育研究会も設置されており，地域人教育に取り組む先生・地域の方々が情報共有し，改善していこうとする土壌がある。長野県教育委員会・松本大学教授・公民館主事・東京大学教授・OIDE 校長をパネラーとしたディスカッションでは地域人教育の課題として「公民館主事と先生の温度差や目的の認識ずれがあり，情報共有の場が求められていること」の点が挙げられた。また OIDE の先生自身は生徒への効果・地域への効果の検証，教科と連動した教育プログラムの構築，先生のスキルアップの必要性，関心度に偏りがあることを今後の課題として認識している。

3.3 類似する事例との比較

近年「地方創生」や「地方活性化」といった理念が教育現場においても重要視されつつある。OIDE における地域人教育と類似した教育プログラムが，日本各地で実施されている。

ここで言う「地域人教育と類似した教育プログラム」は，以下のような特徴を持つ取り組みを指す[48]。

・「地域への愛着を育む」「地域への理解を促す」「地域に貢献する人材を育てる」といった要素を持つ。

・実践的・体験的学習を重視する。

・職業や進路について知り，考える機会を提供する「キャリア教育」の要素を持つ。

なお，OIDE は職業高校だが，以下では普通科高校におけるものについても記載する。

【事例 1：島根県立隠岐島前高等学校の取り組み[49]】

島根県海士町にある隠岐島前高校は，島根県の離島部である島前地方で唯一の高校である。廃校の危機に瀕していた隠岐島前高校の存続と，過疎化が進む地域の活性化を目指し，隠岐島前高校と島前地区 3 町村が連携して「隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会（魅力化の会：三町村長・三町村議長・高校校長・三中学校長・PTA 会長・OBOG 会会長等で構成。事務局は島

[48] 2015 年 8 月の A 先生のプレゼンテーションにおいて，A 先生が作成した資料を参考とした。
[49]「島根県立隠岐島前高等学校」入手先 URL：http://www.dozen.ed.jp/（アクセス日：2016-2-15）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

前高校)」を立ち上げ，2010 年から「島前高校魅力化プロジェクト」を開始した。このプロジェクトの一環として，多文化協働力（人間関係形成能力），地域起業家精神（職業観・勤労観），夢（自己理解・将来設計能力）を養う「夢探究」，地域の特徴を知り，地域の課題について考える「地域学」，インターンシップを通して社会人として必要な能力を身に付ける「生活ビジネス基礎」といったカリキュラムが実施されている。2 年次の「夢探究Ⅱ」では，生徒がチームごとに設定した課題について探究学習を行い，成果を発表する。

隠岐島前高校の生徒は，2 年次から「特別進学コース」と「地域創造コース」の 2 つのコースに分かれる。前者は学力向上に重きを置き，国公立大学などへの進学を目指す。後者は地域資源を活かした体験型・課題解決型の学習や，外部講師による特別講座，企業へのインターンシップなどを通してグローカル人材を育成し，多様な進路実現を目指す。1・2 年次で続けて行われる「夢探究」は両方のコースで，2 年次から始まる「地域学」「生活ビジネス基礎」は地域創造コースで実施されている。

これらのカリキュラムで育まれた能力を活かし，推薦・AO 入試で首都圏の難関私立大学に合格する生徒も現れていることから，「地域について知り，探究学習を行うこと」は，高卒就職を志望する生徒だけでなく，大学進学を目指す生徒にとっても効果があるという可能性が示唆される。

【事例 2：岐阜県立可児高等学校の取り組み】

可児高校は岐阜県東部の進学校であり，岐阜県教育委員会がグローバル化や少子高齢化等の急速な社会情勢の変化に対応した高校改革を推進するために立ち上げた「県立高校改革リーディングプロジェクト推進事業」（平成 25～27 年度）に参加している。事業の一環として，可児高校が地域に呼びかけ，可児市議会が地元の諸機関・団体を結び付ける形で，「地域課題解決型キャリア教育を通して，学力向上・キャリア保障・地域再生を一体的に進める取り組み」が始まった。

可児高校の事例には，実務面での負担を解消するため，多様な関係者同士をつなぎ，コーディネートを行う NPO「縁塾」が設立され，この「縁塾」を通して人的ネットワークを構築しているという特徴がある。

取り組みが本格的に始動した 2015 年には，「夏の！OPEN エンリッチ・プロジェクト 2015」と題し，地域の様々な課題について，解決に向けて尽力する講師から，地元住民と可児高校の生徒（1 年生全員と 2・3 年生の希望者）が一緒に学び，解決策を探る，社会教育的な学びの場が実現した。

可児高校教諭の浦崎太郎氏は，高校と地域が関わりを持つメリットとして，次のような要素を挙げている[50]。

---

[50] 中央教育審議会 第 6 回 学校地域協働部会（H27.8.25）浦崎太郎 意見発表資料」入手先 URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/009/siryou/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1361987_2_1.pdf（アクセス日：2016-2-15）

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

＜生徒のメリット＞
・ 社会に出ていく不安感が軽減され，むしろ，社会に出て活躍する意欲が増す。
・リアルな素材で体験できるため，いま求められている，課題発見&解決能力が高まる。
・「地元が」生きていくため，そして「地元で」生きていくために習得すべき力を正確に知ることができるため，進路選択がより的確になるとともに，それに必要な力を身につけて帰郷できる可能性が向上する。
＜高校のメリット＞
・生徒の学習意欲やキャリア意識が向上し，本来業務に専念でき，負担が軽減される。
・生徒が「地域で」学ぶことができれば，すなわち社会教育の場に高校から生徒を送り込む仕組みを構築できれば，キャリア教育の企画や運営に要する高校の負担は激減する。
・課題発見・解決能力を育成する場を確保でき，入試改革にも対応できる。
＜地域のメリット＞
・先入観や固定観念のない発言により，課題解決に突破口を与えることが珍しくない。
・特に医療福祉等の分野では，向学心を高めて進学した若者が 5～6 年後に地元事情を熟知した即戦力として地元に帰ってくる可能性が高まる。すなわち，投資的価値が高まる。
・それ以外にも，中長期的にみて，地元の将来に対する当事者意識や，「地元が／地元で」生きていく力を高めて帰郷する率が向上し，地域の持続可能性が向上する。
・行政事業や，高齢化が進みがちな地域活動や市民活動に若い力を吸収する機会が増える。
・教育環境の高さに魅力を感じて移住する世帯が増え，やはり地域の持続可能性向上に貢献する。（…既に「移住を検討したい」の声あり）

また，可児高校では，地域と連携した学習の中でアクティブラーニングを取り入れ，大学入試改革において重視される課題発見・解決能力の育成を試みている。

事例 1 は，大学・短期大学や専門学校への進学を目指す生徒，地域内外への就職を目指す生徒といった，多様な層の生徒に対応しているという点では，OIDE と共通する。また，OIDE の地域人教育は商業科で行われていることから商業教育としての色が強く，進学校で大学入試を前提に行われている事例 2 に比べると，インターンシップなどの職業教育が組み込まれた事例 1 に近い。一方，対象地域の人口規模は事例 2 の方が近い（2010 年国勢調査において，飯田市の人口は 105,335 人，海士町の人口は 2,374 人，可児市の人口は 97,436 人）。もっとも，自治体としての規模や大都市へのアクセス，地域の歴史や文化にはそれぞれ差があるため，「地方の事例」とひとくくりにしないことが重要である。

また，事例 1，2 と OIDE の地域人教育は，いずれも「学校側から自治体・地域住民に呼び掛けて事業が始まっている」という共通点がある。しかし，OIDE では高校の先生が中心となって，大学・自治体・公民館・地域住民などとの協力関係を構築したり，事業を運営したりしているの

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

に対し，事例 1 では「魅力化の会」，事例 2 では「縁塾」という，多様な主体が混じった運営団体が存在し，先生の事務的負担を軽減するとともに，地域が学校をバックアップする構造が形成されているという，運営構造上の差異が見られる。

3.4 調査の概要

3.4.1 実施背景

筆者が地域人教育について知った契機は，2015 年 8 月の飯田実習における，OIDE の A 先生と生徒 2 名のプレゼンテーションである。その際に筆者は「過疎化が進む地方の高校が，地域との関わりを通して，地域に貢献する人材を育成する」という地域人教育の理念に，地方創生における教育の可能性を見出し，強く興味を持った。一方で，地域人教育が生徒の能力および地元に対する意識にいかなる影響を及ぼすのかは，プレゼンテーションの内容からでは判断しがたく，実際に検証してみる必要があると感じた。

飯田市における住民自治と生涯学習について研究するにあたり，筆者はかねてから明らかにしたいと考えていた「地域人教育が生徒にもたらす影響」に焦点を当てた。

この研究の成果を以て，日本各地，特に過疎化が進む地方の教育に携わる方々に，広く地域人教育の現状を知っていただき，同時に OIDE の先生方へ「外部からのフィードバック」という形で貢献できればと考えている。

3.4.2 目的とリサーチクエスチョン

佐々木と名倉の共同執筆である本研究は,「地域人教育の効果を検証する」という共通の目的の下に行われており,「能力における変化」について佐々木が,「地元に対する意識における変化」について名倉が調査・検証するという形式をとっている。

佐々木のリサーチクエスチョンは以下の二つである。

⑴地域人教育によって，生徒のどのような能力が伸ばせるのか

⑵地域人教育において，生徒の能力に対する教師の評価は適切か

⑴は，2015 年 8 月の A 先生の説明から，地域人教育が明らかに生徒の能力の向上を図っているものと判断した上で設定した。⑵は,「能力の変化」には,「生徒自身が感じる能力の変化」と,「生徒を評価する立場にある教師から見た，生徒の能力の変化」の二つの側面があるのではないかという考えから設定したものである。

名倉のリサーチクエスチョンは以下の三つである。

⑴地域人教育によって，生徒の地元に対する意識はどのように変化したのか

⑵地域人教育によって，生徒自身の進路に対する意識はどのように変化したのか

⑶地域人教育において，生徒の意識の変化に対する教師の評価は適切か

⑴は，地域人教育が目的通り「地域を愛し」「理解して」「貢献する」に至るまで生徒に効果をもたらしているのかを検証しようとするものである。

⑵は，地域人教育がその問題意識に「キャリア教育」を含んでいることから,「地域の産業,

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

暮らしの中核を担うリーダー」を育てる人財像に掲げていることから，生徒が自分の進路を自己のものだけでなく「地域」の中に位置づけるに至っているかを検証しようと考えた。

(3)は，佐々木と同様，「意識の変化」にも二つの側面があるのではないかという考えのもと設定した。

3.4.3 仮説

ベネッセ文教総研が 2001 年に発表した「高校生の学力変化と学習行動」第 5 章第 2 節[51]によると，「目標追求型学習」と「課題解決型学習」の相互作用により「論理的思考力」「文章表現力」「自己表現力」が育つとされる。ここで言う「目標追求型学習」とは，「一問一解」という前提に基づき，知識・暗記を重視する，従来の学校教育である。一方，「課題解決型学習」とは，「一問多解」を前提とし，「社会の中で自分はどう生きるべきか」といった意味不安の解決にかかわる学びである。この定義によれば，「地域理解を深め，地域での生き方を考え，郷土愛を育み，地域活性化や地域社会に貢献できる人財を育成する」という理念に則る地域人教育は，課題解決型学習の一種と考えることができる。

この資料に基づき，佐々木はリサーチクエスチョン(1)について，「地域人教育への参加を通して，生徒の論理的思考力・文章表現力・自己表現力が向上する」という仮説を設定した。

また，リサーチクエスチョン(2)については，2015 年 8 月の飯田実習で A 先生が「地域人教育における成績評価の基準設定について，課題が残っている」という旨の発言をなさっていたことから，「生徒の自己評価と，先生が生徒に対して行う評価とは，必ずしも一致しない」という仮説を設定した。

8 月の合宿でのプレゼンテーションを聴き，地域に貢献しようとする高校生の姿をみて，名倉はリサーチクエスチョン(1）について，「地域人教育への参加を通して地域への理解が深まり，愛着が深まり，さらには貢献意識が高まっている」という仮説をたてた。また 8 月の実習で「つながり」を重視する発言が地域人教育に関わらず多く出されていたことから，この愛着は特に「地域の人とのつながりを感じる」ことでうまれるのではないかと考えた。そこで地域への意識の変化のもうひとつの仮説として「地域人教育を通して地元の人とつながっていることを感じるようになる」という仮説を設定した。

また，地域人教育のプレゼンをしてくれた高校生は自分のビジョンが明確だったことから，(2)に対しては，「地域人教育を通して地域の課題を自分事としてとらえ，地域のために働きたいと考えるようになる」という仮説をたてた。さらに(3)に対しては，佐々木と同様「生徒の自己評価と，先生が生徒に対して行う評価は必ずしも一致しない」という仮説を設定した。

3.4.4 調査方法

本研究では，地域人教育に携わった OIDE 商業科先生 3 名（以下，A 先生・B 先生・C 先生と

---

[51] 入手先 URL：
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakuryokuhenka/2002/chapter_05/section02.html（アクセス日：2016-2-15）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

する）および，地域人教育に参加した OIDE 商業科 3 年生（A 先生のクラス）37 名，2 年生 2 名，1 年生 2 名を調査対象とした。なお，1・2 年生の 4 名は，「地域人教育において特に積極的に活動している生徒」として，A 先生に選んでいただいた生徒であり，彼らは正規の授業時間以外でも，前述の高校生による団体「sturdy egg」を組織し，自主的に活動している。

本研究では，聞き取り調査および同一内容のアンケートによる調査を行った。
先生に関しては，質問項目を予めメールで送付し，質問に対する答えを事前に用意していただいた上で，聞き取り調査を行った。生徒に関しては，まず商業科 3 年生 37 名全員にアンケートに回答していただき，その中から A 先生が選抜した 6 名について，同一の内容についてより詳細な語りを引き出すためのインタビューを実施した。1・2 年生 4 名については，アンケートは実施せず，聞き取り調査のみを実施した。

聞き取り調査およびアンケートでは，以下の項目について，この順番通りに質問した。

1.地域人教育を通じたみなさんの能力面の変化についてお聞きします
①物事を筋道だてて考えられるようになったり，論理的に考えられるようになった
そう思う・思わない
そう思う，の方はどんなときにどう感じましたか？
②自分の考えを文章を用いて正確に表現できるようになった
そう思う・思わない
そう思う，の方はどんなときにどう感じましたか？
③自分の考えを他人にわかりやすく話せるようになった
そう思う・思わない
そう思う，の方はどんなときにどう感じましたか？
④地域人教育はほかの教科の成績向上につながったと思いますか？（国語・数学・英語・社会・理科・商業科の専門科目）
つながった・変化なし・成績が下がった
つながったと回答の方は，どの教科で何をする際に地域人教育で学んだことが役立ったと感じましたか？
⑤以上でお聞きした能力以外に，向上したと思う力・能力はありますか？
あるとしたらどのような力ですか？
⑥地域人教育を通して身についた能力を，先生は正しく評価してくれたと思いますか？
思う・思わない
そう考える理由はなんですか？

2.次に，地域人教育を通じたみなさんの意識の変化についてお聞きします
①地域人教育を通じて地元への理解は深まりましたか？

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

深まった・深まらなかった
②地元への愛着は深まりましたか？
深まった・深まらなかった
そう考える理由はなんですか？（深まった・深まらなかった方どちらも）
③地元のひととつながっていると感じましたか？
感じた・感じなかった
そう考える理由はなんですか？（感じた方・感じなかった方どちらも）
④進路や自らの生き方は変わりましたか？
変わった・変わらなかった
そう考える理由はなんですか？（変わった方・変わらなかった方どちらも。変わった方はどう変わったかも含めてお答えください）
⑤地域のためになりたい，と考えるようになりましたか？
なった・ならなかった
そう考える理由はなんですか？（なった方・ならなかった方どちらも）
⑥地元の課題を自分にも関係する問題だと考えるようになりましたか？
はじめからそう思っていた・そう思うようになった・そうは思わない
そう考える理由はなんですか？
⑦地域人教育を通してその他意識の面で変わったと思うことはありますか？（勉強のモチベーションがあがった，地域の人だけでなくまわりの人が好きになったなど）
⑧こうした意識面での変化を先生は正しく評価してくれたと思いますか？
思う・思わない
なぜそう考えますか？

3.5 調査結果

3.5.1 能力の変化について

まず，高校生に対する調査の結果をまとめる。表 2-3-1 は，アンケートの項目 1①～⑥について，各選択肢を選んだ生徒の人数，自由記述欄の回答を整理したものである。自由記述欄の回答については，複数の回答に共通して見られた要素をまとめ，類型化した。

質問番号	回答（回答者数 37 名中）
1①物事を筋道だてて考えられるようになったり，論理的に考えられるようになった	そう思う　10 名 思わない　26 名 無回答　1 名
そう思う，の方はどんなときにそう感じましたか？	【企画運営・計画立案の際に】 「イベント前の企画時」「カフェを企画したときの,準備か

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

	ら開店までの予定をたてたとき」「計画的にすすめられるようになった」「頭の中で効率が良いやり方がすぐに思い浮かぶ」 【思考を深める際に】 「「なぜ」をすごく考えるようになった。地域で起きてる現状→「なぜ」その問いを自分の中で大切にするようになったのは地域人教育の影響で論理的思考の原点だと思う」「地域人教育としてやっていた課題研究などの時間でいろいろ案を出したりどのようにすればもっと上手くいくのかなど考えるようになった」
1②自分の考えを文章を用いて正確に表現できるようになった	そう思う　9 名 思わない　26 名 無回答　2 名
そう思う, の方はどんなときにそう感じましたか？	【地域人教育の授業内で】 「商店街の方に仕入交渉をするとき」「やりたいことがあれば企画書を書く。それは生徒だけでなく大人のひとにも見せるものだから,その中で自然とついた力だと思う」「課題研究発表会の時に自分で文章を考え発表した時に思った」 【その他の場面で】 「国語の授業」「文章を書くのがふえたから」「作文」
1③自分の考えを他人にわかりやすく話せるようになった	そう思う　12 名 思わない　23 名 無回答　2 名
そう思う, の方はどんなときにそう感じましたか？	【発表の際に】 「自分たちのやったことを 1,2 年生や地域の人が大学の方などに発表する機会があったのでその時に」「課題研究で発表したとき」 【何かを説明する際に】 「地域の人にアンケートを取る時。私たちは今,何をやっていてなぜアンケートをとりたいかの説明」「説明したときにすぐに分かってくれる」 【校外の人との会話で】 「学校にいるだけでは会えない人と会って話をすると,コミュニケーションの練習になる。8 割伝えられる時もあれば 2 割も伝えられない時もあって常に話すことは練習して

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

	る」「地域の人と関わっていろんな世代,種類の人と話したので,色んな場面で,質問されたとき分かりやすく説明できるようになった」 【話し合いで】 「グループで話し合いをしてて自分の意見をいうとき」「イベント企画のときに,お互いに意見を出し合ったとき」
1④地域人教育はほかの教科の成績向上につながったと思いますか？（国語・数学・英語・社会・理科・商業科の専門科目）	つながった　3名 変化なし　33名 成績が下がった　1名
つながったと回答の方は，どの教科で何をする際に地域人教育で学んだことが役に立ったと感じましたか？	【国語】 「少し国語力があがった」 【情報】 「PCを使う時」
1⑤以上でお聞きした能力以外に，向上したと思う力・能力はありますか？ あるとしたらどのような力ですか？	【コミュニケーション能力】（13名） 「周りの意見と自分の意見を組み合わせる力」「人に自分の思っていることを伝える能力」「色んな世代の人と話せるようになった」 【行動力】（3名） 【その他】 「マナー」「リーダーシップ」「協調性」「販売力」
1⑥地域人教育を通して身についた能力を，先生は正しく評価してくれたと思いますか？	思う　12名 思わない　18名 無回答　7名
そう考える理由は何ですか？	＜「思う」の理由＞ 【成績評価】 「成績表を見て」「成績があがったから」 【生徒の意思・行動・自主性の尊重】 「自分たちで考えてやっていくことはむずかしいことだけど,それに協力してくれたから」「先生たちは自分たちにやらせてくれたから」 【先生からのフィードバック】 「ここが良かったと伝えてくれる」「次の課題を提示してく

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

	れるから」「とてもほめてくれたから」 ＜「思わない」の理由＞ 【自己評価と先生の評価のずれ】 「賛成でない先生も多い。協力的であったり,なかったり。「無駄だ」と思われるのが残念」「夜おそくまでまとめをパソコンでしていて,真面目に取り組んでも思ったより成績が上でなかったから」 【そもそもどう評価されているのか分からない】 「どう評価されているか知らない」「いまいち良く分からなかった」

図表 2-3-1　アンケートの項目 1①～⑥の回答

アンケート結果を見る限り，このクラス全体としては,「地域人教育による能力の伸び」に対して肯定的な自己評価をしている生徒は少数派であり，過半数の生徒が否定的な自己評価をしているか，自分の能力の伸びに気づいていないということが分かる。一方，個別の項目の回答について見ていくと，地域人教育を通して自分にどのような力が身に付いたか，明確に把握できている生徒も確実に存在しているといえる。

以下では，アンケートの回答および生徒へのインタビュー結果を踏まえて，各項目について分析する。

論理的思考力について問うた質問 1①については，能力の伸びを実感した場面に二つの傾向が見られた。一つは，企画を運営したり，効率的な計画を立てたりするといった，地域人教育のカリキュラムと密接に結び付く場面で能力の伸びを感じたというものであり，もう一つは，何らかの問題と向き合う際に，問いを掘り下げ，深く思考することができるようになったというものである。

質問 1②で確認した文章表現力は，質問 1①，②，③の中で最も「そう思う」の回答が少なく，生徒にとって特に伸びが実感しにくかった能力である。伸びが感じられた場面は，店との交渉，企画書作成，課題研究発表会といった,「地域人教育の授業内」と，その他の場面，特に国語の授業などで文章を書く場面に大別された。

発表で文章作ってるときに，だんだんうまくまとめられるようになったかなって。(3 年　A 先生のクラス)

私も発表のときに，作るときに,「相手に分かりやすくするには」っていうのを考えながらできた。(3 年　A 先生のクラス)

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

はい，たぶんそうですね。やっぱり昔は，逆に僕，もともと文章書くのあんまり得意じゃなくて，人前で発表するのとかも得意じゃなかったんすけど，その，文章作るってところは，今結構得意っていうか，結構，作れるなっていうところは，自分でも自覚してきて，で，それを今度伝えるところ……，伝えるところを今度，今やっていこうかなと思ってるところであります。なので，そうですね，書くところは今，できてきました。はい。（2 年　sturdy egg）

質問 1③で確認した自己表現力については，「そう思う」の回答数が質問 1①，②，③の中で最多だった。生徒が能力の伸びを感じた場面も多様であり，「発表するとき」「何かを説明するとき」「校外の人と会話するとき」「話し合いの中で」といった 4 つに類型化される。これらの場面に共通するのは，「相手と確実に情報を共有するため，伝え方を工夫しながら話す必要がある」ということであり，後述する「コミュニケーション能力」と通ずるところがある。

地域人教育が他教科へ影響を及ぼすかについて検証した質問 1④では，アンケートの回答者 37 名中 33 名が「変化なし」と回答しており，地域人教育が生徒の能力に及ぼす効果を，ほとんどの生徒が「あくまで他教科とは無関係のもの」と捉えていることが分かる。他教科の成績向上に「つながった」と回答した 3 名のうち，2 名は国語において成績が向上したと述べている。このうち 1 名は，質問 1②において，文章表現力の伸びを感じた場面として「国語の授業」を挙げている。国語以外には「PC を使う時」という回答があったため，パソコンを活用する情報の授業等でも地域人教育の影響があったと考えられる。また，意識面の変化にも関係するが，地元について知ることで，商業科の学習意欲が向上したというインタビュー結果もある。

やっぱ，そういう外，地域とかっていうと，イベントとか出て，地元のこととか，意識高くなって，それによって，あの……商業科目の意識が高まるんで，そっちのほうが，よく頑張れました。（2 年　sturdy egg）

「論理的思考力」「文章表現力」「自己表現力」以外に身に付いた能力を問うた質問 1⑤では，「周りの意見と自分の意見を組み合わせる力」「人に自分の思っていることを伝える能力」「色んな世代の人と話せるようになった」等といった，「多様な他者を対象に，相手の考えを聞き入れつつ，自分の意見を適切に伝える能力」を挙げた生徒が最も多かった。本稿ではこの能力を「コミュニケーション能力」とする。なお，より直接的に「コミュニケーション」「コミュニケーション力」「コミュニケーション能力」といった回答をした生徒は，アンケートでは 13 名中 8 名おり，ここから，地域人教育において「コミュニケーション能力の強化」という理念が明確に意識されていた可能性が示唆される。「コミュニケーション能力」以外では，「行動力」を挙げた生徒が 3 名いた。その他，グループにおいてリーダーを任された生徒の中には，地域人教育の活動の中で上手くリーダーシップを発揮した者もいた。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

はい，そうですね，やっぱコミュニケーション能力はそうなんすけど，あとは，イベントとかやるときに，企画・運営者側とかでずっと携わってるんですけど，そういうときに，こう，あなたは何やって，あなたは，このグループは何やってと，まとめる力が……はい。何やって，何やって，何やって，と，そういう仕切る力みたいなのは，結構ついてるなあって，自分では思います。（2 年　sturdy egg）

先生からの評価が適切かどうかについて尋ねた質問 1⑥では，成績評価を通して直接的に，あるいは先生の生徒に対する声掛けや態度を通して間接的に，「適切な評価を受けている」と感じている生徒が 12 名いた。先生の声掛け・態度の例としては，生徒の取り組みを認め，自主性を尊重するような言動や，活動の成果に対する，良かった点・悪かった点についてのフィードバックといったものが挙げられた。

自分で企画したイベントで演奏したんですけど，えっと……，「1 回目より 2 回目の方がよくなったね」とか，そういうことを言ってもらいました。（3 年　A 先生のクラス）

一方，自分の取り組みを過小評価あるいは過大評価されたと感じている生徒もいた。また，地域人教育における自身の取り組みが，先生からどう評価されているか分からない生徒も見受けられる。

私は時々プレゼンテーションとかにも出てるんですが，それが終わった後，良かったねとは言ってくれるんですけど，もっとこうしようみたいな改善点がないのが……。自分でダメだったのが分かっているから……。（1 年　sturdy egg）

今回は回答に「分からない」という選択肢を用意していなかったため，「自己評価と先生からの評価が合わない」と考えている生徒と，そもそもどう評価されているのか分からない生徒とを，完全に区別することはできなかった。

続いて，先生に対する調査の内容を整理する。

先生に対する調査において，地域人教育において特に向上した能力として B 先生が挙げたのが，「言語活動に関わる能力」である。この「言語活動」とは「理解，伝達，表現，交流等」を指し，「言語活動に関わる能力」には，プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力（ただし B 先生は「コミュニケーションは数をこなせばできるようになるものだから，能力だとは思ってないんですけど」とも述べている）が含まれる。既に示した通り，高校生への調査では，国語学習への影響や，発表の場における自己表現力の伸び，コミュニケーション能力の向上について述べた回答が複数見られた。よって，「言語活動に関する能力」の向上に関しては，生徒・先生の双方の評価がある程度一致しているといえる。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

高校生が大人と話すとか知らない人と話すっていうのは，やっぱり，うまく言葉が出てこない。ただ，その，以前よりかは出てくる。で，あとはその，場を，設定をするんですよね。話す場。で，あの，こないだ来てもらった課題研究発表会。ああいう場，ああいう発表会みたいなのを設定すると，あの，生徒自身が伸びようとするもんで，そういった機会を，まあ，いくつもいくつも発表会みたいなところだとか，プレゼンする機会だとかをつくることによって，彼ら自身が，言語能力が磨かれていくって考えています。（B 先生）

さらに，地域人教育によって発達した，言語活動に関わる能力は，高校での学びに留まらず，進学や就職の機会においても発揮されているという。

2 人いるんですけど，1 人はその P（仮称）って子が，あの，すごい面接んときに，役に立ったっていう。これは就職の子です。もう 1 人は，あの，大学，四大に行った子ですけど，Q 君（仮称），Q は，さっきの，リアカーのなんですけど……，僕が担当してるんですけども，リアカーのことを大学の面接の時に言ったら，すごい食いついて，面接時間ほとんどを地域人教育のことを聞かれた。だから，プレゼンの練習をしてたから，あの，しゃべるネタには困らなくて，それ話してたら，何か受かりましたって……，っていうことは言ってましたね。（C 先生）

ただし，注意しておかねばならないのは，当初，「言語活動に関わる能力の成長」はあくまで地域人教育の副産物にすぎなかったということである。たとえ進学や就職の場において役立つとしても，「言語活動に関わる能力の成長」は地域人教育のもともとの目的とは異なる。なお，2015 年度の地域人教育のカリキュラムにおいては「地域人教育を入試や就職に活かす」という狙いも込められており，A 先生が地域人教育を開始した当時と比べると，地域人教育の方向性も若干変わってきたようである。

僕ら，でも，あの，これも伸ばそうとしてる力ではないんですよね。あの，言語活動も副産物っていうか。あの，僕らかっこよく「果実」なんて言うんですけど。ほんとにあの，現場は地域に生徒を送り出すことで結構いっぱいいっぱいで……，気が付いたら「ああ，生徒，そんなに喋れるんだ」って。あの，課題研究発表会も「あんな喋れるんだ」って。今までが今までだったので，そういう意味だと「変化があったな」っていう。（中略）コミュニケーションは数だっていうので，「コミュニケーション能力」ってのは，まあ，就職する上では求められるんですよね。だからあの，それは狙ってたんですけども，そういうところまでいくとは思ってなかった。（B 先生）

地域人教育と絡めた他教科の成績向上については，次年度に向けた課題とされており，現段階ではまだ先生が目指すレベルには到達していないようである。B 先生は「あるとすると商業科と

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

社会科の成績が向上すると考える」と述べている。また，B 先生は「地域人教育がどの教科の成績向上につながるかは，関わる人，課題によって変わる」という考えも持っている。

「関わる人，課題によって，成績が向上する教科が変わる」という地域人教育の特性に加え，生徒への調査では商業科や社会科の成績について言及した回答が少なかったことも考慮すると，先生の期待通りに成績が向上するかどうかは，今後のカリキュラム編成の方向性にかかっているといえる。

今回，先生への調査の中で，地域人教育における能力評価の指標として，「社会人基礎力の自己診断シート」というものが用いられていることが分かった。「社会人基礎力の自己診断シート」の項目は，NPO 法人 OCP 総合研究所が経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」委員会中間報告から抜粋したものを使用しており，以下の計 12 項目について，5 段階評価を行うようになっている。

主体性：物事に進んで取り組む力
働きかけ力：他人に働きかけ巻き込む力
実行力：目的を設定し確実に行動する力
課題研究力：現状を分析し目的や課題を明らかにする力
計画力：課題の解決に向けたプロセスを明らかに準備する力
創造力：新しい価値を生み出す力
発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力
傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力
柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力
情況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
規律性：社会のルールや人との約束を守る力
ストレスコントロール：ストレスの発生源に対応する力

評価項目の①～③は「前に踏み出す力（アクション）」，④～⑥は「考え抜く力（シンキング）」，⑦～⑫は「チームで働く力（チームワーク）」というくくりになっている。

佐々木が高校生に対して行った調査と比較すると，「論理的思考力」は④～⑥に，「文章表現力」「自己表現力」は⑦に，多くの高校生が「身に付いた力」の例として挙げていた「コミュニケーション能力」は⑦～⑨とほぼ合致する。一方で，⑦では表現の方法については指定がなく，「文章表現力」と「自己表現力」を区別していないといった違いもある。

「社会人基礎力の自己診断シート」の項目から考えるに，地域人教育では，佐々木が仮説設定において重視した「論理的思考力・文章表現力・自己表現力」に加え，行動力やチームワークといった，より実践的な能力の成長も主眼に据えられているといえる。

3.5.2 意識の変化について

質問番号	回答（回答者数 32 名中）
2①地域への理解は深まっ	深まった 28 名

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

たか	深まらなかった 4 名
②愛着は深まったか	深まった 29 名 深まらなかった 3 名
②理由	＜深まった理由＞ 【地域の魅力を知った】（15 名） 「景色など知らなったことを多く知れた」「こんないいところがあるのだと分かった」「魅力がどんどん出てきて」「地元の新しい発見があった」「普段なら見られないようなものを見たり，調べられたりしたから」「地元のことを知って何もない場所ではなくあたり前と感じていただけだと気づいたから」「今までイベントに参加してどれも知らなったイベントだったので理解が深まった。地域の魅力を考えたときに愛着が深まった」 【地域の人のあたたかさを知って】（5 名） 「接してみて，いい人ばかりだと思った」「地域の人々の心の優しさを改めて知ったから」「地元の人たちの人柄の良さなど魅力をみつけることができた」「地域の方一人ひとりの顔を知れた」 【その他】 「地域の現状はいまこういう感じだからもっとこうしなくちゃいけないと感じた」 ＜深まらなかった理由＞ 「自分たちの班はあまり飯田のためとかを考えずやってしまったから。しかし飯田はもともと好き」「あまり変わらない」「受動的だったから」
③地域の人とのつながりを感じたか	感じた 28 名 感じなかった 4 名
③理由	＜感じた理由＞ 【地域の人とたくさん関われたから】（6 名） 「リヤカーなどで触れ合える機会があった」「先生以外の大人と関わることが増えた」「イベントに参加してたくさんの方と話せた」 【地域の人が協力してくれたから】（10 名） 「自分たちがした提案を快く引き受けてくれた」「とても親身になってくれた」「自分たちの活動に協力してくれる

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

	人がたくさんいた」「資金や物を提供してくれた」 【自分たちの活動を喜んでもらえたから】（4 名） 「待ってたよと言ってもらえた」「支援してくれる気持ちを感じる。期待してくれている」「私たちの活動を見て，地元の人が嬉しそうだと感じた」 【その他】 「自分たちの取り組みを知ってくれていた」 ＜感じなかった理由＞ 「あいさつしても返事をしてくれない時があった」 「その時にかかわっても今はもう全然会わないから」
④進路や生き方は変わったか	変わった 14 名 変わらなかった 17 名
④どう変わったか・理由	＜変わった＞ 【地域で働きたいと思うようになった】（12 名） 【やりたいことが見えた】 【いろいろな人と関わりたいと思うようになった】 ＜変わった理由＞ 【地元のためになりたいと思った】（4 名） 「大学に行くか市で就職するかのものさしが地域のために自分ができることになっていた。二年の後半くらいから。」「地域のことを知る機会があまりないので実際に見る際には自分たちで様々な地域の現状をしり，自分たちがまだまだやることはあると思った」 【地元が好きになった】（2 名） 「田舎なんて嫌で絶対進学したいと思っていたが，地元が好きになり残りたいと思った」 【地域の人を知って】（2 名） 「地域人教育で地域の人と関わったことで人と関わることの楽しさが知れて，やりたい仕事が決まった」「都会に出ていこうと思っていたけれど，地域の人の優しさを知り，地元に残ることにした」 ＜変わらなかった理由＞ 【もともと残る予定だった】（2 名）
⑤地域のためになりたいと	なった 22 名

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

考えるようになったか	ならなかった 10 名
⑤理由	＜なった理由＞ 【感謝】（4 名） 「地域に支えられていると感じた」「自分たちのために動いてくれた人がたくさんいたからそれを返したい」 「地域の方々が自分の知らないところで頑張っている姿をみたから」 【地域の人が喜んでくれたから】（2 名） 「イベントでたくさんの人に「またやってほしい」「楽しかった」と言ってもらえたから」「たった少しの私の行動が誰かの役にたったから」 【地域のことを知って】（3 名） 「若者が減少してきているから役に立ちたい」「道を歩いていると高齢者が多いと感じ，高齢者の支えになりたいと思った」 【その他】 「飯田はこれから盛んな地域になると思うから」 「イベントなどに参加した時は，仕事ではないのでお金にはならないが準備も実行も楽しかった」 「イベントの手伝いをしていてもっと外の人たちにいいところを知ってもらいたいと感じたから」 ＜ならなかった理由＞ 「もともとそう思っていた」「思いはあるが地域人教育によるものではない」「何ができるかわからない」
⑥地元の課題を自分にも関係するものとしてとらえるようになったか	はじめからそう思っていた 4 名 そう思うようになった 16 名 そうは思わない 5 名
⑥理由	＜はじめからそう思っていた理由＞ 【当事者意識】（3 名） 「自分の人生に直結する」「住んでいる時点で関係がある」 ＜そう思うようになった理由＞ 【当事者意識】（7 名） 「取り組みを通して，自分たちでやることの意味を知った」 「ひとりが変わることによって地域が良くなるから」

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

	「完全に手が届く。目で見えるし，話も聞ける。他人ごとじゃなくなる。」「これからこの地域で働くから」「住むのも住んでいるのも自分だからできるだけ良いところを増やしたいと思えた」 【地域の課題を知って】（4 名） 「あんまりか過疎になると店とかさらにしょぼくなりそうだから」 「お年寄りが多くて街を活気づけたい」 「地域人教育で飯田の高齢化が思ったより深刻なことを知った」 【その他】 「自分が生まれてきた地域を大切にしたいと思った」 ＜そうは思わない理由＞ 「考えたことがなかった」
⑦その他意識面での変化	【挨拶をするようになった・しやすくなった】（3 名） 【地元へのポジティブ感情】（2 名） 「悪いところだけでなくいい面も考えられるようになった」 「飯田のことに少し関心が出てきた」 【他人への意識】（2 名） 「仲間意識みたいなものが強くなった。みんなでやり遂げる達成感」「利他的な思考が生まれた。地域の人に，後輩に，ほかの学校に。自分のできることでためになりたい」
⑧正しく評価されたと思うか	思う 4 名 思わない 20 名
⑧理由	＜思わない理由＞ 「伝わっていない」「先生に聞いたことがない」「先生と関わらないから意識の変化とか気づかれない」「賛成でない先生からプレッシャーを感じた」

図表 2-3-2　アンケートの項目 2①～⑧の回答

アンケートの結果は上記のようである。これに関してインタビューで聞いた詳細な話と合わせて結果を簡潔にまとめる。

アンケートの結果から，全体として「地域への理解」と「愛着」は大方深まっていることがうかがえる。愛着の要因としては人とのかかわりより，地域のことを「知った」という理由が大き

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

い。また仮説の通り地域とのつながりを感じている生徒も多く，その理由としては地域の人と関わって顔を「知った」り，実際に協力してもらったことへの「感謝」，そして自分たちの活動が喜んでもらえたという「承認された体験」が大きい。

理解や愛着が深まった生徒はクラスの 3 分の 2 を占める反面，自分の進路に実際に影響を与えたという認識をしている生徒は半分以下である。これに関してはもともと地元志向が強いという理由が大きい。インタビューの際にも*「飯田が好きだし，否定的な感情はないが，地域人教育を通してってなるとそうでもなくて。もともと地元に戻ろうとしていた」（3 年生徒）*という率直な意見が聞かれた。

しかし, 3 分の 1 の生徒は地元のためになりたいなど, 地元に就職したいと思うようになった，と答えている。また実際の進路は変わらなくても，地域のためになりたいと思うようになった生徒や地域課題を自分事としてとらえるようになった生徒はともに 3 分の 2 に上る。こうした貢献意識の変化についてインタビューでは

「地元を歩いていると高齢者が多く，支えになりたい，と思いました。地域をつくってくれたのも高齢者の人なので恩返しがしたい，と」（3 年生徒）

「街を歩いたときに人のいない建物がたくさんあって，目につくようになった。それを祖母話したら，問題点を話してくれて。」（1 年 sturdy egg）

という風に，アンケート結果と同様「地域を知ること」「感謝の気持ちをもったこと」がその要因としてあげられる。

実際に進路が変化した生徒はインタビュー調査では

「生きてきて身近に感じていた，関わって自分の想いを伝える場があり，それを言っているうちに自分が頑張るしかないな，と」（2 年 sturdy egg）

「（地域人教育では）地元の課題を結構教え込まれるから。地域がよくなればいいというのは結果だけれど，自分のやりたいこと（人とのつながり）があって地域課題も

*解決できる（空き家問題）のならそれを利用してやろうと思った」(2 年 sturdy egg)*のように述べていた。

その他意識の変化については「挨拶」と「利他的な思考」が挙げられる。

先生のインタビューからは，自分のことが中心だった子が役立つ経験・承認される経験・人前で話す経験を通して人に勉強を教えるようになったり，自ら仕事を探すようになったりする生徒がでてきたというエピソードをお聞きした。

評価に関して生徒は「適切に評価されていない」と感じる生徒が 3 分の 2 おり，自分の変化が先生に伝わっていないと感じている。インタビューでこの判断基準を聞いてみたところ生徒は「課題研究の成績」のことを指していると分かった。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

3.6 考察

以上の結果を受けて地域人教育の影響を考察する。

3.6.1 能力面での変化について

まず，能力面の影響について論じる。論理的思考力・文章表現力・自己表現力に関しては，自己評価における個人差は大きいものの，少なくとも一部の生徒は身に付いたと感じている。さらに上記の能力に加え，「コミュニケーション能力」が向上したと考えている生徒が，少なからず存在する。論理的思考力は企画運営・計画立案の際や思考を深める際に，文章表現力は地域人教育内外で文章を書く際に発揮され，自己表現力やコミュニケーション能力は，発表の場や多様なシチュエーションの会話において活かされている。他教科への影響は，現時点では国語や情報，商業科に多少見られる程度であるが，先生側には，今後他教科へも何らかの影響を及ぼしていけるようにしたいという思惑がある。どの教科において影響が出るかは，カリキュラムの中で関わる人・課題をどう設定するかによる。

また，OIDE では地域人教育による能力面の影響を評価するにあたって，佐々木が当初予想していた「論理的思考力・文章表現力・自己表現力」に加え，コミュニケーション能力や行動力，チームワークといった能力についてもチェックしている。先生の生徒に対する評価は，成績そのもの，生徒の自主性の尊重，あるいは活動へのフィードバックを通して，生徒に「先生から適切な評価を受けている」という実感を抱かせるが，そういった実感を持つ生徒は少数であり，多くの生徒にとって，先生の評価は不本意なものであるか，実態不明のいわゆる「ブラックボックス」であるかのどちらかである。したがって，地域人教育において，先生が生徒の能力を効果的に引き出していくためには，先生と生徒のコミュニケーションをより密にし，「地域人教育において身に付けたい能力は何か」を先生と生徒が共有すると共に，各生徒のどういった能力が向上しており，どういった点に改善の余地があるのかを，先生が生徒自身に十分に理解させることが求められる。

3.6.2 意識面での変化について

地域人教育の意識面での生徒への影響は予想以上に大きく，特に意識面ではかなり愛着を深めることができている（結果①）。また，地域課題への当事者意識や地域への貢献意識が高まっている生徒が非常に多い（結果③）。利他的な行動や挨拶等，地元や自分のキャリアの意識以外の変化も認められる（結果⑤）。サンプル数が少ないのでやや正確さにはかけるものの，こうした意識の変化は「地域を知ったこと（魅力・人のやさしさ）」「地域の人への感謝が生まれたこと」「受け入れてもらう経験をしたこと（役に立った・喜んでもらえた・人前で夢を話してそれが認められるなど）」が影響している可能性が示唆された。特に人のやさしさでも魅力でも「知る」という段階の影響が大きいようである。愛着が深まった理由や進路意識の変化の理由として最も多い理由であった。ただ一方でそこから実際に進路や具体的な行動としてあらわれるのは難しいようである（結果②）。もともと地元就職志向であることから，地域の課題をかねてから当事者意識をもってみることができていたり，地元にプラスの感情をもっていたりする生徒も多い。進路選択に影響

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

を与えたと感じている生徒は

Ⅰ課題をもともと身近に感じており，その場を与えられたことで進路が明確になったり

Ⅱ初めから地域課題への意識がなくても，課題を知ったことでそれを自分のやりたいことと重ね合わせたりしている（結果④）。

生徒の進路意識は，地域人教育の結果外へ向かう，ということは見られなかった。また地元への愛着は深まっても，それをどう生かせばいいのかわからないという声もあった。仕事にはしなくても地元にいながら具体的な行動ができる方法を少し示してもいいのではないかと思う。若者の政治参画等，選挙で意思表示をする必要性など主権者教育の分野も少しばかり入れていくとその方法を知ってもらえるのではと考える。

評価に関しては先生に評価されていない，と感じている生徒が多かった。しかしその理由は意識の変化に気づかれていない，などというものだったので，どんな観点でみているか評価のルーブリックを可視化することだけでも多少の改善はありそうである。事前と事後で生徒自身につけてもらうというのもひとつの手段であろう。特にこうしたキャリア教育の評価では行動ベースでの指標が望ましいとされているが，「地域の人に挨拶をするようになった」というのは生徒自身も先生も変化を感じる部分が大きいようである。地域の人に受け入れてもらえているような感覚が強まった，ということは愛着の表れでもあり，生徒が自身でつける評価指標に入れて参考程度にしてもよいのではないだろうか。

地域人教育を通じて，決して「押しつけ」でない地域の人への感謝の気持ちを生徒自身が認識し，愛着をさらに深めていること，魅力を再発見することで戻ってきたいと思うようになった生徒が少なからずいること，より行動的な生徒は進路選択にも影響を及ぼすまでになっていることが明らかになった。特に意識の変化が「知ること」を大きな要因としていることをみると，地域人教育はつながりを「つくる」というよりは「再発見している」のであろう。そしてより行動的な生徒は，自主的な活動（主にイベントなど）を通じて他校の生徒や大学生などあらたにゆるやかなつながりを形成していく。またそこでは生徒のみならず，先生自身もとけこみ，つながりを発見しながら変化しているように見えた。イベントに生徒と同じ目線で溶け込む先生，休日がないといいながらどこか楽しんでいる先生の姿があった。もちろん先生自身にも様々な葛藤もある。ある先生はインタビューで「教師の役割が拡大し，ファシリテート能力が求められる」ことや「地域に広いつながりをもった先生が出てき始めている」こと「そうした先生がいる反面，地域人教育をみんなでやっていく意識をもって自分は教科面でも学校をきっちり支える」という発言なさっていた。またそれに対して葛藤を抱える教師もみられた。OIDE では地域人教育を通して教師の在り方や学校の在り方が大きく変化していることがうかがえた。昨年 12 月に文部科学省が開かれた教育課程やチーム学校を掲げる答申を出したが[52]，まさにこれを先進しているのである。

---

[52] 中央審議会「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）（H27.12.21）」入手先 URL:
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/05/1365791_1.pdf（アクセス日：2016-2-15）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

生徒の意識面の変化をキャリア教育の側面からみてもこの取り組みはより多くの方にひとつのモデルとして知られて然るべきだろう。冒頭で概観したように，運営主体が学校であり，生徒がここまで主体的であること，そして生徒の取り組みを受け入れるだけの素地が地域にあることは地域人教育の大きな魅力である。キャリア教育アワードに応募するなど，ほかの学校でもこの活動が広がっていくように情報発信が強く求められていると考える。地域人教育は〝飯田〞というつながりを高校生が再発見し，そこに自分なりの意味を見出し，さらにはゆるやかにつながっていくという働きをもっている。近年「地域」を教材とする教育が増えているところを鑑みると，これからこのつながり意識のモデルが地域人教育を通して外へ外へと伝わっていくのかもしれない。

謝辞

最後になりましたが，ご多忙の中，日程を調整していただき本調査にご協力いただいた OIDE の先生方，多項目にわたるアンケートにご協力いただいた生徒の皆さま，本当にありがとうございました。学校の調査においても，イベントで顔をあわせた際も，あたたかく迎えて下さりいつの間にか飯田へ行くことが楽しみになっていました。初めは地域人教育についてまとめようと考えていたことが，そうして関わらせていただくにつれ，少しでもなにか先生方にとって，生徒さんにとってプラスになる報告書にしたいという気持ちが大きくなりました。心より感謝申し上げます。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 4 章　進学校における地域意識

武田 周平

4.1 はじめに

飯田市で盛んに行われている町おこしについて，夏に訪れた際に様々な試みを紹介され強く感じた。中でも地域人教育は高校生が行うという点で新鮮であり，興味を惹かれた。

しかし一方で，私は夏の実習で長野県飯田高等学校を訪れた体験が，地域人教育と比較する形でより印象に残った。飯田高校は進学校であるため生徒たちのほとんど全員が大学に進学し一度は地元を離れる。飯田市という，地域に根ざしたあり方を推進している環境下で，生徒たちは郷土についてどう考えているのかについて興味を抱いたため，今回の調査によってその意識の一端を明らかにして行きたい。

4.2 先行研究

江崎ら(1999)は長野県出身者を対象に人口還流現象，いわゆる U ターン現象について実態と要因を調査している。彼らの調査によれば，1957～1959 年生まれの大学・大学院卒の長野県出身男性は，卒業後三大都市圏に残留するのが 36.3%，学卒 U ターン(大学・大学院卒業後即座に U ターンし，就職)が 39.7%，転職(勤)U ターンが 12.3%となっている。県外の大学を卒業後，長野県に U ターンした者の「U ターン率」は，58.8%である。この「U ターン率」は高度経済成長の終了，長野県の経済水準の改善などにより 1960 年代から 1980 年代にかけて上昇している。

またこの研究においては，U ターン現象は「出身市町村 U ターン」が主流であることや，U ターンの要因について分析が加えられている。中でも，転勤(職)U ターンは三大都市圏での就職後かなり早い時期の U ターンが主流であり，その後ライフステージの進行に伴って転勤(職)は困難になるという分析が今回の調査に関連する。

4.3 調査の概要

4.3.1 目的

夏のフィールドワークで多くの取り組みが紹介されたように，飯田市は非常に町おこしが盛んな環境である。しかし，話を聞くことができた人は一部のみであり，飯田市に住む全ての人々が積極的に町おこしに関わっているわけではない。中でも，長野県飯田 OIDE 長姫高等学校において「地域人教育」が行われ町おこしに深く取り組んでいる一方で，本地域において進学校という位置付けの飯田高校の生徒たちは町おこしについてどう考えているのかを調査するのが本調査の目的である。

加えて，本調査の結果から，特に OIDE との対比の文脈において「地域人教育」の波及などが

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

読み取れれば良いと考えている。

4.3.2 調査方法

本調査は二つの手順に分かれている。

まず，飯田高校の生徒に直接インタビューを行った。夏のフィールドワークのような大人数のものではなく少人数を対象にインタビュー調査を行い，郷土意識や進学後の進路についてなどについて聞き取った。

次に，インタビュー調査をもとに質問事項を考案し，アンケート調査を行った。対象は普通科・理数科それぞれ 20 人ずつとした。

4.4 調査結果

4.4.1 インタビュー結果考察

調査は 1 月 20 日に飯田高校にて行った。理数科に所属する二年生の女子生徒 2 人（以下，A, B とする）に話を聞くことができた。

インタビューは以下の項目に沿って行った。

- 飯田市について
- 町おこしについて
- 進学について
- 大学卒業後の進路について

インタビューを通じて，以下の四点について気づきを得ることができた。

一点目は，飯田市の魅力をどう捉えているか，という点についてである。当然ではあるが，三大都市や，長野県内でも長野市や松本市と比べて飯田市は便利であるとは言い難い。その一方で二人は飯田市を魅力的であると述べている。

B：（以前住んでいた松本市と比較した飯田市の魅力について）気候とかはあったかいし，人柄も，どちらかというと飯田の人はフレンドリーで馴染みやすいと思います。
質問者（以下 I と表記する）：なるほど，（中略）飯田の人はフレンドリー，松本の人は冷たい？
B：結構，あの初見の人に対して…
I：壁を作る感じで？
B：はい。

以上のように，生徒は飯田市の魅力は物質的な豊かさではなく，人柄や人と人とのつながりという精神的な温もりであると述べている。また，飯田市のいいところは「安全である」ことだとの意見も得られた。彼女らによると，台風などの自然災害に見舞われることがほとんどなく，安心して生活することができるという。

二点目は，町おこしに対する考え方が対照的であったことである。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

インタビューに協力してくれた二人は町おこしに特に関わっていないということであった。また, 飯田市で盛んに行われている町おこしについてどう思うか聞いた所, 二様の返答が得られた。

I : 町おこしについてどう思う？飯田市にもっと発展してほしいとか，別に今の「フレンドリーさ」が維持されていけばいいんじゃないかとか，自分はもう関係ないからどっちでもいいです，みたいな…
A : 私の住んでる所は結構獅子舞とか，区民の運動会とかあったりしていいと思ってるんですけど，（中略）（最近は）めんどくさいからいいやってなってきてる感じがして，そういうのは続けていくべきなんじゃないかなって思っています。
I : もっと皆で地区を盛り上げていった方がいいんじゃないかな，と思っている？
A : はい。
I :（A さんは）面倒くさいとは思わない？
A : 直接的に関わったことはないのでなんとも言えないですけど，でもやるからには，しっかりやった方がいいと思うので…

I : B さんは？
B : 私は逆で, 町おこしとか地域の関わりとかが, 松本で育ったせいもあると思うんですけど, 結構めんどくさいし，近所付き合いってやると逆に近所のガードになってしまって，周りの人と打ち解けられない。あと町おこしにも言えるんですけど，一つのことに対して凄い頑張ってるのはわかるんですけどあんまり効果が見られないようなこととかが多くて, ちょっとどうなんだろうな，とか思います。
I : なんで効果が見られないのにあんなことをやっているんだろう，っていう感じ？
B : はい，そうです。よく中学生とか集めて，「飯田の町おこしについて語ろう」とかやってるんですけれど，「それで，何なの？」って感じで終わってしまっているので，やるからにはもうちょっと計画的に…なんていうのかな, 小さなことをまばらで地域でやってもあまり意味がないと思うので。

特に B さんの意見が興味深い。夏のフィールドワークでは主に「町おこしに取り組む人々」に話を伺ったため，町おこしに対して関わっていない人の意見として，新鮮であった。
一方で，B さんは町おこしについて認めている部分もある。

I : 人形劇フェスタはどう思っている？あれも効果が見られないというか，あんまり，と思っている？
B : そう思っていたんですけど，松本の友達が来てくれて，見に行ったら「凄い面白かった」って言ってくれて「また来る」って言ってくれたんですよ。ちょっとそこは驚きました。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

B さんは飯田市に長く住んでおり，人形劇フェスタは当たり前の光景となってしまっている。そのため，フェスタが効果を上げられているとは感じられていなかったようだが，外から来た人が「面白い」と言ってくれたことにより，異なる視点からの意見に触れ，驚きを覚えたという。

インタビューより，町おこしに対する意見や感じ方は飯田に住む人の中でも様々であるだけでなく，内部の人と外部の人とで受け取り方が異なることが読み取れる。

三点目は，大都市への志向を二人とも持っていたことである。

二人とも東京への進学を希望しており，その理由について以下のような返答を得られた。

B：（なぜ東京の大学に進学したいのかと聞かれて）やっぱ東京に出るのは，本当に小学生くらいからの夢で，一回は出てみたいと思って…

I：じゃあ A さんは？

A：私は高校入った当初は理系のクラスだったので，このまま理系に行くのかな，理系だったら薬学部かな，みたいな感じで思ってたんですけど，どうもやる気がわかないのと，本当にやりたいっていうわけじゃなかったのでビジョンが明確じゃなくて…。それで，やっぱり薬学部とかだと偏差値が高くなってくるので，行けるのも国立でも名の知れてないところというか…。やっぱり文系だったらまだ有名なところを目指せるっていう感じがあって，それは私の価値観なんですけど，あんまり知らないところに行って薬剤師の免許を取って，薬剤師になるよりも私は有名なところに行きたい，って思って…

また，A さんは叔父が大学を卒業しており，その影響も志望校に反映されているという。

東京への志向を聞いてみると，B さんは強く抱いていたということが聞き取れた。

I：東京での生活に憧れがある？

B：すごいありました。

I：じゃあ例えば，東京のどういうところに憧れを感じる？

B：本当に小学生の頃とかは，芸能人に本当に会える，とか思ってたんですけど，現実味が出てきて，やっぱ色々中心で集まってるからイベントとか行きやすいし，何しろ便利そうだし，一回東京行った時にすごい楽しかったので，もう絶対行くみたいな感じになってました。

I：A さんは東京への憧れみたいなものは別にない？

A：一時期，中学生…小学生の終わりくらいの時はあって，私は高校生になったら外に出て行くんだって言ってたんですけど，中学生になって，まあ学力の面もありますし，あとはやっぱり近所の付き合いとかしていく上で，なんか（飯田が）住みやすいなあとか思ったところがあって，飯田はいいなあ，と思いました。でもやっぱり大学に進むにはここもないですし，有名どころって考えるとやっぱり東京に…

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

A さんは過去に東京への憧れを抱いていた時期もあったようだが，現在は飯田の良さを再認識したことで外部への志向は強くない。しかし本人の「有名な大学に行きたい」という価値観に沿うために，という意味での，B さんとは違った形の大都市志向を抱いているということができそうである。

四点目は，飯田に戻ってくる気があるかどうか，という点についてである。大学を卒業した後に地元に戻ってくる気があるかどうかから，その生徒が今後地元に対してどう関わっていきたいか，ひいては現在どのような感情を抱いているのかを読み取ることが可能であると考えられる。

I : A さんは，大学を卒業したら，就職は東京？
A : はい，あの，地元に戻ってきたいっていう気持ちもあるんですけど，やっぱり就職となると東京に…

I : B さんはどうかな？
B : 私は, すぐには無理だと思うんですけど, 最終的には飯田に帰ってきたいと思っています。
I : 何才ぐらいのイメージ？
B : 30…才過ぎたら。
I : ある程度のキャリアを積んだら，という感じかな。
B : はい。

医学部志望の B さんは父親が地域医療に取り組んでいるため，飯田に戻ってきて後を継ぎたいという思いがあるそうだ。インタビュー中に何度も「最終的には飯田に戻ってきたい」ということを述べており，卒業後の地元志向はかなり強いといえるだろう。

また，A さんも働いている間は飯田に戻ってくる気は無いが，退職後は飯田に戻ってきて老後を過ごしたいという。その理由として彼女は「飯田の住みやすさ」をあげた。

インタビューより，地域意識は様々であり，町おこしに対する意見も異なる一方で，飯田の魅力については共通の認識を抱いており，その「住みやすさ」から想定する年齢は違えども将来的にも飯田で暮らしたいと考えていることが読み取れる。

4.4.2 アンケート概要

インタビューを基にアンケートを作成し，飯田高校の二年生，普通科 20 人，理数科 20 人ずつの合計 40 人に実施した。また，全 40 人中男子 21 人，女子 19 人とほぼ男女同数であった。

質問内容は，以下の通りである。

Q1　性別を教えてください。
　1.男　2.女
Q2　飯田の魅力的なところを教えてください。（自由記述）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

Q3　何か町おこし（りんご並木ネットワーク，子供博等）に関わっていますか？

1.　はい　2.いいえ

Q4　町おこしについてどう思っていますか？

1.　現状維持がいい
2.　より発展させたい
3.　自分には関係ない

Q5　進学志望地域を教えてください。

1.　東京　2.近畿（大阪，京都）　3.県内　4.その他

Q6　なぜその地域に進学したいと考えたのですか？当てはまるもの全てに丸をつけてください。

1.　学びたい内容に合致していたため
2.　学歴を得るため
3.　その地域に憧れがあったため
4.　なんとなく
5.　その他

Q7　大学卒業後，飯田に戻ってくるつもりはありますか？

1.　はい　2.いいえ

Q8　Q7 で「はい」と答えた方に質問です。飯田に戻ってくるのは何歳ごろを想定していますか？

1.　大学卒業後すぐ
2.　25 歳～35 歳
3.　36 歳～45 歳
4.　46 歳～55 歳
5.　56 歳～65 歳
6.　退職後

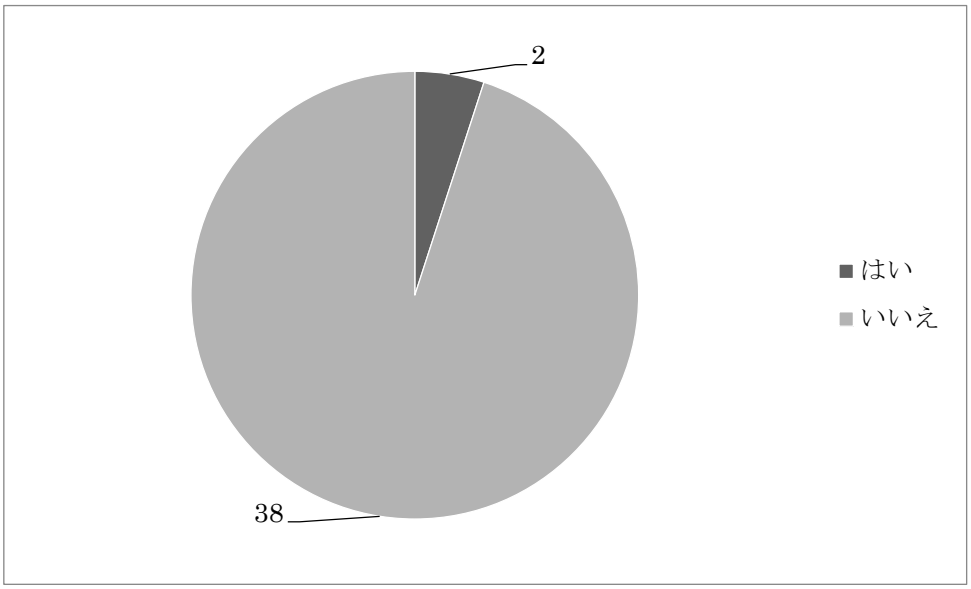
Q9　Q 7 で「はい」と答えた方に質問です。飯田に戻ってくる理由はなんですか？当てはまるもの全てに丸をつけてください。

1.　家業を継ぐため
2.　飯田が好きだから
3.　両親・親族の希望
4.　その他

4.4.3 アンケート結果

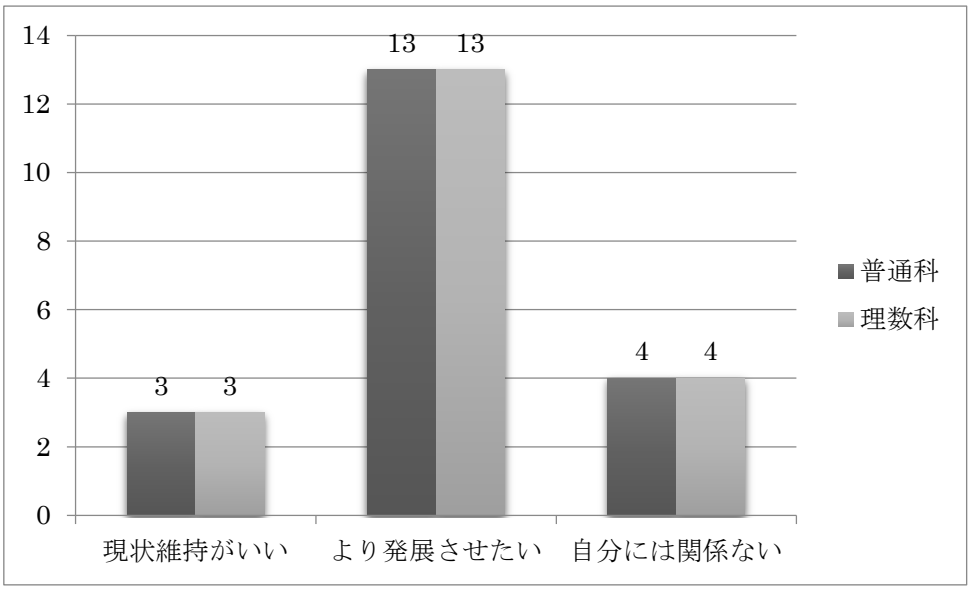
それぞれの回答を普通科，理数科ごとに集計すると以下のようになった。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

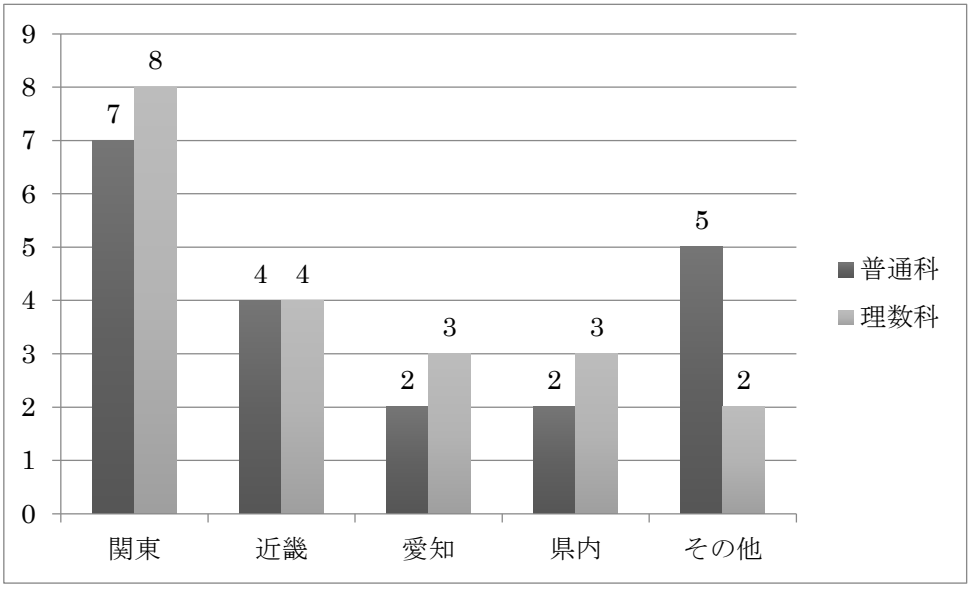


図表 2-4-1 町おこしに関わっているか

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

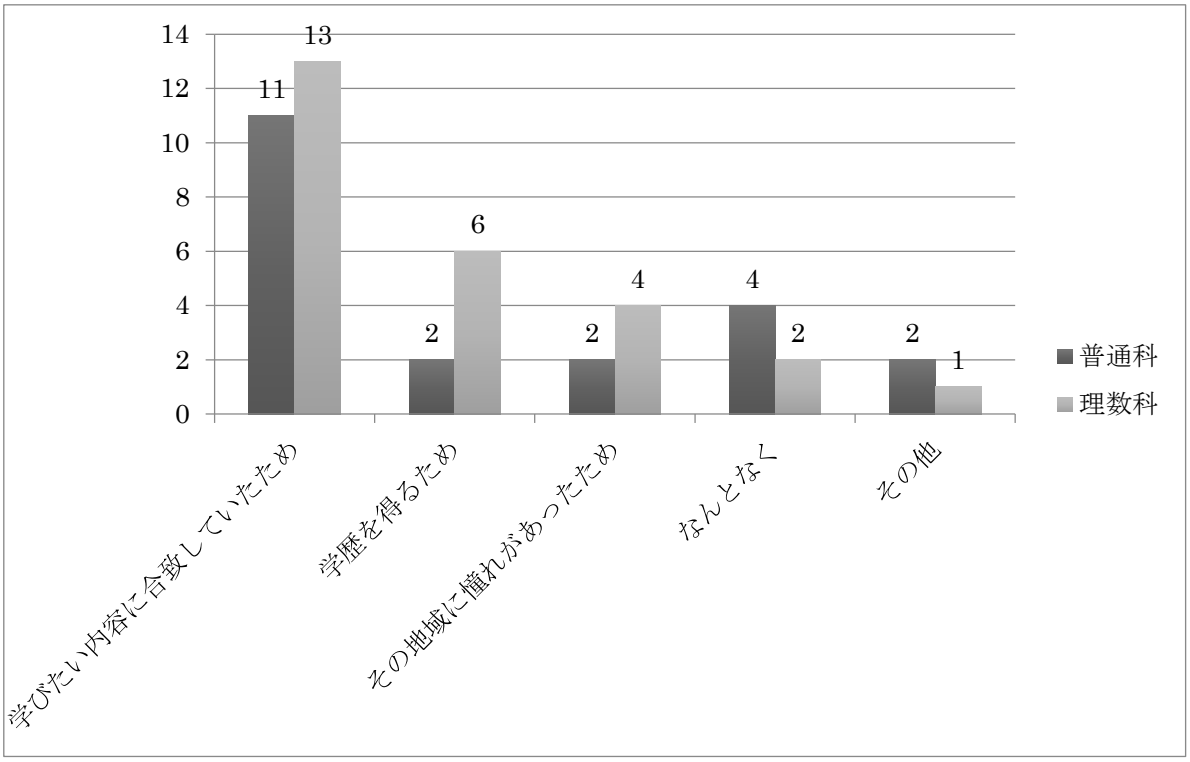


図表 2-4-2 町おこしについての意見

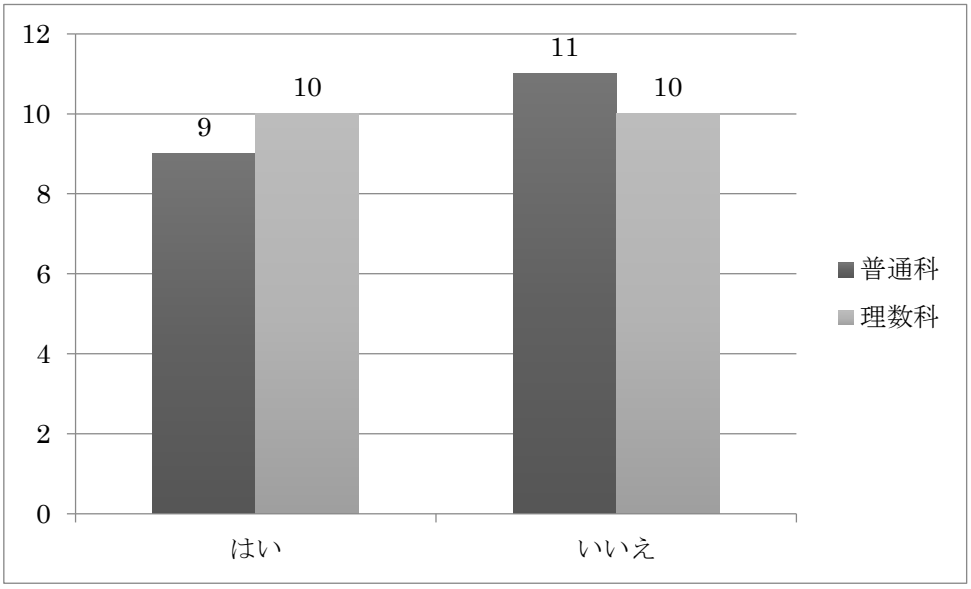


図表 2-4-3 進学志望地域

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

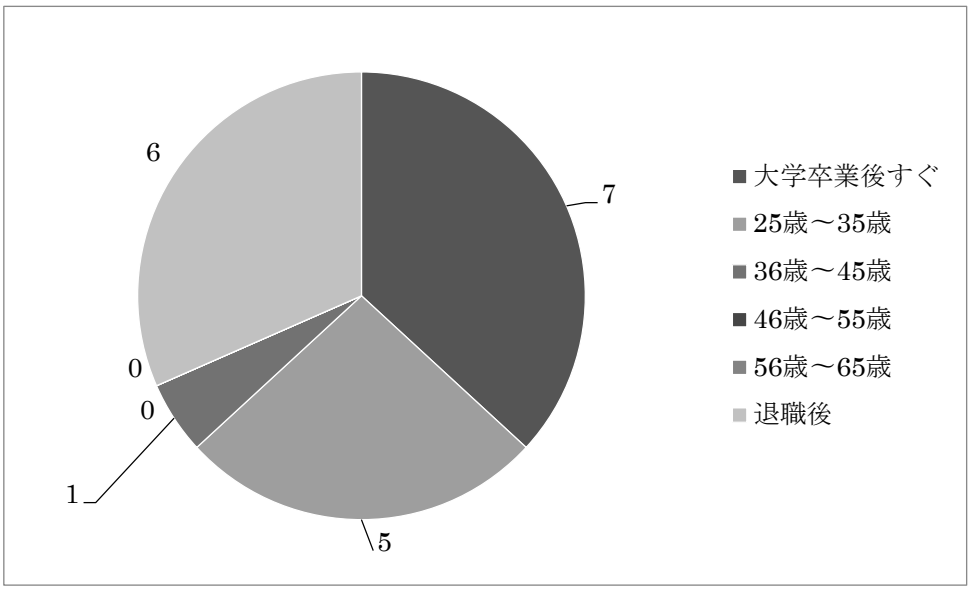


図表 2-4-4 進学希望理由(複数回答)

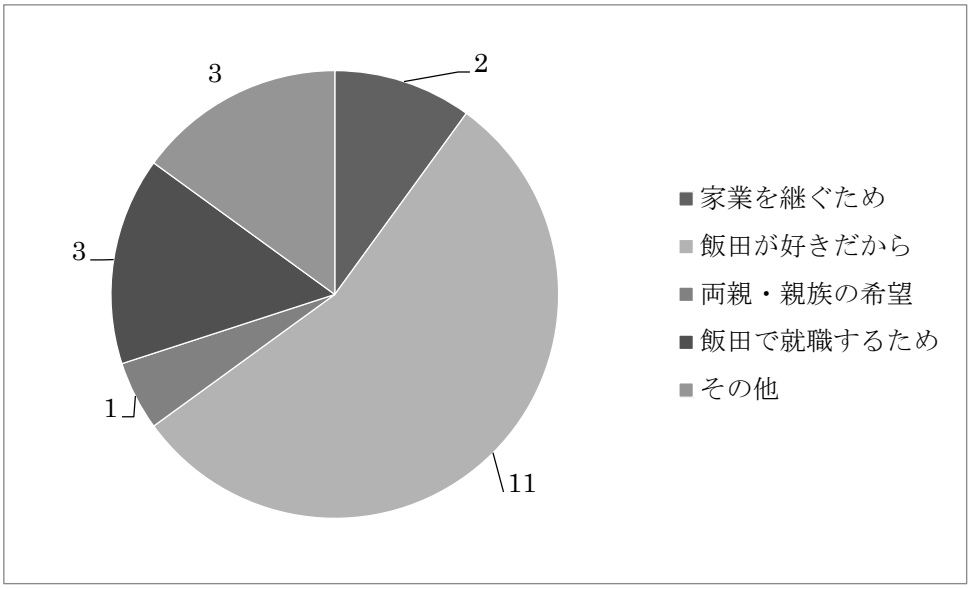


図表 2-4-5 飯田に戻ってくるか

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室



図表 2-4-6 何歳ごろに戻ってきたいか



図表 2-4-7 飯田に戻ってくる理由（複数回答）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

4.4.4 アンケート結果分析

進学校であり地域人教育を行っていない飯田高校では町おこしに関わっている生徒は少なかったが，半数以上が町おこしにより飯田がより発展することを希望している。このことより，飯田高校には積極的に町おこしに関わることはしないものの，潜在的に町おこしに対して賛同している層が一定数存在すると考えられる。

進学希望地域は，関東（東京圏）が 15 人と最も多く，次いで近畿，愛知という順番であった。進学理由について質問した Q6 において「その地域に憧れがあったため」と回答した 6 人中 5 人が関東への進学を希望しており，東京圏への憧れを持つ人は多い。また，愛知への進学を希望している人の中で，Q6 で「近いし，少し都会」と回答している者がいたように，愛知は飯田からの近さと便利さが同居している地域であることが魅力であるようだ。愛知への進学を希望している生徒 5 人中 4 人が「大学卒業後すぐ」「25 歳～35 歳」の段階で飯田に戻ってきたいと希望していることから，比較的飯田に愛着のある生徒が愛知への進学を希望する傾向があるのではないか。

飯田に戻ってくるつもりがあるか，という質問に対しては回答がほぼ半数に分かれた。飯田に戻ってきたいと回答した人が戻ってくることを想定する時期は，「大学卒業後すぐ」と「25 歳～35 歳」，「退職後」が約 94%を占めており，江崎ら（1999）の，多くの人はライフステージが進行すればするほど U ターンは困難になるという説と一致する結果となった。「大学卒業後すぐ」と「25 歳～35 歳」と回答した人は飯田で働くことを想定していると考えられ，Q9 での戻ってくる理由についての質問に「地元で職に就きたい」「飯田で働きたいから」などと回答している人が存在した。一方で，「退職後」と答えた人の多くは飯田に戻ってくる理由を「飯田が好きだから」と選択している人がほとんどである。また，「老後は静かなところで暮らしたいから」という回答もあり，「働くなら都会だが，暮らすなら飯田」という考えが共通していることを読み取ることができる。

Q2 で聞いた飯田の魅力については「自然が豊か」「水・食べ物が美味しい」「人が優しい」という意見が多かった。中でも自然に関するコメントが多く，飯田の大きな特徴の一つになっていることがわかる。また，飯田市に多い和菓子や焼肉について触れたものもあり，飯田の特色を捉えられていると感じた。

4.5 まとめ

進学を考えている高校生はほぼ間違いなく，近いうちに地元を離れることが確実であり，そのような立場にある彼らが飯田市そのものや町おこしについてどう考えているのか，大学卒業後の進路についての質問を交えて調査を行った。

本調査より示唆されることは，進学校に在籍する生徒であっても全員の地元意識が弱いわけではなく，あくまで個人差と言えるレベルであったことである。飯田に対する意識は普通科・理数科で差がなく，半数以上の生徒が飯田の発展を望んでいる。現在地域人教育を取り入れていないながらこのような結果となったため，もしこの先飯田高校でも地域に関する教育を行うようにな

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

った際にはより多くの生徒が飯田に関する興味・関心を深めるのではないだろうか。

また，約半数の生徒が飯田に戻ってきたいと回答しており，その中でも「飯田が好きだから」と回答している人が多い。大学進学で一度地元を出た後に戻ってくるためのモチベーションとしては，「地元愛」「郷土愛」が最も大きいことがうかがえる。さらに，インタビューでは「戻ってきたいけれど飯田につきたい職がない」という意見も聞かれた。町おこしにより飯田が発展することによって多様な職種が存在するようになれば，そのようなタイプの生徒に対する大学卒業後の U ターンが積極的になり，結果としてさらに飯田が発展するという正のスパイラルを描くことが可能ではないだろうか。

また，飯田市には 2027 年にリニア中央新幹線が開通する予定であり，大都市へのアクセス性が向上することによって U ターンの障害が今後減少していくことが予想される。

今後，同様の意識調査を飯田市内の他の高校や他市の高校にて実施し，結果を比較することによってより鮮明な飯田高校生徒の地域意識を描き出すことができるであろう。

最後に，お忙しい中インタビュー・アンケート調査に快くご協力いただいた長野県飯田高校の塩野入先生，テスト最終日にもかかわらずインタビュー調査にご協力いただいた 2 年生二人，アンケート調査に協力していただいた 2 年生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

引用文献・資料，Web ページ

江崎雄治，荒井良雄，川口太郎（1999）「人口還流現象の実態とその要因－長野県出身男性を例に－」『地理学評論』72 (10)，p. 645-667.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 5 章　U ターン就職された市役所職員へのインタビューと，ムトス飯田事業について

石原 江理

5.1　はじめに

飯田市のまちづくりを支える仕組みということで，私は 2 つの事に関心を持ち，調査をさせていただいた。

1 つ目は飯田市に住み，働くということである。市内には 4 年制大学がないため大学進学を志すと一度地元を離れざるを得ない。また，卒業後大企業に就職したいとなると都会に比べて地元ではどうしても就職先が限られてしまうだろう。だが，市民主体のまちづくりを継続していくには，若い世代の存在が欠かせない。前章までの地域人教育とも関連して，飯田市に戻りたいと思うことが出来るならその要因は何なのか知りたいと思ったため，大学進学のために一度飯田市を離れたけれども U ターン就職をされた方のお話を伺った。

2 つ目は市民主体のまちづくりを広げ，持続させていくための行政の役割についてである。何か始めたいという心意気があっても協力者がいなかったり資金がなかったりするとせっかくの意欲が無駄になってしまう。また，活動も継続していくとなると様々な困難が生じると思われる。私は初めて飯田市を訪れた際に，市民が主体となった様々な活動が行われていることを知り，こうした活動がなぜ何年も持続できるのだろうと驚いた。そして背景には，行政のサポートや，市民のつながりが欠かせないだろうと考え，市民団体の活動を支援している飯田市役所のムトスまちづくり推進課の職員の方にお話を伺うことにした。

5.2　U ターン就職された職員へのインタビュー

飯田市では地域人教育が行われていると聞いていたので，飯田市訪問で飯田高校の生徒たちと話をした際，多くの生徒が「都会に行きたい」と話しているのが印象的だった。しかしだからといって彼らに地元愛が欠けていると言い切ることはできないだろう。なぜなら，高校生のうちは都会へのあこがれもあって当然だろうし，実際に都会に行ってみて故郷の良さに気づくこともあるだろうからだ。また，飯田市内では通学可能な範囲に 4 年制大学がないことから，進学校に通う高校生たちは，高校卒業後故郷を離れることを当然の事として受け入れているのかもしれない。

そこで，飯田市出身で大学進学のために一度飯田市を離れたのち飯田市役所に就職された方へのインタビューをさせていただいた。

今回インタビューに応じてくださったのは，就職して 1 年目の職員 T さんだ。彼女は飯田市で育ち，飯田高校出身で兵庫県にある大学を卒業したのち，飯田市役所に就職された。T さんは子

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

供のころから近所の祭りに参加したりなど地域とのつながりはあったが，将来は飯田を出たいと考えていたそうだ。

特に高校生になると勉強と部活動が中心の生活になり，中学生のころまでと違って地域の行事に参加することも少なくなっていったという。進路を考える際も，都会へのあこがれは大きく，実家から通える範囲に大学がないため，都会の大学に目が向いていたそうだ。また，高校での進路指導も「大学合格がゴール」であり，将来どこに住んで働くかなどについての話はほとんどなく，「地域について学ぶ授業もなかった」とおっしゃっていた。そして都会の大学に合格して飯田を離れた時は，「寂しさよりも都会に行けることへのワクワク感の方が強く，実際都会は楽しかった」とおっしゃっていた。

そこで，「なぜ，飯田市に戻ることを決めたのですか？」と伺った。すると，「都会に行ってみて，飯田ののんびりした感じや人のあたたかさがいいなと思った」と話してくださった。子供のころ近所の人にも育ててもらっていたことや地域の行事を楽しみにしていたことなどを思い出し，「地元の人が好きで，地元のために働きたい」と思い，市役所に就職しようと決めたそうだ。万が一市役所に就職できなかったとしても飯田市に戻ろうと考えており，地元の民間企業も受けていたという。地元と都会のどちらも経験できたからこそ，「若いうちは都会は楽しいけど，ずっと住んで子どもを育てるには飯田の方がいい」と思うようになったそうだ。

しかしながらやはり，大学を出て地元で就職となると就職先も限られているなど，難しい現状がある。T さんの友人の多くも東京や名古屋に住んで働いているという。市役所職員として「みんなが戻ってきてくれる市にしていきたい」と最後に話してくださった。

5.3 ムトス飯田事業

ムトスまちづくり推進課の池戸さんに，市が発行している『ムトス飯田事業の概要』という資料とともに市民の活動を支援する制度について教えていただいた。「…しようとする」という意味のムトスを合言葉に掲げる飯田市のまちづくりはムトス飯田事業と呼ばれ，「多様な主体の協働によるまちづくり」を目指している。ムトス飯田事業は，飯田市長と各界から選抜された市民の計 12 名および市の職員である庁内幹事 10 名で構成されるムトス飯田推進委員会が推進し，市の市民協働環境部ムトスまちづくり推進課に事務局が置かれている。ムトス飯田事業の主な要素 4 つを，いただいた資料や池戸さんのお話から学ぶことが出来た。

5.3.1 ムトス飯田表彰事業

昭和 60 年に創設されたムトス飯田表彰事業が，ムトス飯田事業の始まりとなった。表彰事業は一市民からの寄付が契機となったもので，「「ムトス」が際立ち，飯田の将来に向けて示唆的で主張ある活動をしている団体・個人を表彰」してきた。これまで 31 回で 66 団体・2 個人が表彰を受け，受賞者は後述するムトス飯田交流会・学習会に出席するなどムトス飯田の発展に貢献している。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

5.3.2　ムトス飯田助成事業

平成 3 年から，ふるさと創生 1 億円を基金にしてムトス飯田の取り組みを行う団体，個人への助成事業を行っている。池戸さんから,『ムトス飯田　助成事業ごあんない』や助成金申請書を見せていただいた。助成事業には「まちづくり・地域づくり応援事業」と，平成 26 年度からは「多様な主体が連携する協働活動」がある。「まちづくり・地域づくり応援事業」の助成金の上限は事業費の 70%以内であり，「地元で購入調達して経済循環を高めることを盛り込み 30 万円を上限」としている。また,「多様な主体が連携する協働活動」とは，まちづくり・地域づくりのなかでも特に「2 つ以上の団体が「新たに連携協働し, 新たに始める地域づくり活動」」を対象にしている。これにより隣接する地区同士で共通の課題に取り組んだり，異なる人材やノウハウを持つ団体が連携することで一つの団体ではできなかった活動を行ったりすることが促進されている。

平成 27 年度の助成金交付が決定した団体は,「まちづくり・地域づくり応援事業」が 29 件,「多様な主体が連携する協働活動」が 5 件であり，助成金額の合計は 6,081,700 円となっている。実に多くの団体が存在し精力的に活動していることを知って驚いた。池戸さんによると，二次募集をかけることもあるそうだ。

助成を希望する団体・個人は活動内容や収支予算計画などを盛り込んだ助成金申請書を市に提出し，ムトス飯田推進委員会による審査を受け，助成額の確定に至る。審査選考基準は

①自ら～しようとする意欲が感じられ，自ら汗と知恵を出す事業であること。
②地域および市民の実情や必要性を反映しており，的確に課題を把握していること。
③事業計画が具体的であり，公益性が高く，波及効果が見込める事業であること。
④他の団体や地域組織へのモデル的な事業であること。
⑤活動において拡充，継続，発展的な展開が見込める事業であること。

であり，活動内容によっては助成率が下がる場合もあるという。助成は基本的には 1 年単位で行われ，例えば平成 27 年度募集であれば 27 年の 2 月 16 日～4 月 15 日が応募受付期間であり，4 月末～5 月上旬に事業の詳細の聞き取りが行われ，審査ののち 5 月下旬に交付が決定する。そして翌年の 3 月 15 日までに活動報告書の提出が必須となっている。

助成金の交付を受けたいという団体は多く，中にはまちづくりに寄与する活動とはいいがたい内容の応募もあるそうだ。しかしそのような応募も単に却下するのではなく聞き取りを通してどうすればまちづくりに関わる活動になるかをアドバイスしているそうで，何か始めたいという意欲を応援し，より良い方向に導いていることが分かった。

また，ムトス飯田推進委員会や自治振興センターでまちづくり活動や地域づくり活動に関する相談窓口を設けており，アイデアはあるが実行へ移すのに不安を感じている人などの相談に応じている。気軽に相談できる窓口を設けることで，新たな活動の誕生を後押ししている。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

5.3.3　ムトス飯田交流会

様々な団体のつながりを広げることを目的に行われたもので，歴代のムトス飯田賞受賞者や助成を受けて活動している団体や NPO などが参加している。交流会は活動状況を報告し，また活動上の課題解決のために相互に意見交換をする場となっている。交流会での他団体との出会いから新たな協働活動が生まれることも少なくないそうだ。

さらに，以前は冬に行われていた交流会の時期を早めて夏に行うことにより，活動を始めたばかりの人がより早い時期に他団体と交流できるようになった。それにより自分の活動を，自信を持って進められるようになっているという。

5.3.4　一般社団法人ムトス飯田市民ファンド

平成 20 年に，市内の NPO 法人を資金面で支援するために一般社団法人ムトス飯田市民ファンドが設立された。飯田市内でも多くの NPO 法人が活動しているそうだが，会員や寄付が集まらないことから運営に苦心されている団体も少なくないという。そこで，社員をムトス飯田推進委員会会長でもある牧野光朗市長と「特定非営利活動法人くらり net」の理事の方とする一般社団法人を立ち上げた。

『一般社団法人ムトス飯田市民ファンド　概要』によれば，貸付の原資はムトス飯田推進委員会等から拠出された資金を基にし，市民からの寄付も募っている。ファンドを営むには貸金業法に沿い法人を立ち上げて行う必要がある。そのため，このようにムトス飯田事業そしてファンドを介して間接的に NPO 法人を資金面で援助する仕組みとなっている。

『一般社団法人ムトス飯田市民ファンド　概要』から貸付計画を引用すると，

①貸付対象　主たる事務所が飯田市にある NPO 法人
②貸付期間　短期融資 1 年以内，2 年以内
③金利　無し，代わりに社会貢献活動をしていただく
④貸付額　300 万円以内（1 年以内），100 万円以内（2 年以内）
⑤使途　事業資金
⑥保証人　法人代表者を含め 2 人
⑦返済　1 年以内の短期融資は，原則として一括返済
2 年以内の融資は，元金均等毎月返済，据え置き期間（3 か月まで），繰り上げ返済可
＊返金遅延の場合の延滞金要

となっている。連帯保証人を必要とするなど貸金業としての体裁が整っている一方で，社会貢献活動をすることを条件に無利子の融資となっているのが特徴的である。

平成 21 年から 27 年までに行った融資の件数は 17 件，融資総額は 2,209 万円となっている。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

5.4 まちづくりの広まり

ムトス飯田事業の持続を支える，市民団体の増加や市民のネットワークの広がりは，どのようにして起こっているのだろうか。

まず，前述したムトス飯田交流会における他団体との出会いが，市民の人脈を広げる役割を果たしている。しかし，新たな団体の誕生はどのように起こっているのだろうか。池戸さんによると，ロコミや SNS の影響力が大きいそうだ。ムトス飯田事業は開始から 30 年経っていることもあって市民の認知度も高まっている。そのため行政として活動を促すようなことをしなくても，市民が見よう見まねで新しい活動を始めたり，仲間を集めたりしているという。

こうした市民のネットワークの基礎となっているのが隣組合などの地縁的つながりである。そのため，市では転入者に対しても隣組合への加入を勧めている。このように市は市民ネットワークを作り出す取り組みをしており，それがまちづくり活動の拡大につながっていると言えるだろう。

また，市は平成 27 年 12 月 24 日に「飯田市市民協働サロン条例」を公布し，市役所内に市民が交流できるスペースを設けた。市民協働サロンは市民協働会議室とその隣のオープンスペースである市民サロンからなる。利用できる時間も午前 8 時 30 分から午後 10 時までと長く設けられていて，例えば仕事の帰りに集まって会議をするなどということも可能だ。使用時間に応じた使用料は存在するが，「飯田市が共催する活動に利用する場合」や「特定非営利活動法人その他公共的活動を行うことを目的とするもの」などには使用料の減額や免除がなされることになっており，まちづくりに関わる活動を促進させている。

5.5 考察

T さんへのインタビュー

インタビューから，都会へのあこがれが必ずしも地元が嫌いだから生まれるのではなく，また，都会に行ったからこそ地元の良さに気づくということもあるのだと分かった。T さんの友人の多くが都会で働いているそうなので，T さんの方が例外的なのかもしれないが，「都会に行きたい」と話していた飯田高校の生徒の中からも，後に地元に戻る人が何人かいるかもしれない。

だが，地元を離れての進学を希望する生徒が多い高校で，地元について考える教育はうまく機能するのだろうか。大学合格に向けて勉学に励む高校生たちが，受験に必要な科目の授業時間を割いて地元について意欲的に学ぶことは難しいのではないか。その一方で，T さんのように地元について学ぶことがなくても地元に帰りたいと思う場合もある。どこに住んで働くかの選択は人それぞれであるから，学校教育で地元に残れと強要することはできない。学校教育でできるのは地元の良さを知り，地元で働くことへの動機づけをすることなどに留まると思うが，地元に帰りたいと考えるかどうかには学校外での多様な経験も絡んでくる。また，地元に帰りたいと思ってもそこで就きたい仕事がないというケースもあり，それは飯田市も例外ではないようだ。飯田市に戻りたいと思うことが出来るならその要因は何なのか知りたいと思って調査をしたが，どんな

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

教育をすれば若者の流出を防げるか結論付けることはできない。だが唯一言えるのは，飯田市には，学校教育のなかで市について学ぶ機会がなかったとしても地元に戻って働きたいと思わせる良さがあるということだ。

ムトス飯田事業

なぜ飯田市では市民主体のまちづくりがこれほど精力的に行われ，持続しているのかを，行政によるサポートの重要性という観点から考えたいと思って始めた今回の調査だったが，調査を経て分かったことを考察としてまとめていきたい。

（1）住民同士のつながりの強さ

市民主体のまちづくりは，地域に昔から存在する住民同士のつながりを財産と捉え，それを活用しようという発想から生まれたように感じる。祭や田植えといった従来からの共同作業が現在の公民館活動や市民団体の活動に受け継がれているそうだ。T さんが都会に出て気づいたとおっしゃっていたような，普段は当たり前のように存在する人のつながりこそが主体的なまちづくりの土壌である。そのため行政は，転入者に対し，隣組合という組織を通してこうしたつながりのなかに入っていけるようにサポートしている。

（2）交流の促進

池戸さんによると，行政と市民が協働するのがまちづくりのよくある形態だが，飯田市ではいろいろな市民，多様な主体の協働によるまちづくりを目指している。また，活動をしていく中で困難が生じたとき，それを解決するための必要な知識やアイデアを持つ人との出会いにより前進できることも多いという。そのため行政では，市民団体がつながりを築くためのサポートをしている。具体的には助成金事業における協働活動に対する支援の導入，交流会の開催などである。しかしそれ以上に口コミや SNS など行政が関わらない部分での交流により，活動が広まって参加しようと思ったり，自分も何か始めようと思ったりする人が増えているそうだ。

（3）持続へのサポート

市民団体が一定以上の規模と期間を維持しながら活動していくには熱意だけでは足らず，資金やメンバーを集め，課題を解決し…など多くの困難を乗り越えていかなくてはならない。こうした困難への対処こそ，行政のサポートが役割を発揮する部分であると感じた。助成事業の申請に詳細な活動状況や収支計画を提出させ，ムトス飯田推進委員会で審査を行っているからこそ，活動を最後までやり遂げられるのではないか。審査は，もちろん公的な助成事業であるから不適切な助成にならないために行っているのだろう。しかし審査を経ることで市民団体が明確な目的や方向性を持つことが出来る。それにより勢いで始めた活動が立ち行かなくなって消滅，などということがなくなるだろうし，市民も自信を持って活動を行えるのではないか。

飯田市では行政が率先してまちづくりを促すのではなく，行政は地域のために何か始めたいという市民の心意気を応援し，挫折を阻止するためのサポート体制を敷いているのだと分かった。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

行政が市民一人ひとりの主体的な動きを信頼し，あくまで縁の下の力持ちでいられるというのは，それだけ市民の中にムトスの精神が生きているということだろう。もちろん課題や一筋縄ではいかない部分もあるだろうが，これからもムトス飯田事業の歴史を積み重ねて発展して欲しいと願ってやまない。

5.6 終わりに

追加調査に行く前，「地方消滅」が危惧されている中で飯田市のようなまちづくりが日本中の様々な地域で行えるようにするにはどうしたらいいのだろうか考えていました。しかし追加調査を行うと，昨今の飯田市のまちづくり活動の発展には，昔からの共同作業の歴史や，公民館活動などの存在に加え，ムトス飯田事業が誕生から 30 年を経て住民の認知が高まり，市民の活動が蓄積されてきていることも影響していると分かりました。そのため，飯田市で行われている事業は素晴らしいですが，一方でそのような背景のない地域に制度だけを移転することは難しいだろうと思いました。

しかし飯田市のまちづくりを調査することによって，自分の住んでいる地域ではどのような取り組みがなされているのかをもっと知りたいと思うようになりました。飯田市のような先進的な例から学ぶ意義は，それをそのまま自分たちの地域に取り入れることだけではなく，先進的な例をヒントに自分たちの地域はどのような良さがあり，それをまちづくりにどう生かせるのか考えることではないかと思います。

最後に，大変お忙しい中ムトス飯田のまちづくりについて教えてくださった池戸様や課長の田中様をはじめとするムトスまちづくり推進課の皆様，お仕事の合間を縫ってインタビューに応じてくださった T 様に深く感謝致します。本当にありがとうございました。

引用文献・資料，Web ページ

長野県飯田市『ムトス飯田事業の概要　多様な主体の協働によるまちづくり―役割分担と支えあい補い合うまちづくり―』 2015
長野県飯田市『ムトス飯田　助成事業ごあんない』 2015
長野県飯田市『一般社団法人 ムトス飯田市民ファンド 概要』 2015
長野県飯田市『飯田市市民協働サロン条例』2015

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第 6 章　住民の自主自立の時代に向けての市役所のあり方

竹本 涼太

6.1　はじめに

飯田市は住民の自治活動が盛んである。スタディーツアーの際は，市役所はそのサポートを行うと説明を受けた。私は，より詳しく，市役所は住民の自主自立へどのようにアプローチをしているのか，そうした中でこれからの市役所のあり方とはどのようなものかを飯田市市役所ムトスまちづくり課職員の方へのインタビュー（実施日：2016-1-25，時間：14 時～16 時，場所：飯田市役所）をもとに調査した。

6.2　飯田市自治基本条例

飯田市第 5 次基本構想基本計画によると，飯田市自治基本条例とは，“自治の基本的な原則，まちづくりに関する市民・議会・行政の役割，市政運営についての基本的な指針を定めた条例”である。飯田市の自治のあり方を示したものであり，市民の役割や飯田の地域自治のあり方，市政運営のあり方などが述べられ，全体を通じて飯田市の自治の方針が示されている。住民に対し市役所は何をするべきであり，どのような活動を行っていくのかという，市役所のあり方の理念もその中で定められている。住み良いまちづくりは，市民一人ひとりが主体となって市と協働しながら進めていく「市民主体の原則」，市が保有する情報を積極的に公開して市民と共有する「情報共有の原則」，市民が主体となって活動するために，市民が参加できる機会や場所を多く用意する「参加協働の原則」の 3 つを基本原則としている。具体的な市役所の活動，飯田市の地域自治，市政運営のあり方をみる上で，上記の 3 つの基本原則をもとにその効果を確認する。

6.3　市役所の取り組み

ここでは住民の自治にむけて飯田市役所が行っている活動をとりあげ，それらの活動がどのように住民の参加協働に寄与しているか基本原則をもとに分析する。飯田市役所の活動は飯田市自治基本条例に沿って行われているはずであるので，活動内容は基本原則に則っていると考えられるからである。

6.3.1　地域自治区制度

地域自治区制度とはそれまでの地区ごとの自治会を新しく地域自治区とまちづくり委員会に再編するというものであり，のちの施策も含め平成 19 年発足の制度である。人口減少，少子高齢化に伴う地域力の低下，地域への価値観の希薄化や役員の負担の増大，地域活動の担い手の不足，

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

地域活動団体の連携及び情報共有の困難さが背景である。そこで，行政と住民との協働による住民自治の拡充，住民に身近な事務を住民の意向を踏まえ処理，住民の企画による個性豊かな地域づくりの推進，各種団体活動及び行政の支援体制の再構築，住民同士の連携・協力による総合的な地域づくり推進，現場主義による機能的・効率的な行政運営，役員の負担軽減と人材育成を目的として導入された。つまり，これからの時代の問題の解決のため，住民自治をよりすすめようとする制度が地域自治区制度である。地域内居住の住民すべてで構成される地域自治区がおかれたが，国が地域自治区制度を検討する際に飯田市がひとつのモデルとされており，自治会地域ごとの自治が進んでいたため，飯田市が大きく変化することはなかった。有から有を生む難産とも表現されるが，もともと進んでいた地区ごとの自治をまた整備し直し，よりよいものとすることは難しい。また導入に当たっても 1 年間に 7000 人あまりの住民に説明を行うなど周知活動も必要であった。しかし，地域が元気なうちになんらかの措置を講じなければならないという問題意識が，以下のような施策を実現させ，飯田市の行政と住民の協働，住民自治は推進された。

6.3.2 まちづくり委員会

もともとは，地区ごとに地区自治会，地区環境衛生組合，地区交通安全会などの団体があった。そうした団体をまとめて横の連携を強め，1 つの組織としたのがまちづくり委員会である。まちづくり委員会以前は，それぞれ団体の定員や組織のあり方が一律で決まっていた。それがまちづくり委員会の導入に伴い，地区が考えて必要に合わせて委員会ごとの役員構成や人数を決めてよいこととなった。つまり，地区が人的資源の選択と集中を行えるようになり，組織の最適化が可能になった。例えばこの地区では子育て支援に力を入れるので，その委員会の定数を増やそうといったように，地区が一番活動しやすいように組織し，地区ごとの特色がでるようになった。また委員会の名前も地区でそれぞれ決めるようになった。役員数を減らした地区では，その分役員 1 人の負担が大きくなる場合もあるが，それも検討の結果であり，地区ごとに組織のあり方を改定して行っている。

人的資源だけではなく，財政資源のあり方も変わった。地区住民からの地区会費と市からの交付金が収入源であることには変わりがないが，交付金の内容が変わった。市からの交付金は団体ごとに交付されていたがそれを一本化し，全地区で総額 1 億円，それを均等配分 3 割，人口配分 7 割として 20 地区に配分してそれぞれのまちづくり委員会に一括交付するパワーアップ地域交付金制度に変わった。パワーアップ地域交付金の地区内での配分や使い方は地区に任されており，重点事業に予算をもることなどできるようになった。つまり，ヒトとカネの面で「縦割り型」の組織からより地区に裁量がある「横つながり型」の制度へと変わった。

インタビューによると，縦割りの組織では「上意下達」の意識が強かったが，横つながりの組織となり自分たちで考えよう，創意工夫しようという意識が強まった。こうした流れはもともとあったが，まちづくり委員会の導入によりこれがきっかけとなって変わっていこうという地区もあり，もともと自立的な地区ではより組織的に改革していこうという変化がおこるなどした。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

6.3.3 自治振興センター

行政からの人的支援制度，行政と地区を繋ぐ拠点が自治振興センターである。行政サービスの窓口業務，後述の地域協議会の事務，保健師業務，公民館主事業務を行っている。合併した 15 地区では自治振興センターと公民館が併設されており，旧飯田市の 5 地区では市役所が共同事務所となっている。合併した 15 地区では所長 1 名，一般職員 2～4 名，保健師 1～2 名，公民館主事 1 名が勤務している。特に合併した 15 地区において，自治振興センターは地域と市役所との気軽な接点となっている。旧飯田市の 5 地区では地区担当の保健師が各 1 名保健課に勤務し，それぞれの地区公民館に公民館主事が 1 名勤務している。

合併した 15 地区の自治振興センターには公民館が併設されており，市役所職員と公民館主事が机を並べている。また，まちづくり委員会など地区の活動も公民館を拠点とする場合が多い。このことから，市の方から何か地区へお願いをすることや，地域から行政に関わる際にはすべて自治振興センター，公民館へ行けばよい，そのような場となっている。持ち込まれた案件に関して，距離的に近いことからすぐに市役所，公民館，地区の連絡がとれ連携を容易にしている。地区に関わることはともに取り組む体制ができている。自治振興センターと公民館が活動の場の拠点，行政と地区との接点になっており，協同的な活動がよりすすみやすくなった。旧飯田市 5 地区に関しては，行政の集積地である市役所に近いことから施設の必要性は薄いと判断され，自治振興センターは建設されなかった。しかし，制度のはじまりとともに旧飯田市 5 地区それぞれに専任の所長が配属されることとなった。このことにより，地区の専任所長のもとへ地区の活動をしている人から電話で相談がいくといったように，市役所と各地区の距離が縮まった。また，地区という意識が高まり，地区としてやっていこうと地区のまちづくりへの動きができだしてきた。

6.3.4 地域協議会

地域協議会は，地区で取り組みをはじめる際，地区の住民からの許可，承認をその取り組みは受けたと制定する場である。規則で最終承認のため議会にあげられる前に必ず地域協議会にかけられなければならないと決まっている。地域協議会にかけられることで，その取り組みは全員が周知のものであるとされ，地区住民からの賛同が得られたとなる。そのため地域協議会は地区を代表した会であるように定められており，規則で公募と推薦の定数が定められている。また，委員男女比のデータも集められており，偏りがないか確認されている。まちづくり委員会からの推薦と一般からの公募からなっており，9名から最大人数である25名まで地区によってその総定数，推薦定数，公募定数は異なっている。公募定数は 2～4 名，推薦は 15 名程度が多い。平成 19 年の実施から 2 年ごとに定数改定が思案され，地区から変更の依頼があった場合，それぞれの定数を変えている。ここでも地区が地区ごとの事情に合わせ変えられるような制度となっている。

地域協議会では市役所からの諮問を審議する場合が多いが，異議なく承認となることがほとんどであり，それは飯田市ホームページ上の議事録をみてもわかる。しかしこれは地域協議会が無批判に承認を行っているわけではない。地域協議会に諮問する前にまず自治振興センターを通じてまちづくり委員会に働きかけ，地区と協働で計画づくりを行っている。そのため，地域協議会

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

では意見が出たとしても異議がなく承認されることが多い。地域協議会は実行部隊ではなく，意見聴取の場である。しかし，市役所がまちづくり委員会と十分な意見調整が行われていない場合や，市役所とまちづくり委員会では合意が取れているが，他の住民や組織からは合意が得られていない場合を想定し，意見を述べる機能を持つ。地区全体の意見調整の役割をもった機関として存在する。

地域自治区制度及びその施策は 3 つの基本原則，「市民主体の原則」，「情報共有の原則」，「参加協働の原則」が多くみてとれる。そもそも地域自治区制度が「市民主体の原則」，「参加協働の原則」を推進するものであり，その導入にあたっては住民への説明が尽くされた。まちづくり委員会は市民がより自由に動けるようにしたもので，その結果主体性をもったまちづくりがなされている。また，自治振興センターは市民の主体的な活動をサポートする他，市民が活動する場である公民館の機能拡張のような効果をもたらし活動の場を広げている。地域協議会は必ず地区内での情報共有が行われているかの確認の場となっている。

6.3.5 地域自治区制度に対する考察

飯田市においてはこのような地域自治区制度が運営されているが，他の市でも同じような制度がうまくいくかというとそうではない。インタビューで伺ったが，やはり主体性を地区にもたせるというやり方は地区ごとの自治の土壌が長い期間をかけて醸成されていた飯田市であるから可能であったことである。自ら決める自由があっても，市民が主体的に動かなければ制度は活かされない。地区それぞれにあった自治組織を設けるという制度は飯田市の状況に合った制度なのである。他の市で住民の自主を振興しようとするならば，その市に合った他の制度，周知活動，住民へのアプローチを行うべきである。

地区が裁量をもつということは，地区ごとに取り組みに差がでてしまい，うまくいく地域といかない地域，そうした差がでてきてしまうのではないかと考えられる。このことに関して飯田市では，制度としては地区ごとに自治振興センターを通じて職員を配置して援助の統一性を持っていること，また 20 地区での連絡会，あるいは竜東 4 地区といった近隣地区の協議会での連絡調整があること，中山間地区には特別に計画があり助成金を設けているなど対策をしていることにより調整を図っている。また，まちづくり委員会のように地域が自らの力で地域に働きかけていく組織づくりは，長い目でみる取り組みであり，時間がかかったとしても地区自らが取り組むことが望ましいと考えていると伺った。最終的に地区が自主自立していくには時間がかかる。それに対し，リニアの開通，少子化といった問題は迫っている。市役所は今後も地区ごとの状況を把握し，時には中山間地区のように集中して対策を行うことが求められるのではないか。

6.3.6 市政懇談会

市政懇談会とは，“市長と市民が一堂に会し，市長自らが，市政経営の考え方や市政の重要課題を広く市民に語るとともに，地域の課題や市民の皆さんの思いを一緒に考え，意見交換する場”である（南信州・飯田フィールドスタディ資料：地方創生にむけた人材サイクルの構築より引用）。市長よりのあいさつ，質疑応答に 30 分，地域課題及びフリートークに 70 分ほどで構成されてお

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

り，各地区で年に 1 回，2 時間ほどをかけて実施される。参加者は開催地区の人がメインであるが，他の地区からの参加も可能である。内容に多少違いはあってもこういった市役所側が市民へ語り，市民が市役所へ意見を述べるといった活動は他の市でもよく行われているものである。飯田市でも何十年も前から行われている。平成 25，26，27 年度に開かれた市政懇談会に関しては，市役所ホームページ内でいくつかの市民からの質問とそれに対する市役所側の回答が掲載されている。市役所は出席人数，発言者数，すべての意見や質問事項を記録し，出された意見に対してはそれぞれに対応している。出席人数は 50～150 人ほどであり，約 50 人に 1 人が出席している。

飯田市の市政懇談会が他の市の活動と大きく異なる点として，飯田市役所とその地区のまちづくり委員会の共同開催であることがあげられる。まちづくり委員会から地域課題について取り上げられそれに対し市側からの意見が延べられそのほかにもフリートークがなされるようになっている。また，共同開催であることから，市役所による広報だけではなくまちづくり委員会からも市政懇談会の広報がなされるなどしている。こうした要因からか，南信州・飯田フィールドスタディ資料：地方創生にむけた人材サイクルの構築によると，参加者が幅広い世代になってきており，また地域から行政への提案が多くなってきたとある。

市長からの語りは「情報共有の原則」に該当する。市民が市政に直接意見を述べることができる場を用意しているということで，「参加協働の原則」もなされている。市政懇談会にはまちづくり委員会にそれほど関わっていない人でも参加しやすい特徴がある。市政懇談会は出席するだけで市長，まちづくり委員会から飯田市，地区に関する情報が得られ，またまちづくりに関心のある他の市民と会うことができる。市政懇談会はまちづくり委員会などまちに特に興味があり関わっている以外の人からの意見を吸い上げることや，まちへの興味をひきだす機会，機能をもっているのではないかと推測する。

6.3.7　市民の意見募集活動

地域自治区制度，市政懇談会はそれぞれ市民が行政へ意見を発することのできる場であるが，他にも市民が市役所へ意見を述べることができるようなツールが設けられている。やらまいか提言箱，HP などだ。インタビューによると，市役所はより多くの市民から意見を募りたいと考えており，そのため市民が意見を発することのできるツールを多くしたいと考えている。今でも十分ではなく，あらゆる機会をとらえて，意見をいただく仕組みを増やしていきたいとのことであった。抱いている考えを自治振興センターに行き表明する人もいれば，やらまいか提言箱を通じて文章で伝える人もいる。多くのツールを用意することは有効であると考えられる。また，市役所改装とともに市役所内に設けられた市民サロンは少し違った機能ももつ。意見をもった人がその時その意見を市役所に表明するだけではなく，サロンを利用し，そこで話すことで意見を持ちやすくなる効果もある。

6.3.8　地区でわけるということ

地域自治区制度，市政懇談会は，まちづくり委員会を中心に地区ごとのまとまりを形成する。この地区ということをポイントに市民の自主自立を進めていると考える。旧飯田市 5 地区に自治

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

振興センターを設置したことにより活動が促されたとある。市という単位よりも自分たちの思い浮かべることのできる地区という単位の方が課題，問題がより実感しやすくなる，当事者意識がもてるのであろう。また，組織としても小さく完結する方が自分の働きを実感しやすくなる。地区は小学校区とほぼ同一であり，高校生と話した時も，地区はよく語られていた。当事者意識を持ちやすく，動きやすい小さい組織区分で，かつ人，予算面での自由を与え自律的な活動を行えるようになる。市役所側も地区ごとに担当がいることによって責任関係が明確化されるほか，地区ごとの状況を把握することが可能となる。

しかし，地区に任せることには懸念点もある。2013 年 4 月 23 日更新のやらまいか提言箱には，以下のようにある。

提言

まちづくり委員会での議論・判断が一部の人の意見に偏っているのではと思うことがあります。地区によっては，自治会，区長会，班長会等で月に一度は連絡事項等の話し合いを行って情報共有に努めている所もあるようです。そういった仕組みを義務化することは，可能でしょうか？また，まちづくり委員会の役員が，毎回同じメンバーが続くことの弊害がとても懸念されます。まちづくり委員会の任期に関する規定はあるのでしょうか？

市からの回答

この度は，「やらまいか提言」に地域自治組織のあり方についてのご提言をいただき，ありがとうございました。飯田市内は 20 地区に分かれており，各地区には「まちづくり委員会等」があります。各まちづくり委員会等は，自らのまちづくり活動の推進の他，地区の重要な課題や施設整備のあり方などについて，市や関係機関との調整や情報共有の機能も担っております。

以下，項目ごとに回答いたします。

地区内における情報共有の仕組みを市内全地区で標準化し義務化することについて

まちづくり委員会等は公共的団体とはいえ，運営は各地区ごとの状況に応じて行われており，そうした自主性を尊重する立場から，意志決定の仕組み等を一律に義務化することは控えたいと考えます。

なお，そのようなご意見があったことについては，まちづくり委員会等の会長が集まる「まちづくり委員会連絡会」で問題提起させていただきます。

まちづくり委員会等の役員任期について

地域の自主性・主体性を尊重しており，飯田市統一の規定はありません。ご提言者様の地区においては，規約により 2 年と定められており，再任は妨げないこととなっております[53]。

まちづくり委員会となり活動の幅に自由がもたらされたが，この提言書にあるように，より多

[53] 飯田市役所ホームページ．『【提言】地域自治組織のあり方について』 入手先 URI: https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/teigen7.html （アクセス日: 2016-2-10）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

くの地区の人々が関わり，地区全体で活動が活性化されるかというと，現状そうはなっていない可能性もある。このたびの調査では市役所の方へのインタビューしかできていないため，フィールドスタディのお話やこの提言からの推測でしかないが，昔から自治会が盛んであったということは，それだけ発言力の強い人物がいるなど組織の人員の固定化や周囲からみて入りにくいなど排他的な性質を持っている場合も想像出来る。地域自治といっても，全員が必ず関わることを目指すわけではない。「参加協働の原則」の通り，市民が関わりたいと思った際に関わることができ，また関わりたいと思うような状態を目指すものである。また，インタビューの際，まちづくり委員会の中で，同じ人が長年その活動に関わることによって経験を蓄積し，ノウハウをため提供するサービスを向上させている事例もあると伺った。必ずしもまちづくり委員会のメンバーが変わらないことに問題があるわけではないが，一部の人のみで地区が動かないようにするという点は留意すべきである。自治振興センター所長，公民館主事が，担当地区のまちづくり委員会は一部の人のみが担い，他の人が入りにくいようになっていないか外からみた視点から確認し，働きかけることがよいのではないか。市政懇談会を市役所だけではなく，まちづくり委員会と共同で開催することは意見を取り入れる，委員会外部に開くという意識が育まれる効果も考えられる。

6.4 飯田のこれからの姿，それに向けた活動の方向性の考え方

飯田市は全国平均よりも早く高齢化が進むことがわかっている。都市部よりも右肩下がりの時代の影響を強く住民は感じており，より成長して，発展していきたいというより，よりよくしながらも今あるものを残していくことが目標という意識をもっている。市役所としても自由裁量で使える予算が減ってきている，その中で今あるものを整理して，いいものを残すという方針である。その何を残すのかは地区によって異なり，地区にあったものを残す。リニアの開通により，地域の独自性が失われる，交通の便が悪かったが故に残っていたものが，なくなってしまうということが考えられる。リニアが通った時に，ここにしかないものを残せるか，降り立ってみたい地区となるかどうかということが鍵となる。20 地区のそれぞれの宝を残していこうということが飯田市のまちづくりのスタンスであり，それを行政からまちづくり委員会を通じて市政懇談会などで少しずつ働きかけている。そうして住民が，地域自治組織中心となり，行政と一体となって飯田のこれからを考えていくことを狙っている。

私はそうした人口減少地域の現状，いいものを残していくという方針は，東京で暮らす学生には馴染みのない考えではないかと飯田市フィールドスタディの出来事から考えた。フィールドスタディの際，美術博物館の方が使われていた「偉大なる停滞」という言葉にひっかかっている学生が多かった。現状を維持し，続けること，残すことが目標であるという職員の方々の考えに対して，学生はもっとよくしていこう，発展させていこうといった考えを持った方がよいのではないかと質問をしていた。資源が少なくなる中の現状維持とは改善を伴うものであり，職員の方の考えと学生の考えはともに改善し向上しようという点では共通していたということを学生はわかっていなかったと考える。人口の，予算，現状の維持が大きな目標であるということが，選択肢

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

が多く変化の激しい環境で，若く経験の少ない東京の大学生には即座に理解できない，違和感のある考え方であるかもしれない。

6.5 市役所のこれから

6.5.1 市役所のあり方

地域自治区制度の導入などと並行し，飯田市役所は行財政改革を計画，実施しており，業務の整理，事業精査が行われている。人口減少時代に合わせた地域のあり方が住民自治であれば，市役所のあり方は必要なところは残しつつ無駄を減らしスリム化することである。ベーシックで法律に定められているような大きな制度を市役所が担い，細いニーズの対応は地域が担うといったあり方が考えられる。インタビューの際，介護保険制度，健康保険制度を行政が担い，それを補完するものとして利用施設と各家庭をつなぐ移動サービスなどを地域が提供するという例をあげてくださった。また，市役所が何を担うかは市民活動とともに考える必要が有る。また例として，現在飯田市内での市民活動の情報を集め，発信することは行政が主に担っているが，それを担う団体がでればともに運営するか，市役所が担う必要がないと判断されれば団体に任せるといったことが考えられると伺った。ゼロベースでつくる，つまりあるものを削るのではなく，ゼロから必要と考えられるものを洗い出して必要なもののみで構成するという考え方がある。なんでも住民に投げればよいというわけではない。また，一度やめてしまうと再開に時間がかかるなどしてしまう。その中で事業精査をして，何を残すのかを考え，ゼロベースでつくられたようなその時々に本当に必要なことのみ行うことが右肩下がりの時代の中の市役所のあり方であると考えられる。

6.5.2 住民自治へのアプローチ

インタビューによると，地域課題に対応するにはまちづくり委員会の活動のみではまかなえないものもあり，NPO などを住民が立ち上げるといった動きがある。「新しい公共」と呼ばれるものである。今後はまちづくり委員会の活動の一部を NPO に委託するなどの例が考えられる。まちづくり委員会でも長年の蓄積から専門性をもてる分野もあるが，NPO の方が活動に特化しており，専門性をもち高いレベルのサービスが可能となるなどのメリットがある。また，地域や活動によっては企業との連携なども始まっており，市民発の新しい活動を支援することも市役所として求められる。インタビューによると，長野県，飯田市で支援金助成金があり NPO や様々な団体の活動を支援し，多様な主体を育てていこうとしている。行政がひっぱっていくものもあるが，地区の中から発生してくるものもあり，そういったものには発表の場を提供する，助成金をつくるといった支援がある。地方であることから，顔が見える関係であり，団体同士が連携しやすいのではないかということである。

「新しい公共」に取り組んでいる他自治体として，文京区を取り上げる。「文京ソーシャルイノベーション・プラットホーム」という特設サイトを作成しメールマガジン，Facebook など広報を行っている。また，「担い手創出プロジェクト支援本部」を設置し，社会企業講座，事業運営に対する支援金，専門家の助言，社会企業 PR フェスタ，NPO 活動 PR フェスタ，対話イベント等を

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

行っている。活動の立ち上げから運営，区民同士の活動の広がりまでトータルでサポートをしている。住民が地域課題に対して語り，事業を立ち上げ運営し，高いレベルで区から独立することまで行うことが協働の推進であると考えている。飯田市の新しい公共の促進としては助成金しか伺っていない。飯田市に合わせた「新しい公共」推進の形としてすでに実施している支援策もあると思われるが，文京区のような事業の立ち上げから自立までトータルで補助する支援も考えられるのではないか。

6.6 終わりに

最後に，「“飯田”というつながり」における市役所のあり方を考察する。調査以前は，市役所は市民の活動を支える存在であるのではないかと考えていた。調査を受けて，市役所は単に市民が行っている活動のサポート，市民が活動を行おうとしていることの成立のサポートだけではなく，活動を市民がはじめようと考える，飯田に関して意識をもつように努めているなどわかった。市役所は“飯田”と関わろうとする人のサポートとして市民の側にいると同時に，“飯田”全体の形を把握し問題はないか確認する，“飯田”がどうあろうとしているのか，どうなるべきであるか考えている存在である。活動を通じて育まれる市民と“飯田”のつながりが 2 次元や 3 次元で表されるとすれば，市役所はつながりを支える，共にある“飯田”というつながりの内側に位置すると同時に，“飯田”というつながり全てを俯瞰する存在であると考える。

最後に，インタビューを受け入れてくださった飯田市役所，ムトスまちづくり課の皆様に深く感謝の意を表したい。

引用文献・資料，Web ページ

財団法人地域活性化センター『地方自治法上の地域自治区を活用した取り組みについて』 2009 年 3 月

長野県飯田市『飯田市の地域自治組織制度』 2015

長野県飯田市『飯田市基本条例保存版』 2009

飯田市役所ホームページ 入手先 URI：http://www.city.iida.lg.jp（アクセス日：2016-2-14）

文京区ホームページ『新たな公共プロジェクト』入手先 URL:
http://www.city.bunkyo.lg.jp/sangyo/kyodo/aratanakoukyouteigengo.html（アクセス日：2016-2-10）

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第７章　中山間地域振興について

福田 満里子

7.1 はじめに

本稿では，なぜ中山間地域の振興を行うのかという問いについて，飯田市の行財政という視点から考察する。なぜ中山間地域の振興を行うのか，今回私が選んだこの問いは，飯田市の社会教育に携わる方々には疑問のないことであり，問う必要がないことであろう。しかし，私は東京生まれの東京育ちであり，その中で当然のように生きてきた人間であるので，中山間地域の振興を自明のことだと捉えることはできない。よって，今回はその問いに対し，飯田市の行財政という切り口から，下栗の里へ焦点をあてて取り組んでみることとする。

以上より，本稿でははじめに飯田市全体の財政の状況と方針について扱い，次に中山間地域振興について，既存の議論の争点も用いて考察し，最後に下栗の里の取り組みについて扱う。調査では，飯田市役所ムトスまちづくり推進課遠山郷・中山間地域振興係の野牧専門官と倉田主査にお話を伺った。また，上村の下栗の里へ訪問すると伝えたところ，ご好意により案内をして下さり，その中でも多くの話を伺った。以下では，当調査の内容を踏まえて考察を行う。

7.2 飯田市の財政状況と方針

7.2.1 飯田市財政の現状

飯田市平成２６年決算概要より，飯田市の歳入は市税 26.5%，地方交付税 24.5%，国庫支出金 10.6%，地方債 15.5%等から成り立っている。一方，飯田市の歳出を目的別に見ると，議会・総務 16.5%，民生 30.3%，衛生 9.3%，農林水産 4.2%，商工・労働 5.4%，土木 9.6%，消防 2.6%，教育 10.9%，災害 1.0%，公債費 10.2%となっている。目的別歳出のうち増額となった費目は，総務費が庁舎整備事業や地域振興住宅整備事業等により 42.4%増加，教育費が竜峡共同調理場，公民館耐震整備等の完了に伴う事業費により 28.2%増加, 民生費が障害者福祉費や臨時福祉給付金，子育て世帯臨時特例給付金とにより 7.7%増加である。一方で減額となった項目は，消防費が 17.8%減少，労働費が緊急雇用創出事業の減少などにより 13.2%減少である。

中山間地域振興に関するものをとりあげると，平成２７年度予算において地域振興住宅の整備に１億１千万円，南信濃への過疎地域定住促進補助金を 450 万円，上村への同様の補助金が 345 万円である。

7.2.2 インタビュー: 歳出の方針に関して

今年の夏に飯田市にうかがった際に,「儲けるよりも地域の人々の幸せを重視する」という趣旨の発言が何度かあったことに関して質問をした。発言から，飯田市では儲けを軽視しているのかと疑問に思ったが，インタビューからは，むしろ飯田市では経済政策に重点を置いているということがわかった。飯田市では産業振興に力を入れて経済的に自立し，それにより人々が豊かに暮

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

らせることを目指している。中山間地域振興に関して伺った際にも，人は食べていくために稼がなければならず，遠山郷では山間地域であるため，林業は盛んだが，農地が確保しにくく農業がやりにくいこと，また地域内で雇用を確保しにくく外へ稼ぎに行かなければならないことにより大幅に人口が減ってしまったのだと伺った。人々の暮らしを維持するために，「儲ける」という観点はやはり重要であり，飯田市は当市の発展のため，産業の振興にも特に力を入れていることが明らかとなった。実際に，総務省地方財政の状況の市町村目的別歳出の平均である総務費 13.9%，民生費 34.1%，衛生費 8.1%，農林水産業費 2.3%，商工費 3.6%，土木費 11.3%，教育費 9.9%，公債費 11.2%，その他 5.6%と比較しても，特に産業への投資が少ないという傾向はみられなかった。

また，住民が「人々の幸せを重視している」というのは，歳出の方針の違いではなく，公民館活動などの自治活動が活発であり，地域の人々がそれぞれに「お互い様の関係」をもっていることに由来すると考えられる。政策としては，飯田市内の 20 地域それぞれに自治振興センターが配置されており，本庁の方に行かなくてもそこで諸手続きや相談を行えるシステムになっているので，住民と行政の距離が近く，きめ細かな対応ができていると伺った。

7.3 中山間地域振興について

『「限界集落」問題の社会学的視座 ―「環境保護」の観点に加えて―』で東京大学大学院の姫野宏輔氏は，“現在，地域社会学や環境社会学などの分野においては，「消滅の危機に瀕している集落を維持・活性化すべきてある」という考え方がほぼ共通認識となっているのに対し，経済的に非効率的であるという観点から，そうした集落を維持することに対して否定的な（主に経済学分野からの）主張が存在している”と述べる。こうした主張に対抗して，“集落の維持によって，①都市部への悪影響を防ぐ（デメリット阻止型環境保護），②山村の森林などの資源を有効活用する（資源活用型環境保護），③地域固有の歴史・文化を保護する（文化保護），④居住し続けたいという住民の意思を守る（コミュニティ保護）”と主に４つに分類できる根拠が提示されているという。これについて筆者は，“実際に危機的状況にある集落に居住し，その維持のために活動している人々に聞き取り調査を行ってみると，山村を維持することが環境の保護につながるという観点は，むしろ近年になってから考案されたもので，もともとの活動の動機は「住み慣れた地域で暮らし続けたい」というところにあることか分かる”と考察する。また，“現在の「限界集落」論は，「住み慣れた地域て暮らし続けたい」人々と，それらの地域に環境保護の意味を見出した人々（地域外の研究者・行政担当者）が，互いに交流しながら，その「公的な論理」を組み立てていった”のではないかと指摘する。

7.3.1 集落の維持に賛成する主張

①都市部への悪影響を防ぐ（デメリット阻止型環境保護），②山村の森林などの資源を有効活用する（資源活用型環境保護）に関しては，姫野宏輔氏が“河川の水源に位置する山村の環境荒廃は河川下流に位置する都市部の環境にも影響を与える”という環境保護の観点からの主張をあ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

げている。③地域固有の歴史・文化を保護する（文化保護）に関しては，祭の背景に隠されていた深く大きな世界を失ってはいけないという主張があげられる。④居住し続けたいという住民の意思を守る（コミュニティ保護）は，実際のところ最も中心となる理由ではないか。『限界集落論への疑問』で山本努氏は，“集落への「まなざし」の問題”があり，それはひとことでいえば“生活をみることなく，外部から『限界』と決めつけることへの批判”であると述べている。また，“たとえ限界集落と呼ばれようと，限界を決めるのはそこに生き暮らす人びと”であり，“そこに暮らし続ける人が「限界」と思わなければ限界ではない”のだという。そして，そうした人びとと村こそ“都市化，効率化，グローバリズム，市場経済至上主義に抗して，静かに凛として日々を生きて”いて，“その人びとによって私たちの日々の食料は支えられている”と指摘する。

7.3.2 都市機能集約化の主張

日本は高齢化による人口減少が進んでおり，この影響は都市部よりも地方において深刻となっている。住民の多数を高齢者が占め，存続が難しくなっている集落について，政府は地域の拠点に人口を集約し，効率的な地域運営を行う「コンパクトシティ」の形成について検討を進めている。しかし，どの程度集約化するのがベストなのかについては，なかなか最適な解が得られていない。国土交通省では，人口の減少が深刻な状況となっている過疎地域において，集落を地域拠点に移転した場合と，そのままの状態で維持した場合を比較し，コスト面でどれだけの違いがあるのか具体的に検証する調査を行っている。各地域に住む人の多くが，住み慣れた地域からの移転は望んでいない一方で，集落を維持するためには，道路をはじめ，上下水道や電力といったハード面，ゴミ収集などの各種サービスといったソフト面のインフラを継続的に整備していく必要があるからである。また過疎地の集落は農業を主な産業としているケースが多いため，用排水路や倉庫など農業基盤の維持管理も必要となる。

このような中で提示されるのが都市機能の集約化である。しかし，最近では住民の合意にも重きを置いた，複数の拠点を置いたネットワーク型の都市構想も提示されている。

7.3.3 インタビュー:限界集落の維持を試みる根拠に関して

飯田市全体の利益を考える，行政の立場からの答えをいくつかいただいた。1 つ目は，山林を保護する必要があるということである。人が住み，山林の手入れを行うことで，豊かな山林が維持され，それにより水資源やきれいな空気が確保される。経済効率から考えると，一見山間集落の維持は非効率であるようにも見えるが，都市の生活であっても，山林の中で涵養された水資源と光合成された酸素があって初めて成り立つ。経済効率論は綺麗な水や空気があるという当たり前のことを前提として言われており，その当たり前のことが成り立つ前提を視野に入れていないのではないかということ。

2 つ目は，伝統文化の維持ということ。例えば上村の祭りなど，800 年以上も人々が伝承してきた文化が失われるのは寂しいではないかという感覚。

3 つ目は，暮らしの多様性の確保である。飯田市では，山・里・町のそれぞれの暮らしを守り，様々なライフスタイルがとれることを重視しており，それこそが他にはない魅力だろうというこ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

とだ。都市には利便性であるとか，都市なりの魅力がある。例えば，上村にはコンビニがない。しかし，住んでいる人にとってはコンビニがなくても全く問題はなく，豊かな自然とのんびりした暮らし，住民が互いに顔見知りである安心感，10 人しかいないからこそ一人ひとりが頑張る小学校など，山の暮らし独自の魅力を愛している。即ち，世の中の人は様々であり，全ての人が都市で暮らしたいわけでもなく，全ての人が山で暮らしたいわけでもないのであって，都市には都市，山には山のライフスタイルがあり，それぞれに独自の魅力がある。だから，近年は，家を２つ持ち，平日は都市で仕事をして休日には山に来てリラックスするという人もおり，おそらくリニアが開通すればより柔軟なライフスタイルの形成が行えるようになるだろうということだった。

7.4 上村･下栗の里

7.4.1 飯田市中山間地域の現状

中山間地域の飯田市に占める割合は，人口で約 14%，面積で約 70%となっており，人口密度は中山間地域外の約 14 分の 1 となっている。高齢化率は 35.6%であるが，特に上村 51.7%，南信濃 56.5%と遠山郷地区が圧倒的に高くなっている。その中で，地域活動の担い手の減少，農地・山林の管理の悪化，自然環境の荒廃化，就業機会の減少，インフラ整備の困難，公益的サービスの統合・廃止などが問題となっている。

7.4.2 飯田市中山間地域振興計画

以上の状況をもって，飯田市では，持続可能な地域社会の形成，多面的機能を保持した中山間地域の形成，地域経済の活性化，地域運営主体の形成を理念に，平成２１年度から３０年度の 10 ヶ年にわたり，中山間地域振興計画を実施することとした。対象は下久堅・上久堅・千代・龍江・三穂・上村・南信濃の 7 地域であり，特に上村と南信濃に関しては重点的に対策が行われている。

政策としては，ハード面において道路整備交付金事業と辺地対策道路改良事業を実施し，道路を整備することにより，交流人口を増やし，産業の発展を推進すること，また，地域振興住宅整備事業により住居を提供することで，若者に定住してもらうということを行っている。地域振興住宅に関しては，これまでに 164 人が入居しており，農業をやりたいということで飯田市外から入居してきた人もいる。

ソフト面の政策としては，町づくり委員会と振興事業への補助金の交付があげられる。特に上村・南信濃の 2 地区には過疎地域特別支援金を交付して，祝い金事業（結婚祝い金等），病院通院費補助金事業，高校生通学補助金事業，インフルエンザワクチン予防接種補助金事業，IU ターン歓迎補助金事業を行っている。上村にはさらに保育園児子育て支援事業で，30 名しかいない上村保育園が存続できるよう援助している。

7.4.3 遠山郷とはどのようなところか

遠山郷は上村と南信濃から成り立っている。大きく分けて 4 つのエリアが存在し，温泉施設の豊富な道の駅遠山郷エリア，昔ながらの木造校舎が保存されている木沢エリア，山村の暮らしが息づく上村エリア，「日本のチロル」と呼ばれる絶景のしらびそ高原・下栗の里である。特に下栗

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

の里のビューポイントからの絶景は何度もメディアに取り上げられている。近年では，旅番組の取材などの方から興味を持って入ってくるため，とくに地域から宣伝をしなくても認知度が上昇しているという。また，他の山間集落では何もないところだという住民も多いが，遠山郷には地域を誇りに思い他者に勧める人も多いとおっしゃっていた。遠山郷は全国各地の限界集落の中でもとりわけ人間を引きつける魅力のある地だと言えるだろう。

7.4.4 上村・下栗の里への訪問

自治振興センターに立ち寄ったり，数カ所の絶景ポイントを訪れたりした。景観は大変よく，確かに観光客を引きつけるものであった。食事処ではその土地でつくった下栗芋のコロッケを食べた。地産地消という言葉があるように，その土地で作った，風土に最も合うものを使うことを心がけていると伺った。野牧さんと親しいおかみさんのお話も伺うことができた。地元の小学生は 10 人しかいないが，運動会ではだからこそ誰かがやっているからとさぼる子もいなく，一人一人が一生懸命やっている様子が感動的だとおっしゃっていた。都会とは全く違った生活のあり方だが，その生活が何より好きである様子だった。以下図表 2-7-1，2-7-2 は案内をしていただいた際に撮った写真の一部である。

図表 2-7-1 上村自治振興センター

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

図表 2-7-2 下栗の里

7.5 まとめ

なぜ中山間地域の振興を行うのか，飯田市の行財政という観点からは，山林の保護により飯田市全体が豊かな環境資源に恵まれた持続的な発展をするためと，山・里・町の多様なライフスタイルを営める魅力ある自治体とすることが答えとして提示できるだろう。しかし，実際のところ少なくとも飯田市については，山の暮らしを好み求める人が根強くいることと，遠山郷に人を引きつける魅力があるからということが根源的な理由なのではないかと推測する。即ち地域と住民に“求心力”があるから，それが人を自然と引きつけ，発展させるのかもしれない。

結論としては，根拠を理屈であげることはできるが，それらは実は後付けであり，結局のところはその土地と人が好きだからという直感的なものが原動力なのではないかと考察する。さらにいってしまうと，いくら合理的だと自負する人間であれ，実際は理屈を超えた直感がまずあり，それを後付けで論理的に説明したり正当化したりしているだけかもしれないと思う。いずれにせよ，机上の理論だけで処理するのではなく，現場にわざわざ足を運ぶ手間をかけ，人の営み自体をよく見るという姿勢が，行政官として重要ではないかと考えた。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

引用文献・資料, Web ページ

飯田市中山間地域振興計画概要版
<https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/19290.pdf>（アクセス日：2016-1-24）
飯田市平成 26 年度決算の概要. <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/23517.pdf>
（アクセス日：2016−1−24）
春日井真英 神話的構造から見る花祭（北設楽）と遠山祭（長野県遠山郷）―湯ノ上の飾りから考える―
<http://repository.tokaigakuen-u.ac.jp/dspace/bitstream/11334/315/1/kiyo_w017_03.pdf>
（アクセス日：2016−1−24）
国交省が限界集落維持のコストを試算する背景とは？
<http://thepage.jp/detail/20150119-00000008-wordleaf?pattern=1&utm_expid=90592221-53.dkK4v0nLS7muTT6u23GJVg.1>　（アクセス日：2016-1-24）
総務省　平成 26 年度版地方財政白書
<http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/hakusyo/chihou/26data/2014data/26czb01-02.html#p01020401>（アクセス日：2016-1-29）
中山間地域振興の推進　平成 27 年度施策マネジメントシート【平成 26 年度評価】
< http://www.city.iida.lg.jp/hyouka/H26/manejimennto/8-5.pdf >（アクセス日：2016-1-24）
姫野宏輔　「限界集落」問題の社会学的視座 ―「環境保護」の観点に加えて―
<http://www.gakkai.ne.jp/jss/research/82/conf82_abstract/abstract104.pdf>
（アクセス日：2016-1-24）

飯田市役所　市内高齢者人口
飯田市役所　地域振興住宅新築の現状
飯田市役所　飯田市中山間地域における地域振興住宅の運営に関する条例
飯田市役所　上村まちづくり委員会からお知らせ
飯田市役所　お年寄りや若者の暮らしを応援する補助事業について　平成２７年度版
遠山郷観光協会　遠山郷観光ガイド

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第 8 章　飯田型社会教育の応用性

八木 舞子

8.1　はじめに

今回，私がこのテーマに取り組んだのは，8 月の実習(南信州・飯田フィールドスタディ)で初めて飯田を訪れた際に感じた 2 つの疑問に端を発している。実習では様々な取り組みの中心を担う住民，またそれを支える市職員の方々に飯田の社会教育についてお話を伺った。どのお話を聞いても，とにかく住民の方が自発的かつ楽しそうに活動されていることがよく伝わってきたものの，いまひとつ釈然としない思いを抱いたのも事実である。

一つは，なぜ飯田市のまちづくりが成功しているのか，ということである。飯田市では，住民の方が主体となって発意し，自主的に活動を運営していく自治が根付いている印象を受ける。しかし，住民が自発的に公民館活動やその他ネットワークの運営を担う風景はどこの自治体においても当たり前に見られるわけではない。実習の最後に牧野先生が述べられたように，「公民館活動が活発だから住民の自治の風土ができたのか，それとももともとそのような文化的風土があるために公民館活動が活発化したのか。卵が先か，鶏が先か，それは分からない」のである。実習の中では，飯田型社会教育を他地域へ移出する取り組みについても講演があったが，飯田型社会教育が意欲的な住民ありきのものであるならば，他地域における応用可能性は低くなってしまうだろう。実習の中では，飯田市の社会教育を他地域へ普及させる取組として解体新書塾が紹介されていたが，果たして飯田型教育が成り立つための共通の基盤のようなものは存在するのだろうか。これが私の感じた一つ目の疑問である。

次に，ある講演者の方が「飯田市の社会教育が成功しているとも思わないのですが……」という実感を述べていたように，飯田の社会教育が一体何を持って成功としているのか，その目指すコミュニティの在り方はどのようなものなのか，ということである。飯田市のまちづくりの活動を見ていると，自身が今まで抱いてきた「まちおこし」のイメージとの間に大きなギャップがあることに気づく。一般に，「まちおこし」というと，地元の名産品や観光資源を PR したり，企業や移住者を誘致したりと，経済振興目的で地元を対外的にアピールしていく活動というイメージがあるように感じる。しかし，飯田市の場合，市中心部の町並みを見てもシャッターの下りた店が目立った他，りんご並木ネットワークの桑原さんのお話でも「とにかく自分たちが楽しいと思ったことをやる」と述べられるなど，経済的な振興よりも内部に暮らす住民の精神的な充足を目的としているような印象を受けた。地域おこし協力隊のネットワークである一般社団法人村楽が『地域おこし協力隊「失敗の本質」』の中で，地域おこしの定義について，以下のようにカテゴリ化している。

6 次産業化・地域ブランド化＝地域活性化（経済的施策）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

集落支援・コミュニティ活動＝地域づくり（自治的施策）
住民ワークショップ・世代移転＝地域再生（再編的施策）
地域における誇り・郷土愛の醸成＝地域おこし（情緒的施策）

これに沿って考えると，私が従来イメージしてきた地域おこしは 1 つ目の「地域活性化」であり，飯田市の地域おこしはまさに上に示された「地域おこし」と言えるように思う。また，飯田市の社会教育は幸福の国として話題になったブータン王国で使われている指標・GNH（Gross National Happiness/国民総幸福量）の理念とも似通った部分があるのではないかと感じた。このブータンとの共通性について，奇しくも飯田市の中ですでに共有されていたことが調査の過程で分かった。この点については，本論において少し触れたい。

このような情緒的・GNH 的とも言うべき飯田のまちづくりによって，今後持続可能な人口や財政を維持していけるのか，というのも大きな疑問として残った。

本章ではこの 2 つの大きな疑問に沿って，1 点目につき飯田型社会教育の地域的応用性，2 点目につき飯田型社会教育の将来的応用性を柱として調査を行うこととした。

8.2 調査方法

2016 年 1 月 8 日（金）13:00~15:00 に，飯田市公民館において飯田市公民館副館長・木下巨一さんにインタビューを行った。また，実習中の 2015 年 8 月 28 日に伺った『飯田市公民館・飯田市の社会教育行政の取組』の講演資料や，インタビューに際して頂いた資料，インターネットを用いて文献調査を行った。

8.3 地域的応用性

8.3.1 飯田型社会教育特有の土壌

飯田市で住民主体の活動が盛んに行われる要因について，2011 年度の報告書においては，地理的要因と政策的要因が挙げられている。前者は，飯田市はマクロ的には山に囲まれた谷としての一体感を備えながらも，ミクロ的には起伏が多く，点在する平地ごとに多様性がある地域であるということである。また後者については，1972 年から 1988 年まで飯田市長を務めた松沢太郎氏により公民館が地域の自治の拠点と位置付けられ，市民セミナーでの学びを市職員が市政に活かすようになったということがある。

飯田市の住民活動の背景に，公民館制度があることは確かだろう。実習でも，飯田の公民館制度の特徴について，市内に飯田市公民館のほか 20 の地区公民館と 103 の地区分館がおかれ，前者には市の行政職員が主事として配置されることや，後者がすべて地域住民によって運営されていること，また分館を運営する住民が地区公民館の専門委員を兼任して様々な事業の企画・運営に携わることなどが述べられていた。しかし，それらの制度的な特徴を聞いただけでは，一般の公民館制度に比べて何が優れているのかが明確にイメージしづらい人も少なくないのではないだ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ろうか。

木下副館長は他地域と比べたときの飯田の公民館の一番の特徴を,「主役がそこに住んでいる人たちっていうのが絶対的に主事に身についている」ことだと指摘したうえで，インタビューの前日に参加した，東京での公民館主事のセミナーにおける所感を以下のように述べている。

セミナーの資料を読むと，飯田の公民館主事と他の公民館主事の発表内容の違いに気づきます。何が違うかというと，他の公民館主事は自分がプレーヤーでかつ，事例の内容が華々しくこんなことができたっていうアウトプットであるのに対して，飯田の公民館主事の発表内容は，一つの活動を通して人が変わっていくプロセスに言及している点です。飯田の公民館主事たちがめざしているのは，その（地域に）住む人たちがどうやって自分たちの力で地域の中で課題に向き合って動いていくかっていう，プロセスを大事にしながら，そういう育ちを支えていこうという姿勢です。

九州大学の八木信一教授は，このような飯田の公民館主事の姿を「住民に巻き込まれる力」という言葉で表現している[54]。木下副館長によれば，実際のところ，飯田の公民館主事は「住民に巻き込まれざるをえない」状況に置かれるのだという。というのも，飯田の公民館主事は，一般行政職として採用された職員が市民課や税務課などの業務を経たのちに配属される。そのため，その地区や主事の仕事については素人状態であり，長きに至っては 20 年ほど務めているベテランの専門委員が公民館主事を「仕込む」ことになる。飯田では，地域住民自身が「まっとうな公民館主事とか，まっとうな自治体職員に育ててやるんだ」,「公民館の担い手は自分たちだ」という意識を持っているため，公民館主事もおのずからそのような住民たちに巻き込まれないと仕事にならないのだという。このように「公民館に集う人たちの存在感が全然違う」[55]のが飯田の特徴だと言えるだろう。

では，なぜ飯田では，そのように特徴的な公民館制度を支える住民の主体意識がはぐくまれたのだろうか。前節でも述べたように，これは「公民館活動が先か，住民の意識が先か」という決着のつけがたい問題ではあるかもしれないが，ここでは飯田市の活発な公民館活動の背景に，それを可能にする条件があったと仮定して考察を進めていく。

まず，飯田市公民館成立の背後には，その母体となる組織，前身のようなものが歴史的に存在したことがこれまで様々に指摘されている。まず，公民館を支える住民自治の背景として，農業における水源管理や収穫作業，祭りなどを皆ですることで育まれてきた地域の生活のリズムがあるということが挙げられている[56]。

---

54 飯田研究会の概要報告書
https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/life/29494_57464_misc.pdf より（アクセス日：2016-2-7）
55 木下副館長インタビューより
56 『未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会記録』p.176

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

また，石神隆法政大学教授と牧野市長との対談[57]では以下のようなことが述べられている。すなわち，飯田では桑畑を作って生糸産業を興すことで，土地が肥沃でない中山間地のデメリットを克服したり，昭和 22 年の大火から復興を遂げたり，農業と工業の転換によって世界恐慌の荒波を潜り抜けたりと，様々な困難を現場の知恵で乗り越えてきた歴史を持っている。また，江戸時代には寺子屋が多数存在するなど，市民が自主的に学ぶ知の伝統が根付いており，それが現在の公民館活動にもつながっているという。

また，「明治時代には自由民権運動の台頭，大正デモクラシー期には読書文化の普及と図書館建設運動，青年運動の発展を受けた自主的運営による自由大学の創設，および飯田市のなかでも現在の竜丘地区で展開された自由画教育や生活綴り方教育という，一連の歴史的流れがあった」ともされる[58]。

このように，飯田型社会教育を支える公民館制度の背景には，農作業のような地域住民の協働の場や寺子屋に代表される「学びの風土」が存在したと言われる。

この点についてインタビューで尋ねたところ，これらの土壌が形成された一番の要因は飯田の「貧しさ」だったのではないかという回答が得られた。木下副館長によると，江戸時代，飯田は強大な大名の統治下になかったため不安定であり，「たぶん侍階級の人たちも畑仕事をやるような感じで」，士農工商の階級分離もあまり明確ではなかったという。そのような中で貧しさを克服していくためには，庶民の自助力を強化する必要があり，庶民の学ぶ場として寺子屋が多く作られたのではないか，とのことである。

このように，飯田では地理的な制約や経済的困難，災害などの地域における課題に対処していく中で，住民が自ら学び，協力して活動する土壌ができていったようである。

8.3.2 社会教育のさかんな他地域

インタビューの中では飯田市以外にも，公民館活動が活発でまちづくりがうまく行われている自治体に複数言及されていた。本項では，飯田型社会教育の成立条件を考える参考として，それら地域の特徴について見てみたい。

まず，地域再生の事例を多く出し，現在脚光を浴びている自治体として島根県が挙げられた。島根県では県が公民館を地域活性の重要拠点として位置づけ，政策的に公民館活動を活発化させているという59。全国的にみても，島根県の公民館における学級・講座数は 47 都道府県で 2 番目に多く60，公民館活動がさかんに行われていることが窺える。平成 19 年~24 年にかけては，県によって『実証！「地域力」養成プログラム』が実施され，毎年モデル公民館を選定して『公民館が培ってきた「地域力」醸成のノウハウ』を実証し，様々な地域課題の解消に役立てること

---

57 南信州・飯田フィールドスタディ　2015 より

58 八木信一「第 6 章　再生可能エネルギーの地域ガバナンス　長野県飯田市を事例として」諸富徹（2015）『再生可能エネルギーと地域再生』日本評論社 p.163

59 木下副館長インタビューより

60 文部科学省国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『平成 25 年公民館に関する基礎資料』https://www.nier.go.jp/jissen/book/h25/pdf/k_all.pdf より（アクセス日：2016-2-7）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

が図られている[61]。

また，島根県の中でも隠岐島海士町は特にまちおこしの取り組みで有名である。海士町は，島根半島から約 60km 沖合に位置する隠岐諸島の一島・中之島を町域する，人口 2400 人ほどの小さな町である。古くから農業・漁業を中心とした自給自足の社会を維持してきたものの，離島という条件ゆえに,「超過疎，超少子高齢化，超財政悪化」[62]という困難を抱えていた。例えば，町内唯一の高校･隠岐島前高校では平成 9 年に 77 人だった入学者数が平成 20 年には 30 人を切り，存続の危機にさらされた。そこで，島前三町村と島前高校が連携して立ち上げたのが「島前高校魅力化プロジェクト」である。地域住民や民間団体をも巻き込んで地域に根差したキャリア教育や学習支援に力を入れ，島留学で島外からの生徒も呼び込んだ結果，生徒数はＶ字回復を見せ，平成 27 年の入学者数は 57 人に達している[63]。

その他，公民館活動を土台として地域再生がうまく動き始めた自治体として，宮崎県綾町，愛媛県内子町，和歌山県田辺市が挙げられた。

綾町は，宮崎市から西に 20km の中山間地域に位置し，その約 8 割を森林が占めている。人口は 7200 人ほどで，就業者の 25%が第一次産業に従事する。『町民自身が「夜逃げの町」と呼んだ過疎の町』[64]であったが，自治公民館組織を支えに，工芸や有機農業でまちのブランド化に取り組み，自然と調和したまちおこしの先駆例となっている[65]。

内子町は松山市から南南西約 40km に位置する，人口 1 万 7500 人ほどの町であり，就業者のうち 2 割以上が第一次産業に従事する。過疎化・高齢化が著しい中で地域活性化を図るために，町並みやグリーンツーリズムなど多方面での取り組みを行っていることで知られている[66]。内子町においても,「やっぱり公民館が元気で，そこで育った人たちが地域づくりをやっている」という特徴がある[67]。

田辺市は, 和歌山県南部に位置する人口約 7 万 9000 人を有する。面積の約 9 割を森林が占め，古くから林業がさかんで，梅やみかん，紀州材などの特産品がある。交通の制約による産業振興面での不利や，広域な山間部に点在する集落に対する行政の非効率が課題として挙げられている[68]。その一方，第三セクターのまちづくり会社による商店街関連事業をはじめとする取り組みも

---

61 島根県 HP『実証!「地域力」醸成プログラム』
http://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/syougai/chiikiryoku/より（アクセス日：2016-2-7）

62 総務省「海士町（島根県）　地場産品を有効活用した新商品開発」『地域資源を活用したまちづくり』http://www.soumu.go.jp/main_content/000063232.pdf （アクセス日：2016-2-7）

63 島前高校魅力化プロジェクト HP　http://miryokuka.dozen.ed.jp/（アクセス日：2016-2-7）

64 国土交通省都市・地域整備局　「綾町　（宮崎県）」『まち再生事例データベース』
http://www.mlit.go.jp/crd/city/mint/htm_doc/db/147aya.html（アクセス日：2016-2-7）

65 綾町役場 HP　http://www.town.aya.miyazaki.jp/ayatown/（アクセス日：2016-2-7）

66 内子町 HP　https://www.town.uchiko.ehime.jp/（アクセス日：2016-2-7）

67 木下副館長インタビューより

68 和歌山県『県市町村の地域特性と地域課題　資料 2』
http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/020100/chokei/shichoson/shichoson01/tokusei.pdf より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

さかんに行われている。

上に挙げた地域はいずれも飯田市よりも小規模であり，前項で述べた，活発なまちおこしの活動には小規模なコミュニティが有効であるということの一つの裏付けともなっている。また木下副館長は,「都市的公民館は最近本当に苦戦しているんだけども，むしろ中山間の地域に残されている公民館が最近結構輝き始めているっていうか，地域の元気のもとになっている」と述べている。

8.4.3 飯田との共通性

ここで，飯田と前項で述べた地域の共通性から，活発な公民館活動に支えられた飯田型社会教育の成立条件を考えてみたい。

飯田や上に挙げた地域に共通していることとして 4 つの点が挙げられる。

まず，いずれも大きな都市から離れた場所に位置し，第一次産業が盛んな地域であるということである。この点について，インタビューの中でも「和歌山の田辺とか愛媛県の内子とか，あの色々なところに行ってみて共通しているのは，東京から遠いところが面白い，という。時間距離が遠いところが面白い。」と述べられている。8.3.1 で少し触れたように，自治的な組織には，共同の収穫作業や祭り，水源管理など農業経営にその起源を持つものも多い。古くから第一次産業を基盤としてきたために，農作業を通じた住民の自治・共助組織が形成されたこと，そして大都市から離れているために都市的な産業構造や消費文化の影響を受けにくく，農村共同体的側面が残されたことが公民館における住民活動の活発化につながっていると推測される。

次に挙げられるのが，教育を大切にする風土である。飯田市は民俗学者・柳田國男が養子に入った地であり，柳田自身，伊那谷の民俗学徒と交流していたという。一方和歌山県田辺市も，同じ民俗学者であり博物学者でもあった南方熊楠が後半生を過ごした地として知られている。また，田辺では昭和初期から共有の森林を伐採して上げた収益を教育のために使っていたという歴史があるという[69]。優れた民俗学者を生み出すだけの厚みのある文化や伝統を大切に受け継ぎ，教育を重視する風土が両地域には共通してあったと考えられる。また，内子町では，明治時代に『胆の内子商人』と呼ばれる優れた商人が県内外で活躍したと言われるが，それら商人を育てたものの一つとして挙げられるのが，明治 12 年に近隣の 3 小学校が統合して創られた化育校（内子尋常小学校）である[70]。

化育校は，町の有志が神戸にまで視察に赴いて研究設計したフランス風の建築で，建築申請時に県から規模縮小勧告を出されたという逸話も残る。この建物は現在改築を経て，児童館として活用されている。また，化育校で県下初めて結成された野球チームを母体に，郷土の将来を担う

（アクセス日：2016-2-7）

[69] 木下副館長インタビューより

[70] 愛媛県生涯学習センター,「えひめの記憶」「『ふるさと愛媛学』調査報告書」
http://ilove.manabi-ehime.jp/system/regional/index.asp?P_MOD=2&P_ECD=1&P_SNO=6&P_FLG1=4&P_FLG2=1&P_FLG3=1&P_FLG4=2（アクセス日：2016-2-7）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

人物育成の目的のもと「内子尚武会」が形成され，明治から昭和にわたって活動するなど，内子では化育校を一つの拠点として，「教育のまち」としての名が高まっていったようである。

ここに挙げたのは一部の例ではあるが，古くより教育を大切にする風土が根付いていることも，住民の自治活動が育つ上で大きな要因となったのではないだろうか。

そして何より，厳しい地域課題が存在するということも大きい。前述のように，飯田で学びの風土が醸成された背景には，その統治の不安定さや経済的な貧しさといった要素があった。また，飯田が災害や経済の変動など度重なる困難を乗り越えてきたことも先に述べたとおりである。飯田以外に挙げた地域でも，まちおこしの活動のきっかけとなっているのは，人口の流出や産業の衰退などの地域課題である。これについてインタビューの中でも，「課題が無いとこから始めるのは逆に難しくて」「危機がまずあって，それを危機感として捉えて，何とかしようっていう動きが起きていくっていう流れがまずはないと，うまいことその地域ってよくなって行かんと思う」と述べられている。さらに，木下副館長ご自身の職員交流の経験から，ヤマハのある浜松市やトヨタ自動車のある豊田市など，有力企業の法人市民税によって財政的に潤っている自治体では，普段から職員の間に切迫感が抱かれにくいため，リーマンショックなどの危機的状況への対応が取りづらいのではないか，ということも述べられていた。

そして，この地域課題に対する危機感が共有できるか否かという点で，重要になってくるのがコミュニティの規模である。木下副館長によると，住民の活動がいい形で動いていくためには「大きな規模よりも小さな規模，できれば本当に顔の見える範囲の中で活動ができるような状況が一番理想的」だという。その点，人口 10 万人の飯田市でも，「10 万人で(市民主体の活動を)やるのは無理」で，公民館活動が 20 の地区ごとに分かれて行われていることが成功の鍵だそうである。さらに言えば，地区分館のように，小さいところでは 100 世帯ほどで行われる活動こそが，飯田全体が「元気」であるための要であるとのことである。

第三の地域課題に関して，過疎化や高齢化など共通して見られた課題は，第一点目として挙げた，大都市からのアクセス性という地理的条件に発している部分も大きいと思われる。上に挙げた特徴に当てはまらない都市圏や人口の大きな地域においても飯田型社会教育が成立しうるのかについては，8.3.4 以降で検討したい。

8.3.4 飯田型社会教育移出の取り組み

ここまで，飯田市や他の公民館活動が活発な自治体の特徴から，飯田型社会教育が成立する条件を探ってきたが，本項では実際に飯田型社会教育を他地域に移出するための飯田市の取り組みを見ていきたい。

飯田では現在まで，県内外，また国内外をも問わず，飯田型社会教育のノウハウを普及させる取り組みが様々に行われている。それらをまとめたものが図表 2-8-1 である。主な取り組みとして挙げられたのは，JICA の事業を受託して行ったフィリピン・レガスピ市のプロジェクト，自治と協働を目指すまちづくり研究集会，長野県公民館職員交流学習会，解体新書塾の 4 つである。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

これらはどのようなきっかけで始まり，どのような展開を見せているのかを時系列に沿って以下にまとめていく。

この中で最初に始まったのは，意外にも国外に向けた取り組みである。飯田市は 1998 年から JICA 中部による途上国支援事業プログラムの研修地として，これまで 50 カ国 300 人以上の NGO 職員や政府関係者を受け入れている。実は，これはもともと飯田市の発意で始まったものではなく，PLSD（Participatory Local Social Development/参加型社会地域開発）理論を考案した大濱裕日本福祉大学教授が，同理論を体現している自治体として飯田市に注目したことがきっかけとなっている。PLSD 理論は，従来ともすれば一方的な援助の押しつけになりがちだった途上国開発において，地域の特性分析に基づき，住民のエンパワメントとそれを支える行政職員の意識改革を抱き合わせで行うことで，主体的な地域づくりを目指すものである。この理論の定義からすると，飯田市はまさに理想の場所だったのである。

この研修は当初，行政というよりも公民館を拠点に活動する市民が受け入れを担ってきたが，受け入れ関係者から「飯田の研修が本当に役に立っているのか分からない，直接相手国現場と関わることはできないのか。」という意見が出た。加えて研修に参加したレガスピ市の職員から具体的に自国でこの手法を用いた取り組みを行いたいとの要望が出たこともあり，フィリピン・レガスピ市の事業が始動することになる。

このプロジェクトでは，日本福祉大学が JICA の草の根技術協力事業を委託する形で，2005 年から 3 年間をかけて，フィリピン・レガスピ市の中でも特に貧困地帯と言われるプロ村，エスタンザ村の開発援助を行った。大濱教授が全体のアドバイザーとなり，大濱教授の理論を身に付けた現地在住の日本人がプロジェクトマネージャーとして，日常的なトレーニングを行うほか，年に一度，レガスピ市から飯田への研修団の受け入れと飯田からレガスピ市への訪問団の派遣も行われた。現地においてはまず，村に共通する課題を発見するためのワークショップが行われ，その結果見えてきた「飲料水の確保」という課題に対して，井戸と簡易水道の整備を設置し，村の共有財産として住民が管理運営を行うことが決められた。この実現のため，レガスピ市行政や地元大学，住民らによるテクニカルワーキンググループを組織することで支援体制を構築し，飯田研修において公民館活動や上久堅の住民による簡易水道管理の仕組みを学んだり，飯田からの訪問団と意見交換をしたりといった取り組みがなされた。その結果，飲料水確保の実現のみならず，プロ村では市の湾岸道路建設計画を住民の要望によって変更し，エスタンザ村では市に保育所建設を要望してそれを住民の話し合いの場としても用いるなど，住民の自治意識の高まりが見られるようになった。住民からは，このプロジェクトを通して「水道管理の技術だけでなく，物の見方や考え方を学ばせてもらえた」という意見が出た。また，支援に携わった飯田の関係者側にとっても，何もないところから課題を発見し，住民自治を実現させようとする村の姿に，戦後草創期の飯田公民館が重なって見え，改めて公民館の原点を見つめ直す好機となったという。

このように双方が学びあえる良い関係を今後も続けていきたいとの思いから，レガスピ市プロジェクトの第二弾が行われることとなった。これも同じく JICA の草の根技術協力事業の委託を

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

受け，2013 年 7 月より現在に至るまで進められている。テーマは「公民館づくりを通した住民自治の風土づくり」であるが，これは先のプロジェクトにおいて，飯田の公民館が単なる施設ではなく，学びや活動そのものを表していることに感銘を受けたレガスピ市側からの提案であった。当時のレガスピ市では，2006 年の超大型台風による被害と 2009 年のマヨン火山噴火によって住民 5 万人ほどが移住を余儀なくされており，避難民の集住地区では住民の出身がそれぞれ異なるために，地域コミュニティ形成において困難を抱えていた。そこで，住民活動の拠点として公民館を作り，管理運営を住民に担わせることでコミュニティ自治を育んでいくというのがこのプロジェクトの狙いである。2015 年 3 月にはレガスピ市タイサン地区において「KOMINKAN」が完成し，ここを拠点に住民自治が定着していくことが期待されている。このプロジェクトは信濃毎日新聞により報道され,「飯田型公民館の輸出」として広く知られるところとなった。ちなみに，後述する解体新書塾も，「（飯田型公民館の）海外輸出をやるなら国内でも」という市長のオーダーによって始まったものだという。

このように，途上国と互いに学びあう取り組みはフィリピン以外にも広がっている。
その一つが 2011 年に行われたブータン PLSD 研修と国民総幸福セミナーである。ブータンでは 1980 年から地方分権が進められており，JICA の地方行政支援の一環として，ブータンの行政職員らが飯田での研修を受けた。また，研修員側も飯田住民に対して「国民総幸福（GNH）」についてのセミナーを行い，双方学びあいの機会が持たれた。冒頭でも述べたように，物質的な豊かさよりも「心の内側から感じる幸せ」を重視する GNH の考え方[71]は，筆者が飯田の市民活動を見て感じた印象と非常にリンクする。実際，木下副館長もこの研修の際に「お互いに向かっていく方向が同じだ」とブータンの研修員から言われたそうである。

では次に，国内における飯田型公民館移出の展開について見ていきたい。

まず，2013 年 2 月 2 日から 3 日にかけて,「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会」が行われた。「公民館なんてもう古い，社会教育は死語だ」という論調が全国に広がる中，地域活性化センター（総務省所管）の運営する「飛び出す公務員ネットワーク」のメーリングリストで木下副館長が「飯田の公民館は面白いですよ」という書き込みをしたところ，では皆で飯田に行ってみようということで開催の運びになったのだという。集会には全国 22 都府県の自治体職員のみならず，文部科学省，総務省の官僚など約 170 人が集まり，飯田型公民館活動をモデルとした住民自治と行政の在り方について議論を行った。ここで牧野市長が感じたのが，飯田市の公民館と他の地域の公民館とのイメージの大きな隔たりである。飯田の公民館は他地域と異なる進化，いうなれば「ガラパゴス化」を遂げており，それによって他地域で地域自治に対して同じような志を持つ人とつながっていくことができないのは飯田の公民館にとってもマイナスではないか，というのが市長の問題意識であったという。そこで，飯田市と組んで公民館的・社

[71] 独立行政法人国際開発協力機構「幸福の国・ブータンと長野県飯田市の住民が学び合う」2011 年 8 月 23 日記事 http://www.jica.go.jp/topics/2011/20110823_02.html（アクセス日：2016-2-7）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

会教育的な考え方に基づいた地域開発に取り組む相手を見つけ，協働して自治体改革を進めていくために考え出されたのが解体新書塾である。

2014 年 3 月の 3 日間にわたって行われた集会では，「行政職員の力量形成」がテーマとして扱われ，職員へのインタビューを基調とする内容であった。これは，京都大学の諸富徹教授が，飯田市職員の持つ，住民と連携する力の土台は公民館にあるのではないかということに関心を寄せ，調査を希望していたためでもある。この研究会には松本市と兵庫県尼崎市が参加しているが，尼崎市は飯田に学んだまちづくりを尼崎においてどう実現するかを検討するため，2015 年 2 月に「自治と協働のまちづくり研究集会」の第 2 回を開催した。そして，まずは住民が主役でありながらも行政職員が一緒に汗をかくような機会を作ることが肝要だとして，同年 8 月 8～9 日に「みんなのサマーセミナー」事業を実施している。この事業では，住民なら年齢や職業を問わず先生になれる「学校ごっこ」というコンセプトで，住民自らが自由に 170 以上の講座を企画・運営した。木下副館長によれば，講座を開く住民は段取りから人集めまでを自身の責任で行い，人に教えられるように講座の内容についても学びを深めなければならないため，先生になることによって一番学ぶことができるのだという。このような，住民が主役になるイベントを出発点に，日常の地域課題を共助により解決するというゴールにまでどう辿り着くかが今後の尼崎市の課題である。

また，松本市も 2017 年 1 月に自治と協働のまちづくり集会の第三回を開催する予定であるという。

さらに解体新書塾は県外だけでなく，県内においても学びの広がりを生み出している。解体新書塾に参加していた長野県駒ケ根市の公民館主事が，公民館職員の自主的な研修会を長野県内で組織しようと発案し，翌年 1 月に「長野県公民館職員交流学習会」が開かれた。これも，第一回に参加した上田市職員が自身の自治体でも開催したいと名乗りを上げ，7 月に第二回が開催され，その後会を重ねる流れができていっているという。

このように，飯田の公民館の考え方を他地域に移転しようという解体新書塾を起点として，飯田で得た学びを自身の自治体でも活かし，自分たちの地域を変えていこうという「自治と協働のまちづくり研究集会」の動き，そして飯田の取組を参考に県内の公民館の在り方を変えていこうという「公民館職員交流学習会」の動きと，様々な形で飯田のスタイルが国内他地域へ波及しているのである。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

図表 2-8-1 飯田型社会教育移出の取り組み

時	取り組み	概要
H10-	JICA中部によるPLSD研修の受け入れ	日本福祉大学・大濱裕准教授が自身のPLSD理論実践の具体例として飯田市に注目し、始まった。現在までに発展途上国約60カ国から500人ほどが参加。
H17-19	フィリピン・レガスピ市における上水道の敷設と管理の経験を通した住民参加型行政の展開	JICA草の根技術協力事業を受託。 PLSD研修で講師をした市民の、本当に飯田の経験を伝えたことが役立っているのか、という問題意識から、直接相手国現場と関わる事業が始まった。大濱准教授がフィリピン大学院に学んだこともあり、フィリピンでの実施となった。
H25.2	未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会	総務省所管・地域活性化センターの「飛び出す公務員ネットワーク」メーリングリスト上での木下副館長の書き込みを機に開催。全国22都府県から自治体や国の職員らが170人余りが集った。
H25.7	フィリピン・レガスピ市における公民館づくりを通した住民参加型行政の展開	JICA草の根技術協力事業を受託。 H17-19のプロジェクトが、飯田側も飯田の公民館の原点を見直す好機となったことから、両市の関係を継続しようと行われたもの。公民館設置はレガスピ市の発案。
H26.10	解体新書塾～公民館・地域自治のあり様を見なおす自治体間共同研究～飯田研究会	H25の自治と協働のまちづくり集会において、牧野市長が飯田の公民館のガラパゴス化への問題意識を持ったことをきっかけとして、職員の力量形成をテーマに開催。
H27.1	長野県公民館職員交流学習会(駒ヶ根)	解体新書塾に参加した駒ヶ根市公民館主事の発意による自主的な研修。
H27.2	第2回自治と協働のまちづくりを目指す研究会・尼崎大会	自治と協働のまちづくり集会は当初、1回完結のつもりだったが、参加した尼崎市が自分の地域でのまちづくりの宣言をするために主催。
H27.7	長野県公民館職員交流学習会(上田)	第1回に参加した上田市職員が名乗りを上げて開催。
H27.8	みんなのサマーセミナー(尼崎)	自治と協働のまちづくり集会でテーマとなった「学びあえるコミュニティ」実践への第一歩として開催。
H29.1	自治と協働のまちづくりを目指す研究会・松本大会	開催予定
H29	長野県公民館職員交流学習会(飯田)	開催予定

8.3.5 飯田型社会教育移出の可能性

ここでは小括として，飯田型社会教育の他地域への移出可能性についてまとめたい。

8.3.4 では，飯田型社会教育が成立する条件として，4 点挙げた。しかし，それらの特徴を持たない地域では飯田型社会教育が成立しえないのかと言えば，決してそのようなことはない。さらに言えば，公民館が無ければいけないというわけでもない。

このことについて，解体新書塾にも参加した兵庫県尼崎市の例から考えてみる。

尼崎市は，兵庫県東南部に位置する中核市で，大阪市とも境を接している。人口は約 45 万人で第一次産業従事者割合は 0.3%に満たない[72]。その点では，農村的な小規模コミュニティとは対

[72] 総務省統計局『統計でみる市町村のすがた 2015』日本統計協会, 2015

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

極にあり，3 節で述べた第一，四の条件は満たさない。一方で，厳しい地域課題が多く存在するという点では，第三の条件に該当する。尼崎市では 1970 年代のピーク時には 55 万人を超えた人口が現在は 45 万人を割り込むなど人口減少が続いているのに加え[73]，競艇からの収入が減少している[74]こともあって歳入が減少し，福祉を縮小せざるを得ない状況に置かれてきたという。また，昭和初期から製鉄所や火力発電所が多く立地する工業都市となり，深刻な大気汚染や地盤沈下，水質汚染などの公害問題に悩まされてきた過去がある。そのほか，尼崎市の外国人比率は県内 50 市区町村のうち 8 位の約 1.8%に及び[75]，多文化共生も問題になるなど，まさに地域課題が山積みの状況である。

また，第二の条件に関して，以下の事実より，もともと社会教育への意識が低くはないことが推測される。大正 8 年には既に阪神間では初めての図書館が設置されている。公民館に関して言えば，1951 年に尼崎市立公民館設置条例に基づき，市内で初めて中央公民館が設置された。それ以降，公民館は地域に密着し，地域住民と連携して生活に根差した活動を展開すべきとの方針から，中学校区を単位に分館が整備されていった。1969 年に市社会教育委員会議の答申において示された，「最低，各行政区に 1 館，全市で 6 館の公民館，分館は 15 館が建設されているが，地域的偏在がみられ，老朽管の改築も併せ，半径 750m に 1 館を目指す」[76]という方針が現在まで受け継がれており，これは全国的にみても先進的なことであるという。

しかし，バブル崩壊以降は，地方財政が苦しくなる中で，公民館をはじめとする社会教育関連施設が見直しの対象になった。公民館においては，用務員制度の廃止，分館職員の削減，夜間・土日の管理委託，分館統廃合など相次ぐ改革を経て，現在は中央公民館，地区公民館 5 館，分館 16 館という体制になっている。こうして見ると，尼崎にも教育を重視する素地が無いわけではないが，必ずしも学びの拠点が上手く機能しているとは言い難いようである。飯田では人口 10 万人に対して本館･地区公民館併せて 21 館があるが，尼崎市では人口 45 万人に対して 6 館であり，到底「顔の見える範囲での住民活動」の拠点として機能できる規模ではないのである。

しかし，上記の課題に対して，自治と協働のまちづくり研究集会では一つの解決の可能性が示されている。

> *「人」であったり，「人のつながり」であったりというそこのところが，たまたま飯田の場合は公民館という形で機能しているところかなというふうに理解をしています。〈中略〉それが NPO であっても良いと思いますし，社会福祉協議会であってもいいと思いますし，商店街の再開発という切り口であってもいいのかもしれま*

---

73 尼崎市『統計でみるあまがさき（2015）』
http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/sogo_annai/toukei/035469.html（アクセス日：2016-2-7）
74 尼崎市（2009）『尼崎市競艇事業経営改善計画』（平成 21～25 年度）
http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/dbps_data/_material_/_files/000/000/029/207/keieikaizenkeikaku.pdf（アクセス日：2016-2-7）
75 国勢調査 2010 に基づく。日本☆地域番付「兵庫県の外国人比率ランキング」
http://area-info.jpn.org/FornPerPop.html（アクセス日：2016-2-7）
76 尼崎市社会教育委員会議『市における公民館計画について』

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

せんが，そんな形で地域社会に関わっていく人を育てる，育つ，そういう場であれば，同じようなことが起こるのかなというふうに思っています。〈中略〉飯田はたまたま公民館ですが，他の地域では公民館でなくても良いし，そういう視点で飯田の公民館というのを見ていただければなと思います[77]。（佐藤健飯田副市長）

つまり，飯田型社会教育が成立するには，公民館の仕組みというよりは，そこで活動する人を育てることが重要であるという。公民館はあくまで「一つの切り口を作っていく」[78]ものであり，住民が活動していく場が公民館でなければならないわけではないのである。実際，尼崎では地区レベルの活動の場として公民館ではなく，社会福祉協議会を考えるという方向で検討が進んでいるそうである[79]。

ただ，ここで 2 つの疑問が生じる。1 つは，公民館のような地縁的なコミュニティでなく，NPO をはじめとする志縁的なコミュニティであっても，地域に根差す住民自治の発展に寄与しうるのかということ，2 つ目に，その「公民館的」な活動を担う住民の意識はゼロから育てうるものなのか，ということである。

1 点目について，インタビューでは以下のように述べられている。

両方あってもいいと思うんだよね。最後は自分の，まあ最後は，年をとると死んでいく場所なので，そういう生涯を送る場所としては自分の地域というのは大事だと思うんだけども，そこに至るプロセスは，場合によってはもう世界に飛び出しちゃったって，くらいの方がいいんじゃないかなと。いろんな経験の中で蓄えた引き出しを作っておいて，そういうとこを活かす場所として，終の住処の地域に戻るっていう。そういう生き方でいいのかな，と。

活動を行う場が必ずしも自身の生活する地域ではなくとも，自分が関心を持てる活動に参加し，多くの人との交流を持つことで，自分の価値観も豊かになり，最終的に身の回りの課題にも主体的に取り組んでいる素地が育まれていくということなのだろう。

2 点目についても，1 点目と重複するが，住民の自治意識を育てていくことは可能である。飯田型社会教育は，決して意欲旺盛な住民や自治的な風土ありきのものではないのである。これについては，解体新書塾でもはっきりと述べられている。

飯田の公民館活動は，自ら積極的に活動に関わっていくというものではないことがポイントとなる。当初は「お付き合い」「お互い様」といった，他者から請われたり持ち回りで回ってくる消極的な意識で関わったとしても，活動の中で地域のために何かをしたいという意識の組み換えが起こるケースも少なくない。これはいう

---

77 東京大学大学院教育学研究科「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会　未来を拓く自治と協働，飯田公民館の地平を超えて～成熟社会・日本における。持続可能な地域・コミュニティに必要なものをあらためて探る 2 日間～　記録」p.172
https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/10383.pdf（アクセス日：2016-2-7）
78 木下副館長インタビューより
79 木下副館長インタビューより

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

なれば「遠慮がちな社会関係資本」と言える[80]。（荻野亮吾・東京大学教育学研究科特任助教）

インタビューでは具体例として，最初は公民館からの依頼で天文講座の講師を引き受けた高校生が，翌年は自ら申し出るようになったことや，必修授業で仕方なく地域人教育の活動に参加した生徒が活動の楽しさに目覚めていく様子が語られた。このように，活動を通して地域における自分の居場所や役割を見出し，後付けの形で主体的になっていくケースが実際に多いのだという。まずは外発的なきっかけとして住民が主役になれるような活動を作りだし，そこへ巻き込んでいくことから住民の自治意識は育っていく。前項で述べた尼崎のサマーセミナーもまさに，このような趣旨のもとで行われたものである。

ここまでは，第四の条件であるコミュニティの規模を克服できるか，という点から考察を進めてきた。では，都市から離れた農村的な共同体という第一の条件についてはどうであろうか。これについては，自治と協働のまちづくり研究集会での大槻大輔氏の発言が一つの示唆を与えている。

飯田に来て僕が最初から疑問だったのが，特に農村地域において，決めていくそういうみんなで住民自治がみたいなことはやりやすいんですけれども，それが都市地域で活かせるのだろうかということでした。〈中略〉分科会では，やはりみんなで管理をしなければならない資源，そういったものが媒介になって自治が進むというんでしょうか，実際人と人とのつながりが生まれる，そんな話がありました。

第三分科会で言いますと，直払いで頂いたお金をみんなでプールして，地域の人のために，地域の農業のために使っていく，そんな仕組みを作ることによって人々が一致したという話がありました。

第二分科会ですと，フィリピンの人たちにそういうことを教えて，フィリピンの人がそれを持ち帰ってやったということでした。これを考えると，今の日本の都市においても，たとえば公園だとか海岸だとかの公共空間は都市の住民にとってもすごく関心があるわけです。

そういったところの管理をどうやっていくかということで，行政が NPO や地域の団体に委託してその中で地域で運営していくことでうまく自治が回っているようなケースを聞いたことがあります。

飯田の取り組みは決して農村地域だけのことではなくて，都会でも活かせることでありますし，また世界でも活かせるということでありました。（大槻大輔　総務省人材力活性化・連携交流室長，下線引用者）[81]

ここまでをまとめると，飯田のような社会教育が盛んな地域には，一定の歴史的・社会的，あるいは地域的な共通性が存在した。その中で，第一に挙げられた，大都市から離れた農村共同体という条件については，管理資源の工夫によって，また第四条件の小規模なコミュニティについ

---

80 南信州・飯田フィールドスタディでの配布資料『飯田研究会の記録』p.17

81 東京大学大学院教育学研究科「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会　未来を拓く自治と協働，飯田公民館の地平を超えて～成熟社会・日本における。持続可能な地域・コミュニティに必要なものをあらためて探る 2 日間～　記録」p.176
https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/10383.pdf（アクセス日：2016-2-7）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ては，活動を作りだす主体の工夫によって克服しうることが見えてきた。第二の教育を大切にする風土という条件に関しても，そのような風土は地域に固有なものではなく，活動を通して住民に働きかけることで醸成される可能性があることが示された。最後に，地域課題についてであるが，程度に差こそあれ，地域課題が存在しない地域など無いと考えられる。もし，無いとすれば，それは課題が課題として共有されていないだけであり，レガスピ市のプロジェクトのように，まずはそれを明らかにすることが必要となる。日本全体が超少子高齢化という問題を抱え，今後東京などの大都市でさえ高齢化の急速な進行と人口減少が見込まれる中で，人口縮小への対応という地域課題は普遍化していくだろう。飯田型社会教育はそのような状況に立ち向かう上で重要な手掛かりを与えてくれるはずである。

8.4 将来的応用性

8.4.1 飯田型社会教育のめざすあり方

ここからは，冒頭で述べた第 2 の疑問の考察に移る。

繰り返しになるが，筆者は飯田を訪れた際，飯田型社会教育が住民の福祉を高めようとする GNH 的な理念を持つと感じる一方で，あまり賑わいがあるとは言えない市街地の様相や観光 PR の印象の薄さ[82]から，経済振興との両立性や財政面でのコミュニティの持続性について疑問を持った。果たして飯田型社会教育の目指すコミュニティのあり方とは一体どのようなものか。そして，今後予想される社会変化，特に少子高齢化や過疎化，リニア新幹線開通による地域社会の変化に飯田型社会教育は立ち向かっていけるのか。これらについて本節で考えていきたい。

まず，飯田型社会教育の理念と GNH 概念との親和性は前述の通り，インタビューの中でも言及されていた。ここで改めて，ブータンの GNH の考え方についてまとめてみる。

ブータンでは物質的成長は必ずしも幸福につながらないとされるが，両者は決してトレードオフのものとして捉えられているわけではない。「繁栄と幸福」は後者のほうが上位に位置づけられつつも，ともに国家の目指すゴールとされ，物質的発展と精神的発展が相互補完的に強化されていくものと捉えられている。GNH の柱は，①公正で公平な社会経済の発達，②文化的，精神的な遺産の保存，促進，③環境保護，④しっかりとした統治の 4 本からなり，このコンセプトは自給自足や貧富の格差減少，政治の改善，国民の強化などの良い効果をもたらしているとされている[83]。

木下副館長によれば，飯田において，経済的繁栄や交流・定住人口の増加はあくまでも手段で

---

[82] 実際に，国土交通省観光庁が北海道富良野市，三重県志摩市，長野県飯田市の住民意識に関する調査をしたところ，飯田市の観光マインドは地域全体的に低いと結論付けられている。
国土交通省観光庁（2011）『自律的な観光産業の形成に向けた調査・分析 報告書』
http://www.mlit.go.jp/common/000163397.pdf より（アクセス日：2016-2-7）

[83] ブータン政府観光局
HPhttp://www.travel-to-bhutan.jp/about_bhutan/%E5%9B%BD%E6%B0%91%E7%B7%8F%E5%B9%B8%E7%A6%8F%E9%87%8F より（アクセス日：2016-2-7）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

あって，最終的な目的はその地域に暮らす人々がいきいきと暮らしているかということである。住民がいきいきと元気に暮らしている状況がまずあれば，そのような魅力的な人や活動，「本物の暮らし」による吸引力が生まれ，他地域の人や若い世代の参加を呼び起こす状況が生み出されていくという考え方がその背景にはある。このように，「繁栄」が「幸福」により二次的に生み出されていくという考え方は，ブータン第四代国王の「豊かであることが必ずしも幸せではないが，幸せであると段々豊かだと感じるようになる」という発言[84]と非常に重なるところがある。

また，解体新書塾に参加し，飯田型社会教育への賛同者とも言える尼崎市顧問の船木氏も，同様の理念を持っていることが以下の記事から伺える。

> *これを船木氏は「お饅頭理論」と呼んでみせる。「外側を包む薄皮だけをきれいに整えて，おいしそうでしょう，と見せるのは，広告的手法によるシティセールス。でも，あんこも一緒に食べて美味しくなかったら二度と口にしないですよね。尼崎に来て，遊んで，暮らしてみたいと思ってもらうには，出会う市民 の笑顔が輝く，日常の政策によるまちづくりを進めてこそ」とそのこころを説く。*
>
> *「尼崎版のシティプロモーションは，かっこいいコピーや宣伝文句ではなく，嬉しい・楽しい・ありがとう，があふれる毎日を私たち（市役所）が支えることこそが，最大の武器なんです」（下線引用者）*[85]

実際に，飯田型社会教育の目指すものが，経済的持続性や発展という側面と矛盾するものでないことは，いくつかの点から示すことができる。

九州大学の八木教授によると，飯田市では市公民館と地区館の予算が行政負担であるものの，分館予算に占める住民からの会費負担の割合が高く，自治公民館としての分館の活動は住民負担により維持されているという[86]。また，公民館主事を経験した市の職員が行政組織に戻って政策や事業を実施する際に，公民館活動での知見が有効に発揮されている[87]。これらのことから，飯田の社会教育の仕組みは行政コストを直接的･間接的に削減する効果を持っていると推測される。また，最近では八木教授が，公民館のような現場機関が強化されている自治体のほうが行財政的な健全性が保たれるのではないかという仮説を示しているという[88]。より詳しく言うと，飯田市

---

84 ブータン政府観光局 HPhttp://www.travel-to-bhutan.jp/about_bhutan/%E5%9B%BD%E6%B0%91%E7%B7%8F%E5%B9%B8%E7%A6%8F%E9%87%8F より（アクセス日：2016-2-7）

85 「博報堂から尼崎顧問へ　船木成記が目指すブランディング」『事業構想』2015 年 2 月号

86 八木信一「第 6 章　再生可能エネルギーの地域ガバナンス　長野県飯田市を事例として」諸富徹・編著『再生可能エネルギーと地域再生』p.164-165

87 同上 p.167

88 木下副館長インタビューで伺った。また，『飯田研究会の概要報告書』p.7（https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/life/29494_57459_misc.pdf）においても，『地方財政は地域における共同需要を満たすために存在するが，飯田型の公民館はそこから取りこぼされたニーズを，住民との関係の中で拾い上げていく機能を持っていること，また住民とのやり取りの中でその人にとっての大事なこと（wants）を発見し，自分たち自身で満たしていくことを，それぞれ担っているのではないだろうか』と言及されている。この仮説についてはこれから実証研究に

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

では他地域に比べて人件費や扶助費が少ないが，その背景には，多くの人員が現場に配され，本庁規模が小さいために人件費が少なくて済んでいることや，行政による医療・福祉サービスが無くても生活していけるコミュニティができていることがあるのではないか，ということである。また，補助費が多いことに関して，地域の中の団体がそれぞれに行う自治活動に対して市が資金を投入しているためと解釈することができる[89]。

このように，地域住民の問題解決能力を高め，現場が自身の裁量で資金を使えるような仕組みを整えることが財政的な持続性の点でも有効であるということが飯田市の事例において実証されれば，飯田スタイルが他地域へと良い影響を与える追い風になっていくだろう。

また，飯田市中心市街地の空き店舗の多さについてインタビューで伺ったところ，近年の空き店舗の増加は否めないものの，民間のまちづくり会社と行政が両輪となって活性化に取り組んでおり，他地域に比べれば，10 万人規模の都市としては健闘しているということである。たしかに，飯田中心市街地の店舗数，従業者数，売り場面積は 1997 年から 2007 年の 10 年間で約 4 割減，年間販売額は 5.5 割減，非常に厳しい状況にあるが[90]，一方で 2013 年の住民意識調査では中心市街地活性化を大切だと思う人の増加や市民のニーズの多様化が確認されている[91]。これは，これまでの市街地活性化の取り組みに対する評価であり，「コミュニティづくりや地域資源にこだわった店舗展開，新たなライフスタイルに対応する魅力ある個店群を持続的に創出していくことは〈中略〉新たな市民ニーズを創り出している」[92]と解釈され，新たな商業展望を開くものとして期待されている。また，1995 年以降減少傾向にあった中心市街地の歩行者通行量は 2005 年に底を打った後，増加に転じており，特に 2009 年から 2011 年の伸びが著しい[93]。これについては，2010 年の飯田駅前観光案内所「結の駅」オープン効果も数値の押し上げにつながったと考えられるが，平日の通行量が増えていることから，りんご並木等でのイベントを機に中心市街地への愛着を深めた市民が，日常生活の中で市街地を訪れる機会が増えたと分析されている[94]。

以上のことから，地域住民の「幸福」や「暮らしやすさ」，「地域への愛着」など情緒面への働きかけを重視した飯田型社会教育の理念は，経済的な持続性・自立性の確保と矛盾するものではなく，むしろ今後の社会の在り方の新たな可能性を示すものであると結論付けることができる。

8.4.2 飯田市の課題と取り組み

それでは，前項で述べたような飯田型社会教育に根差したコミュニティは，将来の社会変化に耐えうるものなのだろうか。ここで，飯田市の今後の課題として，特に少子高齢化とリニア新幹

入るそうである。

[89] インタビューおよび八木教授の研究概要に関する資料より

[90] 長野県飯田市（2014）『第 2 期飯田市中心市街地活性化基本計画』
https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/18172.pdf　p.18 より（アクセス日：2016-2-7）

[91] 同上 p.30

[92] 同上 p.61

[93] 同上 p.21

[94] 同上 p.51

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

線開通への対応が挙げられる[95]。

インタビューで飯田の一番の課題は何か，と伺ったところ，次世代へのバトンタッチであるとのことであった。飯田市は人口減少時代における持続可能な地域づくりのために，進学や就職で地域を一度離れても帰ってくる「人材サイクル」構築に力を入れている。その取り組みの一つとして挙げられるのが，「地育力」[96]を活かした心豊かな人づくりである。地域を離れるまでの，特に高校時代までの間に，ふるさとへの愛着や誇りを持てるようにすることが，将来的に飯田に人材が帰ってくるサイクル作りにつがなるとされる。

この次世代の育成については，公民館も大きく二つの取り組みに関わっている。一つは，飯田 OIDE 長姫高校商業科の地域人教育，もう一つはカンボジアスタディーツアーという高校生講座である。地域人教育は「地域人」すなわち「地域を愛し，理解し，地域に貢献する人材」の育成を目的として,飯田 OIDE 長姫高校と飯田市,松本大学のパートナーシップのもと行われている。具体的には，1 年次に講義・市内フィールドスタディ，2 年次に講義・りんご並木まちづくりネットワークへの参加と地域イベントの運営サポート，3 年次に地域商品開発・販売や買い物弱者支援としてのリヤカー販売など，地域を知るところから地域課題の解決の実践まで，段階的なカリキュラムが組まれている。ここでは，公民館が高校生と地域をつなぐ窓口となって，地域の課題を把握できるような場所を作り，高校の教師がそれを商業教育に落とし込んでいくという連携体制が取られている。木下副館長によれば，商業科には商業を志してというよりも，学力面の問題から進学してくる生徒が少なくないため，最初は地域人教育の授業へのモチベーションが高くない場合が多いという。しかし，仕方なく始めた活動であっても，地域の中での自分の役割や居場所が感じられたことで意欲が高まり,「飯田が故郷っていう選択肢が確実に増えるだろうなと思う」と木下副館長は語っている。また，公民館側からしても，高校生が活動を通して「ガラッと変わる」のが目に見えて分かるのは面白いらしく，最近では進学校の生徒も含めて高校生と連携して講座などを行うことも増えているのだという。

ただ，商業科の生徒たちは就職か進学かに関わらず，もともと地元志向が強く，半数は卒業後に地元で就職する[97]。そのため，自分が学んでいることを地域と結びつけやすいのに対して，普通科の生徒たちが地域のことを学ぶ動機づけをするのは難しい。そこで取り組まれているのが，カンボジアスタディツアーである。これは，飯田市在住の高校 1，2 年生対象で，一週間のカンボジア訪問を通じて自分の地域や生活を振り返り，将来を考えるという講座で，参加者は「7 割型進学志向」だそうである。ここで注目すべきは，カンボジア訪問前の半年間にわたり，カンボ

95「平成 27 年度至誠経営の方向について」『 南信州・飯田フィールドスタディ 2015』p.3-4 において，「リニア元年」と『人口減少，少子化，高齢化の問題に対する「地方創生」』について述べられている。

96 南信州・飯田フィールドスタディでの配布資料『地方創生に向けた人材サイクルの構築』によると,地育力とは,「飯田の資源を活かして,飯田の価値と独自性に自信と誇りを持つ人を育む力」とされる。

97 南信州・飯田フィールドスタディでの配布資料 浅井勝巳『地域人教育の取り組みについて』より

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ジアを見る「物差しを作る」ために飯田について学習するということである。地域と海外という一見関係のなさそうに見える二つがどうして結びついているのか。その背景には，生まれ育った地域，すなわち自分のルーツやアイデンティティをしっかりと理解していることで海外でも自信を持ってグローバルな活動をすることができ，またグローバルな視点を持つことで自分たちの地域を多角的に評価することができる，という考え方がある。実際，ふるさと学習の始まりは，飯田風越高校国際教養科にある。生徒が海外留学の際に，ホームステイ先のホストファミリーから飯田のことを尋ねられ，満足に答えられなかった経験から，地域学習の必要性が認識されたのだという。

インタビューをした際，ちょうど飯田 OIDE 長姫高校の生徒が中心となって中学生向けのキャリアフォーラムが企画されているところであった。まず，自身が進路選択のさなかにいる高校生がキャリア教育を行うという発想に驚かされたが，そのプログラムの中でも，飯田市で国際的な活動をしている社会人の話を聞くというプログラムが組み込まれていた。

このように飯田では，「地域を愛し，理解し，地域に貢献する」人材を育てる教育が，決して地域内部に閉じたものとしてではなく，海外を含め自分の視野を広げることと，自分のルーツである地域に立ち戻って自身の将来を深く考えるということが相互に結びつきながら行われているのである。特に普通科の生徒の場合は必ずしも飯田市に戻ってくるとは限らないが，これらの活動は，人生の大きな岐路である高校時代において飯田を自分の原体験として持つことができるという意味で，非常に重要だということである。

しかし，飯田市外の大学へと進学した生徒が帰ってくるにはやはり，学歴に見合った就業先があるかが問題となる。飯田市はすでに「帰ってこられる産業づくり」のために，地域活性化プログラムや地域産業クラスター形成などの施策を打ち出しおり，地元で新たな仕事をつくるアントレプレナーシップの育成が一つの打開策とされている。地元での起業という選択の前段階には，やはり地域に戻りたいという動機が必要だが，木下副館長は以下のように語っている。

一つは戻ってくる，戻ってきてる人たちの様子を見ていて共通している傾向は，親が楽しく暮らしている。農業で後継で戻ってくる人たちも増えていて，皆さんも農家宿泊したよね，農家民泊を受け入れている農家には後継ぎが戻ってきている。農業のような一次産業は斜陽で，こんな仕事を継いだって収入も少ないから都会に出たほうが良いと親が自分の仕事を否定的に子どもに伝えていた時代から，農家宿泊のようなことをしながら，いろんなところから来る人たちと交流することが自分にとっても楽しみな暮らしをしているっていう親を見ていると，子どもたちがやっぱり自分の親のような暮らしをしたいなぁという選択をしていくっていうのがあって。だから親自身が子どもに自分の背中を見せられるような活動を地域の中でできていると，ちゃんと子どもも戻りたいっていう考え方が自分の中にあって，あとは仕事があるかとか，自分で仕事を作ってみようとかいう選択肢に進むわけで。一番土台のところでね，大事なのは自分の，子どもたちの周辺に手本になる人たちがきっちり存在しているかどうか，だと思います。高校生教育は，かっこいい大人をどうやって高校生に結びつけるかっていうのが一番ポイントになると思います。とにかくそういう人たちをどんどんどんどん高校生

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

に見せていくっていうことを公民館側はかなり意図してやっている。（下線引用者）

これに関連して，飯田市公民館では定年退職者を対象に地域レジェンド養成講座を実施している。これも，周囲から「こんな人になりたい」と思われる人になろう，という目的で行われているものである。公民館は，今後高齢化がますます進んでいく中で，高齢者自身が生涯現役で社会貢献活動を担う状況を作る取り組みにも，次世代の育成と同様に力を入れようとしている。飯田市の場合は公民館活動を比較的若い世代が中心となって担っており，高齢者も現役時代のそうした経験の積み重ねから，自分がやるべき役割に対する意識が高い人が多いのだという。こうした高齢者の力を活用し，活動を生み出していくことで，少子高齢化を逆に可能性に変えていくこともできるのではないか，というのが現時点での展望だそうである。

次にリニア新幹線開通についてである。私事ではあるが，筆者の出身地である金沢では昨年北陸新幹線が開業し，今まさに観光客増加による地域の変化やストロー現象などへの懸念が高まっている。リニア開業においても同様のことが懸念されるが，飯田型社会教育はそれに対応できるのであろうか。木下副館長によれば，一部で経済効果を期待する声がある一方で，行政側に「リニア万歳」という考えは全くなく，むしろ「もっと反対があってもよいのでは」という声も聞かれるという。ただ，リニア開通を既定路線で考えた上でリスクに対処しなければという意識はあるものの，このような大きな外部要因を経験したことが少ないため，「具体的に言うとまだイメージがわかない」「整理できていない」というのが木下副館長の実感だそうである。

しかし，展望が全く描けないわけではない。というのも，一つには，飯田の公民館が新しくやって来た人たちが地域にデビューする入り口の機能を果たすことができるからである。木下副館長自身も，20 年前に新しい地区に移り住んだ際，地域の運動会などに参加していると 1 年後には公民館の役員を委嘱され，その後は中学校の PTA 会長に選ばれるほどになったという。公民館活動は単なる「お役」ではなく，活動自体が楽しんでできるため，新しくその土地に来た人のこともうまく巻き込み，地域に根付づかせていくことができるそうである。

とはいえ，木下副館長が危惧するのは，リニア開通によって新しく飯田に来る人よりもむしろ，飯田から人が出て行ってしまうストロー現象のほうである。これについては，仕事場である都市圏と暮らしの場である飯田という二つの生活の拠点を持つ「二地域居住」などの新しい暮らし方の提案をしていく必要性が挙げられていた。また，前述した高校生教育のように，若い世代が地域の良さを知り，地域への愛着を持って，主体的に新たなことに取り組んでいけるよう上の世代が上手くサポートしていく必要性があることも述べられていた。

以上のように，飯田では，地域への愛着と柔軟な発想を持った若い世代を地域の中で育てていくことが，今後の超少子高齢化やリニア開通などの社会変化を乗り切る土台となると考えられている。次世代育成の効果はすぐに目に見えて現れるものではないが，そこに暮らす一人ひとりの生き方・感じ方の充足を第一義的な到達点とし，地域で人を育てていこうという飯田型社会教育

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

の理念は，今後の社会変化にも対応しうるものであろう。さらに言えば，それは神野（2015）がポスト福祉国家のビジョンとして掲げる「人間国家」，すなわち人間を「手段」ではなく，相互に目的とする参加型社会の在り方[98]とも通じるものがあり，今後の社会の新たな価値規範ともなりうるものではないかと感じさせられた。

8.5 おわりに

ここまで，飯田型社会教育が他の地域においても実現しうるものなのか，また将来の社会変化に耐えうるものなのかを考察してきた。結論としては，どちらも Yes である。当初は飯田の社会教育への懐疑から始まった本研究であるが，飯田市の取り組みについて調べれば調べるほど，それら取り組みの背景に，人を目的とする一貫した理念や価値観があることが分かり，気づけば飯田型社会教育の魅力に取りつかれてしまったように思う。振り返ってみると，飯田の社会教育に対して，言葉は悪いがある種の「胡散臭い」印象を拭えなかったのは，明確な輪郭を持たない飯田型社会教育独自の「かたち」に原因があるように思う。

「必ずしも公民館である必要はない」「それぞれが楽しいと思う活動をすればよい」「必ずしも飯田にいなくてもよい。どんどん外へ目を向け，海外に飛び出したって構わない」―その根っこに飯田があれば。

インタビューや様々な資料に触れる中で，飯田型社会教育はこのようなメッセージを発しているように感じられた。人を一つの場所や活動に縛り付けることなく，それぞれの自由を尊重する。それぞれがそれぞれのやり方で飯田につながるあり方を認める。これが飯田型社会教育における「つながり」のかたちであり，その根底には「地域の前に人がある。一人ひとりの生き方が充実することこそが大切である」という理念がある。

そして，その「つながり」は今や飯田を超えて他の地域へと波及しつつあり，社会の今後の在り方を考える上でも重要な示唆を与えている。

最後に，お忙しい中快くインタビューにご協力いただいた，飯田市公民館副館長の木下巨一さんに深く感謝の意を表したい。

98 神野直彦（2015）『「人間国家」への改革』NHK 出版

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第Ⅲ部　多彩にひろがる“飯田”のつながり

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 1 章　川路通学合宿―地域の方々のお世話になることを成立させる「つながり」

末光 翔

1.1　はじめに

全国の市町村で，通学合宿という取り組みが行なわれている。通学合宿とは，地域の公民館・集会所・青少年施設・学校など宿泊可能な施設で，異年齢の子どもたちが共同生活を行ないながら通学することを指す。衣・食・住といった生活体験を通じて，基本的生活習慣の確立や日常生活に必要な生活技能を習得し，子どもの「社会力や生きる力の向上」を目的としている。また，子どもたちの活動を支援する立場で地域の大人たちの参画を促し，家庭・地域の教育力の向上を期待するという[99]。

近年の長野県内での実施状況を見ると，長野市や上田市など県の中心的な市町村に加え，阿南町や阿智村，豊丘村や大鹿村など飯田市を取り囲む下伊那地域の町村にて多く実施されていることがわかる[100]。その中，飯田市内で通学合宿が実施されているのは川路地区の小学校（川路小）一か所のみである。今年度で 2 回目の実施となり，来年度の実施準備も関係者の間で進められているという。

この川路地区の通学合宿は，昨年度の 9 月体験プログラム（南信州・飯田フィールドスタディ）にて新たに紹介された飯田の教育実践事例であり，今年度の 8 月体験プログラムでも引き続き紹介が行なわれた。特に川路地区の通学合宿は，地域の多様な立場の方々が実行委員会のスタッフメンバーとして運営に参加していること，子どもの成長だけでなくスタッフ養成も視野に入れて実施していることが特徴的である。

人口 1880 人ほどの，飯田市内の小さな自治区である川路がどのようにこの新しい事業を継続していけるのか。それを考える上で，当初は昨年度の調査報告で課題に挙げられていた，「新 5・6 年生保護者など新しいメンバーに新規立ち上げ時の委員会メンバーの思いをどうやって理解・共有してもらうか」「川路地区内部へどのように説明し，保護者の不安を取り除くか」といった論点[101]について考えたいと思っていた。

---

99 長野県ホームページ『通学合宿の情報』入手先 URI: http://www.pref.nagano.lg.jp/jisedai/kyoiku/kodomo/shisaku/tugakugassyuku/tugakugassyuku.html（アクセス日：2016-2-15 ）

100 長野県ホームページ『平成 26 年度 長野県内における通学合宿実施結果調査票』入手先 URI: http://www.pref.nagano.lg.jp/jisedai/kyoiku/kodomo/shisaku/tugakugassyuku/documents/h27tsugaku-jisshikekka.pdf（アクセス日：2016-2-15 ）

101 東京大学教育学部社会教育学研究室『未来（あした）へつむぐ飯田らしさ 「東京大学教育学部社会教育学演習」2014 年度飯田市社会教育調査実習報告×東京大学体験活動プログラム「南信州・飯田フィールドスタディ」報告』2015 年 3 月, p.231-233.

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

一方でそれらの問いは，今回保護者の方々へのインタビューを進めていく過程で，「川路地区には，既に保護者が地域の事業のことを理解し，安心して参加していけるような基盤があるのではないか」という問いに変わっていった。この問い方は，川路地区における地域ぐるみの事業が今後も継続していく可能性を示すと同時に，「なぜ川路地区では通学合宿が実施できたのか」という問いにつながるものと思われる。以下，川路通学合宿の内容と今回のインタビュー調査で得られた示唆について述べていく。

1.2 川路通学合宿の概要

平成 27 年度で二回目の実施となる川路通学合宿は，6 月 9 日（火）～13 日（土）の 4 泊 5 日，天龍峡温泉交流館にて行われた。川路小の 5・6 年生希望者 22 名を対象に行われ，うち 6 年生男子 3 人，6 年生女子 11 人，5 年生男子 1 人，5 年生女子 7 人である[102]。事業のねらいとして「親と子の自立」「多様な人との交流，つながりづくり」「生活リズム，生活習慣の立て直し」が掲げられ，地域の多様な立場の方々が通学合宿実行委員会に参加して準備･運営が進められた。地域からは主任児童委員（前および現），まちづくり委員，料理クラブ（食生活改善推進協議会），地区有志。小学校からは校長先生，教頭先生。保護者からは PTA 会長（前および現），5・6 年生学年代表。公民館からは公民館役員，館長，主事，保健師が通学合宿実行委員会に参加している。また当日スタッフには，地域の方々32 人（館長，主事，保健師，お楽しみ会講師除く）が参加している。スタッフの経歴は，元公民館役員や元小学校 PTA 会長，元小学校用務員など様々である。また，昨年度小学 6 年生時に川路通学合宿に参加した現中学生の中に，今年度通学合宿のボランティアとして参加した生徒がいたという。

また当日の通学合宿では，1 日目から 4 日目にかけて学校生活後の「宿題の時間」「夕食の準備・食事・片付け」「入浴」「振り返り」「就寝準備」等を共同で行ったほか，2 日目と 5 日目に地区の方を講師に招いたお楽しみの時間を設け，それぞれそば打ち体験と木製メダル作りを行なっている[103]。

1.3 調査の概要

1.3.1 インタビュー調査の概要

インタビューを依頼した当初は，「昨年度から始まったばかりの通学合宿が次年度以降も引き継がれていくためにどんな工夫が行なわれ，これからどんな工夫が必要か」を検討することを調査の目的にしていた。その上で，今年度川路地区の通学合宿に参加された保護者の方々に，「川路地区の通学合宿への理解がどんなきっかけで，どのように深まって（変化して）いったのか，それ

---

[102] この数字は，もともとの女子の割合の高さが反映されたものだという。また平成 26 年度は同時期に同交流館にて，川路小 5･6 年生希望者 27 名を対象に行われた。うち 6 年生男子 7 人，6 年生女子 7 人，5 年生男子 3 人，5 年生女子 10 人で実施された。

[103] 以上の概要の内容は，「第 9 回飯田市安全大会発表資料」川路通学合宿実行委員会 座長：A さんの資料を参照した。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

を通して関わり方に何か変化があったかどうか」という問いを中心に聞き取りを行ないたいと考えた。

そのような関心のもと川路地区の公民館主事に依頼し，今年度の川路通学合宿に小学5年生の子どもを参加させた保護者の方々への聞き取り調査をお願いした。結果，2 名の保護者の方々がインタビュー調査へのご協力を引き受けていただき，2016 年 1 月 24 日の午後 14 時，川路地区公民館にて1時間半のグループインタビューを行なった。川路通学合宿実行委員会座長のAさん，川路公民館主事のIさん，参加児童保護者のUさん，Eさんの4名の方々にインタビューに参加していただいた。なお，参加児童保護者のうちUさんは義理の父母が祖父母の代からの川路出身者であり，Eさんは飯田市周辺の町村出身者であることがインタビューの最中にわかった。

1.3.2 保護者アンケートの概観

以上の問いについて考える上での基礎情報として，平成 27 年度川路通学アンケート集から保護者がアンケートに記入した内容を参照する。川路通学合宿に子どもを参加させた保護者向けのアンケートには自由記述の項目が5つあり，それぞれ「1．通学合宿後のお子さんはどんな様子ですか？」「2．保護者のみなさんの目から見て，この通学合宿を通してお子さんが得たものは何だと思いますか？」「3．この取り組み全体を通して，保護者のみなさんが感じたこと，得たものなどを教えてください」「4．来年の通学合宿に向けて，ご意見などあれば教えてください」「5．最後に1つお聞かせください。あなたが『こういう人になってほしい』と思うお子さんの姿は，どのような姿ですか？」である。

今回の報告書では，子どもの成長に関する内容以外の記述が想定される「3．この取り組み全体を通して，保護者のみなさんが感じたこと，得たものなどを教えてください」への記入事項を大まかに分類していくことにする。(複数項目の内容が書かれていた場合，それぞれ別々に加算していく)

保護者アンケート16名分の記入事項を分類した結果が以下である。

・子どもの成長・自立に関する実感：8名
(「団体行動の大切さや友達との絆など充実した合宿だったと思う」等)
・子どもを送り出す不安の解消：1名
・親としての自立・子ばなれの実感：5名
(「親も子供を信じる気持ちが強くなりました」等)
・支えていただいた地域の方々への感謝・思いの実感：8名
(「色々な方々が協力してくれて，川路のあたたかさや子供を大切に思ってくれていることが実感できました」等)
・親同士のつながり：1名
・その他（あまり得られなかった）：1名

アンケートに記入した保護者のうち，約半数の保護者がそれぞれ，子どもの成長・自立に関する実感を川路通学合宿で一番の得られたものと捉え，あるいは地域の方々への感謝の気持ちや地

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

域の方々の思いへの実感を明らかにしていることがわかる。

1.4 保護者の川路通学合宿への姿勢

1.4.1 二人の保護者の川路通学合宿に対する姿勢

二人の保護者，U さんと E さんが川路通学合宿について知ったのは，平成 26 年 4 月，自分の子どもがまだ 4 年生（参加する前の年）だった頃だという。当時は 4 年生の子どもの親として，川路通学合宿が 5，6 年生対象に行う旨の話を聞いていた。二人の保護者の方に当時の川路通学合宿への印象を伺ったところ，最初から「子どもをこの合宿に行かせたい」という気持ちがあったことが語られた。

U さんの場合は，U さんが小学生の頃にキャンプで一泊するなどの経験があったことから，夕飯を作ったり，布団を敷いて消灯時間を決めて寝たり，といった生活を同世代の近所の子ども同士でするのは必要な経験だと思っていたという。その考えもあって，合宿についても子どもが行けるべき条件が満たされている場合は行くのが良いのでは,「子どもは行くものだ」という思いがあったとのことだった。U さんの場合は，むしろ子どもが通学合宿に行くのを迷っていたため，事前に人の家に泊まる練習をさせたり,「近所の子が行くよ」といって子どもを通学合宿へ焚きつける側に回ったりしていたという。また，座長の A さんはこれを受けて,「(川路通学合宿は）お母さんの後押しがないと実現しなかったと思う。」とコメントしている。

E さんの場合も通学合宿には前向きだった。E さんは仕事で忙しい関係で子どもにしてあげられることが限られてしまっており，そのため親がしてあげられないこと，例えば子どもがちがう場所でちがう経験を楽しむ，といったことをさせてあげたいという気持ちがあったという。今までなかった行事なので多少不安はあったが，個人的にはそのようにいいことだと考えており，子どもも行きたいという意志があったため川路通学合宿に行かせた。自分の身の回りのことができるのか心配だったけど，そこも勉強で覚えてくるのだろう，と考えたとのことだった。

このように，川路通学合宿に子どもを参加させる保護者の思いとしては，川路通学合宿のスタッフがしっかり面倒を見てくれるか，子どもが家の外できちんと寝泊りできるか，といった不安よりも，子どもにできるだけ貴重な経験をさせてあげたいという気持ちの方が川路通学合宿への参加に強く働いているように思われた。

1.4.2 インタビューの論点の切り替え

一方で今回の二人の保護者の場合，すでに川路通学合宿への参加に前向きな気持ちから出発しているため，スタッフとの関わりを通した川路通学合宿への思いや理解の進展，という切り口ではあまり大きな示唆を得られないように思われた。

そこで今度は，U さんの述べた「行くものだと思っていた」という言葉に注目し,「なぜ公民館の事業に対して『(子どもは）行くものだ』と当たり前に思うようになるに至ったのか」という問いに切り替え，インタビューを行なった。上記のこの問いへの回答は,「川路地区には，保護者が地域の事業のことを理解し，安心して参加していけるような基盤が既にあるのではないか」と

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

いう「1.1 はじめに」で述べた仮説への一定の答えを与えるものではないかと考えている。

1.5 保護者の川路通学合宿への姿勢に影響を与えているもの

1.5.1 公民館と小学校とのつながり

まず，上記の問い「なぜ公民館の事業に対して『(子どもは) 行くものだ』と当たり前に思うようになるに至ったのか」への一つの答え方として，「川路地区では公民館と小学校が密接に連携を取っているので，公民館の事業もあたかも小学校の行事のように感じられるのだ」というものが考えられた。そのため，そのようなつながりの是非について保護者の方々や実行委員会座長の A さんに伺った。

保護者の U さんによると，川路地区の小学校では地区の食生活改善推進協議会の方々が小学校の料理クラブに来て，小学 4 年生向けに長芋を使ったお饅頭など，地元の食べ物を教えていただけるとのこと。そしてその料理クラブの講師が知り合いのおばあちゃんである，といった出来事が多くあるとのことだった。それはほかの講座も同様で，例えば小学校の絵手紙のクラブなどに地元の人が手伝いによく来ているという。

また公民館主事の I さんも，小学生向けの川路公民館事業である通学合宿や絵手紙教室，人権講座や学友林[104]などの相談で学校と連絡を取る機会が多く，保護者にとっては「何の用事かはわからないけど，よくいる」存在なのだという。

一方で保護者の U さんが上に述べた料理クラブは，平成２７年度川路まちづくり委員会総合資料を拝見した限りでは平成２６年度川路公民館事業報告の欄に掲載されていない[105]。おそらく，食生活改善推進協議会が公民館を経由せず，直接小学校とコンタクトを取って料理クラブの講師を務めているものと思われる。また，座長の A さんが事例に挙げた小学校 1・2 年生向き凧作り教室も，教育育成委員会が公民館とは別に活動し実施していることが分かる[106]。

つまり川路地区では，地域の方々が食生活推進協議会や教育育成委員会といった公民館とは別のチャンネルから小学校と積極的に関わり，クラブの講師やボランティアを務めるというパターンが多かれ少なかれ存在するように思える。そしてそのことについて，保護者の側から見ると，「講師をしていただいている方が公民館経由かそれ以外経由か」などは気にせず，「地域のどの方が来るか」ということを気にしているようにも思われた。

また，川路通学合宿の実行委員会の場合，児童委員やまちづくり委員，校長先生，教頭先生，公民館主事，保健師など様々な立場の人が集まっており，純粋な公民館事業として扱うのでは規模が大きいようにも思われた。

---

104 川路小学校の裏山を使い，小学生や幼児が草花探しや落ち葉拾いなどの体験活動に使えるようにした敷地。公民館が地区の人と一緒に整備を行なっている。

105 川路まちづくり委員会『平成２７年度川路まちづくり委員会総合資料』平成２７年４月２５日（土）, p.23-28.

106 *Ibid.* p.22.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

1.5.2 二人の保護者それぞれの地域とのつながりの遍歴

そこで，前項にて保護者 U さんに地域の知り合いの方が多いように感じたため，川路通学合宿の実行委員会名簿の一部（名前のみ伏せられたもの）を保護者 U さんに見ていただき，実行委員会スタッフのうち保護者 U さんの知り合いの方がどれほどいるのかについてお伺いした。その結果,「実行委員会の人はほとんど知っている人。何かで顔を見たことがあって，実行委員会の挨拶のときに名前の紹介があったので，顔と名前が一致した」という返答をいただいた。

これには驚いたが，実は保護者の U さんは三世代同郷家庭だった。祖母が地区の役員などを何年もやっているため，その関係で地域の人を見ていたのかも，と U さんは振り返っている。これに対しては座長の A さんも,「以前 PTA の会長をやっていた人は，保育園の頃から（U さんが）いつも顔を見ていた」という発言で U さんの考えを後押ししていた。そのほか，子どもを川路の保育園に預けることでできた地域のつながりや，自身が児童クラブに入っていて地域の方々と関わって来ていたことを振り返っている。

U さんが川路通学合宿について,「(子どもは）行くものだ」と思っていたのは，以上のような背景が考えられるものと思われる。つまり今回の U さんのような保護者の場合，川路通学合宿のスタッフのほとんどが既に顔見知りであるため，安心して子どもを任せやすくなる。また同時に地域の方々のご厚意を快く引き受け，子どもを合宿に参加させようとする傾向が見られるのではないかと思われる。

E さんの場合は，夫婦ともに他地区から川路地区に引っ越し，また子どもも他地区の保育園に預けていた。そのこともあって，川路地区の知り合いは U さんに比べると少ないという。一方で E さんは，子どもを通じて組合のお付き合いや行事に参加するようになって，交流を持たせていただけるようになったと振り返っている。またこれについては座長の A さんも,「よその地域から来た新しい家族でも，児童クラブや保育クラブの役員をやってくださったり，お祭りや運動会などでも積極的に参加していただけたりする家族が多い」という印象を語っている。E さんは地域に関わる姿勢として,「地域に住まわせていただいているから，そういう行事には参加させたいし，子どもにとっても大事なことだと思う」「親は知らないことが多いけど，子どもを通じていろいろと覚えることがたくさんある。地域になじむにはいい機会だと思う」のように，自分の子どもを通じて地域にお世話になって行く様子が見られた。そしてそのように地域にお世話になるのは通学合宿からではなく，子どもを児童クラブで学校時間外に預かってもらってからだという。以下，E さんのインタビュー中の発言を引用する。

> *「通学合宿の以前から，子どもが小さいうちから地区で関わりを持たせてもらって。児童クラブで学校の時間外で子どもを預かっていただく。そこから子どもってスタートしたんですけど。組合の長もやらせていただいて地区の方々とは交流をもてていたので。その延長線に今回子どもが小学校 5 年になったということで，じゃあ通学合宿というのがあるから，参加になるんだな，と言う形で。あえてそこがスタートっていう形ではな*

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

いんですよね。前から来てるんだけども，改めてその年齢になったから，もちろん出席をしてみようという」

このように，他の地区から移り住み川路の知り合いが少ない人にとって，保育園や児童クラブは子どもを通して地域にお世話になる貴重な機会であり，通学合宿も地域にお世話になる延長線上の出来事としてEさんに受け止められていた。またそのことは同様にほかの保護者についても，地域にお世話になる延長線として通学合宿が受け止められうる，ということを示唆している。

以上を考えると，川路地区の通学合宿は三世代同郷家族にとっては馴染み深いメンバーが運営する安心できる地域教育プログラムとして。他の地区から移り住んできた家族にとっては，子どもを通して地域にお世話になり地域に馴染んでいくための機会の一つとして。それぞれ通学合宿に子どもを参加させる動機を高め，参加のハードルを下げることを可能にする環境が川路という地域には備わっているように思われた。

Uさんのようなタイプの家族とEさんのようなタイプの家族とでは，現在川路地区内では「3対1」の割合で住んでいるということである。一方で座長のAさんによると，近年川路地区にUターンする家族が一定数あり，これから他の地域から引っ越してくる家族が増えるかもしれないとのことだった。中央高速道路のインターまでの道も整備され，駅にも近いため好条件なのだという。また，子どもの人数もここ10年近く減っていないとのことだ。

川路地区のような規模の小さい地域に引っ越してくるという時点で，地域に関わるという事についてはある程度前向きに考えるのではないかとは思われる。一方で今後Eさんのような立場の家族が今後増えていくと考えると，Eさんのような家族が地域に馴染み，地域における役割をこの先担っていく上で，どのような取り組みが必要なのか問われてくるように思う。保育園から児童クラブ，その先に通学合宿がありその先に･･･という形で，地域の子どもを各成長段階の中でもれなく支えていく取り組みをすることができればあるいは，家族の子どもを通じた地域参加もよりしやすくなるのではないだろうか。

1.6 考察

1.6.1 保護者の今後の地域への関わり方について

座長のAさんに，今後川路通学合宿を続けていく上で，保護者を巻き込んで手伝ってもらおうという気持ちはあるか伺った。Aさんによると保護者のみなさんにこんなに応援してもらえるとは思っていなかったが，川路通学合宿を始める前のPTA会長が実行委員会に残ってくれたり，また応援のボランティアの方に子どもを参加させたお母さん方が出てきたりと，「すでに巻き込んでしまっている」というお返事をいただいた。また，ほかのPTAの役員の方たちや，子育ての済んだ，Aさんにとっては小中学校の先輩や後輩にあたる方たちにもやっていただいて，そういうメンバーでだんだんお祭りのように引き継いでいくものなのだ，ということを今実感しているとい

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

う[107]。

一方で大人のボランティアは子どもの安全・体調への責任という意味でも，時間的拘束という意味でもハードルが高く，誰にでもできることではないという。そもそも今回のEさんが子どもを通学合宿に参加させた理由の中でも,「自分が仕事で忙しい中，子どもにいろんな経験をしてもらいたい」という思いが語られている。子育て中の親も仕事を続けることが求められる昨今において，地域のお世話にはなりこそすれ，地域のボランティアとして活動するのは少々荷が重い場合が多いように思われる。

そうした場合,子どもの親はどのように地域に参加すればよいのか。もちろんEさんのように，地域の役職に進んで就くのもよいと思う。一方で今回の調査を踏まえて考えると,「子どもを通して地域にお世話になったように,子どもを通して地域に貢献する」と考えるのはいかがだろうか。つまり，通学合宿を経験したことのある中学生や今後の高校生が，親が地域に参加しにくいのに代わって通学合宿のボランティアとして参加する，という塩梅である。特に川路地区の通学合宿は天竜峡交流館や公民館で実施するため，ボランティアとして参加するための地理的なハードルが低い。子どもの教育にもなることを考えると，悪くはない考えではないだろうか。実際，今年度も中学生や高校生のボランティアが来てくれたという（座長のAさんによると，小学校で川路通学合宿に参加した児童・生徒が，将来大人になり親となって出てきてくれるのが理想であるという)。

1.6.2 地域のつながりをつくる川路の地区制度と歴史的な背景

最後に，本文中で述べられていた「地域の役員」に関連する事項について，またそれが川路地区で機能している背景について，仮説レベルであるが言及する。

まず川路の地区について，飯田市内の地域自治区である川路地区は，その中でもさらに2区から8区に地域が区分される。1区あたりの世帯数は20,30件から150件までまちまちであり，その中で役職をまわしている。区ごとに，川路まちづくり委員会という地域自治組織の中にある各委員会の役職を出すことになっている。各委員会とは，地域振興委員会，生活安全委員会，健康福祉委員会，環境保全委員会，教育育成委員会，公民館の6つであり，それぞれさらに複数の役職を出すことになっている[108]。当然，1区あたりの世帯数の少ない区だと，少ない人数で役職を回す必要がある。通常こういった話は町村民への重い負荷として語られるが，座長Aさんによれば川路の場合，ある一定の年齢に来て役職や公民館職の依頼が来たとき，都合が合えば快く引き受ける人が多いという。またそのような文化のおかげで，Uさんのような川路出身の郷土家族が地域の方々へのアンテナを強く張ることができたのではないかと思われる。

そもそも，なぜ川路地区では，このような助け合いの精神に近いものが存在しているのか？そ

---

[107] このことに関して座長のAさんに,「何年か経ったら，実現したらいいという提案が，立ち上げる準備委員会で何度も話が出ていました。でも2年目から，前年の参加の保護者の方たちと下の学年の保護者の方とのコミュニケーションがすでにできていたことが，スムーズに2年目が実施できた要因のように思います」というコメントを後ほどいただいている。

[108] *Ibid.* p.56-57.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

れを考える上で,戦前戦後期の川路地区の状況が参考になると思われる。座長のAさんによると，この川路地区は川で浸食した地域であるため，川に堤防ができる昭和 20 年までは川の氾濫にさらされやすい地域であったといわれる。水害で家が浸かってしまい，使える家が足りず部屋を貸し合うしかなかった。助け合わないとやっていられなかったという。また戦後も貧しく厳しい環境だったこともあり，助け合おうという地元意識が強いのかもしれない，とのことだった[109]。

1.7 おわりに

今回の川路通学合宿の調査では，子どもを合宿に参加させた保護者の意識の変化から調査を出発し，最終的には保護者と実行委員会とが信頼関係を形成するための元々の地域のつながりに注目することになった。そして示唆されたこととして，川路出身の保護者は既に地域の方々とのつながりが強く，通学合宿への志向性が高いのに対し，他の地域出身の保護者もそれはそれで，地域に馴染むためにも通学合宿に進んで参加する可能性が高い，というふうに結論づけた。課題としては，どうしても一部の熱心なボランティアの方に運営の負担が回ってしまうことや，それらに対して保護者の方々は簡単には運営側に参入しづらい，という点が挙げられる。

また今回の調査では地域とのつながりが比較的強い保護者 2 名（E さんも下伊那出身のため，地域のつながりとの親和性が高いことが後々わかった）の方々にインタビューに参加していただいたため，今回の調査結果が必ずしも川路地区のどの保護者にも当てはまるとは言い難い。一方で今回の 2 名の保護者の異なる境遇や志向性，また共通点は象徴的であり，今後も川路通学合宿や川路の様々な取り組みに子どもの保護者を巻き込んでいく上で示唆に富むのではないかと思われる。

とはいえ，川路通学合宿について調べ足りていないことは非常に多い。スタッフやボランティアの活動参加への意識，動機なども今後深堀りしていく必要があるし，何より子どもの成長のあり方について実際に現場に入って調査していく必要があるだろう（通学合宿の時期の都合で，この報告書ゼミの枠組みでは実施が難しいのが悩ましいところであるが･･･)。

今回聞いていてもっとも興味深かったのは，実は最後の戦前戦後期の水害の話である。この歴史背景の話は，川路のみならず飯田の方々の精神性を考える上で欠かせないトピックであるように思われた。当時の水害を経験された方も川路通学合宿のスタッフにいらっしゃるということで，今後また川路通学合宿の調査に入る場合，テーマとして検討してみると非常に面白いのではないかと思う。

最後に，今回のインタビュー調査に関して詳細に及んで手配していただきました，公民館主事のIさま。大変示唆に富むお話を聞かせて頂きました，実行委員会座長のAさま，保護者のUさま，Eさま。インタビュー調査にご協力いただき，大変ありがとうございました。またもしよろ

109 これについて座長のAさんから，「それは飯田市全体で言えることだと思う。余談ですが，長野県が教育県だったと言えることにつながるかもしれない」とのコメントを後ほどいただいている。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

しければ，通学合宿の取り組みや川路の歴史についてなど，お話をお聞きできればと思います。ぜひぜひよろしくお願い致します。

引用文献・資料，Web ページ

川路まちづくり委員会『平成２７年度川路まちづくり委員会総合資料』平成２７年４月２５日（土），p.23-28.

東京大学教育学部社会教育学研究室『未来（あした）へつむぐ飯田らしさ 「東京大学教育学部社会教育学演習」2014 年度飯田市社会教育調査実習報告×東京大学体験活動プログラム「南信州・飯田フィールドスタディ」報告』2015 年 3 月, p.231-233.

長野県ホームページ『通学合宿の情報』入手先 URI: http://www.pref.nagano.lg.jp/jisedai/kyoiku/kodomo/shisaku/tugakugassyuku/tugakugassyuku.html（アクセス日：2016-2-15 ）

長野県ホームページ『平成 26 年度 長野県内における通学合宿実施結果調査票』入手先 URI: http://www.pref.nagano.lg.jp/jisedai/kyoiku/kodomo/shisaku/tugakugassyuku/documents/h27tsugaku-jisshikekka.pdf（アクセス日：2016-2-15 ）

川路通学合宿実行委員会 『第 9 回飯田市安全大会発表資料』

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第 2 章　地域福祉と「つながり」

浅沼　百合美

2.1　はじめに

少子高齢化が進み福祉サービスのニーズが拡大・多様化する現在，地域社会では行政による福祉サービスの充実のみではなく，住民間の「つながり」や「住民参加」といった地域住民の主体的な力による福祉の充実を期待する地域福祉の推進が求められている。しかし現代では近隣住民とのつながりは減少しており，また高齢者や生活保護世帯など福祉サービスや「つながり」が必要であるとされる層に限ってより地域社会において孤立しやすい現状が生じている。

夏に訪問した際，飯田ではりんご並木ネットワーク，音楽祭，人形劇などの様々な活動を通じ，住民間の「つながり」や「住民参加」によるまちづくりが成立しているように感じられた。しかしこの時に感じられた住民間の「つながり」が果たして飯田市内のどの範囲まで及ぶのか，つまりこのような「つながり」は飯田の核となり得るような積極的・主体的な住民間のみでなく，本来「つながり」が必要であるはずの独り暮らしの高齢者の方，生活保護世帯，母子世帯など地域において孤立しやすい人々にも及んでいるのか，疑問に感じた。そこで，このような飯田市に存在すると思われる「つながり」は，現在そして未来に全国的に求められている地域福祉における「つながり」と同じ効果をもつのか，つまり飯田における「つながり」は地域におけるセーフティネットとしての機能を果たし，地域福祉の理想とされる共助を実現することに貢献しているのか，今回調査を行うことにした。

2.2　先行研究と調査課題

2.2.1　先行研究

飯田市における地域福祉について調査する前に，一般的な地域福祉の意味や目的，課題や理想像について先行研究や厚生労働省の報告書を使い調査した。

地域福祉とは，全国社会福祉協議会によると“それぞれの地域において人びとが安心して暮らせるよう，地域住民や公私の社会福祉関係者がお互いに協力して地域社会の福祉課題の解決に取り組む考え方”と定義されている。また安井（2008）は，地域福祉について“従来のタテ割りの社会福祉制度では対応できない生活問題の地域的な広がりに応じて登場した最終的な対応である”と定義し，“社会保障制度の一環であり，同時に住民の参加と自治を基盤にしたまちづくりの一環である”と指摘している。

地域福祉の目標について，牧里（2008）は“住民として暮らし，受け入れられ，住民として地域社会に参加し，貢献することを実現するための生活ネットワークづくり，最後の支えとしての暮らしのセーフティネットづくり”であると考えた上で，“このような社会的ネットワークを１枚のタペストリーにたとえるならば，専門的・行政的サービスにつながるタテの人間関係と，隣人・

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

住民として迎えてくれる地域住民と連帯するヨコの人間関係が縦糸と横糸のように編まれなければ，暮らしのセーフティネットも生活ネットワークも機能しなくなってきている”と主張している。また，厚生労働省は，地域福祉の意義について“地域における『新たな支え合い』（共助）を確立すること”を挙げ，この共助について“住民と行政との協働の下に行われるもの”だとしている。そこで，今回はこの「タテの人間関係」と「ヨコの人間関係」に注目し，この二つの要素とその要素間のつながりから地域福祉について考える。

まず「タテの人間関係」，つまり専門的・行政的サービスにつながる人間関係について述べる。地域福祉の政策主体は国，都道府県，市町村であり，国が地域福祉政策を方向づけそれに沿い都道府県が市町村を支援する形となるが，地域福祉の現場である地域社会にて実際に地域福祉を展開し行政や専門的なサービスへと住民をつなぐのは，市町村と市区町村社会福祉協議会となっている。この二つの機関は両者とも専門サービスに住民をつなぐ役割を持つが，市町村が公的部門であるのに対し社会福祉協議会は民間部門であるため，その役割に違いが存在する。厚生労働省の地域福祉に関する報告書によると，市町村の役割は公的な福祉サービスを適切に提供するとともに，財源の確保や地域福祉計画の策定と計画への住民参加の仕組み作りなど，住民の地域福祉活動の基盤を整備する役割があるとされている。これに対し社会福祉協議会の役割は，民間組織でありながら公共性もあわせもち，広く住民や社会福祉関係者と連携しながら地域の実情に即して様々な事業や活動を展開する役割を持つとされている（佐甲，2008）。このように社会福祉協議会は民間部門の代表であり地域福祉推進の中核団体とされる一方，行政からの実質的なコントロールが強い状況が見受けられるとされる。しかし地域福祉推進には公民の協働が不可欠であるとされるため，今後の課題として，公的部門と民間部門が対等平等なパートナーシップを築き批判的協力関係を樹立していくことが重要であるとされる（井岡，2008）。

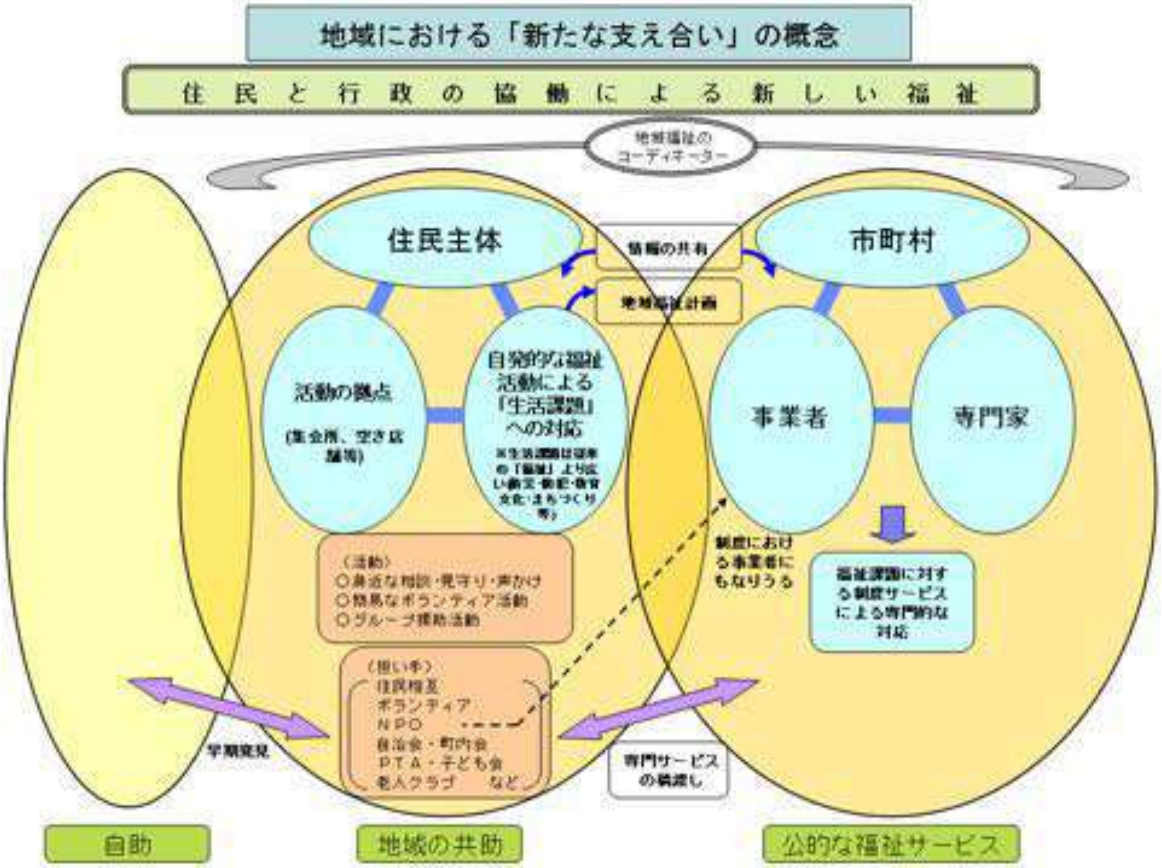
次に「ヨコの人間関係」，つまり地域住民どうしの連帯について述べる。厚生労働省によると，地域福祉の推進においては，地域の生活課題を発見することやその解決のための働きをするなど住民主体を確保することが条件となっている。そしてこの住民主体を確保するには，生活課題を発見するための環境，情報を関係者間で共有する仕組み，住民が活動するための場所などが必要だとされている。また住民間のネットワークに関して諸富（2013）は，住民間の信頼関係や互恵性が豊かであるほどネットワークは強固なものとなるとしたうえで，住民の社会参加はこの信頼関係や互恵性を育成する一方，住民間の信頼や互恵性の十分な蓄積は住民の社会参加を促すと述べている。これらより，住民の連帯と住民主体を進めるためには，場や仕組みといったハード面と信頼や互恵性といったソフト面の両方が求められていることがわかる。

最後に，「タテの人間関係」と「ヨコの人間関係」の連結について述べる。厚生労働省は，地域福祉の留意事項として“多様性を認め，画一化しないこと”を挙げている。また諸富（2013）は地域が持続可能な発展を遂げるための要件として，トップダウン型の意思決定に依存するのではなく，住民の力に依拠してボトムアップ型でまちづくりを行っていくこと，そして住民の内発的な力を活用することで画一性から抜け出し地域の固有性を高めることを挙げている。これらより，

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

タテとヨコの関係，公と民の協働の方法は，ヨコが積極的にタテへと働きかけること，タテはヨコの自由な動きを尊重することが理想とされていることがわかる。

ここまでのことをまとめ，また地域福祉の理想とされる図として，厚生労働省研究報告書「地域における「新たな支え合い」を求めてー住民と行政の協働による新しい福祉ー」より抜粋したものを示す。



図表 3-2-1：地域福祉の理想

2.2.2 課題設定と調査方法

先行研究を踏まえ，今回の調査では「タテの人間関係」と「ヨコの人間関係」，そしてこの二つの連結から飯田の地域福祉について見ることに決め，調査の課題を三つに分けた。まず一つ目にタテについて，飯田市役所と飯田市社会福祉協議会に注目し，この二つの機関が飯田市の地域福祉において果たす役割と両者の関係性について明らかにする。二つ目にヨコについて，飯田市の地域住民間には「つながり」があると言えるのか，またその「つながり」は住民間でのセーフティネットの役割を果たしうるのかを明らかにする。そして三つ目にタテとヨコのつながりについて，飯田市役所，飯田市社会福祉協議会，地域住民といった関係者がどのように連携して地域福

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

祉を進めているのかを明らかにする。

今回の調査では，飯田市役所福祉課地域福祉係の職員の方と飯田市社会福祉協議会地域福祉担当の職員の方に対し，飯田市での地域福祉の取り組みについて聞き取り調査を行った（日時：2016年1月15日13時～15時，場所：飯田市役所）。また民生児童委員協議会会長会の見学と飯田市民生児童委員の方々との交流を通じ，飯田市における民生児童委員の意味について伺った。

2.3 縦糸―飯田市と飯田市社会福祉協議会のつながり―

飯田市福祉課地域福祉係の方と飯田市社会福祉協議会の地域福祉担当の方への聞き取り調査，飯田市民生児童委員の方々のお話より，飯田市での地域福祉のあり方について考える。まずは飯田市役所と飯田市社会福祉協議会について，両者の役割と連携，そして住民との関係から見ていく。

2.3.1 それぞれの役割

飯田市と飯田市社会福祉協議会が「福祉のまちづくり」を実現するために締結した「福祉のまちづくりパートナーシップ協定」によると，市の役割は以下のように示されている。

6　市の役割と責任

（1）市は市民協働による行政運営の効果を最大限発揮できるよう努力します。

（2）市は「福祉のまちづくり」の実現を図るため、市社協が推進する地域福祉活動や他の民間事業者が参入しない福祉サービスに対して、必要な支援を行います。

（3）市は市の行う施策と事務事業のうち、「福祉のまちづくり」に関係するものについて、必要に応じて、情報の収集と提供を行うとともに、提言を行う機会を確保し、その内容の反映に努めます。

（4）市は、市社協との協働により実施した「福祉のまちづくり」に関係する施策と事務事業、その他の活動実績について市民に公表します。

（5）市は、「福祉のまちづくり」を総合的に推進するため、市社協をはじめとして、市民及びまちづくり委員会や事業者、各種団体、医療関係者等との連携・協力体制の強化に努めます。

図表 3-2-2：飯田市の役割

インタビューでは，地域福祉の事業を推進する際の主な市の担当部分は予算や計画立案だと語られており，特に地域の活動者に対する補助金など予算に関することについては，行政という立場でできる部分とできない部分が存在すると語られている。またこの計画立案の際に重要なこととして，ニーズの把握が挙げられている。高齢化率，農業地帯かどうかなど，同じ市内であっても地域特性によって必要な地域福祉の種類（買い物支援，住民の見守りなど）は変わってくるため，現状とニーズを把握できないと制度設計や財政設計ができない。そのためニーズ把握は市の役割の一番初めにあるものだと言える。ニーズを把握する方法としては，市が直接アンケート調査を行うことが中心だが，社会福祉協議会や民生児童委員を通じて実態調査を行う場合や，民生委員との定例会後や民間の事業者，まちづくり委員などとの話し合いの場にて把握していく場合

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

もある。

社会福祉協議会の役割についても,「福祉のまちづくりパートナーシップ協定」に以下のように示されている。

5　市社協の役割と責任

（1）市社協は、自らが行う「福祉のまちづくり」の活動について、幅広く市民に周知し、市民が参加できるようにします。

（2）市社協は、多様な主体による支え合いを進めるため、市民及びまちづくり委員会や事業者、各種団体、医療関係者等との相互の連携・協力を推進します。

（3）市社協は、市の行う施策と事務事業のうち、「福祉のまちづくり」に関連する企画立案に対して、積極的に提言・提案を行うとともに、事業の実施に係わり連携と協力を行います。

（4）市社協は、地域福祉を推進する中核的な団体としての専門性と総合性を高めます。

（5）市社協は、活動の成果を定期的に市へ報告するとともに、市との協働により実施した「福祉のまちづくり」に関する施策と事務事業、その他の活動実績について、市民に公表します。

図表 3-2-3：飯田市社会福祉協議会の役割

インタビューでは，市が予算や計画を作成した後の実行部隊，そして周知や住民への働きかけが担当部分であると語られている。社会福祉協議会は専門家や地域住民とのつながりが強いため，事業推進にあたり制度の組み立てや人的な支援が必要とされる段階に入ると，市と連携して事業の具体化や組み立てを行う役割を果たしている。この具体化というものが一つのキーワードとして語られており，それは市の計画を具体化するといった意味のみではなく，地域包括支援センターや生活就労支援センターといった住民と専門家をつなぐ具体的な施設を設置していることや，住民の生活課題に対しどのように地域のネットワークを形成するのかを地域の方と一緒に考え地域の方が主体となり活動できるよう支援するといった,住民主体の具体化も意味すると思われる。これを踏まえると市社会福祉協議会の役割は，行政，専門家，住民をつなぐ「地域福祉を推進する中核的な団体」だと言える。

以上より市と市社会福祉協議会の地域福祉における役割についてまとめると,市が予算,制度,計画など事業の土台や外枠を固め,その中身を市と市社会福祉協議会が連携しながら詰めていき,市社会福祉協議会が最終的に地域住民に対し周知や事業の実行を働きかける，ということになるだろう。

2.3.2 連携の形

飯田市と市社会福祉協議会の連携を規定したものとして，前述の「福祉のまちづくりパートナーシップ協定」が存在する。この協定では基本原則として,「市社協と市は，対等，協働を基本として,「福祉のまちづくり」を進めるもの」ということが定められている。この協定と「対等」という言葉についてインタビューでは,「市から委託や補助金を出すと上下関係になってしまいがちだが，連携という関係で相互に話し合いができるような対等なルールを組んでいる」「市は市の立場で，社協は社協の立場で，常に一緒に動いていけるのが対等」と語られている。市と市社会福

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

祉協議会の担当者は月に 1 回は地域課題を一緒に考える場を設けているが，意見交換の場は常にあると言う。また市と市社協の間には前述のような役割分担は明確に存在するが，地域課題に対しては各々がその課題を分担して持ち帰り考えるというようなことはせず，その課題を共有し一緒に考え一体的に動くことで互いに新たな気づきが生まれることが多いと語られている。役割分担と一体という一見反するものの両立が，飯田の地域福祉において一つの鍵となっているのかもしれない。

2.3.3 住民との関係

社会福祉協議会は地域住民との結びつきが強く，地域住民が構成するまちづくり委員会や民生児童委員と社会福祉協議会職員である地域福祉活動コーディネーターや地域包括センター担当者が連携することで，地域における住民主体の活動への支援や，情報の共有，地域課題の把握や見直しを行っている。またこの時把握した問題や日常的に住民から寄せられる問題に対し，介護，生活困窮，権利擁護など問題ごとに専門の各機関へと住民をつないでいる。ここからも社会福祉協議会が住民や行政，専門家といった様々な主体の中で中間的な位置を有していることがうかがえる。

2.4 横糸―地域住民間のつながり―

次に飯田市の地域住民間のつながりについて，民生児童委員の役割や住民主体の活動から見ていく。

2.4.1 民生児童委員

民生児童委員は民生委員法に従い地域住民から選ばれる。飯田市では一人 150 世帯を担当し，生活状況の確認を行い，何か困りごとがあれば社会福祉協議会などの機関につなぐといった役割を持っている。この民生児童委員が，飯田市の地域福祉においては重要な役割を担っており，また住民間のつながりを形成しているということがインタビューを通じてわかった。

以下は，飯田市民生児童委員協議会作成の「民生・児童委員改選における推薦に関わる要望書」より抜粋した，平成 26 年度の民生委員一人当たりの年間活動状況となる。

	委員 1 人あたり　年間平均年数	
	飯田市	長野県
相談・支援件数	42	28
調査，行事参加，地域福祉活動，証明事務等	151	118
訪問回数	185	151
活動日数	160	132

図表 3-2-4：飯田市の民生児童委員の活動状況

ここからも，飯田市の民生児童委員の活動が活発であることがうかがえる。民生委員は基本的

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

に担当の全世帯への定期的な訪問を行っているため，地域の課題や特定の世帯が抱える問題を地域内で最もよく把握している存在だと言える。特に独り暮らしの高齢者の方の安否確認に関しては，社会福祉協議会の設置する地域包括センターの方へと緊急の連絡（何日も電気がつけっぱなしである，新聞がたまっている，など）が来る時はたいてい民生委員からであると言う。他にも生活困窮世帯が集中する地域では，民生委員がアパート全体のゴミ出しを手助けしている例もあると言う。また，民生委員は住民を行政や専門的なサービスへとつなぐ意味も有しており，「生活に困ったら何か聞ける」というように民生委員が福祉の総合窓口としての機能を持っていると言える。このように，民生委員の常々の気づきや状況把握，個々の見守り活動は地域から孤立する危険のある住民をもつなぎとめる力があるように思われる。

飯田市民生児童委員のお一人は，自身の活動について「民生に助けられたから，自分も他の人を助けるようになる」といったような相互に助け合う仕組みができることにつながることを理想として語られており，民生の活動が住民の意識改革につながることを望んでいた。この相互に助ける仕組みについては，市や市社会福祉協議会の方々においても「助ける人と助けてほしい人の両方に参加してもらうこと，助けてもらうのみでなく自分に何ができるかも考えること」を地域福祉の理想として語られている。

2.4.2 住民主体の活動

次に，民生児童委員やまちづくり委員といった特別な位置にある地域住民のみでなく，他の一般的な住民も含めた地域住民全体について見ていく。

飯田市内在住の満 20 歳以上の男女 2000 人を対象とした平成 26 年度市民意識調査によると，「生活している中で，隣近所で助け合い，支え合うことができていると思いますか」という質問に対し「そう思う」と答えた人は全体の 24.5%,「どちらかと言えばそう思う」と答えた人は 51.7%, この二つを合わせて 76.2%となっており，ここから飯田市の住民は固いものではないにせよある程度の住民間のつながりを認識できているのではないかと予想される。またこの割合は年代により異なり，「そう思う」＋「どちらかと言えばそう思う」の割合は 50 歳代から 70 歳以上では約 80%，20 歳代から 40 歳代では約 67%となっており，高齢者の方が近隣とのつながりを感じる人が多いと言える。またこの割合は飯田市内の地区によっても差異があり，高齢化率が高い南信濃地区では 100%となっている。この南信濃では，地区の高齢化率が上昇することに危機感を覚えた地域住民自らが主体となり地域福祉プロジェクトを立ち上げて住民同士が話し合う活動がされており，地域福祉の成功例と言える。

南信濃の例のような，地域の課題や実態に合った地域住民主体の活動を展開するための一つのきっかけとして，「住民支え合いマップ」が挙げられる。これは，もともとは災害時用に作られるもので，住宅地図上に高齢者や障害者など災害時の避難に支援が必要となる住民の位置や，避難所，医療機関などの地域の資源や危険箇所などの情報を記載することにより，災害時に要援護者の安否確認，避難や支援を迅速に行うためのものと想定されていた。しかし災害時の要援護者は日常生活においても見守りや手助けが必要であることから，地域福祉を推進するための道具とし

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ても活用することが期待されている。以下は，支え合いマップの例となっている。民生委員や自治会委員の位置，支援が必要な住民の位置と支援をしている住民の位置が記載されている。

図表 3-2-5：住民支え合いマップの例

これは地域のまちづくり委員（自治会委員）を中心に作成され，地域差はあるが主にまちづくり委員により活用されている。成功例としては，このマップの作成により見守り，買い物支援，ゴミ出し支援などその地域に必要とされている支援の種類や地域の課題に気づき，マップからの気づきによりまちづくり委員を中心とした地域住民が事業を立ち上げ，その後他の地域住民にも呼びかける，といった形がある。このマップの有する意義について，飯田市と市社会福祉協議会の方々へのインタビュー内では，気づきの後の活動も大事だが「まず（地域課題や必要な支援を）気づく・知るという作業がマップの持つ意味」であると語られている。

また地域福祉以外の住民主体の活動としては，「公民館活動が盛んであることが一番大きいのではないか」と語られている。飯田市には各地区全てに公民館があり，日常の公民館活動や公民館での各イベントにより住民間のつながりが形成されている。「福祉は人とのつながりが基本」であるため，公民館活動による住民間のつながりは福祉の基盤を作っているとも考えられる。さらにこの「福祉は人とのつながりが基本」ということについて，インタビューでは「一番大事なのはどれだけどういう形であれ人と関われるか」であると語られている。例えば独り暮らしの高齢者の方については誰とも話さないことが認知症につながりやすく，民生委員などが自宅を訪問し話をすることがその予防となる。中には「帰れ」と言われてしまうこともあるそうだが，それでも民生委員の方々は必ず定期的に自宅訪問を行い，独り暮らしの高齢者の方との「つながり」を保

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

っていると言う。地域福祉に関する住民主体の活動や公民館活動は住民間の「つながり」を形成することに大きく役立つが，これらの活動は基本的には住民の自由参加となっている。しかしこれらの活動で形成されるもののみが住民間の「つながり」というわけではなく，受動的な形であっても住民との関わりが生活に存在することが「つながり」と言えるのではないだろうか。

2.5 考察

2.5.1 飯田の地域福祉体制

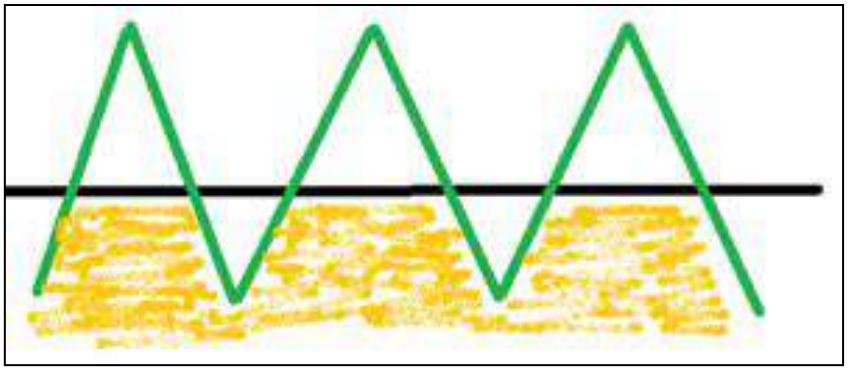
先行研究と飯田市の地域福祉の現状を比較しつつ，飯田市の地域福祉体制において重要な点をまとめていく。まず行政や専門サービスにつながる「タテの人間関係」について見る。先行研究では公的部門である市と民間部門である市社会福祉協議会の対等平等なパートナーシップが今後の課題であるとされていたが，飯田では「福祉のまちづくりパートナーシップ協定」を結ぶことで市と社会福祉協議会の間の対等な関係が強調されており，またインタビュー中でも「市と社協が一緒に考える」といった言葉が多くあったことからも，この課題は解決していると思われる。しかし対等であり両者が一緒に動くことのみでなく，それと同時に両者の役割分担と責任を明確にしている点もまた重要であると思われる。公的部門である市と民間部門であり住民，行政，専門家ともつながる中間的な機能をもつ社会福祉協議会とが連携する意味は，互いが異なる役割を持つために自身に足りないものや自身のみでは実行できないことを補完できることにあると考えられるからである。

次に「ヨコの人間関係」について見る。先行研究では，住民の連帯と住民主体を進めるためには，場や仕組みといったハード面と信頼や互恵性といったソフト面の両方が求められているとされていた。これに対し飯田では，ハード面についてはもともと公民館といった場が整備されていることが大きく地域福祉の基盤となる「つながり」を住民間に築くきっかけとなっている可能性が高い。また住民支え合いマップという仕組みは，住民に自身の地域の課題を気づかせる可能性を持ち，住民主体による地域福祉を進めるための仕組みだと言える。信頼と互恵性に関しては，今回の調査のみでは実際に地域住民間にそれらが築かれていたかはわからない。しかし，担当の全世帯を訪問し相談の窓口になり，積極的にゴミ出しや見守りなどの支援を行う民生委員への地域住民の信頼は，増加するものではないかと予想され，この民生への信頼が住民と民生とのつながりを強化すると予想される。また互恵性に関しては，民生児童委員，市，社会福祉協議会の三方ともが地域福祉の理想として「助けられたり助けたり」といった相互の助け合いを挙げていることから，現在住民全体にこのような相互の助け合いの感覚が浸透していない場合であっても，今後の三方の取り組みや姿勢により，目指すべきものとしての意識が徐々に住民の間に広がっていく可能性があると思われる。しかし，たとえ信頼や互恵性といった「つながり」を強化すると言われるものが住民間に無かったとしても，「つながり」が住民間に生じないわけではない。飯田市では民生児童委員が担当地区の全世帯を訪問し福祉の窓口となっていることから，飯田市のほとんどの住民は皆何らかの形で少なくとも一人との関わりを生活の中で有していることになる。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

地域福祉にとって「一番大事なのはどれだけどういう形であれ人と関われるか」ということだと考えると，この関わりは訪問される側にとって受動的なものであったとしても，地域の中で福祉から漏れ落ちる住民を生まないセーフティネットとしての機能を果たしうる「つながり」と言えるものではないかと考えられる。

最後に，タテとヨコの連携に関し，民生児童委員のお一人が民生児童委員の意味について説明する際に口頭で示してくださった図を描く。



図表 3-2-6：地域福祉体制のイメージ図

真ん中の直線は市，ギザギザになっている線は社会福祉協議会を示し，この線の上部は各機関ができることの領域，線の下部はできないことの領域を示している。社会福祉協議会を表す線の下部の塗られている部分が，民生児童委員を指すと言う。この図は，地域福祉において行政である市はできることとできないことの基準が明確であり，社会福祉協議会はその基準が明確でなく一定の基準を持たないこと，そして民生児童委員は両機関ができないことを埋める存在であるということが主張されている。この民生児童委員が役割を果たす領域の一部は，役職につかないその他の普通の地域住民も果たしうるものであり，その際に地域住民間の「つながり」が必要になると思われる。もしもこの領域が塗られることなく白紙のままである場合，それは行政や社会福祉協議会のもたらす福祉サービスから漏れる住民がそのまま地域内で孤立し何のサービスも受けられないことを意味する。つまりこの行政と社会福祉協議会の手が及ばない領域に存在する住民に対しては，民生児童委員や地域住民の「つながり」がセーフティネットとして機能することになる。またこの一人の住民も取りこぼさないためのセーフティネットを張るためには，住民間の「つながり」と同時に民生児童委員や地域住民が固い規定にとらわれず，自由に動けることが重要であると思われる。そしてこの自由さが地域福祉に必要とされる住民主体の活動や，行政が地域の固有性を認めることであると言える。インタビューでは飯田市内でも地域特性により各地区でニーズが異なること，地区ごとに異なるニーズを行政や住民が把握することが重要であることが強調されていたことや，地域ごとに自身のニーズに合った活動をする住民を市や市社協が支援していることから，セーフティネットに必要とされる住民の自由さは確保されていると考えられる。しかしこの図で一つ注意したいこととして，住民が自由に動くことが重要であるとはいえ行

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

政のもたらす福祉サービスの中には住民が補完することはできない領域が存在し，その行政の領域を消すことはセーフティネットの消滅になってしまうということがある。そのため，金銭面などでの住民へのサービス，社会福祉協議会や住民主体の活動を支援するための基盤整備などの行政の欠かせない領域はしっかり維持しつつ，そのような行政の支援を住民に行き渡らせるために，行政と地域住民，中間的な社会福祉協議会といった三者のつながりによりセーフティネットを築くことが地域福祉において必要とされると考えられる。そして飯田においては，この三者のつながりがこのイメージ図のような形で，互いに補完しつつ互いに接する部分を持ちつつ築かれているのではないかと思われる。

2.5.2 課題と展望

これまで見てきたように現在飯田市の地域福祉において民生児童委員の果たす役割はとても重要なものとなっている。しかし民生などの地域の役員はだいたい 2 年任期で交代をするため（しかし 20 年ほど民生を継続していらっしゃる方もいる）事業の継続性に課題があると言える。また今後高齢化率が上昇し定年退職年齢が上がることにより，民生児童委員のなり手を確保することがさらに難しくなり，高齢の民生が高齢者を見るといった課題が生まれると思われる。さらに住民間のつながりに関しても，増加する外国人と地域とのつながりのできにくさ，組合未加入者や住民票を飯田市に移していない者の中に存在する生活困窮者の状況の把握の難しさ，母子世帯優先入居のアパートなど困窮世帯が集中している地域への見守り支え合いの大変さ，などの課題が存在し，民生への負担が増加している。

このような課題を踏まえ，地域福祉に対する地域住民の意識の向上と地域福祉を担う次世代の育成のための対策として，現在社会福祉協議会では福祉教育を行うことに力を入れている。地域福祉に関する研修会を地域で開くこと，学校のボランティアサークルを復活させること，学校にて出前福祉講座を行うこと，東日本大震災の学生ボランティアに高校生を派遣すること，などがその例として挙げられる。各学校や学校の先生の考えが異なるため手こずることもあるそうだが，地域の中に高齢者や障がい者が存在し一緒に暮らしていることへの理解を求めるため，学校での福祉教育は必要であるという。今後少子高齢化の進行により公的扶助を住民に行き渡らせることが難しくなったとしても飯田の地域福祉が持続可能な発展をしていくためには，現在存在する住民間や住民と行政・専門家の間のつながりを未来へつないでいくことが重要だと思われる。そのためにも，このような福祉教育やその他の住民主体の活動により若者と地域のつながりを育てること，潜在的に地域のために何かしたいと思っている住民の心を刺激することが鍵となるのではないか。

2.6 おわりに

この報告書では一番初めから「つながり」という言葉を定義することなく使ってしまいましたが，「つながり」とは一体何なのか，様々な意味を含んでいるような言葉でいまだに掴みどころがないように感じています。今回飯田に訪れる前に読んでいた先行研究では，つながり（ネットワ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ーク）を形成するものとして信頼と互恵性が示されていました。しかし飯田での調査が終わった今では，もちろん信頼や互恵性は「つながり」を強くする上で重要なものですが，それは最も良い「つながり」の形の理想像であり，ただ住民どうしが一緒に同じ場に集まり話をするだけでもそれが「つながり」の始まりになるのではないかと感じました。そのただ一緒にいることから始まった「つながり」が，継続することや片方から助けられることなどにより信頼が生まれ，助けられた方が今度は助けるようになることで互恵性が生まれ，支え合いと言えるような「つながり」へと進化していくのではないかと今は考えています。またどの段階の「つながり」であっても，たとえそれが信頼や互恵性の段階にまで発達していなかった場合でも，「つながり」は人に何かしらのパワーを与えてくれるものであると信じています。私は夏に訪れた際に感じられた飯田のパワーを，今回も様々な方々とお話しすることで感じることができました。これも私が飯田の方々と一種の「つながり」を感じることができたからなのかもしれないと思います。

最後に，飯田市福祉課地域福祉担当の方々，飯田市社会福祉協議会の方々，民生児童委員の方々，お忙しい中調査にご協力いただき，またおいしいご飯とお酒をいただき本当にありがとうございました。皆様の貴重なお話しにより，至らない点は多々ありますがこの報告書を作成することができました。今後とも皆様が飯田にてご活躍されることを願っております。

引用文献・資料，Web ページ

安井善行「施設と地域福祉-地域福祉活動の拠点としての施設-」，井岡勉・監修，牧里毎治，山本隆・編『住民主体の地域福祉論-理論と実践-』法律文化社，2008，p.221-232

佐甲学「社会福祉協議会における地域福祉実践」，井岡勉・監修，牧里毎治，山本隆・編『住民主体の地域福祉論-理論と実践-』法律文化社，2008，p.197-206

牧里毎治「生活者視点からの地域福祉をふまえて」，井岡勉・監修，牧里毎治，山本隆・編『住民主体の地域福祉論-理論と実践-』法律文化社，2008，p.1-7

井岡勉「地域福祉とは何か」，井岡勉・監修，牧里毎治，山本隆・編『住民主体の地域福祉論-理論と実践-』法律文化社，2008，p.11-21

諸富徹「地域再生・社会関係資本とケア」，広井良典・編「ケアとは何だろうか-領域の壁を越えて-」ミネルヴァ書房，2013，p.150-171

厚生労働省「こらからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」2008 入手先 URI: http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7.html （アクセス日：2016-2-15）

全国社会福祉協議会「社会福祉の制度」入手先 URI: http://www.shakyo.or.jp/seido/tiiki.html （アクセス日：2016-2-15）

飯田市ホームページ「福祉のまちづくりパートナーシップ協定について」入手先 URI: https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/11/fukushinomatidukuri.html （アクセス日:2016-2-15）

飯田市ホームページ「災害時助け合い・住民支え合いマップの取り組みについて」入手先 URI: https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/11/saigaimap-torikumi.html （アクセス日:2016-2-15）

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

飯田市民生児童委員協議会「民生・児童委員改選における推薦に関わる要望書」
長野県飯田市「平成 26 年度市民意識調査の集計概要」

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 3 章　I ターンという「生き方」

丹田 桂太

3.1　はじめに

2015 年 8 月 26 日から 29 日にかけて行われた飯田市でのフィールドワークでは，様々な分野で活躍される方々のお話や，またそうした活動の場となっている施設等を訪問させていただいた。どの方々のお話も，自身の「地元」を思い返せばとても想像することができないような刺激的な内容に満ちていたが，一方で感じたのは「今回お話を伺うことのできなかったその他多くの人たちは，飯田の中でどのように生きているのだろうか」ということであった。

ここでいう「その他多くの人たち」とは，どのような人たちが考えられるだろうか。もともとその地域に住んでいるが，今回話を伺った活動には積極的に参加していない人がいるだろう。あるいは，こうした活動へコミットできないような人もいるだろう。そもそも，そうした活動が行われていることさえ知らない人たちもいるだろう。このように，「その他多くの人々」と言ってもその存在は多様である。それではどこに焦点を絞っていけばよいだろうかと考えた時，ちょうど自分の関心が（若年者の）「地域移動」にあったこともあり，飯田へと移住して間もない人々に目を向けてみようと考えた。これが，今回の報告で「I ターン者」に着目した理由である。また本稿では，I ターン者のなかでもとりわけ女性に焦点を当てている。それでは，なぜ I ターン者の中でも女性に焦点を絞るのか。この点については，次節で先行研究の整理を行いながら説明する。

本章では，飯田市へ I ターンしてきた女性たちへのインタビュー調査から，I ターンにいたるまでの経緯やそのきっかけ，I ターン後の生活の変化やその様子などについて明らかにした上で，I ターンという選択がその後の彼女たちの生活にどのような影響を与えているか，そして，そうした彼女たちの生活の変化がもつ可能性について考察する。

3.2　問題関心および先行研究

人口還流現象の類型としては，地方出身者が都市へと移動し再び出身地へと戻ってくる「U ターン」や，地方出身者が都市へと移動した後，出身地とは別の地方へと移動する「J ターン」，そして本稿で扱う（主に）都市出身者が縁のない地方へと移動する「I ターン」がある。このうち U ターンや J ターンのように，地方出身者のある種の地元回帰をとらえる研究は少なくないものの，I ターンをメインに扱った研究はそれほど多いとはいえない。本稿が注目するのはそのような I ターンという動きである。

なお，I ターン者の中でもとりわけ女性に着目する理由についてここで述べておく。それは，上記のような人口還流移動を扱った研究において，地域移動の「ジェンダー」による影響への視点の欠落が指摘されていることによる。例えば，山口（2015）は，これまでの U ターン現象を扱った研究が，その対象を男性に限定してきたことを指摘し，そこにジェンダー差という視点を取

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

り入れる必要性を指摘している[110]。山口は本稿の知見の一つとして，女性のUターン移動が「夫の仕事の都合」という“パートナーとの関係の中で移動が行われやすいこと”[111]をあげているが，果たしてこのような移動のきっかけは，Iターン女性たちにも見られるものであろうか。もちろん，山口の研究は人口還流移動の中でも「Uターン」について扱ったものであるため，そこでの議論をそのまま本稿の議論に援用できるわけではないが，そうした視点や関心を引き継ぐことはできるだろう。以上が，本稿においてIターン者のなかでもとりわけ女性に焦点を絞って調査を行った理由である。

さて，ここでIターンという動きに注目する理由は主に2点ある。一つは，一昨年度に提唱され話題を呼んだいわゆる「増田レポート」を皮切りに，各自治体において，いわゆる定住促進事業が喫緊の課題となっていることと関連する。今回訪問した飯田市においても，「結いターン」という独自の人材誘導プロジェクトを展開し，移住者向けの情報提供や就業支援，補助等を行っている[112]。このような動きがあるなかで，実際に移住したIターン者たちの移動のきっかけや，移動するにあたっての不安,移住後の暮らし向きや地域の人々との関係などを明らかにすることは，上記のような取り組みを行う行政にとって貴重なデータとなると考えられる。このことは，本報告書をもって飯田へ「お返しをする」というコンセプトに少なからず合致することであろう。

もう一つは，Iターンという動きに一種のオルタナティブな「生き方」を見ることができるのではないかと考えるためである。社会全体がある種の閉塞感を抱える中で，都市に居住し，そこで働き続けることは，人々に共有された「理想の生き方」ではなくなりつつある。そうした状況において，今回注目するIターンという動きあるいはその「生き方」は，一つの希望となる可能性を胚胎しているのではないだろうか。以上が，本稿においてIターンという動きに注目する主な理由である。

それでは，先行研究においてIターンという動きはどのような観点から捉えられているであろうか。本稿では，主に高木（2000）の研究を参考にする[113] [114]。高木は，過疎地域の住民およびその地域へIターンしてきた者を対象に行ったインタビュー調査から，Iターン者たちの「同化」と「異化」という動きが，両者が互いの関係性を構築していく中で生じ，それがIターン者の地域への定位につながる側面があることを指摘している[115]。ここで「同化」とは，“親切と監視のような協調を求める働きかけ”や“移住者が地域社会に近づこうとする努力や，地元住民が協調

---

110 山口恵子.「地域移動におけるジェンダーと経済格差 −青森県のUターン移動に関する住民調査から」,『季刊家計経済研究』SUMMER No.107，2015，p.36-44

111 *Ibid.*

112 この「結いターン」制度については，昨年度（2014年度）の報告書『未来へつむぐ飯田らしさ』内の「第1部第4章 未来に向けた飯田の雇用支援」が詳しい〈東京大学教育学部社会教育学研究室『未来へつむぐ飯田らしさ』，2015〉p.50-65〉

113 高木学.「「離都向村」の社会学」『ソシオロジ』，社会学研究会，第44巻3号，2000，p.3-20

114 なお,高木はここで,Iターン移住を“出身地とは異なる縁のない地域へ移住する移動であり，80年代後半から次第に増加してきた移住パターンの一つ”と説明している。

115 *op. cit.*

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

を求め価値観の違いを許さない働きかけ”のことを，また，「異化」については，“区会参加の多様化を認めていくという，異なる生活態度を受け入れる姿勢や，移住者をより積極的に評価する動き”や“地元の人が移住者をよそ者として特別視することや，移住者が自分のスタンスで地域活動をおこない，地域から離れて他のネットワークにアイデンティティを求めること”を意味している[116]。この「同化」と「異化」への注目からもわかるように，高木の関心は主としてＩターン者と地元の人との関係性に向いている。そして，ここでその関係性は，一方では「同化」というかたちでＩターン者あるいは地元の人がもう一方へと（その「近づき方」は異なるものの）近づこうという動きとして見ることができるものの，そこには「よそ者（Ｉターン者）」と「地元民」という分断線が引かれたままである。それゆえ，どちらかといえば高木の研究では，Ｉターン者が移住先の地域へ入っていきたいけれども思うようには入っていけないという「ジレンマ」を強調するように描かれている。以上のような高木の議論を踏まえて本稿において特に注目したいのは，Ｉターン者の地域の人々との「関わり方」でという点である。この「関わり方」に十分注意した上で，両者の「関係性」に目を向けたい。この点に注目することによって，移住してきた当事者たちが地域住民と関係を取り結んでいく様子やそれによる地域への位置づき方を，そしてまた，高木が注目し得なかったＩターン者たちの暮らしの内実や 価値観の変化に目を向けることで，前述のオルタナティブな「生き方」を看取することができるかもしれない。

3.3 調査概要

本節では，調査の概要について説明を行う。

追加調査は，2016 年 1 月 14 日および 15 日にかけておこなった。今回インタビューを依頼したのは，飯田市へＩターンしてきて 1 年弱から 2 年弱という，比較的日の浅い 3 名の女性とそのうち一人のパートナーの男性の計 4 名である。インタビュー時間はそれぞれ約 1 時間程度であった。

インタビューは，事前にいくつかの質問項目を用意し，基本的にはそれに準拠するかたちで進めていったが，固い雰囲気にならないよう考慮し，時折雑談を交えながら行った。なお，今回のインタビューを引きうけくださった方との交渉や時間調整については，飯田市役所産業経済部産業振興課雇用人材誘導係主事の羽生千夏さんにお世話になった[117]。

事前に用意した質問項目は以下の通りである。なお，調査を依頼した段階での文書は，巻末付録として本章末尾に掲載している。

---

[116] *Ibid.*

[117] なお，今回のインタビューは産業振興課の羽生さん同席のもとで行われた。そのため，時折羽生さんのほうから話し手に質問が投げかけられるような場面もあった。羽生さんからの主な質問項目としては「移住してよかったこと，苦労したこと」「Ｉターンする人たちへのメッセージ」などであった。羽生さんからの質問に対する回答は，本稿にも一部整理されているが，詳しくは「全国移住ナビ」というサイトで閲覧することができる（https://www.iju-navi.soumu.go.jp/ijunavi/）。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

▸基本事項
①名前，②年齢，③職業，④出身地，⑤学歴，⑥家族構成，⑦I ターンするまでの経歴
▸I ターンに関するもの
⑧I ターン後の期間，⑨飯田に来る以前の居住地，⑩I ターンのきっかけ，⑪I ターンにあたっての戸惑いや不安，⑫地域の方々との交流の有無／関わり方，⑬地域活動への参加の有無，⑭地域の人との関わりの中で気をつけていること，⑮飯田の魅力，⑯I ターンにあたっての家族の反応，⑰現在の暮らしについて，⑱今後も飯田に住み続ける予定か，⑲I ターン以前と以後とで大きく変わったこと

また，対象者 4 名の概要は以下の通りである。

図表 3-3-1：調査対象者の概要

	性別	年齢	出身地	I ターン以前の居住地	I ターン後の期間	現職	前職	家族構成
A さん	女性	41 歳	フランス	東京都多摩市	11 ヶ月	遠山郷観光協会	病院勤務	独身
Y さん	女性	33 歳	神奈川県	神奈川県横浜市	10 ヶ月	農業研修中	看護士	夫（K さん）
R さん	女性	32 歳	富山県	神奈川県横浜市	1 年 10 ヶ月	育児休業中（自営手伝い）	小学校教員	夫，子ども 2 人
K さん	男性	36 歳	宮城県	神奈川県横浜市	10 ヶ月	農業研修中	グラフィックデザイナー	妻（Y さん）

【A さん】
・41 歳女性，I ターンしてきたのは 2015 年 2 月。未婚。現在は遠山郷観光協会でアルバイト。
・インタビュー場所は，飯田市南信濃にある観光協会『アンバマイ館』。インタビュー時間はおよそ 1 時間。
【Y さん】
・33 歳女性，I ターンしてきたのは 2015 年 2 月。K さんの妻。現在は夫婦で，農業研修中。
・インタビュー場所は，飯田市下久堅の『下久堅公民館』学習室。インタビュー時間はおよそ 1 時間。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

【K さん】
・36 歳男性，Y さんの夫。
【R さん】
・32 歳女性。夫と二人の子どもとの 4 人暮らし。現在は育児休暇中（元教員）。子育ての合間に自営の手伝いをしている。
・インタビュー場所は，飯田市役所 3 階産業振興課内。インタビュー時間はおよそ 1 時間。

3.4 調査結果

本節では，インタビューデータをもとに前掲の質問項目と照らし合わせながら，4 名の方々の語りを整理する。本節で特に注目するのは，第 2 節でも述べたように I ターン者の地域の人々との関わり方についてであるが，I ターンにいたるまでの経緯やそのきっかけ，I ターン後の生活の変化などについても重要な情報であると考えられるため，それらの点を中心に整理を行っている。質問項目についている番号はインタビュー時に用意した質問項目に沿って示しているが，それぞれに聞いているもの／聞いていないものがあるなど，若干違いがある場合もある。

3.4.1 A さんについて

はじめに，A さんの聞き取り結果を整理する。

⑦I ターンするまでの経歴

A さんは，フランスで生まれた後，1～2 歳の頃に東京へと移った。その後，高校卒業まで多摩市で生活し，大学進学に際して，アメリカに渡った。アメリカの大学で運動生理学について学んだのち，帰国。再度，アメリカで暮らしていたが東日本大震災をきっかけに帰国した。A さんはそのときのことを「なんか帰ってきたほうがいいな」という「感覚」があったと振り返っていた。

⑩I ターンのきっかけ

I ターン先として飯田を選んだきっかけは，友人が遠山に住んでいたこと，その友人を介して遠山という場所を知ったためであるという。しかし，それ以上に理由があったわけではなく「縁があった」と述べていた。

> 「*よく聞かれるのが，いっぱいあるなかでどうしてここに？っていうのがすごい多いんですけど，まあこればっかりは縁だなあと。特に理由はないです。まあでも，この場所を知ったきっかけは友人がいたからっていうことですね*」（A さん）

A さんの姉と現在遠山で働いている S さんが知り合いであり，それをきっかけに A さんは遠山のことを知ったという。移住を検討しているときに一度，視察で遠山を訪れたが，そのときも特

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

段の印象があったというわけではなかった。遠山の良さを感じ始めたのは，実際に移住し，生活をし始めてからであったという。

> 「*私は 1 回，視察がてら遊びにきて，もうそのあとすぐ引っ越しになったんですけど，その視察で 2～3 日滞在したときにはあんまり，別に（笑）もう，山深いところだなっていうくらいで（笑）取り立てて，まあ，「山だなあ」っていう感じですね。むしろ住んでからの方が，良さを発見っていうタイプでした*」（A さん）

⑪I ターンにあたっての戸惑いや不安

以前勤めていた仕事をやめてまで I ターンすることの不安や戸惑いについて尋ねたところ，こちらに引っ越してくる以前に現在の仕事が見つかっていたということもあり，その点についての不安などなどは全くなかったという。

> 「*（不安とかは）全く無く。引っ越すというかは，仕事のポストがあったので，観光協会の。それが前提で来ました*」（A さん）

この点について，やはり仕事の当てがないままに移住をしてくることには難しさを感じているようであった。

> 「*多分，仕事の当てがなくポンッと来るのは難しいですよね。なかなか*」（A さん）

また，そうした仕事面以外での不安や戸惑い，都会への文化的な憧れなどについて尋ねてみるも，それも「ゼロ」だという。A さんは自身のこうした感覚を「性格なんですけど」と語っていた。

⑫地域の人々との交流／関わり方，⑬地域活動への参加の有無

A さんは観光協会での仕事を通じて，多くの地域住民の方との関わりがあるという。仕事以外での関わりとしては地域の子どもたちに英語を教えたり，バレーボールを教えたりすることで関わりがあるという。またバンド活動にも取り組んでおり，地域のカフェで定期的に公演をしたり，お祭りなどで披露したりしている。そうした趣味を通して，地域の方々とふれあう機会ができているということであった。

趣味以外での関わりとして，地域で開かれている会議に呼ばれることがあり，現在はその委員になっているという。この点について，A さんは以下のようにいう。

> 「*それ（上記の活動）以外の地域活動みたいなのに参加されたりっていうのはあります*

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

か？」（筆者）
「*会議に呼ばれます。（中略）最近，委員に自然となっていたみたいなのがあって。それは仕事外でやってます。*」（A さん）
「*公民館活動は？*」（羽生さん）
「*公民館はやってないです。いろいろ，まちづくりのあれで*」（A さん）

高齢者の方々との関わりは，前述のように，観光協会での仕事を通じてはかなりあるものの，仕事外ではそれほど多くないという。この点について A さんは，「仕事が「観光協会」でなかったら，それほどの人と会うことはないと思う」と述べている。しかし，そうしたことも含めた人間関係に関わる不安は，全く無いという。

「*（人間関係での悩み）全く無くですね。色々頼まれるのを断るっていうのは思ってたので。それをちゃんとしてれば，本当に困らないですね*」（A さん）
「*やりたいこととやりたくないことをはっきりしてれば，何の不便も無いですね*」（A さん）

A さんは上記のような，自らが決めたある種の「ルール」にもとづいて，地域の方々と関わっている。それは，必ずしも全面的に地域に入っていってしまうものではなく，かといって地域と切り離された状態でもない，I ターン者ならではの関わり方のようにもみえた。

これ以外の地域の方々との関わりとしては，野菜を中心にした物を介するかたちでのやりとりがあるようであった。A さんは現在，自分で野菜を栽培しているが，地域の人からも野菜をよくもらうという。

「*野菜は畑をやってるので困らないです。あと，すごいくれるんです。とにかくみなさんいろんなものをくれるので。野菜はあんまり買わずに済んでます*」（A さん）

⑰現在の暮らしについて
現在の暮らしの様子について尋ねたところ，東京に住んでいたころと比べて特に金銭的な面で変化があったという。東京にいた頃は，特に家賃が高いために苦労していた A さんであったが，現在は月 7000 円で市営住宅に住むことができているという。

「*私，東京ではキツキツで暮らしてたんですけど，何せ家賃が高いですし。今，市営住宅に入ってまして，家賃が 7000 円なんですけど，すごいですよね。いろいろ提出するものがあって，多少の家賃の，所得に応じてですよね。私のは，平屋の本当に古い建物*

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

なんですけど，もう 7000 円一律で。まあそこが空いていたのでそこに入ったという感じですね」（A さん）

家賃 7000 円という，首都圏とは比べものにならないほどの安さではあるが，家を探す段階ではその数の少なさを感じ，また実際に住みはじめてからは，慣れない環境に驚いたこともあったという。

「*（賃貸住宅は）市営しかないですね，ここの地域は。（中略）しかもその市営もいろいろ規則があるので。選べるのは，私のときは 2 つだったんですね。それでどっちにしようかって。もう写真を見て決めたんです*」（A さん）

「*（実際に住んでみて）最初はやっぱりちょっとびっくりしましたね。色々なんかぼろぼろで。でも畳は変えてくれてたので。最初の 1 日 2 日はブルーシートを窓にかけてっていう生活を（笑）もう，協会会長にいっぱい助けてもらって，すぐ住めるようになりました*」（A さん）

このときの経験から A さんは，生活する中で色々な人に助けてもらうことにありがたみを感じているようだった。その点について，A さんは以下のように話している。

「*（手助けとか）いいと思ってきたんですけど，実際助けてもらって，助かった！みたいな感じの（笑）*」（A さん）

⑱今後も飯田に住み続ける予定か

今後も遠山に住み続けたいかどうかを尋ねたところ，「気持ちというか勘」で「5 年くらいは」住み続けることを考えているという。ただ，来年度から観光協会を離れ，I ターンの人たちを受け入れる体制づくりの一貫として空き家対策をしようと考えているという。

「*一応，多分なんですけど，来年から観光協会をはずれて，空き家対策をやろうかと思っているんですけど。いわゆる，本当に I ターンの人たちを受け入れる体制をつくろうかなと思って。友達も越してきたいっていう人が。空き家もすごい，40 件みたんです*」（A さん）

「*みんなに聞いて，あそこもあそこもいっぱいあるよ！みたいな。それで手分けして，〇〇さんにも協力してもらって，上村と南信濃と天龍村も行ったんですけど。一通り空いているところをバーッと見て，やっぱり住めるようになるまでのがなかなか無くて。*

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

だから実際本当に，越してきたいという人は窓口でもいっぱいいるんですけど，住むところがないなあと思って。というので，それを仕事でしていこうかなっていう，来年度以降です」（A さん）

I ターンをする際に家探しという点で選択肢の少なかった自身の経験が，今後 I ターンしてくる人たちのためにという思いへ引き継がれていた。

⑱I ターン以前と以後とで大きく変わったこと

最後に I ターンする以前と以後とで大きく変わったことは何かを尋ねたところ，「環境的ストレスが少ない」ことを一番にあげていた。「物理的に左右が広い」ことや「人が少ない」ことで，「ストレスフリーに」なるという。

「*実際に，環境的ストレスが少ないですね。ラッシュが無いとか，本当にそういうのが毎日のことだったので。（中略）人が少ないのがいいです。（中略）物理的に左右が広いっていうか（笑）それは楽ですね。*」（A さん）

また，温泉が多いことも A さんにとって「魅力」に感じられているようだった。後述するように，これは Y さん夫妻にも感じられている「飯田の魅力」の一つであった。

「*あとは温泉が，本当に助かってます。もう入るだけで 1 日，全然リセットされるので。（中略）すごい疲れてても，助かりますね。身体が本当にストレスフリーになります*」（A さん）

以上のように，A さんにとって I ターンの以後の一番の変化は健康面に関わることが主であるということがわかる。

3.4.2 Y さん･K さん夫妻について

次に Y さんと K さん夫妻への聞き取り結果を整理する。

⑦I ターンまでの経歴

妻の Y さんは，神奈川県出身である。看護系の専門学校を卒業するまで地元に住んでおり，専門学校卒業後に就職した病院も，実家から通える範囲であった。その後，看護士として勤務している途中で，旦那さんである K さんと一緒に，実家を離れ横浜に住むようになった。看護士として 10 年働いた後，「就農」を目的に飯田市への I ターンを決めた。

旦那さんの K さんは，宮城県仙台市の出身である。横浜ではグラフィックデザイナーとして勤

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

務されていた。後述するように，アウトドアが好きだったこともあり，「自然の多いところで生活したい」という夫婦共通の思いを抱いており，それが飯田市へのＩターン，そして「就農」という選択をするきっかけになったという。

⑩Ｉターンのきっかけ

Ｙさん夫妻が飯田へＩターンしてきたのは，2015 年の 2 月である。Ｉターンの目的は，前掲の通り「就農」であった。そもそもなぜ農業に興味を持ったのか尋ねたところ，Ｙさんも Ｋさんも，もともとアウトドアが好きだったこと，それゆえに自然の多いところで生活したいという夫婦共通の思いがあったことなどを話してくださった。また旦那さんは，2011 年の震災を経験したことが，就農への思いを一層強くさせたという。震災を経験し，「今の仕事でいいのかな？という一抹の不安」を抱え，加えて当時のグラフィックデザイナーという仕事が「不規則な生活」の原因になっており，そのため「健康面的にもちょっとどんなもんなのかな」という思いがあったという。

このような経緯で「農業をやろう！」と決めたお二人ではあったが，ではどこでやるのかという話になった。その場所を探すために訪れたのが「農業人フェア」であった[118]。そのときのことをＹさんは以下のように話している。

> 「*それに行ってみたら，いろんな全国からのブースが出ていて，いろんなところの話を聞いていく中で，飯田のブースに話を聞いたときに，ワーキングホリデーっていう制度が飯田にはあるということを知って。それじゃあ，あとは色々，リニアモーターカーが通るとか（笑）私の実家がちょっと，相模原でちょうどリニアの駅ができるとこなので，あ，繋がったらなんかすぐ帰れるなと思って。そんなのもあって，飯田にちょっと，飯田が気になるようになって。それでワーキングホリデーにそこから参加して*」（Ｙさん）
> 「*まずは体験からやろうっていうことで。なかなかその体験をやらせてくれるところがブースで聞いたときに無くて，飯田市ぐらいだったんだよね，近場だとね*」（Ｋさん）

「ワーキングホリデー」という仕組みが設けられていることを知った二人は，その後 1 年間に合計 5 回にわたって飯田市を訪れている。そのときお世話になったのが，現在の師匠にあたる里親さんであるという。現在はその里親さんのもとで，農業全般に関わることについて学びながら独立のための準備をしている。

---

118 「農業人フェア」（正式には「新・農業人フェア」）とは，農林水産省が新規就農者倍増のために実施している施策の一環である。農林水産省の HP によれば，「就農希望者や自治体，農業法人等が一堂に会し，相談ブースでお互いの意向を確認したり，セミナーで先輩就農者の体験談を聞くこと等により，農業への関心を具体的な就農に繋げていくための総合就農相談イベント」と位置づけられている（農林水産省ホームページ http://www.maff.go.jp/j/press/keiei/zinzai/140613.html（アクセス日：2016-2-17））。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

⑪I ターンするにあたっての戸惑いや不安

I ターンするにあたっての戸惑いや不安について尋ねたところ，Y さんは，環境が大きく変わることや入ってくる情報が少なくなること，知っている人がいなくなってしまうというようなことに不安を感じていたが，実際に「来てしまえばそんなに」という感覚であったという。中でも印象的だったのは，Y さんが話してくれた「お隣さん」との関係である。これについて，Y さんは以下のように語る。

> 「*あとお隣さんとかもすごく良くしてくれて。人に関して寂しい思いがっていうのもそんなに感じないし，あとは，友達も田舎ができた！みたいに喜んでくれて，結構毎月のように遊びに来てくれるので。そういう意味であんまり，家族が身近にいないとか，そういうのではたまにちょっと落ち込んだりすることもありますけど，でも全然，ホームシックになったりとかっていうことではなくて*」（Y さん）

⑫地域の人々との交流について

地域の方々との交流について尋ねたところ，地元で開催される様々なイベントに足を運んだり，また清掃活動へ参加したりということを通じて，地域の方々との交流があるという。定期的に行われる「常会」というものがあるが，これは研修中ということもあり参加は免除されているという。こうした「気遣い」に，Y さんと K さんは飯田の地域性を感じているという。

> 「*その地域性，ガツガツ来ない感じが（笑）*」（K さん）
> 「*すごいなんかね。求めればすごく助けてくれるけど，踏み入っては来ないし，強制したりはしないっていう，そのほどよい距離感がすごく*」（Y さん）
> 「*やりやすいよね*」（K さん）

そして，こうした飯田の地域性については，前日の「農業人フェア」の段階から感じていたという。そのことが I ターン先として飯田を選んだ理由の一つになってもいた。

> 「*飯田を選んだ一つでもあるんですけど，農業人フェアとかで他のブースを見たときもわりと，結構，なんていうんだろう。あまりウェルカムじゃない地域とかもあって*」（Y さん）
> 「*なんかね。ちょっと壁つくってる感じがね*」（K さん）
> 「*やっぱり壁を感じる地域とかが結構あった中で，飯田はすごく来て来て！って言ってくださって。来てからもすごく手厚くしてくれるので。それは本当に助かってるし，良かったなあと思ってますね*」（Y さん）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

また，前述の「ワーキングホリデー」をはじめとした行政側の体制づくりの重要性について以下のように述べている。

> 「*あとやっぱり，（他の自治体がウェルカムではなかったのは）教育体制とかも多分あんまり，制度自体も整っていない地域だと，やっぱり未経験者を受け入れるのがお互いに不安なんだと思うんですよね。その点，飯田は里親制度だったりとか，ワーキングホリデーとかでしっかり基盤があるので，そういう意味でも受け入れしていただきやすいのかなと*」（Y さん）
> 「*足掛かりがあるから，入りやすいよね*」（K さん）

こうした飯田へのある種の「第一印象」が Y さんたちに飯田への I ターンを決意させ，そこでの経験は，実際に地域へと入っていった後も地域の人々との交流を通して継続的に感じられていた。

地域の人々との交流という点については，A さんの事例にも見られたように「物々交換」をするような関係があるという。

> 「（野菜を）*交換するんですよね。こっちの人はそう，交換するらしいです。渡しに来たら*」（K さん）
> 「*じゃあこれをって言って。でもなんかいいなあって*」（Y さん）

地域の人々とのこのようなやりとりを通して，Y さん夫妻は関係を結びながら，地域に根付いていこうとしている様子がうかがえる。

⑭飯田の魅力について

飯田の魅力について尋ねたところ，第一に「人のあたたかさ」をあげていた。こうした飯田の「地域性」とも言えるものは，前述の通り，Y さん夫婦が I ターンを計画する段階から現在まで飯田の人々と関わる中で継続的に感じられているようであった。そして，事前にそうした「地域性」を感じることの出来るような機会が設けられていることの重要性についても話している。

> 「*飯田の魅力としては，その人柄というか*」（K さん）
> 「*ね，あったかい*」（Y さん）
> 「*あったかい人たちが本当に多いので，本当に入りやすかったというのはあるので，まずはその，自分が就農したいところの人たちと関われる何かがあったほうが，先に，いいかなとは思いますね*」（K さん）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

その他，飯田の魅力としてはAさんの事例でも見られたように「景色が良いこと」，「温泉が多いこと」などがあげられていたのが印象的であった。

⑯現在の暮らしについて

現在，Yさん夫妻は農業研修中という身であることもあり収入を得ていないが，新規就農者向けに長野県から給付される給付金を受給しながら生活している。それは，かつて共働きで得ていた額よりは少ないものの，必ずしも苦労へと結びつくものではない。そしてまた，そうした金銭面での変化はYさん夫妻に新しい価値観をももたらしている。この点について，Yさんは以下のようにいう。

> 「*以前と同じような暮らしをって思うとまず無理なんですけど，そこはもう完全に考え方を変えて。まあでも何ですかね，生活にかけるお金は減ったけど，自分で穫れた，自分でつくった野菜をその場で調理して食べられたりとか。貧しくなったっていう感じはなくて，むしろ豊かに。食は豊かになったって印象だし，暮らしの，こっちにいるとお金もそんなにかからないので。家のお金もそんなにかからなかったりとか*」（Yさん）

そして，この「食」に関する豊かさは，例えば災害時の「安心感」にも繋がっていた。

> 「*地震とかそういうのもそうですけど，都会にいるより田舎でこう，例えば，食，食べ物がストップしちゃったときとかも，今だったら別にどうにでも対処できるっていう自信があるので。なんかそういう意味でも，安心材料が増えたっていうか。逆にいうと，飯田に無いもののほうが無いんじゃないかなって*」（Yさん）

このようにYさん夫妻の飯田での暮らしは，金銭的な側面（収入）についてはIターン以前に比べて低下しているものの，それが直接「貧しさ」や「苦労」を感じるものと繋がってはおらず，むしろ「豊かになった」と感じられていることがわかる。

⑱Iターンする以前と以後とで大きく変わったこと

Iターンする以前と以後とで大きく変わった点について，Kさんは第一に「金銭感覚」をあげていた。

> 「*向こう（横浜）だと，やっぱ収入があるぶんつい買っちゃう物も，今じゃ全然シビアに見ちゃいますね*」（Kさん）
>
> 「*洋服なんかも向こうでは結構買ってたんですけど，特に今着ていく場も無いので(笑)そんなに買う必要も無いっていうか。だったら農作業する服のほうが欲しいし，みたい*

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

な（笑）変に着飾らなくなったので，向こうにいたときは結構無駄遣いをしてたんだなあっていうのを感じたりしますね」（Y さん）

そして，この金銭感覚の変化を通して，将来の見通しや展望も大きく変わったという。

「*あとはあれかな。将来の見据え方が変わったというか。前は，そんな先までは考えてはなかったんですけど，今だと結構，自分が働ける年くらいまで，65 とか 70（歳）くらいまでのスパンで見る感覚になったかなっていうところはありますね。ちょっと先のことじゃなくて，遠い先のことまで*」（K さん）
「*前は働いてればお金ももらえたし，そんなに将来に対しての不安も無くっていうのもあって。今は自分が経営者になるっていうのがあるので，色々ビジョンというか，ちゃんと具体的に考えるようになったし，それが楽しかったりもするし。色々，将来こういうのもやりたいなとか，考えられるようになったので*」（Y さん）

また A さん同様，健康面での変化をあげていたのも印象的であった。

「*あとは健康的なとこだよね*」（K さん）
「*そうだね。私はもう夜勤とかをやってたので。身体の楽さというか，色々，大分変わりましたね*」（Y さん）
「*規則正しくなったし。僕も風邪，結構ひいてたんですけどね，向こうだと。こっちに来て全くひかなくなったし，頭痛とかも酷かったんですよ。やっぱりパソコンずっとでストレスもあるんですかね。あと，パソコンずっと見つめて電磁波浴びてたんで。今はほとんど浴びてないんで（笑）そのせいもあって頭痛もないのかなあって*」（K さん）

以上のことから，Y さん夫妻にとって I ターン以前と以後とで変わったのは，①金銭感覚，②将来の見通し，③健康面という大きく分けて 3 点であった。

3.4.3 R さんについて

最後に，R さんへの聞き取り結果を整理する。

⑦I ターンまでの経歴

R さんは富山県の出身である。高校卒業まで地元で過ごした後，大学進学で京都に移る。その後，小学校教員として採用され横浜に移り，以後，飯田市へ I ターンするまで横浜に住んでいた。I ターンしたのは 2014 年の 3 月末である。現在はパートナーの方と子ども 2 人の 4 人で生活している。なお，パートナーの方はクライミング事業を行っている。R さんは現在，育児休暇中で

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

あり，育児をしながら自営の手伝いをしている。

⑩I ターンのきっかけ

前述のとおり，R さんが飯田市へ I ターンして来たのは 2014 年の 3 月末であった。移住の大きな目的としては，パートナーの方とともに長年の夢であったクライミング事業を行うことであったという。移住先としていくつか候補が挙がる中で最終的に飯田市を選択したのは,「この辺（飯田）にクライミング事業が無かった」ためであり，これが一番の理由であった。この点について，R さんは以下のように話す。

> 「*商売をやっていく上では・・・で探していくと，飯田の街の規模とか，自分たちが住みたい環境とか，そういう候補，消去法でいって，残ったうちで。あと物件とかも探した中で縁があったというところですかね。一言でいえなくて*」（R さん）

このような商業上の理由を探し求めていった結果として飯田市を選択した R さんとパートナーであったが，そもそも「移住をする」ということについてはかねてから両者の間での合意があったという。

> 「*子育てもそうですね。自然の豊かなところでする，したいっていうのは夫婦共通の思いだったので*」（R さん）

実際に R さんが I ターンを決意したのは，ちょうど子どもが生まれたときであった。育児休暇を取り職場を離れていたこともあり,「ちょっと，えいっ！で感じ」で移住を決めたという。

⑪I ターンするにあたっての戸惑いや不安

I ターンすることへの戸惑いや不安について尋ねたところ，移住そのものへの不安以上に「事業がうまくいくかどうか」という面での不安の方が大きかったという。移住すること自体は，自身も，そしてパートナーもこれまで経験したことであったため，それほど大きな不安には感じられていなかった。

> 「*場所が変わる不安っていうよりも，私たちの場合，事業というかね。開業することの不安のほうが大きかったんですけど。わりと私たちあちこち引っ越しというか，生活変わってきた人なので。それで夫も，もともと愛知の出で，仕事で横浜に行ってたので。場所が変わることはむしろ自分たちに，田舎という場所に行くから，そっちの不安は無かったんですけど。生活していく，お金を得ていくっていう意味では少し不安があったんですけど，いろいろ夢でもあったので*」（R さん）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

そしてRさんは，自身が小学校教員であったこともまた，移住を躊躇わせなかったという。

> 「*幸い，幸いというか，向こう（横浜）でもうやめちゃってるので。今働くとしても教師として働くので，まあいつでもできるなっていう*」（Rさん）

以上のような夫婦共通の思いやRさん自身の職業およびこれまでの移動経験が，飯田市へのIターンを後押ししたことがわかる。

⑫地域の方々との交流について／その関わり方

地域の方々との交流について尋ねたところ，現在住んでいる地区の「組合」に入っていないことから，もともとその地域に住んでいる人たちとの交流はそこまで多いわけではないという。

> 「*私が組合に入ってないせいもあって，私はちょっと，正直そんなに。（中略）この辺には暮らすけど，ずっと定住するっていう気持ちがはっきり無かったので，組合に入らなかったんです。組合に入ってる人は，消防団の集まりだったり，なんやかんやと関わってるみたいだけど，私は正直まだ，〇〇に住んで半年かな？経つけど，まだそんなに無いです。本当，挨拶程度のおつきあいで*」（Rさん）

一方で，Rさんに特徴的だったのは，同じIターン経験者同士での交流が盛んであるということであった。

> 「*こっちに移住してきたら知り合いがいなかったので，〇〇ていう，あそこで移住しているお母さんたちとちょっと話をする機会があったんです。そしたらなんか，今のアパートじゃなくて一軒家で暮らしたいなんて話をしてたら，そこで仲良くなったその人も移住の人だったんですけど，近所に空いてるとこあったよって。そうやって紹介してくれて，繋げてくれて。でもそれがやっぱり，こっちに移住してきたら，移住の人と気が合って，そうやってできたお友達が結構みんな，お醤油づくりの会があるよ，とか，お味噌づくりの会があるよ，とか声かけてもらって。今そういうので楽しんだりね。家もね，そうやって見つけてもらって。前の住人が暮らしていたままのお家だったんですけど，片付けとかもそうやってみんなで手伝ってくれたり。私はそれにすごく救われてというか，助けられてます*」（Rさん）

このように，現在の家探しから日々の生活に至るまで，周囲にいる同じIターン者の人々がRさんの支えになっていることがわかる。

上記のように，Rさんは同じIターン者同士で交流することは多いけれども，元々その地域に

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

住んでいる人との関わりについてはそれほど多くないと述べていた。このことはRさんにとって一つの「悩み」として感じられていた。Rさんは以下のようにいう。

> 「*さっきの組合の話じゃないけど，地域の人と仲良くしたい半面なかなか。やっぱり，借り暮らし感が自分たちにある。向こうもちょっと遠慮してるのかなあ。なかなかそこは入っていきたい気もするし，ちょっとこっちも遠慮しちゃったり，周りもきっと遠慮してるとこもあって。なんとなく，移住の人たちじゃないけど，似てる人たちと集まると気が楽なので。結局そっちに行っちゃうので，地域のつながりがなかなか作りづらいかなあっていう気がします*」（Rさん）

> 「*〇〇さんと同じ組合になるんですけど，仕事の関係があるから向こうは入れられたんですけど。なんか，うち結局，今考え中ですって言ってずっと入ってないんですけど，なんか入ればちょっとお金もかかることだし。だから余計悩むんですけど。でも入っちゃうのもまた手なんですよね。関係を作るってね*」（Rさん）

> 「*いいことも聞くし，反対にちょっとわずらわしいことも聞くし。だから悩んじゃうんですよね*」（Rさん）

このようにRさんはもとからその地域に住んでいる人々との交流を望んでいないわけではない。同じIターン者の「先輩」たちから情報を得，それと現在の自分たちの生活の状況とを摺り合わせながら，どのように地域の人たちとの関係を構築していこうかと葛藤している様子がわかる。

一方で，こうしたいわゆる地縁（組織）を介した交流は少なくても，そうした地域の方々との個別でのやりとりはあるという。それは，Aさん，Yさんらの事例でも見られた「物々交換」によるものであった。そしてまたRさんはこの物々交換を通して「食」という側面から生活の変化を感じている。

> 「*あとすごくちっちゃいことかもしれんけど，こっち，野菜がおいしいとか。本当にこっち，お野菜を貰ったりだとか，生活の仕方がそういう食の意味でも結構変わってきて*」（Rさん）

> 「*近所の農家さんがすごいくれたりだとか，余るくらいもらって。今度はそれを加工したりして。そういう楽しみが出来たりだとか，そういう意味で，前とは食っていう意味でも暮らしが変わったなあと思います。私はそれは良かったほう，変化で*」（Rさん）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

⑯現在の暮らしについて

現在の生活の状況について尋ねたところ，Y さんらの事例と同様に，収入面での落ち込みは見られた。しかし R さんもまた，このことを特段の苦労だとは感じていなかった。R さんは以下のようにいう。

> 「*(収入面での落ち込みは）正直あるのはあるけど，それこそお野菜貰ったりだとかがあって。やっぱり自営をはじめたってことで落ち込むのは覚悟の上だったんですけど，まあまあなんとか。今のところはなってます。工夫をしながらっていう感じですかね。前だったら結構買い物に行ったりする生活から，今は本当にあるもので生活をしたり，リサイクルショップに行ったり（笑)。前とは違う方面で努力をして。でもそれがまた楽しかったりもするんですけど*」（R さん）

この「お金を使わないようにする」意識の変化は，R さんの日々の生活の仕方にも影響を与えているようだった。

> 「*(色々）無くても生きていけるという（笑）あとは車さえあれば，バスにも電車にも乗らない。まあ無いのもあるんですけど，乗らないで歩いたり。土地に合わせた暮らしっていうんですかね*」（R さん）

⑭飯田の魅力について

飯田という地域の魅力について尋ねたところ，「子育て中の私だからかもしれないけど」という前置きをした上で，以下のように話してくださった。

> 「*時間の流れ方がすごく，生きること，生活することに，暮らすことに時間をかけられる今の暮らしが私はすごく好きなんです。だから，飯田っていう土地柄もあるんだろうけど，なんかこう，ゆったりとした，上手く言葉が出て来ないけど，すごく，そういうところが素敵だなって思います*」（R さん）

> 「*まだまだ今これから，そうやって野菜も自分でつくりたいっていう夢がある，思いがあるけど，それを叶えられる場所なので*」（R さん）

そしてまた，飯田という土地に多くの I ターン者がいるということが，自身も I ターン者である R さんにとって支えとなっており，そうした人々が自分の周囲にいることの大切さを感じているようだった。これは前述の I ターン者との交流からもわかることである。この点について R さんは以下のようにいう。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

「*それでまた，移住者も多いから刺激的というか。そういう情報交換もできる。まわりに人がいないと多分出来ないんだろうけど，もう8年くらい，10年近く前にIターンしてきている人とかがいて，そういう人からいろんな情報を貰えるんですよね，今までの経験とか。だから，移住者の先輩が多いから心強いですよね*」（R さん）

⑱I ターンする以前と以後とで大きく変わったこと

最後に，I ターン以前と以後とで一番大きく変化したことは何かを尋ねた。この点について R さんは，飯田の魅力としてもあげた環境面による変化を大きく感じているようであった。

「*移住してきたから，周りにそういう環境があったりするからか，なんかこう，ご飯をゆっくり，畑で収穫してつくったり，加工したり。あとは子どもと。やっぱりいい環境だとお散歩にも行きたくなるんですよね。こっち，本当にお天気がいいですよね。のんびり，時間の流れが。ゆったり過ごせるようになったというか*」（R さん）

「*自営ということもあって，時間の流れが違ってきて。定時に出勤・退勤の生活から，自分たちで時間が作れる。自由な時間は減ったけど，自由な時間設定ができるようになったので*」（R さん）

移住前と仕事の内容が大きく変化したという要因はあれども，上記のような環境の変化によって「時間」そのものの感じ方もまた変化したと感じられている点が印象的であった。

3.5 考察

本節では，前節の調査結果を踏まえ，先行研究で議論されていた点を再検討していく。まず，山口の議論を引きながら整理した「ジェンダー」という側面について検討する。第 2 節でも述べたように，山口の「U ターン」者を対象にした研究では，女性たちがパートナーである男性の仕事の都合によって移動を選択する傾向にあることが指摘されていた。この点については，Y さん夫妻と R さんの事例が参考になるだろう。ここで重要なのは，両者ともパートナーとの間で移住をすることについての合意がとれていたということである。例えば Y さん夫妻であれば「自然の多いところで生活したい」という共通の思いを持っていたことが移住に繋がっているし，また R さんであれば「自然豊かなところで子育てをしたい」という思いが子育てをきっかけに移住を決めたことに繋がっていた。それは，必ずしも片方のパートナーの「都合」に左右された結果としての合意ではなく，「生き方」に共有された考え方に基づいての合意であった。夫婦間でこのような共有を行い，そこで共有された考え方をもとに今後の生き方を展望していけるというのは，ジェンダーの観点からしても理想的な状況ではないだろうか。移動の「結果」だけではなく「過程」に注目することも，ジェンダーという観点から地域移動を扱う研究においては必要といえるかも

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

しれない。そこには必ずしも格差が生じているばかりではないかもしれない[119]。

また，この「生き方」という点に注目するならば，4 名とも現在の暮らしにある程度満足している様子であったのは，非常に印象的であった。もちろん，3 名とも生活する上で全く不安がないわけではない。しかし，その不安は「先の見えなさ」というような漠然としたものを伴うものではなく，4 名とも色々なかたちで「このさき」を見据えることができていた。実際，A さんは，自身の経験を踏まえて今後 I ターンを希望する人たちのために「空き家活用事業」を展開したいという展望をもっていたし，Y さんと K さんは「自分が働ける年くらいまで」という長期的なスパンを持って将来を展望していた。また R さんも飯田という場所が「「これからやりたい」という思いを叶えられる場所」であると述べており，そこにはやはり「このさき」が見据えられていた。こうした，「このさき」を見据えるような「生き方」を，窮屈な先の見えない社会に対抗するオルタナティブな「生き方」として捉えることができないだろうか。

次に I ターン者と地域の人々との関係性について考察してみたい。先行研究としてあげた高木（2000）の議論においては，I ターン者はあくまでも「よそ者」と位置づけられており，地域住民は彼らに強調を求めるようなかたちで，そこにはあくまでも分断線がひかれたままであった。しかし，今回の事例においてはそうした分断線が必ずしもひかれているわけではなかった。A さんの事例における「色々頼まれるのを断る」ことや「やりたいこととやりたくないことをはっきりして」おくというというような地域と関わり方は，一面で見れば上記のような分断線がひかれているようにも見えるが，それはあくまで地域活動という側面についてであって，「地域活動」以外の日常生活においては，地域の人が「とにかくいろんなものをくれる」という関係ができあがっている。ここで，地域活動と日常生活とは直接的に結びついているわけではないのである[120]。Y さんと K さんの事例では，「常会」という地域活動へ参加できないことが述べられていたが，地区の区長さんの配慮もあって参加が免除されていた。しかし，A さんの事例と同様，近所の人が野菜を持ってきてくれる，そしてそれにお返しをするというような関係性があった。R さんの事例でも同様に，地域の消防団などの地縁組織への加入はしていないものの，やはり野菜のやりとりを通した地域の人々との関係があった。以上のようなことを踏まえると高木の研究によって指摘されていたような「同化」を求めるような地域住民の働きかけとそれに対抗するようなかた

---

119 もちろん，そうした合意形成の段階である種の権力性が作用することにより，女性の側が合意「させられている」という批判もありうるだろう。しかし，この点の検証は別途求められることであり，本稿はそうした議論を目的としたものではなく，前述のような「過程」へと着目することの可能性を示すにとどまるものである。

120 もちろん，A さんの事例を整理した部分でもみられたように，A さんは地域に関わる活動全てを断っているわけではなく，まちづくりに関わる委員会の委員等を務めている。高木（2000）の研究では，元々その地域に住んでいる人たちが移住者たちを自らの価値観からはずれないように働きかけるような動きが見られたが（そして高木はそれを「同化」の動きと定義していたが），Y さんと K さんの語りにあるように，今回目を向けた飯田においては「ほどよい距離感」が保たれているという点に特徴があり，高木のいう意味での「同化」という動きは（今回の事例の限りでは）見られなかった。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ちで生じる「異化」というような動きは，（少なくとも高木が提示するようなかたちでは）今回の事例では見ることができなかった。このことは，I ターン者が「地域の一員」として人々に認識されているということであり，高木の示すＩターン者像とは異なるものといえるだろう。このようなＩターン者と地域の人々との関わりが可能なのは，Y さんと K さんが語った「ほどよい距離感」をもつ「飯田の地域性」が大きな影響を持っていると推測される。

最後に，I ターン後の暮らしの様子と価値観の変化という点について考察したい。今回聞き取りを行った女性は 3 名とも，I ターン以前は介護関係の仕事や看護士，教員といった専門職として従事しており，必ずしも不安定な生活を強いられているわけではなかった。K さんも同様に，グラフィックデザイナーとして活躍されていた。なぜ，そうした専門職として働き「安定」していたように見える 4 名が，わざわざその職をいったんやめてまで，I ターンという選択をとったのであろうか。その背後には，Y さんと K さん，そして R さんの語りに見られたように職業的安定とは異なる次元で作用する「生活の窮屈さ」とでもいえるものであった。それは，例えば Y さんや K さんが働くなかで感じていた生活リズムの不規則さや身体のしんどさ，あるいは R さんが「定時出勤定時退社」という生活の中で感じていた毎日が同じように過ぎていく感覚にみることができる。そうした生活の変化を求める気持ちが，I ターンという選択を促した側面も大きいだろう。3 名とも，I ターン以前と以後とでの大きな変化について「健康面」あるいは「時間の感覚」に関わることをあげていたのは，それを物語っている。

また前述のように，ある程度収入がある状態からのＩターンは収入の低下という事態をもたらすが，そのことは必ずしも「貧しさ」に結びつくものではなく，むしろＩターン者の「お金」あるいは「消費」に関する価値観を大きく変化させることによって，新たな「豊かさ」や「楽しさ」の発見につながっていた。A さんは，東京に住んでいた頃とは比べ物にならないほどの月 7000 円という賃貸に驚いていたし，Y さんと K さんは，自分で作り自分で料理して食べるという，金銭的な豊かさとは異なる「食」の豊かさを感じていた。また Y さんは，そうした暮らしの中で，以前は「結構無駄遣いしてた」ということにも気付かされたと話していた。R さんも，以前は頻繁に買い物に出かけていたが，今は「本当にあるもので生活をしたり，リサイクルショップに行ったり」するような「前とは違う方面で努力を」するようになっており，しかも，それがまた R さんにとって楽しみとして感じられていた。こうした価値観の変化は，まさにＩターンという選択と「飯田」という地での暮らしによってもたらされている。ここに，先行研究とは異なるＩターン者像や，社会全体が閉塞感を抱える中におけるオルタナティブな「生き方」を見ることができる。

3.6 おわりに

本章では，飯田市へとＩターンされた女性たちへの聞き取り調査から，主に移住後の地域の人々との関わり方という点に注目しつつも，I ターンのきっかけや不安に感じていたこと，現在のくらし向きの様子などから，当初予定していた以上の示唆を得ることができた。4 名の方々のＩタ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ーンという選択と飯田での暮らしは,本報告書において他の学生がテーマにしたような飯田の「核」となって活躍する人たちの動きほどダイナミックなものでは無いだろう。しかしそれは，当人たちのこれまでの考え方や価値観を大きく転換させるものであり，それはまさに，社会全体が閉塞感を抱える中でのオルタナティブな「生き方」のように思われる。今回は，4 名という数少ない方々にしかお話を伺うことができず，これをもってＩターンという動きの内実やその後の変化の全てを捉えることができたわけではないが，少なくともこれまでの Ｉ ターン像とは違う何かを，「飯田」という地域特有のものとして示すことができたのではないだろうか。今回の報告が少しでも飯田のためになれば，これ以上のことはない。

謝辞

本調査を実施するにあたり，多くの方々にお世話になりました。まずは，お忙しい中，快くインタビューを引き受けてくださいました 4 名の方々に心より感謝申し上げます。みなさまのお力が無ければ，今回の報告が完成することはありませんでした。みなさまからお話を伺うなかで，そして本稿を執筆する中で，私自身の関心である「地方」，そして，なにより「飯田」という地にますます惹き付けられ，また多くのことを学ばせていただきました。

また，調査を実施するにあたり，飯田市産業経済部産業振興課のみなさまにお世話になりました。中でも，雇用人材誘導係主事の羽生千夏さんには，4 名の方々との交渉や日程調整，インタビュー場所までの移動など，本当に様々なところでお世話になりました。ありがとうございました。

みなさまからお聞きしたお話を十分に汲み取り,お返しすることができたかはわかりませんが,少しでもみなさまの，そして飯田のためになれば幸いです。

引用文献・資料，Web ページ

山口恵子　“地域移動におけるジェンダーと経済格差 −青森県の U ターン移動に関する住民調査から”　『季刊家計経済研究』 SUMMER No.107，2015，p.36-44.

高木学　“「離都向村」の社会学”『ソシオロジ』 社会学研究会，第 44 巻 3 号，2000，p.3-20.

農林水産省ホームページ（農林水産省 HP　http://www.maff.go.jp/j/press/keiei/zinzai/140613.html（アクセス日：2016-2-17））

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

巻末付録

20160104　　飯田調査内容について

この調査は，飯田市へＩターンされた方々の，そのご経験やＩターン後の生活についてお聞きするものです。みなさんからお聞きした内容をもとに，よりＩターンをしやすい地域のあり方やそうした地域の人々の関係性について考察していきたいと考えております。

現時点では，主に以下のような内容をお聞きする予定です。実際にお話を聞かせていただく際には少し変更が生じてしまうかもしれませんが，ご了承ください。

・Ｉターンをされてどれくらいになりますか？
・Ｉターンをされたきっかけは何ですか？
・飯田に来られる前はどちらにお住まいでしたか？
・Ｉターン先として飯田を選ばれたのはどうしてですか？
・Ｉターンをされるにあたって，戸惑いや不安はありましたか？
・現在お住まいの地域の方々と交流はありますか？
・地域活動には参加されていますか？
・Ｉターンをされる前とされた後で，一番大きく変わったことはなんですか？
・飯田という地域に魅力を感じることはありますか？

なお，実際に聞き取りをおこなわせていただく前に以下の点についてご確認ください。

▸お聞きした内容は，現在，東京大学教育学部教育実践・政策学コースの社会教育学演習（牧野ゼミ）で執筆中の報告書の一部としてまとめさせていただきます。その際，個人情報やみなさんのプライバシーにかかわることは厳重に扱い，研究以外に使用することは絶対にありません。ご安心ください。

▸聞かれたことについて，答えたくないことがあれば答える必要はありません。みなさん自身のお考えを，率直にお話しいただければと思います。

▸みなさんからお聞きしたお話を，あとでもう一度聞きなおし，記録としてまとめるために，ICレコーダーを使用させていただきたく思います。

▸そのほか，わからないことや不安なことがありましたら，遠慮なくいつでもご相談ください。連絡先は下記のとおりです。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

以上をお読みいただいた上で，内容に同意していただけましたら，本調査へのご協力をお願いできますと幸いです。よろしくお願いいたします。

研究責任者：丹田　桂太（たんだ　けいた）
東京大学大学院教育学研究科 生涯学習基盤経営コース　社会教育学研究室
連絡先：ktanda@p.u-tokyo.ac.jp

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

第 4 章　飯田における民泊という活動

山崎 恒宇

4.1 はじめに

飯田の調査実習を終え，各自で報告書を作成する時期になった。それぞれで調査する分野を決定する必要があったのだが，実はその時点では明確に調べたいものが決まっていたわけではなかった。訪れた際に聞いたお話はどれも面白そうで魅力的だったが，それがかえって決め手に欠ける結果になっていた。最初の希望調査では，自身がその時に部活動について調べていたこともあり，訪れた高校の部活動について調査しようと考えていたが，強引にこじつけた感覚は否めなかった。

そんな時に，世間では民泊や Airbnb といった話題が広がっていた。そして，これが私の調査分野の決め手になった。飯田で農家民泊を体験したが，それと Airbnb に代表されるような民泊を組み合わせて調査すれば面白い調査になるのではという予感がしたのだ。幸いなことに，飯田市で Airbnb を通して民泊を営んでいる方もいらっしゃったので，飯田の民泊について調査することに決めた。私が民泊を調べることにしたのはこのような理由からである。

この報告書では，民泊を営んでいる方たちの取り組みや思い，そして彼らに対する行政のサポートについて分析・考察していく。

4.2 調査の概要

4.2.1 農家民泊概要

飯田における農家民泊は，株式会社南信州観光公社が事業として提供している体験活動プログラムの一つである。体験活動プログラムについて，南信州観光公社は“南信州に住む人々がインストラクターや案内人となり，訪れた人とともに普段の仕事や暮らし・趣味を一緒に味わったり，地域の自然や歴史をともに楽しんだりといった体験”であり，“これらの体験活動を通じて様々な交流が生まれ，様々な思いを伝えるのが，私たちの使命”[121]と説明している。農家民泊では，農家に宿泊しながら農作業を体験し，農家と交流するという経験を提供している。

4.2.2 Airbnb 概要

青木歩，本江正茂は Airbnb について“2008 年に Brain Chesky ら 3 人によって設立されたベンチャー企業で，居間のソファーから空き部屋，別荘まで未使用の物理的スペースを持つホストと，数日から数週間程度の短期滞在場所を必要とするゲストをマッチングさせるオンラインサービス”[122]と説明している。Airbnb が物件を所有するわけではなく，あくまで民泊事業のプラ

---

[121] 南信州観光公社 HP 入手先 URI: http://www.mstb.jp/900other/archives/honmono.html （アクセス日：2016-2-7）

[122] 青木歩，本江正茂“「Airbnb」の日本における利用実態に関する研究−異文化交流と収益を目的とした新たなシェアの形態”『日本建築学会大会学術講演梗概集』 2013，p.915-916.

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

ットフォームという立ち位置になっている。

また，Airbnb の関係者は，Airbnb と通常のホテル宿泊の違いについて“宿を提供するホストとの交流によって，その土地ならでは，その人ならではの体験をできるのが Airbnb”[123]と述べている。この点は，Airbnb の HP に記載されている“190 カ国超の地元の家で，暮らすように旅をしよう”[124]という文言からも読み取れる。

現段階では，Airbnb に登録されている物件の多くは行政の許可を得ずに運営されており，法的な問題点が存在している。また，利用客のマナーや地域住民とのトラブルといった問題も指摘されている。一方，外国人観光客の急増の影響で宿泊施設が不足しており，その状況を改善するために, Airbnb で行われているような民泊に関して規制を緩和し許可制にすることで宿泊施設の拡充を目指す動きもある。

また，Aribnb の外国人利用者にも特徴がある。日本全体における 2015 年の訪日外客数の半数は韓国・中国・台湾からの観光客が占めているが，Airbnb に関しては欧米からの観光客の利用が多いことが指摘されている[125]。調査の標本サイズや対象地域，調査主体などの問題で正確な情報とは言い切れないが，Airbnb の発祥などを考慮すると，ある程度信憑性があると考えられる。

4.2.3 調査の方法

今回は飯田に訪問し，以下の 4 名の方にインタビューを行い，その結果をもとに分析，考察を進めた。

・株式会社南信州観光公社社長高橋充さん
（日時：2016 年 1 月 25 日 15:00～15:40 場所：南信州観光公社事務所内）
・飯田市で Airbnb のホストを営んでいる A さん[126]
（日時：2016 年 1 月 25 日 18:00～19:00 場所：飯田市内のカフェ）
・飯田市で農家民泊と民宿を営んでいる柏木ちづ子さん
（日時：2016 年 1 月 26 日 9:30~10:15 場所：民宿宮のまえ）
・飯田市観光課の鈴木義光さん
（日時：2016 年 1 月 26 日 11:00~11:45 場所：南信州観光公社事務所内）

---

[123] 東洋経済オンライン 『Airbnb は，なぜ旅人に受け入れられたのか「おもてなしのプロ」が語る新しい旅の価値』2013, 入手先 URI: http://toyokeizai.net/articles/-/27075 （アクセス日:2016-2-8）
[124] Airbnb HP 入手先 URI: https://www.airbnb.jp/ （アクセス日:2016-2-8）
[125] 日本政府観光局 入手先 URI:
http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/20150722.pdf （アクセス日:2016-2-8）
マンション・チラシの定点観測
入手先 URI：http://1manken.hatenablog.com/entry/2015/07/29/054640（アクセス日:2016-2-8）
マンション・チラシの定点観測
入手先 URI：http://1manken.hatenablog.com/entry/2015/06/30/053430（アクセス日:2016-2-8）
青木歩，本江正茂“「Airbnb」の日本における利用実態に関する研究−異文化交流と収益を目的とした新たなシェアの形態”『日本建築学会大会学術講演梗概集』 2013，p.915-916.
[126] A さんは会社も経営しており，従業員とともに Airbnb での民泊活動を行っているが，今回の報告書では便宜上，A さんが民泊を営んでいると記述する。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

4.3 調査結果

4.3.1 民泊を始めた理由・きっかけ

A さんが Airbnb で民泊を営む理由は，観光に関する外国人へのリサーチである。

A さんは元々Airbnb に取り組む前に，香港の観光客数十人を対象にしたサイクリングツアーを運営していた。しかし，その活動について「自分たちが入れ込んでったわけじゃない中で，やっぱり大きな産業にはなってない」とした上で，「このまま長いことやってても しょうがないから，そろそろね本格的に仕掛けていこうかなと思う気持ちもある中で，まずは外国の人にいろいろなリサーチができたらいいなと。今は香港だけなんだけど，いろいろな国の人達が，そもそも外国人ってどんなんなのか，外国人から見た飯田ってどんなんなのか，そういったリアルなものが取れるかな」と考えた。その折に Airbnb の存在を知り，この目的に運営を始めたとのことである。

柏木さんが農家民泊を始めたきっかけは，地区の集会で農家民泊の紹介を受けたことである。オープンな性格だったこともあり，受け入れることに抵抗や違和感はなかったという。

4.3.2 民泊での具体的な取り組み

先に述べたように，A さんが Airbnb で民泊を営むのは外国人へのリサーチが目的であり，Airbnb の活動において収益は重視していない。宿泊料についても Airbnb のシステムの都合で一度支払う必要はあるが，後で手数料を除いた金額を客にお返しするシステムを取っている。そのため，宿泊にかかる費用は安く抑えられている。また，有料ではあるが貸し自転車とツアーガイドのサービスも提供しており，単なる宿泊に留まらないサービスを展開している。

客層は外国人が多く，訪れる目的は様々であるものの，傾向として「大体世界一周の途中とか，日常的に世界回って今回はアジアに行ってみたくてって人」が多く，ビジネス目的の人はほとんどいないとのことであった。また，日本人の客の目的も様々で，飯田線に乗りに来た，Airbnb で面白いところを探していて，長野で探してみたところ A さんが運営する民泊を見つけたといったものを挙げていた[127]。

A さんは，Airbnb での民泊を営むメリットとして，通常では繋がらないような人と繋がるきっかけができたことと，職員の経験値向上への寄与の 2 点を挙げている。

前者の例として A さんは，Airbnb に利用している物件を通して不動産業やリフォーム会社との繋がりができたと述べている。この例は会社としての繋がりができた例だが，Airbnb の特性上，一般論として，個人と個人との繋がりにおいても，通常では繋がらないような人との繋がりが生まれる可能性は十分考えられる。

後者に関して A さんは，異業種を取り込むことが本業に良い影響を与えることに繋がると考えている。例として，A さんの会社の業界はその特性上，BtoB の事業が中心となっている。しかし，A さんにとってそれは「商売から離れた商売」をしているように見えるという。Airbnb で民泊を営むことは，個人客への商売（BtoC）を知り，その知見を BtoB の業務に活かすことに役立

[127] A さんは，「すべての人と付き合えてるわけではないのと，本当のことを喋ってるかどうかもわからない」と前置きした上で述べている。

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

つとのことである。

柏木さんも農家民泊に関して経済的なメリットは重視していない。もちろん，ボランティアでも全然構わないというわけではないが，経済的なメリットより訪れた人と交流ができることが重要とのことである。

この交流に関して，柏木さんは以下のように述べている。

> 「*お金的な面ではなく，子どもたちから得るものもあるし，学生さんたちにも，私達と出会ったことで何か収穫して帰って行ってもらいたいってのもあるし，楽しい思い出を作ってもらいたいってのもある。それがメインだね*」

ここからも，金銭面以外に得るものがあることが分かる。では，実際に何を得ているのだろうか。インタビューからは，そもそも人との交流が楽しいということと，訪れた人から学ぶことがあるということがこの答えとして見えてきた。

前者に関して，柏木さんの経歴は，奄美大島で生まれ育ち，中学 3 年の時に東京の中学校に転校し，その後進学・就職し，働きながら短大や専門学校に通った後，その時の仕事を辞めて幼稚園教員に転職し，その後縁あって嫁ぎ飯田に住むことになったということである。このような人生の中で多くの人に出会ったことが人との交流を楽しむようになった理由と述べている。

後者に関して，柏木さんは自身が経験した様々な具体例を紹介してくれた。例えば以下の様な例がある。

> 「*一回ね，朝，「もう支度できたー？」「はーい」って言って，出かけるのに 5 分って時にまだ散らかってる女の子が居て，やっぱり，はいって返事しながらまだできてないってことで。（中略）私がきちんと確認をすべきだなって思って。起こらないようにするには自分が。そこが子どもだと思うのよ。だから，何度も確認して何分前にはきちんと出来てるかってことを自分が確認をすべきだなって。そういうところも自分の勉強になるじゃない*」

また，金銭面以外に得るものの例として高橋さんは以下のように述べている。

> 「*農業体験とかそういうのにしても，普段自分たちは大変だったりとか，いわゆる観光とかで来た方にとって楽しいものなのかなっていうような感覚もあると思うんですよね。それに来た方たちがそのことに対して喜んでくれたりだとか，あるいは勉強になるなっていった形で接してくれたりだとか，こういうことに対して敬意を表してくれたりだとか，っていうのはやっぱり普段の生活の中ではそういったことはなかなかない*」

ここからは，体験活動プログラムを通して，自身の活動に対して肯定的な評価をもらえうると

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

いうことが分かる。

4.3.4 行政のサポート

A さんが取り組んでいる Airbnb での民泊について，鈴木さんは「宿泊を安く，気軽に泊まっていただくという取り組みなのかな」と捉えている。また，地域住民とのトラブルや外国人客のマナーといった点や，法的な観点において課題が多く，現段階では，そのような形の民泊は飯田市としては進めていないと述べている[128]。

A さんも，Airbnb での民泊に関して直接的支援はなく，また，自身が商売を行うにあたってできるだけ自立した主体であることを目指しているため，Airbnb の事業に関してはサポートも望んでいないと述べている。また，その一方で行政には，人的な支援がとても強く，新しい事業やユニークなことを始める際にはとても力強いとコメントしている。

農家民泊経営者へのサポートについて述べる前に，体験活動プログラムの受け入れ側と南信州観光公社の関係性について触れておく。両者の関係性について高橋さんは以下のように述べている。

> 「*事業としては私達がやって，地域の方たちは自分たちの活躍の場として捉えて，積極的に関わって頂いてるという感じですね。だからやらされてるって感覚はないと思いますよ*」

ここからは，受け入れ側が南信州観光公社の事業に自主的に協力していることが分かる。では，その中で実際にどのようなサポートがされているのだろうか。

柏木さんが取り組んでいる農家民泊へのサポートは主に研修機会の提供であった[129]。

研修機会の提供は南信州観光公社が行っており，その内容は「こちらはほんものの体験を提供するってことを大命題としてやっていますので，そういう体験ってのは地域の人達が普段の生活

---

128 鈴木さんは述べていなかったが，行政は Airbnb のようなタイプの民泊を現段階ではサポートできないと考えられる。飯田市の観光政策は『飯田市観光ビジョン』という資料でまとめられているが，これが公表されたのは 2015 年 3 月である。一方，Airbnb のような，ネットを利用した民泊についての検討を始めると明記したのは，2015 年 6 月に閣議決定した「日本再興戦略」であり，規制緩和の話題が登場したのはその後である。ここから，飯田市の観光政策において Airbnb のようなタイプの民泊は検討するだけの時間的な条件が整っていなかったと考えられるためである。また，現段階において許可を取らずに宿泊業を営むことは原則違法であり，その点も公的に支援できない理由であると考えられる。

129 南信州観光公社の業務内容には，利用者と受け入れ側の仲介も含まれており，これもサポートと捉えられなくはないが，仲介業務はこの事業を行う上で前提となる業務だと考え，今回はサポートという枠に入れることはしなかった。また，高橋さんは「サポートというよりは，事業としてやっているのは私達なんですよ。マネジメントって部分ですよね，協力して頂く地域の方たちにそういう（新鮮な）気持ちを持っていただく。（中略）我々はそういう形で支えられているというか，仕事をしていますね」と述べており，研修をサポートと捉えているわけではなかった。しかし，ここでは受け入れ側の立場からするとサポートであると思われたため，このように扱うことにした。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

の中に受け入れて体験，交流していただくってところになりますので，その考え方を地区ごとに研修会をやったり反省会をやったり，全体で，外部から講師を招いて話を聞く機会をもったり」となっている。高橋さんは，この研修によって受け入れ側の意識高揚や自分たちの活動の価値の確認といったメリットを指摘している。また，受け入れ側には，体験活動プログラムを実施する際のマニュアルがあり，それを利用して講習を受けてもらっている。

しかし，体験活動を現場で行う際の裁量はそれぞれの受け入れ側が持っており，その内容も受け入れ側それぞれの技術や経験，さらに自身の活動の規模などで変わってくる。そのため，具体的な活動の内容や方法を細かく設定することはなく，受け入れ側に意識してもらうことは，注意事項と体験活動ということを前提にした活動や交流を行うこと程度に留まっているという。

その他のサポートとしては金銭的な援助がある。鈴木さんは「農家民泊に関しましては，やってくださっている農家さんは全員簡易宿所の許可申請を県の方にとってありまして，その際にかかる申請料の半額相当を飯田市が負担するというのを行政としては取り組んでいます」と述べている。また，柏木さんは個人的に民宿を行っており，一般のかたをご紹介してもらうこともたまにあるという。

柏木さんは，現状のサポートに特に不満はなく，今後行政に追加してほしいサポートも特にはないと述べていた。

また，鈴木さんは，観光業は民間が中心となって動いていくべき分野であり，その中で行政が果たす役割は，民間の観光事業者が動きやすい仕組みや枠組みを作っていくことであると述べている[130]。

4.4 考察

今回の調査の中で私は，民泊を営む方の思いや取り組み，観光を支える行政の方との関係性など，様々なことを学ぶことができた。報告書の都合上，載せきれなかった内容もある。その中で私が個人的に特に興味深く，大事だと思った点が 3 つある。

1 つ目は，民泊を営む方の自立性の高さである[131]。

A さんが営む民泊は，4.3.4 で触れた，A さん自身の信念や実際の取組みなどから自立性の高さは明らかである。柏木さんも，農家民泊に加えて自主的に民宿を経営しており，宿泊業を通して自主的に交流を進めている。また，その他の農家民泊経営者も，4.3.4 で触れたように，南信州観光公社の事業に積極的に参加しており，南信州観光公社の体験活動プログラムを実際に行う際もかなりの裁量を持っている。この点は，観光事業は行政主導で行い，民間の事業者はそれに従うだけという思い込みがあった私にとってとても驚いた点であった。

2 つ目は，民泊での人との交流による，金銭面以外でのメリットである。

---

130 具体例として Wi-Fi の拡充や道路の整備といった，ハード面の質向上を挙げている。

131 今回は深く触れていないが，体験活動プログラムに関して，客に対して受け入れ側が従属的な姿勢を取るのではなく，対等に近い形で接していることも興味深かった。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

今回のインタビューからは，客との交流それ自体を楽しむ，交流によって新たな学びを得たり自身の普段の生活の意義を再確認したりといった良い影響が生まれることが分かった。これは人生をより豊かにする有効な方法の１つと考えられる。

3 つ目は Airbnb での民泊と農家民泊での客層の違いである。

Airbnb での民泊は 4.3.2 で触れたように外国人利用者が多いが，体験活動プログラムでの農家民泊には修学旅行などによる学生客が多く，両者の客層は大きく異なっている。また，後者に関しては，飯田の観光政策を学びに訪れる社会人を泊めることもあるという。

全体を通して，飯田での民泊の活動からは，飯田外の様々な人と積極的に「つながる」という側面を強く感じた。誰かにやらされるのでもなく，過度に経済効果を追い求めるのでなく，自ら人と接していき，その交流を通して相手にも良質な観光や体験を提供しつつ，自身もその交流から楽しみや学びなどを得ている。観光客がただ単に観光名所を巡ったり，食事や温泉を楽しんだりするだけで，受け入れ側はただ奉仕するという形では生まれないつながりが飯田では生まれており，農家民泊に関しては，それを支える行政の仕組みづくりも相まって一つの完成された交流・体験の場になっていると実感した。

今回インタビューした民泊の活動に関してはそれぞれ安定的な活動が行われていたが，今後の課題としては観光に無関心な層と観光客との間での交流を増やすということが考えられる。例えば，言い方は悪いが，体験活動プログラムでは飯田外の人が流入しており，外部の人とつながるためのリソースは十分にあるともいえる。また，民泊の規制緩和で，観光に関心がなかった人たちが自身で民泊を開始し，Airbnb などのようなマッチングサイトを利用して農家民泊とは異なる層を誘客し，交流するといったことがあるかもしれない。素人考えではあるが，観光に無関心な層と観光客との間での交流を増やすために，現行の制度や Airbnb といったサービスは有効に活用できるのではないかと思っている。

謝辞

今回のインタビューでは，4 名の方にご協力いただきました。皆様のご協力のおかげでこの報告書を作成することができました。特に，高橋さんには日程調整や移動など，多くの面でお世話になりました。皆様，ありがとうございます。

インタビューの中で，どの方にも示唆に富むコメントをしていただき，民泊や観光に対する考え方が大きく変わりました。インバウンドや爆買いといった言葉が話題になる中で，ただ単に経済的な側面を追い求めるのではなく，人と人との交流を大事にするという姿勢が，頭ではそういう観光もあるとは分かっていましたが，夏のフィールドワークや今回のインタビューで実感することになりました。皆様には本当に様々なことを学ばせていただきました。誠に感謝しております。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

参考文献・資料，Web ページ

Airbnb HP 入手先 URI: https://www.airbnb.jp/ （アクセス日:2016-2-8）

青木歩，本江正茂 “「Airbnb」の日本における利用実態に関する研究−異文化交流と収益を目的とした新たなシェアの形態” 『日本建築学会大会学術講演梗概集』 2013，p.915-916.

東洋経済オンライン “Airbnb は，なぜ旅人に受け入れられたのか「おもてなしのプロ」が語る新しい旅の価値” 2013，入手先 URI:

http://toyokeizai.net/articles/-/27075 （アクセス日：2016-2-8）

日本政府観光局 入手先 URI: http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/20150722.pdf （アクセス日：2016-2-8）

マンション・チラシの定点観測入手先 URI:

http://1manken.hatenablog.com/entry/2015/07/29/054640 （アクセス日：2016-2-8）

マンション・チラシの定点観測入手先 URI:

http://1manken.hatenablog.com/entry/2015/06/30/053430 （アクセス日：2016-2-8）

南信州観光公社 HP 入手先 URI:

http://www.mstb.jp/900other/archives/honmono.html （アクセス日：2016-2-7）

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

第 5 章 「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」についての報告

大野 公寛

5.1 はじめに

5.1.1 研究動機

私が初めて飯田市を訪れたのは，2013 年夏のフィールドスタディにおいてであった。教育学部に進んだ当時の私は，飯田市の人のつながりの深さやそれに基づいた住民の自由な活動などについて先輩方から聞くにつけて，飯田市への関心が深まると同時にそのつながりへの違和感や疑念も持ち合わせていた。しかし実際に飯田に訪れ，住民の方々と接することを通して，その疑いの念は薄れ，徐々に飯田の人々の楽しそうな様子と豊かな暮らしに惹きつけられていった。

そして，報告書を書き上げ，飯田市での報告会を終えたとき，その後も飯田にかかわりたい，今度は自分も共に活動する当事者の立場でかかわりたいとの思いが湧いていた。そのときに誘いを受けたのが，本章で扱う「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」であった。このプロジェクトとのかかわりも来年度で 3 年目を迎えようとしている。

プロジェクト内容は次節以降で詳しく述べるが，本プロジェクトのおもしろいところは，リニア開通を見据えた南信州―首都圏交流の創出という壮大な目標を掲げながら，人とのつながりを少しずつ結んでいこうとしている点にある。そのためこのプロジェクトには多様な団体が参画している。

本章で目指すのは，これらの多様なアクターがどのような目標や思いを持ち，本プロジェクトの将来像をどのように描いているのかを明らかにすることである。加えて，本プロジェクトにかかわる協力者を募集することも意図している。

不十分な点は多々あるが，本プロジェクトにかかわってきた学生の報告として，また日頃から本プロジェクトでお世話になっている飯田や品川の方々へのお返しとして，お読みいただければと思う。

5.1.2 研究の目的と方法

「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」の概要については，昨年度の報告書によってある程度の記述が完了していることを踏まえ，今年度は，昨年度から残された課題すなわち各関係者がどのような目的や思いを持ってかかわっているのかということに着目したい。よって本章では，「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」の本年度の活動内容を整理した上で，このプロジェクトの各関係者が，それぞれどのような目的を持って活動してきたか，今後どのようなかたちで「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」にかかわっていきたいと考えているのか，そしてそれらを踏まえ，南信州―首都圏交流のどのようなあり方を目指しているのかを明らかにしたい。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

以上のような目的のもと，本プロジェクトの関係者にインタビューを実施した。インタビュー対象者は，飯田市観光課 A 氏，かたつむりの会 B 氏及び C 氏であり，南信州サポーターD 氏（男性）に対しては，質問状を電子メールに添付し，それに回答・返信していただく形式を採った。調査概要は以下の表の通りである。

図表 3-5-1：インタビュー調査概要

対象者	性別	日時	時間	場所
A 氏	男性	2016 年 1 月 14 日（木）	14:00～16:00	合同庁舎（飯田市）
B 氏	女性	2016 年 1 月 14 日（木）	11:40～13:30	市役所（飯田市）
C 氏	男性	2016 年 1 月 14 日（木）	18:00～18:40	飲食店（飯田市）

図表 3-5-2：質問事項

質問順	質問事項
1	「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」にかかわるうえで，どのような目的を持って活動していましたか。
2	今年度の活動の中で大事にしてきたことはどのようなことですか。
3	今後「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」とかかわっていく中で，どのような活動をしていきたいと思いますか。
4	今後の活動の中で大事にしていきたいこと，大切にしていきたい視点・姿勢・態度はどのようなものですか。
5	南信州（飯田・下伊那）と首都圏（品川）との交流を進めるこのプロジェクトにかかわる一人として，描く本プロジェクトの将来像について他に考えがあれば自由にお答えください。

5.2 「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」の概要

本節では「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」の概要を示す。この概要については，昨年度の報告書の中で既にある程度の記述が完了しているため，簡略な記述に留める。

5.2.1 事業概要

「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」とは，「長野県地域発元気づくり支援金」制度[132]を活用して平成 25 年度から開始された飯田市の事業であり，飯田観光協会と飯田市観光課との協

[132] 「長野県地域発元気づくり支援金」とは，“豊かさが実感でき，活力あふれる輝く長野県づくりを進めるため，市町村や公共的団体が住民とともに，自らの知恵と工夫により自主的，主体的に取り組む地域の元気を生み出すモデル的で発展性のある事業に対して，必要な経費を支援”するものであり，県の地域振興支援施策の一つである。（長野県 HP：http://www.pref.nagano.lg.jp/shinko/kensei/shichoson/shinko/shienkin/index.html（アクセス日：2016-1-29））

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

働で取り組まれている。本プロジェクトの事業目的は，“2027 年のリニア開通を見据え，日本の“玄関口”品川と，日本の“奥座敷”南信州をセットで社会（日本，海外）に PR する基盤をつくり，両地域のブランドイメージを醸成する”ことであり，またそれによって“「品川経由，南信州行き」交流人口の増加を図る”ことである。本プロジェクトの背景には，首都圏における南信州の認知度が低いとの認識があり, 2027 年のリニア中央新幹線の開通による南信州と首都圏との間の交通利便性の向上を好機と捉え，両地域の交流機会の創出を図ろうとする狙いがある[133]。

本プロジェクトは，リニア開通予定の 2027 年を見据えた事業であるため，長期の展望が必要となる。本プロジェクトは，東京オリンピックが開催される 2020 年までを 3 年ごとに 3 つの段階に分けて事業を構想している。第一段階（2013～）は品川へのプロモーション活動，第二段階（2015～）は交流事業の実施，第三段階（2018～）はセットイメージの発信であり，2020 年以降は品川区と連携した観光誘客・交流事業を実施することとされている。したがって本プロジェクトにおいて実施される事業は，現段階ではプロモーション事業と交流事業との 2 種類に分類されることとなる。今年度は，“さらなるプロモーションの拡大，交流事業への踏み出し”がテーマとして掲げられている[134]。このような事業構想とテーマに基づき，本プロジェクトの中で行われる具体的な事業は，プロモーション事業としては東京都品川区での物産展等，交流事業としては子ども交流ツアーや農家交流ツアー等が挙げられるが，これらの具体的な内容に関しては 5.3 で述べる。

また本プロジェクトで大切にしたいこととして，“人を通して地域をみる，人と人をつなげる，人を巻き込む”ことが明記されており，観光客や交流人口の増加等に限定されない狙いが伺える[135]。

5.2.2 事業形態

昨年度の報告書によると，本プロジェクトの運営主体については，「主催 飯田観光協会／担当 A 氏（飯田市観光課）」とされている。この両者の関係は，プロジェクト全体の方針や施策の決定を飯田市観光課が担い，観光協会がその実行部隊として動くというものであり，相補的な関係であるとされる。飯田観光協会は，1979 年の設立以来，飯田市産業経済部観光課内に事務局を置いてきたという経緯から，2013 年の組織再編後も飯田市観光課と密接な関係を維持している。このような関係により，本プロジェクトの推進主体としてこの両者が中心的な駆動力として機能しているのである[136]。

本プロジェクトには様々な団体がかかわっているが，ここではかたつむりの会，南信州サポーター，本プロジェクトにかかわるケーブルテレビ品川のメンバーを取り上げる。まずかたつむりの会についてである。かたつむりの会とは，結成 30 年を超える飯田・下伊那地域の農業青年の

---

133 飯田市観光課「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト 2015」（A 氏提供資料）
134 同前
135 同前
136 原田健太郎“「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」についての報告”＜東京大学教育学部社会教育学研究室 『未来へつむぐ飯田らしさ』, 2015＞p. 32-33.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

団体であり，本プロジェクトの主要なパートナーであるとされる。かたつむりの会は，飯田市農業課の紹介で本プロジェクトとの提携が結ばれ，2013 年 11 月に品川で開催された本プロジェクト最初の物産展から出店し，以来物産事業の中心的出店者となっている[137]。本プロジェクトにおけるかたつむりの会の活動は物産事業にとどまらず, ケーブルテレビ品川による取材の受け入れ, 南信州サポーターとの共催による農家体験ツアーの企画及び受け入れ，品川の青物横丁商店街の店舗関係者の産地交流ツアーの受け入れなどが取り組まれている。

次に南信州サポーターについてである。南信州サポーターとは，2014 年に結成された本プロジェクトを首都圏側で支える学生の団体である。南信州サポーターは，東京で行われる物産展の補助，SNS 等での広報活動，かたつむりの会との農家交流ツアーの企画などの活動を通して本プロジェクトにかかわっている。

最後に，インタビュー対象者として発言を取り上げることはできなかったが，ケーブルテレビ品川で本プロジェクトにかかわるメンバーについてである。本プロジェクトに携わるケーブルテレビ品川のメンバーは，リニア中央新幹線の発着駅となる品川のローカルメディアとして本プロジェクトの動向を追いかけてきた。具体的には，本プロジェクトの活動への取材，プロモーションビデオの作成，情報番組での飯田市の紹介などが行われてきた。またこのメンバーたちは，“カメラの回っていないところでも（むしろカメラの回っていないときの方が），客寄せやビラ配りなど，物産事業への援助を惜しみなく行って”いたが，このような取り組みの様子は本年度においても何ら変わらず確認されている。原田が，“これらの活動を「善意」の一言で片付けることは容易だろうが，仕事上の関係を超えて，熱意を持ってともに働く CATV 品川と飯田関係者の姿に，品川と飯田の真の交流の姿を見た思いがした”と述べているものは今年度の活動の中でも継続さらには増幅されていることが観察されているが，この関係性が本章の重要な要素となる[138]。先取りして言うと，原田がここで示唆している“真の交流の姿”が本プロジェクトの本質であり，4 節で述べるような新たな活動や価値の生まれる基盤なのである。

以上が昨年度の報告書に基づいた事業形態とその関係者についての概要である。これらを踏まえ，次節では本プロジェクトの今年度の活動を報告する。

5.3 今年度の活動報告

本節では，本プロジェクトの今年度の活動報告を行う。5.2.1 で整理したように，活動をプロモーション事業と交流事業とに分類し，その詳細を述べる。

5.3.1 年度計画

本プロジェクトの今年度の活動は図表 3-5-3 のようにまとめられる。

---

137 同前, p. 33-35.
138 同前, p. 41.

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

図表 3-5-3：年間計画

時期	種別	内容	場所
6/13，14	交流事業	農家交流ツアー	飯田
7/31，8/1	交流事業	飯田の小学生親子の品川交流ツアー	東京
8/19-21	交流事業	農業体験ツアー	飯田
8/21-23	交流事業	飯田・品川の子ども交流ツアー	飯田
8/29，30	プロモーション事業	戸越銀座商店街での物産展	東京
9/12，13	交流事業	KAIDO 交流ツアー	飯田
9/26，27	プロモーション事業	しながわ宿場まつりへの出店	東京
10/3	交流事業	飯田・品川の文化芸能交流	飯田
11/12-14	プロモーション事業	青物横丁商店街での物産展	東京
2/4，5	プロモーション事業	中延商店街での物産展	東京
2/13	プロモーション事業	銀座 NAGANO での活動報告会・新規メンバー募集イベント	東京

主な事業は以上であるが，この表にないものとしてケーブルテレビ品川による取材・放送などの活動もこれらの事業に合わせて行われている。

5.3.2 プロモーション事業について

（１）戸越銀座物産展

2015 年 8 月 29 日（土），30 日（日）に第 18 回とごしぎんざまつりが，戸越銀座商店街連合会（戸越銀座商栄会商店街振興組合，戸越銀座商店街振興組合，戸越銀座銀六商店街振興組合）の主催で開催された。この催しでは，全長約 1.3 キロメートルで都内最長の戸越銀座商店街で，模擬店や，ライブ演奏やトークショーなどのイベントが行われた[139]。

その中で全国各地の特産品の販売が行われ，ここに飯田市が出店した。戸越銀座銀六商店街「銀ちゃん物産シアター」を会場に，飯田市観光課と飯田観光協会とが主催者，鍋倉高原農場と遠山郷観光協会とが出店者となって果物や下栗の特産品などを販売した。この物産展では南信州サポーターによって当日の準備・販売・片付け等への協力がなされたほか，本プロジェクトに当初からかかわる品川ケーブルテレビのメンバーによる取材も行われた。この品川ケーブルテレビのメンバーも呼び込み等の補助を行っている。

（２）品川宿場まつり

2015 年 9 月 26 日（土），27 日（日）に第 25 回しながわ宿場まつりが開催された。しながわ宿場まつりは，江戸時代に東海道の第一宿場町として栄えた品川の“伝統と文化遺産を若い世代

[139] 品川区 HP ：http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/page000026300/hpg000026281.html（アクセス日: 2016-1-12）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

に伝え地域の発展をめざす事を目的として”，“毎年 9 月の最終土，日に旧東海道北品川の八山から南品川の青物横丁まで約 2km にわたって開催”されているまつりであり，北品川本通り商店会，北品川商店街協同組合，新馬場商店街振興組合，品川宿場通り商会，青物横丁商店街振興組合が実施商店街として主催している[140]。このまつりでは，江戸の風俗衣装を纏った参加者が練り歩く「江戸風俗行列」や，かつて花街文化が興隆した品川の情景を再現した「おいらん道中」などの催しが行われるほか，上記の各実施商店街でのイベントや，聖蹟公園でのライブステージや全国の物産展が開催された。

この物産展に飯田からかたつむりの会が出店し，野菜や加工品等の販売が行われた。かたつむりの会の農家が品川を訪れて直接販売を行うという形式がとられ，南信州サポーターと，本プロジェクトに当初からかかわるケーブルテレビ品川のメンバーとによって，準備・販売・片付け等への協力がなされた。また南信州サポーターの友人の学生が数名同じく販売の補助として参加している。

（3）青物横丁物産展

2015 年 11 月 12 日（木）～14 日（土）に青物横丁商店街のフリースペース「スキマ」にて物産展が開催された。飯田市観光課と飯田観光協会が主催，かたつむりの会を中心とした南信州の農家が出店した。青物横丁商店街のスキマは本プロジェクトにおいて南信州を品川へ発信する一つの拠点となっており，この物産展は今回で 3 年目となる。販売品目は，にんじん，キャベツ，白菜，大根，ネギ，キュウリ，里芋，かぶ，しめじ，ほうれん草，パプリカ，ガブリエル，はなびら茸，トマト，ミニトマト，りんご，洋梨，卵，トマトピューレなど様々であるが，これらの生産物は会期中毎朝かたつむりの会の農家が南信州から会場へ運搬してきたものである。かたつむりの会は生産品の運搬後，会場で直売を行うという形式がとられている。

この物産展にあわせて様々な企画が催された。第一に，「南信州フェア」である。これは，青物横丁商店街の飲食店で，1 週間の限定で南信州の食材を使用した料理を提供するという企画である。第二に，飯田 OIDE 長姫高校による企画である。物産展の 2 日目にあたる 11 月 13 日（金）に，同校商業科が，北品川から青物横丁商店街まで旧東海道を歩きながら南信州の特産品を販売するリヤカー行商，及び KAIDO での水引のワークショップ等を実施した。生徒の一部は，かたつむりの会が物産展を行っているスキマの一部を借りて特産品を販売した。第三に，物産展 2 日目の終了後に青物横丁の飲食店「いさりび」で開催された交流会がある。この交流会は南信州サポーターの企画により物産展関係者以外にも開かれ，飯田出身の大学生や農家交流ツアーの参加者などが集まり飯田や品川の関係者と交流した。

（4）ブックカフェ KAIDO

2015 年 8 月 6 日（木），北品川に空き店舗を活用した「KAIDO books & coffee」が開店した。

---

140 品川宿場まつり HP：http://shinagawa-shukuba-matsuri.com/（アクセス日：2016-1-12）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

これは，北品川商店街の協力のもと株式会社しながわ街づくり計画が企画した，旅と街道を専門としたブックカフェである[141]。KAIDO は，“旅好きな人に，全国のローカルな魅力や，その土地の風土をもっと楽しんで”もらいたいとの思いから立ち上げられ，“店頭には 1 万冊を越える書籍や雑貨，民芸品などが並び，北は北海道，南は沖縄まで，全国各地の魅力を”発信している。KAIDO の 1 階では，“季節ごとに地域を決め，特別展を開催”し，2 階では“様々なワークショップや勉強会を開催”している[142]。

今年度より飯田市はこの KAIDO を活用した取り組みに着手している。A 氏の提供資料によれば，KAIDO 事業参画の目的は，“KAIDO を入口にして，首都圏と南信州の新たな人の出会い・交流を生み出す”ことであり，“「観光客」ではない「ファン・パートナー」の獲得”，“「物見遊山」ではない「共感・共創」の創出”である。飯田の地域の事柄や人に関心のある主に 30 代女性を新たなターゲットとして設定し，KAIDO において“その都度テーマを定めて，①飯田市情報の展示②ワークショップなどの PR イベント開催③実際に飯田を訪れるツアーの実施という①～③のサイクルを生み”，“飯田の取り組みに対する首都圏の「共感者」「協働者」を獲得する”ことが目指されている[143]。

①飯田市情報の展示としては，今年度 8，11，12 月に KAIDO にてそれぞれ天龍峡，遠山郷，市田柿等の特別展示が実施された。②ワークショップなどの PR イベント開催としては，飯田 OIDE 長姫高校による工芸品のワークショップなどが行われた。③実際に飯田を訪れるツアーの実施としては，9 月に行われているが，これは交流事業に分類されるため，次項で述べる。

5.3.3 交流事業について

（1）2 回の農家交流ツアー

農家交流ツアーは，かたつむりの会と南信州サポーターとが企画して行われるもので，今年度は 2 回実施された。この 2 回のツアーは，首都圏在住の若者特に大学生を対象に，実際に南信州を訪れて農作業を体験しながら農家との交流を図ること，さらにはそれを通して南信州の魅力に触れてもらうことを目的としている。2015 年 6 月 13 日（土），14 日（日）に 1 回目，8 月 19 日（水）～21 日（金）に 2 回目のツアーが実施された。1 回目のツアーは参加者 8 名，初日には 2 グループに分かれての農作業，夕食交流会，2 日目にはグループワークが行われた。このグループワークでは，参加者がツアーを振り返りながら飯田に来てみて感じたことを語り合って共有し，農家や行政職員や大学生という異なった立場から飯田の魅力について，またそれを発信するアイデアについて話し合われた。2 回目のツアーには 11 名が参加した。2 回目のツアーでは，農家の一日の仕事をそのまま体験するために，初日の夜に飯田に入り，翌日の早朝から 5 箇所の農家に分かれて農作業が行われた。その日の夕食時には全グループが集合し，各班が持ち寄った農産物を農家と参加者とが一緒に調理した。この交流会には農家以外の南信州在住者も数多く招待

---

141 品川区 HP : http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/page000026200/hpg000026163.htm（アクセス日：2016-1-28）

142 KAIDO books & coffee HP : http://kaido.tokyo/whats.html（アクセス日：2016-1-28）

143 飯田市観光課「KAIDO の利用について」（A 氏提供資料）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

された。最終日には，参加者によるグループワークの後，天竜舟下りの体験が行われた。このグループワークでは，各班の農作業体験が共有されるなかで農家に対するイメージの変化などが言語化された。

（2）小学生交流ツアー

リニア開通を見据えた飯田―品川間交流の創出を目的の一つに掲げる本プロジェクトにおいて，2027 年時点で社会人・大学生となる年代への働きかけは重要であると考えられる。このような観点から今年度より子どもの交流が開始された。

まずは，品川の小学生 1 名が飯田を訪れることから開始され，小学生の交流や飯田のプロモーション映像の撮影が行われた。この映像では飯田の桜が中心的に紹介され，麻績の里舞台桜の小学生ガイドと品川の小学生との交流が見られる。7 月 31 日（金），8 月 1 日（土）には飯田市から小学生の親子が品川を訪れ，それを品川の小学生が迎え入れるかたちで交流が行われた。8 月 21 日（金）～23 日（日）には品川の小学生が飯田市を訪れる交流ツアーが実施された。初日には飯田市のりんご並木で，並木の世話をしている飯田市立飯田東中学校の生徒と共にりんごの初収穫が行われた。また最終日には，かたつむりの会の農家においてアスパラガスの朝採り体験が行われた。なおこのツアーには，南信州サポーターが撮影補助や受け入れとして加わっている。

（3）KAIDO 交流ツアー

前項で述べたように KAIDO を入り口とした飯田へのツアーが行われた。このツアーは，「飯田でないとできない仕事をしている人たちに出会う旅」と題されて，2015 年 9 月 12 日（土），13 日（日）の一泊二日で実施され，品川から女性 6 名と KAIDO の店長の計 7 名が参加した。このツアーは，品川からの参加者である若手社会人が，クリエイターや船大工など飯田で営む職人を訪問し，体験や交流を通してその暮らしや心意気に触れるというものであった[144]。A 氏によればこのツアーの特徴は“飯田の美味しいものを食べるとか観光でなくて，完全に人に会ってもらうツアーにした”ことであり，“人に興味を持ってもらう，そして人を通して地域を知ってもらう”ことを意図したものであったという。

（4）芸者ツアー

飯田藩の城下町として繁栄した飯田には，かつて花街文化が隆盛を極めた時代があった。大正初めから昭和初めにかけての最盛期には，約 400 人の芸者が存在したとされる[145]。そして数十年前までは地元の芸者衆が行き交い，市街地丘の上に夜毎三味の音が響いていたといい[146]，花街文

---

144 中日新聞 2015 年 9 月 13 日，南信州新聞 2015 年 9 月 20 日

145 中日新聞ウェブサイト「旅行ナビ」:
http://tabi.chunichi.co.jp/odekake/151001nagano_iida.html （アクセス日：2016-1-12）

146 飯田観光協会・南信州広域連合「南信州ナビ」: http://www.ii-s.org/v3info/2015/09/103-1.html（アクセス日：2016-1-12）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

化が飯田の伝統として息づいていた。一方品川は，江戸時代に東海道の第一宿場町として栄え，その沿岸の風光明媚な土地柄から明治時代に花街としての歴史が始まる。花柳界は大正から昭和にかけて大きく発展し，最盛期には約 400 人の芸者が在籍し，広範囲にわたって花街が形成されていた[147]。そして現在でも芸者が活躍し，様々な催しなども行われている。

飯田と品川とのこうした文化芸能における共通点から両地域を花街文化を通して結びつけ，飯田における伝統的な文化芸能を多くの人に知ってもらい未来につなげることを目指し，2015 年 10 月 3 日に「和遊楽」というイベントが開催された。会場は天龍峡の龍峡亭であった。品川から芸者を招き，両地域の芸能の交流が行われた。昼の部では，飯田の古典芸能を伝承する団体が地唄や演奏を，品川の芸者が踊りや鳴り物演奏をそれぞれ披露した。夜の部では，参加者が品川芸者のお座敷遊びを楽しんだ。昼の部と夜の部とでそれぞれ約 150 人と 65 人が参加し，また地元の高校生 7 名が当日のスタッフとして参加した[148]。

5.4 本プロジェクトの特質と展望

本節では，インタビュー調査の結果をもとに，本プロジェクトの各関係者が，それぞれどのような目的を持って活動してきたか，今後どのようなかたちで「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」にかかわっていきたいと考えているのか，そしてそれらを踏まえ，南信州―首都圏交流のどのようなあり方を目指しているのかを明らかにしたい。

5.4.1 各関係者の目的

第一に，今年度，各関係者が本プロジェクトにかかわるうえでどのような目的・目標を持って活動していたかということについてである。A 氏，B 氏，C 氏，D 氏はこの点についてそれぞれ以下のように述べている。

> *“一つは交流事業を拡大していきたい。実際に人に来てもらうということも。二つ目は KAIDO カフェを使って継続的な情報発信をして，そこに行けば飯田の情報にアクセスできますよという拠点を作る。三つ目は，子どもとか，20 代から 40 代の OL の女性層とか，そこへのアプローチも初めてやった。これまで飯田としてアプローチできてなかった層なのね。今後プロジェクトとして力を入れて，働きかけていきたい層。その新たな仕掛けをやったかな。新たな層を積極的に，かつ年齢層など絞ってね。今年はその第一弾かな”*（飯田市観光課 A 氏）

> *“今は周りに若い農家の人いっぱいいるけど，こっちに帰ってきたときは，最初は知らなくて。…地元の良いところを伝えるために何かできないか，農業で伝えられること，それで私*

147 品川大井海岸芸者置屋まつ乃家 HP：http://www.geisha-matsunoya.com/rekishi.html （アクセス日：2016-1-12）

148 「広報いいだ」フェイスブックページ：https://www.facebook.com/kouhouiida/posts/1154847944543809 （アクセス日：2016-1-12）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

は野菜ソムリエを取ったんだけど。それで若い農家の人たちと出会ったのが，就農してから 1 年半くらいで。やっぱその，会うまでの間，結構大変というか，それでかたつむりの会の〇〇さんと会って。なんかおもしろい人いるんだなと思って。その時の会長が C さんで。そのときに野菜ソムリエコンベンションって言って，野菜ソムリエのイベントが東京であったときに，一緒に行って，…そのときにかたつむりに入りなよって言ってくれて。C さんの話ってすごい，頭良いから，ね，今こういうことやってるんだよとか，経営の話とかいろんな話をしてくれて，それ，すごいな農家，と思って，それで一緒にやりたいなと思って。だからかたつむりの会がなかったら今の自分はないと思うし”

“忙しい時期と被ってて日程的に無理だったんだけど，物産展ね，行くとすごい大変で，この前行ったときも。でもやっぱり生産者が直接東京に行って売るっていうこと。みんな仕事があって，農作業って手が離せないから大変なんだけど，3 年目になるのかな，続けられた”（かたつむりの会 B 氏）

“こっちに来たときに関しては出来るだけ飯田のことを知ってもらえればな。サポーターの人たちが来てくれたときは，こっちのことを，基本的には農業中心だけど，それ以外のことでも少しでも知ってもらえればなと思うし，あとせっかく農家に来たもんで農業がどういうもんかをわかってもらうっていうのもあったし，そういうので知ってもらうっていうのが一番大切かなあと思う。こっちが飯田から品川に行った場合は，品川の人たちが，飯田が長野県のどこにあるかっていうのは 10%くらいの人しか分からないと思うから。だもんでちょっとでも頭の片隅に，その 10%が 11%になれば，ちょっとでも気づくというかね，そういうふうになる情報発信として，なればいいのかなと思う。じゃあ飯田っていう地名だけでも知ってもらいたいっていうのがあって，それと僕らは農産物だから，例えば美味しい野菜があるところだとか，美味しいりんごがあるところとか，そういうふうにイメージが，何かしら持ってもらえるといいのかな”

“あともう一つは，行った先で商店街さんなんかと知り合いが出来て，何か自分らにとっての有益な情報なりつながりが出来れば，それはまたプラスになって良いのかなと”（かたつむりの会 C 氏）

“地元である飯田を含む南信州が，今より少しでもいいので賑やかになり，魅力を発信，発見したいと思い，このプロジェクトに関わるようになりました”（南信州サポーターD 氏）

以上が，各関係者による本プロジェクトを進めるうえでの目的に関する発言である。ここで注目されるのは各関係者の目的が相違している点である。言い換えれば，各関係者がそれぞれの職業的立場に基づいた目的を持ちながら本プロジェクトに参画している側面があるということである。詳しくみていくと，まず A 氏の発言は，飯田市観光課としての今年度の本プロジェクトの事

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

業構想と一致しているものである。5.2.1 で整理したように，本年度は，交流事業を実施していくプロジェクトの「第二段階」であり，交流事業への踏み出しが目指されていた。具体的には KAIDO 事業への参画や若手の社会人女性を対象としたツアーなどが事業内容となっている。また，かたつむりの会両氏の発言からは，農業がその基本にあることがわかる。C 氏が述べているように農業そのものを知ってもらうこと，そして B 氏が述べているように農業を通して飯田の良さを感じてもらうことが，農家である彼らの思いであり，また役目でもあるとの認識がうかがえる。加えて，物産展への言及に見られるように，農産物を通した飯田の認知度向上や交流も主要な目的の一つにあるようだ。また“(物産展に）行くとすごい大変で，この前行ったときも”（B 氏），“決してよく利潤が出てるかと言うと，補助を貰っとるもんで”（C 氏）との発言から推察されるように，物産展での売り上げを伸ばすことも出店農家としての基本的かつ重要な目的であることはおさえておかなければならない。ケーブルテレビ品川で本プロジェクトの立ち上げ当初からかかわるチームについていえば，メディアとしての立場から映像撮影や取材が不可欠なものとして位置づけられていると推測できる。また南信州サポーターD 氏は，飯田出身者として，また学生として協力したいとの思いを持っているようであり，本プロジェクトの事業目的に比較的近いと言える。

このように，本プロジェクトの各関係者の持つ具体的な活動目的は，それぞれの職業的条件に規定されるかたちで相違していることが見えてきた。これは，様々な分野の人々が連携して進める本プロジェクトの性質上当然のことであり，そのそれぞれの立場における本プロジェクトへのかかわり方の諸相が表れた結果であると捉えられよう。

5.4.2 本プロジェクトに込められた思い

第二に，本プロジェクトの今年度の活動にかかわるなかで各関係者が大切にしてきたことについてである。A 氏，B 氏，C 氏，D 氏はこの点についてそれぞれ次のように発言している。

> *“活動の中で大事にしてきたこととしては，やっぱり顔の見える関係を作るっていうことかな”*
> *“顔を見て，あーあの人がいる地域だからまた行きたい，と思えるような関係づくりを狙ってやってるし，それは今後も大事にしていきたいなと思ってる”*（飯田市観光課 A 氏）

> *“人を知ってもらうこと。自分もそうだったけど人と出会ったから今があるんだよね。だから人と人とをつなげるっていうのがおいでなんしょプロジェクトの目的でもあるし。それに農業が挟まってもそれで交流ができるっていうのはすごいいいなと思ってる。地元の魅力って，やっぱあの人がいるから行きたいな，会いに行きたいなっていうのはあると思うし。うん，その土地が良いっていうのももちろんあるとは思うけど，誰かがいるから行こうって思えるってこと，あると思うんだよね”*（かたつむりの会 B 氏）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

“このおいでなんしょプロジェクトのかたつむりの会なんかは，そういう気持ちがあるんじゃないかなと思うよ。っていうのは，何かしら，多分自分のもうけうんぬんでやってたら，ああいう物産展なんかも結構毎日しんどいし，決してよく利潤が出てるかと言うと，補助を貰っとるもんで。それ考えると，うん，それだけじゃない，まあ自分の農産物を売るだけじゃなくて，その先のつながり，A さんのそういうところに賛同してるなかで協力しましょうと”（かたつむりの会 C 氏）

“サポーター，市の関係者，農家さんたち皆が楽しく，互いに協力し合える活動や環境を作っていくこと”
“農家さんの生活や作物を通じて地域の魅力や農家さんの仕事に対する思いなどを感じてもらい，いろんな側面からみ南信州を感じてほしいという思いでやっていました”（南信州サポーターD 氏）

各関係者が活動の中で大切にしてきたことは，上に述べられている通りである。発言内容からわかるように，「人とのつながり」が共通項として浮かび上がる。ここでは次の二点について触れておきたい。一点目は，「人とのつながり」が本プロジェクト全体を貫く重要な視点であり，これが関係者間で主に A 氏を中心として共有されていることである。本プロジェクトは，5.2.1 で示したように，“2027 年のリニア開通を見据え，日本の“玄関口”品川と，日本の“奥座敷”南信州をセットで社会（日本，海外）に PR する基盤をつくり，両地域のブランドイメージを醸成する”こと，またそれによって“「品川経由，南信州行き」交流人口の増加を図る”ことを目的とした飯田市の事業である。このようにプロジェクトの規模と構想が壮大であることと，飯田市観光課・飯田観光協会を中心にかたつむりの会，南信州サポーター，ケーブルテレビ品川で当初から携わるプロジェクトメンバーなど様々な主体がかかわることでプロジェクトが成り立っていることとの二点からしても，次項で B 氏が指摘するように“全体像がわからな”くなったり，それによってプロジェクトメンバーが分解してしまったりする事態も十分に考えられる。そのような瓦解を防ぎ，この大きなプロジェクトを成立させているものとして，人とのつながりを重んじる姿勢という共通項があるといえるのではないか。つまり，南信州と首都圏の人と人とをつなげるという本プロジェクトの趣旨に各関係者が賛同していると同時に，プロジェクト関係者どうしもまたこのつながりによって結ばれているということである。そして本プロジェクトが「人とのつながり」を重視することは，A 氏を通じて各関係者に共有され賛同されているようである。上の発言のなかで C 氏が述べていることに加えて，B 氏は“最初 A さんの話を聞いたときに，すごいな，こんなことできるんだって”とも述べている。

二点目は，この「人とのつながり」は具体的な関係として認識されているということである。A 氏提供資料「南信州へおいでんなんしょ！プロジェクト 2015」のなかで“大切にしたいこと”として挙げられている“人を通して地域をみる，人と人をつなげる，人を巻き込む”という三点

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

は，一見抽象的なもののようであるが，A 氏はこれを“顔の見える関係”と述べていることに加えて“僕にとってはとても具体的な人との関係”とも表現している。聞き取りの別の箇所で B 氏が，“（物産展へ）行かなかったら寂しいな。品川のケーブルテレビの人も来てくれるから，電話くれて，いつ来るんですかって聞かれて，今回行かないんですーって言ったら，えーって言ってくれて，それが嬉しい”と語り，“一番初めに品川のみなさんが取材で来てくれてそれを流した後のとき，14 年か，そうだ，B さんいますかって来てくれた人がいて，知り合いかなと思ったら全然知らない人で。そんなふうに，来てくれる人いるんだと思って，すごいよね”と物産展での思い出を振り返っていることからも，人とのつながりの個別具体性が読み取れる。

またこれは A 氏から伺ったことであるが，ケーブルテレビ品川で本プロジェクトに当初からかかわるチームが霜月まつり（遠山郷で行われる伝統的なまつり）の撮影に入った際には撮影の前から遠山郷の人々との関係を築いていたという。ケーブルテレビ品川で本プロジェクトに当初からかかわるチームのこのような姿勢からは，具体的な関係が相手に対する敬意を促している様子さえ推察できる。ケーブルテレビ品川で本プロジェクトに当初からかかわるメンバーによる映像は，本プロジェクトにかかわる彼らにしか撮ることのできないものであっただろう。

このように，本プロジェクトの各関係者が活動の中で大切にしてきたこととして，人とのつながりが見出された。そしてこの人とのつながりは，本プロジェクト全体を貫く特質であり，A 氏を中心にして各関係者に共有されていること，活動の中でこのつながりが具体性を帯びていることが読み取れた。

5.4.3 南信州—首都圏交流のかたち

本項では，各関係者が今後取り組みたい活動や目指す活動のかたちを明らかにし，南信州と首都圏との交流を創り出す本プロジェクトの将来像を展望する。今後取り組みたい活動と，活動のなかで大切にしたい視点，そしてプロジェクトの将来像について，A 氏，B 氏，C 氏，D 氏は以下のように述べた。

> *“観光客と言うよりも，飯田の取り組みや飯田の人がやってることに共感してくれて，一緒にやってくれる，そういうコアなパートナーとかファンっていうのかな。物見遊山で観光するのではなくて，一緒に何かつくっていきたいというところまでの人たちをつくっていきたいな。まあ，変だけど，これはもはや観光業というよりは，まちづくりとかになるのかな”*
> *“具体的に何か描けてるわけではないんだけど。んー。都市部と地方との今までにない何か新しい関係っちゅうのをつくれないかなって思ってるのね。今，地方がいろんなところで活性化，活性化ってやってさ，うちはこんなにおもしろいものがあるよとか，結構何か新しいモノをつくって人を惹きつけてみたいなことをやっているところも多いんだけど，新しいものをつくるというよりも，もともとあったものに磨きをかけていく，もちろんそれをやっている地域はあるだろうけどね，飯田ってなかなかそれをまだできてないかなって思う，んーまあそういうとこがあって。…今まであったものを大事にとか，それを，いかに磨きをかけ*

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

て飯田にしかないものだよ，と見せていくかとか，それってなかなかないなっていうのを実感としてあって，それをこのプロジェクトを通してやっていきたい，かな。もともとあるものを，掘り起こすとか磨くっていう方向につなげて”
“首都圏の人，品川ケーブルさんなんかもそうだよね。映像を通してこんなふうに見えるのかっていう，例えばそんなことなんだけど，首都圏の人たちも一緒になってお互いの地域を磨いていけるような関係になっていけばっていうのもあるし。新しいものをつくるっていうよりも新しい関係をつくっていく，都会の人と地域の人が新しい関係をつくっていく。そんなふうになっていったらいいかな，感覚の話ね。具体的なイメージまではないんだけどね”
“最終的に目指すところは，行政が抜けるっていうところかな。これかなと思ってる。黙っててもも住民や団体同士が，もう勝手に，じゃあいつ行っていつ受け入れてみたいな，そういう民間同士の関係が生まれていく，で，行政はそのお膳立てをする，そしてだんだん抜けていく。そこをやれたらいいかな。なかなかね，まあ。行政がいつまでも運営母体になってるものは，やっぱり住民がついてこないと思うんだよね”（飯田市観光課 A 氏）

“コラボしたい。農家だけ，今かたつむりだけが多いけど，今 KAIDO カフェとかやったりとか，結構別で動いてることっていっぱいあるよね。全然知らない事がいっぱいありすぎて。こんなことやってんの，こんなことやってんの，とかいっぱいありすぎて。全体像がわからないんだよね。それこそ KAIDO カフェで物産展のイベントとか，この前やってたけどあれはかたつむりとは別でやってたから。一緒にやって，そこで OIDE の高校生がやってたから一緒にやったりとか。そういうことができて，これがあそこに行ったら買えるよとか，それは小さいことだけど”
“そう，カフェの人とか，子どもとか，学校どうしがつながってとか。結構ね，全体像を見ていくと，ここととここが一緒にできるとか，あると思うんだよね。本当に南信州全体で魅力を伝えられるとか，なるんじゃないかなと思う。最初は自分の農業で精いっぱいだったけど，色んなつながりができて，そうするとここととコラボしようかとか，ここの飲食店さんと何かしようか，そこのつながりがまた今度はここととコラボしてみようかとか”（かたつむりの会 B 氏）

“今まで通り農産物を持って行って売りたいとか，そういうのは引き続いていいと思うんだけど，どちらかと言えば，飯田っていう田舎を考えれば，…実はそれだけじゃないっていうのをやってかなきゃいけないかな。それは，飯田＝農業，それと違うものを連想できるようなもの，だもんで，今んとこサポーターとのつながりっていうのが農家中心なんだけど，農家以外の人，飯田側からするとそういうつながりを，飯田側のパイを広げていくと，飯田の農業以外のところとかかわれるようにしていくっていうのが，品川と飯田を近づける一つの方法かな，と思ってるっていうのがあるかな。なのでもうちょっと大きく，農業だけじゃな

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

くて，関連する，えー，工業でも飲食店でもいいし，そういう人たちにも広げていくとまた新しいアクションが起きるんじゃないかなと思う。おいでなんしょっていうのはその奥にある人と人とをつなげることが，多分A さんなんかが立ち上げた思いだと思うので，それに向っていくのは僕らだけでなくてもっと違う人とのつながりを，僕らを介して，飯田だけでなくて，広く飯田下伊那，南信州全体で連携してくると，また今は学生中心だけど，東京に住んでる興味のある人，まあ品川中心かもしれないけど，一般の，社会人なり子どもなりね，そういうのも行けるような，アクションをしていくと，飯田が単なるリニアの通過駅じゃなくて向こうから行ってみたいなというところに，十何年後に，なると良いですね”（かたつむりの会 C 氏）

“もっと多くのサポーターを呼び込み，いろんな企画や活動を通して南信州に訪れてくれるファンを増やしていきたい”
“いずれは両地域を通じた新しいコミュニティができたり，お祭りやイベントなんかも企画しあったりして草の根の交流が深まっていくといいのかなと思います”（南信州サポーターD 氏）

以上が，今後取り組みたい活動とその中で大事にしたい，プロジェクトの将来像についての発言及び記述である。ここでもやはり「人とのつながり」が全体の共通項として浮かび上がってくる。これを基本にしながらそれぞれの発言を検討し，本プロジェクトの今後の展望を試みたい。

発言の掲載順とは異なるが，まずかたつむりの会 B 氏について見ていくこととする。B 氏は，前項と本項の両方で人とのつながりの重要性に言及しているが，その前提として自身の就農直後の経験を語っている。B 氏は U ターンして就農するが，就農直後は若手農家とのかかわりがなく苦労を溜め込んでいた。しかしかたつむりの会と出会うことで若手農家と知り合い，農作業だけでない活動が広がっていったという。B 氏は，“かたつむりの会がなかったら今の自分はないと思う”とも述べている。そして，このような経験を踏まえて B 氏が語る今後の本プロジェクトの活動が，“コラボ”なのである。そこでは，農家である自身やかたつむりの会，または他のプロジェクトメンバーが，互いにまたは本プロジェクトとかかわりのある様々な団体等と結びつくことで，何かの活動が生まれること，そしてそれが南信州の魅力につながることが描かれている。

農家であるかたつむりの会 C 氏は，農業を中心としながらもそれよりも広く飯田市や南信州全体を視野に入れている。飯田と品川とがリニアでつながるとき，都会の人にまず楽しんでもらいたいのは飯田の自然やそこで育てられる豊かな農産物であるが，それは飯田以外の田舎と呼ばれる地域でも同様であり，それだけでない何か別のものが必要だと考えているようである。C 氏はその何か別のものを具体的に指し示してはいないが，だからこそそれは，まだ見ぬ新しさを含んだものであると捉えられよう。そこで注目されるのは C 氏がここで“おいでなんしょっていうのはその奥にある人と人とをつなげること”とに述べていることである。つまり C 氏が思う，新し

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

さを含んだ何か別のものとは，かたつむりの会を介して南信州サポーターや品川の人が飯田の様々な人とつながることによって“新しいアクション”が生まれていく将来像と考えられるのではないか。したがって人とのつながりとは，ここではその“新しいアクション”の生成に不可欠なものと言える。

B 氏，C 氏は上記のように，人とのつながりを基盤に今後の活動とその中での視点について述べているが，この人とのつながりについて A 氏は，それはもはや観光客と呼べるものではないとしている。A 氏はそれを，飯田や品川というまちを共につくっていく“コアなパートナーとかファン”と表現している。D 氏も“ファン”や“新しいコミュニティ”という表現をしており，A 氏の考えと一致しているようである。そして，このように語る A 氏の発言が，各関係者の描く本プロジェクトの将来像をまとめあげたもののようになっている。

A 氏は本プロジェクトの今後を展望するにあたってその位置づけの難しさ意識している。言い換えると，A 氏は，本プロジェクトが昨今の地域活性化の流れの中にそのまま当てはまるとは言い切れないと感じているということである。そこには，地方が活性化するとはより多くの人がそこに来ることであるとして，その人々の要求に合わせるようにして地方＝飯田が新しい観光資源をつくって提供し，より多くの観光客を呼び込むことを他地域と競い合うことへの，観光課職員としての違和感が込められているようである。そこから，本プロジェクトにおいて，A 氏が提起するものは，物見遊山の観光客ではなく，飯田の取り組みに共感して一緒に何かをつくっていく“コアなパートナーとかファン”であり，そのパートナー・ファンとのつながり，なのである。A 氏の感覚では，これはもはや“観光業というよりは，まちづくり”に近い。

では，A 氏が生み出していきたいとする，このパートナー・ファンとのつながりとはどのようなものか。A 氏はこれを“都市部と地方との今までにない何か新しい関係”と表現している。本プロジェクトにおいて観光客を呼び込むことが目的ではないことを踏まえると，これは，都市部（品川）と地方（飯田）が観光地としてお互いを消費する関係に対しての“新しい関係”であると捉えられる。そしてそれは，地域にあるものを受け継ぎ，見直し，掘り起こす作業を基本とした，品川と飯田が“お互いの地域を磨いていけるような関係”であるとされるが，この点に B 氏，C 氏の発言が昇華されている。両氏ともに語っていたのは，プロジェクトの中で結ばれる関係の中から新たな価値が生み出されていくことなのであった。A 氏の言葉を借りれば“新しいものをつくるっていうよりも新しい関係をつくっていく”ことによって，つまり単なる観光客ではなく顔の見えるパートナー・ファンというつながりを飯田と品川が生み出していくことによって，お互いの地域がこれまでなかった視点や関係の中で捉えられ，地域にこれまであったものが再発見されたり新たな価値が見出されたりすることが，本プロジェクトの将来像であり，関係者への聞き取りから導かれた本プロジェクトの展望であるともいえよう。繰り返しになるが，このことは，まさに上で整理したようにプロジェクト関係者が考えているプロジェクトの今後の姿でもある。例えば B 氏の言う“コラボ”も，関係の中から新しい活動が生まれていくことの具体である。C 氏もかたつむりの会を介したより多様なかかわりの構築の必要性を指摘していた。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

またA氏は，このことの例として本プロジェクトに当初からかかわるケーブルテレビ品川のプロジェクトメンバーとの関係を取り上げている。つまり，本プロジェクトの立ち上げ当初からかかわるケーブルテレビ品川のチームによる撮影や取材の結果制作された映像は，新しい飯田の見方・見せ方としてA氏に受け取られているということである。そしてこの映像制作の過程は，前項で触れた通り，本プロジェクトの特徴を理解し，飯田とパートナー・ファンとして関係をつくってきたケーブルテレビ品川の本プロジェクトメンバーによってのみ可能となるものであり，それそのものが彼らの関係から生まれる新しい価値なのだと言える。映像の制作を通して飯田が品川に磨かれているのであり，このように捉えるとケーブルテレビ品川の果たす意義は大きい。

ここで，インタビュー対象者として発言を取り上げることはできていないが，本プロジェクトのメンバーとしてのケーブルテレビ品川の役割についてもう少し触れておきたい。本節での聞き取りから読み取れる，本プロジェクトにおけるケーブルテレビ品川の果たす意義は，以下の三つであった。一つ目は，前項でのB氏の発言にもあるように，ケーブルテレビ品川の映像が飯田と品川の人のつながりを媒介することである。二つ目は，前項でみたように，本プロジェクトにかかわるケーブルテレビ品川のメンバーが飯田の人々との関係を構築していることである。三つ目は，直前で述べたように，その関係の中で，映像によって飯田が磨かれ，飯田の新たな見方が生まれてきていることである。ここではもう一つ，映像が，本プロジェクトに人を巻き込む力を持っていることをこれらに付け加えたい。プロジェクト関係者が目指すパートナー・ファンの創出は，観光客を呼び込むより困難な面があるが，映像があることによってその意図するところがプロジェクト外の人々に伝わるということがあるのである。5.3.3で見たような小学生の交流は，映像によってその目指すところが伝わり交流が広がっている例である。ケーブルテレビ品川の果たす役割は以上のようになるが，これらはどのような映像であっても可能となるわけではないことに注意しなければならない。つまり，本プロジェクトの特質を理解し，プロジェクトメンバー同士や飯田と品川の両地域で関係を構築してきたケーブルテレビ品川の本プロジェクトメンバーによって制作される，対象との関係性を浮かび上がらせる映像でなければならないということである。本プロジェクトの今後を考える上でも本プロジェクトにかかわるケーブルテレビ品川の役割は重要であると言えるだろう。

以上のように見てくると，本プロジェクトで人とのつながりが重視される理由も明らかになる。プロジェクトを通して人とのつながりが生まれ，そのつながりの網の目が複雑に絡むことで，その関係から新しい価値が見出されていくのであり，そのためには自分とは異なる人々とのつながりが必要とならざるを得ないのである。本プロジェクトの将来像としての南信州―首都圏交流のあり方は，お互いが観光地として消費される段階から一歩進んで，パートナー・ファン同士が顔の見える関係の中で新たな活動や価値を生み出していくようなかたち，すなわち“都市部と地方との今までにない何か新しい関係”へと展開していく可能性を含んでいると考えられる。そして各関係者は，つながりの中から様々な動きが生み出されていくことを楽しんでいるかのように活動を展開しているのである。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

5.5 おわりに

本章では，まず「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」の概要と今年度の活動報告がなされた。今年度はプロモーション事業の継続と交流事業の展開が目指されたが，その具体的な活動内容が整理された。

また関係者へのインタビュー調査からは，本プロジェクトの各関係者の持つ具体的な活動目的がそれぞれの職業的条件に規定されるかたちで相違していること，各関係者が活動の中で大切にしてきたこととして人とのつながりが共通項としてあることが見出された。そしてそのつながりは，本プロジェクト全体を貫く特質であり，各関係者に共有されていること，活動の中でこのつながりが具体性を帯びていることが読み取れた。

また本プロジェクトにおいてこのつながりは，新たな活動や価値を生み出す基盤となっている可能性が指摘された。以上を踏まえ，本プロジェクトの将来像としての南信州―首都圏交流のあり方は，お互いが観光地として消費される段階から一歩踏み出し，パートナーやファンと呼ばれる人々同士が顔の見える関係の中で新たな活動や価値を生み出していくようなかたちとして展望されるのではないだろうか。そして各関係者は，このようにつながりの中から様々な動きが生み出されていくことを楽しんでいるかのように活動を展開しているのである。

謝辞

今回，報告書を作成するにあたって 4 名の方が調査にご協力くださった。飯田市でのインタビューは年明け 1 月の雪が舞う寒い日に実施された。そのような日でもあたたかく私を迎え入れてくださったかたつむりの会，飯田市観光課，飯田観光協会のみなさま，また調査終了後の食事会にお越しくださったかたつむりの会のみなさまにお礼を申し上げます。ありがとうございました。そして，私たち南信州サポーターの学生が本プロジェクトにかかわる中では実に多くの関係者のみなさまにお世話になってきました。ここで本プロジェクトの関係者のみなさまにも感謝申し上げます。これからもよろしくお願いいたします。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

引用文献・資料, Web ページ

飯田市観光課「KAIDO の利用について」（A 氏提供資料）
飯田市観光課「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト 2015」（A 氏提供資料）
中日新聞 2015 年 9 月 13 日
原田健太郎 “「南信州へおいでなんしょ！プロジェクト」についての報告” ＜東京大学教育学部社会教育学研究室 『未来へつむぐ飯田らしさ』, 2015＞
南信州新聞 2015 年 9 月 20 日
飯田観光協会・南信州広域連合「南信州ナビ」: http://www.ii-s.org/v3info/2015/09/103-1.html (アクセス日：2016-1-12)
KAIDO books & coffee HP：http://kaido.tokyo/whats.html（アクセス日：2016-1-28）
品川大井海岸芸者置屋まつ乃家 HP：http://www.geisha-matsunoya.com/rekishi.html (アクセス日：2016-1-12)
「広報いいだ」フェイスブックページ：
https://www.facebook.com/kouhouiida/posts/1154847944543809 （アクセス日：2016-1-12）
品川区 HP：http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/page000026300/hpg000026281.htm （アクセス日: 2016-1-12）
品川区 HP: http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/page000026200/hpg000026163.htm（アクセス日：2016-1-28）
品川宿場まつり HP：http://shinagawa-shukuba-matsuri.com/（アクセス日: 2016-1-12）
中日新聞ウェブサイト「旅行ナビ」：
http://tabi.chunichi.co.jp/odekake/151001nagano_iida.html （アクセス日：2016-1-12）
長野県 HP：http://www.pref.nagano.lg.jp/shinko/kensei/shichoson/shinko/shienkin/index.html（アクセス日：2016-1-29）

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

補論　飯田風越高等学校との交流から

新藤 浩伸

報告書内では，飯田高等学校，飯田 OIDE 長姫高等学校について記したが，同様に飯田風越高等学校にもフィールドスタディではお世話になった。国際教養科２年生と東京大学学生が交流し，下記の課題研究のことのほか，様々な意見交換を行った。その後，筆者は 2015 年 12 月 9 日に「『知のネットワーク』を活用した人材育成事業」の一環で呼んでいただき（本来ならば牧野教授が登壇予定であったが，どうしても日程の都合がつかなかった），同じ２年生と交流の機会をいただいた。ここではその模様を記しながら，まとめにかえて，全体をふりかえることとしたい。

１　長野県飯田風越高等学校の課題研究

昨年度の報告書に詳しいが，飯田風越高等学校国際教養科では，２年次に「課題研究」として地域の問題を探究するカリキュラムを実施している。今年度は以下のテーマに取り組んでおり，大きなグループに分かれて４人の先生が指導にあたる。下記の通り，経済，多文化共生，文化など非常に多様な切り口である。週に１回１年間をかけてテーマについて探究し，３月に発表を行なう。

かれらは１年次の３月にオーストラリアの研修に出かけるが，そこで広く海外を知り，さらにこの課題研究を通じて地元のことも学びながら，広い世界と自分の足元の両方をみすえることがめざされているといえる。

グループ１
飯田市が環境モデル都市であり続けるために／飯田市の人口／リニア開通後の飯田市／リニアと飯田市／リニア開通後の阿智村の進むべき道／リニア開通後の飯田市／世界の人口増加と飯田の食文化／飯田市の環境モデル都市について／リニア開通後の飯田はどうなるか／I ターンでの人口増加
グループ２
飯田の社会福祉／結について／自分たちの得意とするものは？（環境モデル都市，多文化共生）／飯田市と多文化共生／多文化共生／飯田下伊那地域に住んでいる外国人／飯田市の国際交流について／飯田市の住みやすさ（多文化共生）
グループ３
オーケストラと共に／飯田動物園／水引／現代の子どもと昔の子どもの違い／オーケストラと共に音楽祭について／お練り祭りについて／満蒙開拓／浜井場小学校の円筒校舎／郷土料理／住みやすさと美しさを兼ね備えたデザイン

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

グループ４
下條村の子ども支援による人口増加／Tour of Japan／ツアー・オブ・ジャパン／龍神について／天龍村のありが隊について／歌舞伎（下条歌舞伎と大鹿歌舞伎を中心に）／寿命／組子／大平宿の栄枯盛衰

（2015 年 8 月現在，飯田風越高等学校提供資料より）

２　交流のなかで：地域イメージの静かな変化？

これだけの多様なテーマを掘り下げている生徒たちに何を話したものか迷ったが，12 月の講義では，「飯田の可能性」と題して，筆者の研究も紹介しながら，文化の面で飯田のもつ面白さ，そして生徒一人ひとりが地域と関わってどう生きていくか，正面から問い，話し合いの時間をもってもらうことにした。

当日は，以下の流れで進めた。前半は講義に，後半はグループディスカッションと各グループからの発表にあてた。

１　研究紹介
教育学とは？／田舎で生まれ育って／文化とは？人の生きる活動の総体
２　なぜ飯田がおもしろいか
自治意識の高さ／外に開かれた風土／地域への愛着・・「ここで生まれてここで死ぬ」
３　リニア時代の飯田・下伊那のありかた
人の流れ，文化・・変わるものと変わらぬもの／「学び」と「交流」を大事にしてきた風土／地域の文化とともに生きる：海外の例／みなさんはどう生きるか？
４　皆さんと話してみたいこと
大学のイメージ，大学で学ぶことのイメージ／学ぶというのはどういうことか，何のために学ぶか／皆さんにとって飯田とはどのような場所か／出てもまた戻ってきたい場所か

当日の模様は南信州新聞 2016 年 12 月 18 日に紹介されているが，その記述を借りれば，「飯田の人がもつ学びの精神は『新しい物事に触れたい。それによって，よりよく生きたい』という，いわばミーハーな心だ。それはとても大事なもので，皆さんにも持ってほしい」というのが，筆者が伝えたいメッセージであった。河原俊文記者はそれをうけて「学ぶことは楽しいんだ。ミーハーたれ，今を生きろ」とまとめてくださっている。遠山霜月祭をモチーフの 1 つにしたとされる映画『千と千尋の神隠し』の主題歌「いつも何度でも」の一節「海の彼方にはもう探さない／輝くものはいつもここに／わたしのなかにみつけられたから」（作詞：覚和歌子）を紹介しつつ，海の彼方の広い世界に出た上で，いつか輝くものをみつけて飯田に帰ってきてほしい，と伝えた。進取の気性と足元の暮らしのどちらも大切にしてほしい，というメッセージである。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

グループワークをするときにはいつもそうだが，話し合いの時間がどうなるか，不安もあった。賑やかな場合でも，充実することもあれば，表面上な賑やかさなだけのこともある。静かで会話が少ない場合でも，本当に苦痛の時間になることもあれば，それぞれの熟考のひとときになることもある。しかし，その不安はまったく不要であった。話し合いと発表は，笑顔が絶えず大いに盛り上がった。話し合いの中で印象に残った意見も聞いてみたが，皆驚くほど周囲の意見をよく聞き，それを自分の意見とてらしあわせながらよく考え，何よりその時間を楽しんでいることが，当日の様子と書いてもらったワークシートからはわかった。飯田の人は議論が好き，と各所で耳にするが，高校生にしてその素地は十分であった。

もっと驚かされたのは，生徒達の飯田へのイメージである。当日のワークシートから，「皆さんにとって飯田とはどのような場所か」「出たとしても，また戻ってきたい場所か」という二つの質問への回答をご覧いただきたい。国際教養科の先生方のお許しをいただき，ここに出席者全員の回答を掲載した。同じ行が同じ生徒の回答である。

皆さんにとって飯田とはどのような場所か	出たとしても，また戻ってきたい場所か
大切なふるさと。田舎で星がみれて川で遊べて，山や緑がある大好きな場所。	戻ってきたい。戻ってきたくないとは思わない。若くて動けるうちは，世界に出て行って，いろいろな体験・活動をしたい。その後，大人になって飯田にもどってきてゆっくりと最後をむかえたい。
いやしの場	戻ってきたくない（就職後には戻りたい）
平和（だと思っていたけど，そうでもなくなってきてしまったかもしれない…）で地域の人がみんなあたたかくて心豊かに生活できるまち。でも，少し不便で楽しみが少ないのが残念。	戻ってきたいくらい大好きだけど，私の目指す仕事の関係上むりかな…と思います。それに，私の地区で老後をすごすには，不便な点がいっぱいあるのも戻る決心がつけられない理由の１つです。
老後は，飯田市に帰ってきて住みたいと思う場	戻ってきたいとは思わない。飯田には，自分の就きたいと思っている職があまりないから。
おちつく場所／実家がある	たまに戻ってきたい　子育てのとき
ふるさと／人々が温かい	都会の方で暮らすよりも，空気とかがきれいだから戻ってきたい。
何かと不便だし，大変だけど安心できる場所。←何もないからこそ	年をとったら戻ってきたい　まだ，わかんないけど…
田舎ならではのあたたかい雰囲気がある場所	気候もいい感じで，災害（台風，津波）もあまりなくて住みやすいのでここに住んでいたい。
いい所／人があたたかい／交通の便が悪い	老後はのんびり暮らしたいので戻ってきたい（自分が自分で行動できるうちは違うところに行ってみたい）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ふるさと／都会から帰ってくると，一安心するけど，ものたりなさも感じる／田舎	戻ってきたくても，就職場所が見つからないと思う
高校に入ってから関わるようになった。好きな場所	戻ってきたいと思う
地域の人達，みんな優しい。／あいさつしたら知らない人でもあいさつを返してくれる。／焼肉屋さんが多い。／交通手段が悪い。	戻ってこようとは思わない。
ふるさと／おちつく場所	自分が戻ってきても就職先もなく交通便も悪いため都会に定住すると思う
天龍村から通っているので通学先。遠い。	天龍村に戻るつもりでいるのでたまに来る程度でいいと思っている
生まれ育った場所　故郷	戻ってきたいけれど，働くことを考えるとまだ分からない。子育て？老後？
飯田出身ではないので故郷とは言えないけれど，自分にとって第二の故郷と呼べる場所	都会に出てまたこっちに帰ってきた時はぜひまた戻りたいと思う。
故郷であり一番落ち着く場所	定期的に戻ってきたいと思う
自然がきれいで食べ物もおいしい	今の時点では戻ってきたくない。
友達とかと一緒に遊ぶ場所	いずれは戻ってきたくなるかも？
生まれ育った場所／田舎／交通機関が不便	戻ってきたい。飯田で自分の英語教室を開く！
年寄りさんが集まる場	県外で退職した後に，戻ってきたいです。
自分の町よりもちょっと栄えてちょっとにぎやかな所／色んな事に取り組んでいるイメージ／人が多い	結婚したら飯田で子育てしたい。
そのままであってほしい。変わらないでいてほしい場所／すっごく好き／田舎でいてほしい	将来的には戻ってきたい。／子どもを飯田で育てたい。
生活をしている所…。もしかしたら，出ていってからわかることなのかも。	自分は気まぐれな人間なので，ずっと戻っていたいかと問われると明確にしにくいのですが，ちょくちょくなら，イエスと言えます。
私にとっての飯田市とは，ただの故郷。飯田を一度離れたとか，そのような経験がないので，飯田についての思いなどはとくにない。	分からない。そのときの状況による
不便	交通が豊かになったら考える。
今のままであり続けてほしい場所	戻ってきたくない！／飯田は良い所だけど，最近近代化・都会化してきてしまってあんまり好きじゃない／果物はとっても好き／海外に行きたいなあ～
居心地のいい場所／ふるさと	40 代ころに子供を育てるときに戻ってきたい。若い

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

	うちは外にいたい
人があたたかくていい場所	たまに帰ってきたい場所／海外でくらしたい
自然がゆたかでゆっくり安心して暮らせるところ／好きな場所	戻ってきたい／飯田市民として生きていきたい
中学までは，けっこう都会イメージで，今は不審者が多いイメージ。	戻ってきたい。／山菜が食べたい
卒業後，飯田を出たとしても戻ってこれる場所。戻ってきたい場所／何かあるというわけではないが，落ち着く場所。	今のところ戻ってきたい。
自然災害（津波，台風）などがほぼ無くて安全な場所／お祭りやイベントが多い／自然豊かで暮らしやすい	自然災害で困らないから家は飯田に建てたい／イベントがある時には戻ってきたい／都会には都会の良さ，田舎には田舎の良さがあるから，出ていったとしても戻ってきたい
とにかくあったかいところ。気候も！！（近所の知らない人なのに，朝会えば“おはよう”と言って下さったり夕方に会えば“おかえりなさい”とあったかく迎えてくれる）／自然豊かで風景がしみじみと心に刺激を与えてくれる。（キレイだなあ，生きていてよかったなあと思える）	戻ってきたいなあと思います。あったかいところで人混みもあんまりなく文化に充実しているので。
私は飯島町から通っているので，初めて自分の地域から離れて自分の地域以外の人々と交流し，学ぶ場所。／出身地ではないからか，なかなか思い入れしにくい場所。	そんなに戻ってきたいとは思わないけれど，遊びには来たい。
「ふるさと」と言える場所だけど不便な所。	戻ってきたい。子どもに同じ体験をさせたい。
今だに「母の地元」というイメージが強い。これから先，自分の故郷として認識する日は早く来ないかなぁ～？と，そんな気持ちを待ち構えているって感じ。	お祭りが好きなので，都会に出たら友達たくさんつくって，その友達にお神輿を担ぐのを手伝ってもらう（笑）→地区のおじ様方も喜ぶから。その時にはちゃんと戻る予定でーす☆
空気や風景がとてもきれいで，いろいろな人が深く結びついているイメージ	あまり戻ってきたいとは思わない。仕事をやめて，おばあちゃんになったら戻って来てもいいかなぁ。

（当日のワークシートより）

ここに付け加えることは何もない。それぞれの言葉で見事に飯田のよさと課題を語ってくれている。交通の便の悪さと職の問題がネックのようだが，それを除けば，深い愛着を飯田に寄せている。人のあたたかさ，自然の豊かさ。何かがあるから，便利だからというよりも，そうでない

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ところに愛着を寄せている。そして，いつか自分の子どもたちともその経験をしていきたい。そう書いてくれたことに深い感銘を受けた。

飯田の可能性についての話題の後だったので，誘導尋問的だったかもしれない。全員が地元志向ではないので，多様な思いをまっすぐにうけとめねばならない。多様性は許容されねばならない。しかし，それを差し引いて考えたとしても，これだけ地域に肯定的なイメージをもっていることに，驚かされる。終了後も，風越高校の先生方とそのことについてしばらく話し合った。

一昔前であれば，一度は田舎を捨てて都会に出て行くストーリーを描く若者も多かったことだろう。私事を言えば，農村出身の筆者もそうであった。今も当然それはあるし，若いうちはぜひ広く外に出ていただきたいと願っている。しかし，今回のかれらの言葉からは，若者の地域イメージは少しずつ変わっているのだろうか，と考えてしまうのである。もちろん，研究的な検証はなされなければならないが，ここではまずその課題提起だけをさせていただきたい。

もう一つ，私の考えが浅かったと思わされたのは，「飯田」は，生徒にとっては市街地というイメージで受け止められていることである。遠距離通学の生徒にとっては，「飯田」は「地元」ではない。もっと小さな生活圏があることに，思いが至らなかった。生活は小さな単位でなされていて，それが集まって「飯田」という地域ができている。

このほか，終了後に池野先生に送っていただいた生徒の感想を以下に抜粋する。

- 私は飯田市が好きです。その１つの理由として，地域交流の深さがあります。道を歩けば話がすすみ，祭のときは皆で楽しむ。都会にはない人との関わりが好きです。
- 飯田は，山しかない田舎だと思っていたけど，たった２週間，オーストラリアに行った時，やっぱり飯田の自然っていいなって思えた。一回，外に出ると今までの考えが変わるんだなと思ったから，ぜひ海外に行きたい。
- 私は，自分の住んでいるこの飯田に魅力を感じたことがありませんでした。今回の講話の中で，海外へ出てみて，地元の魅力を見つけた，というのはすごく共感できました。私も３月にオーストラリアへ研修しに行って来てみて，「やっぱり地元が良いな」と思えることがありました。普段生活しているうちは気づかないことに気づくことができました。また，後半の話し合いでは，自分では考えつかないような発想があって面白かったです。
- 私は下伊那がとても好きなのですが，歴史や地理的なことから人間性などできているのではないかということがなるほど。と思いました。外に出ないと分からないことは本当にたくさんあると思います。私はあまり外に出ていきたくないのですが，改めて違った考えをするために外に出てみることも大切だと思いました。
- 私の住んでいる地域も昔と変わっていて，今はもはや思い出せないくらいです。だから，リニアが通るのもうれしいし，楽しみな反面，変わりすぎてしまうのも，寂しい事だなと改めて思いました。将来，海外に出たいと考えていますが，外から見た日本，飯田を考えたいと思いました。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

・ 文化に優劣はないということをきいて，色んな面でそれぞれの良さがあることを知りました。それは文化だけじゃなく個人的な考え方とかでも当てはまることだと思うので，優劣なんてつけないで，色んな面をみて考えていきたいと思いました。色んな場所に行って，色んな人と会って考えをきいたりして，自分だけではみつけられないものをみつけられたらいいです。

（当日の感想より）

３　実習を通じて

この実習を含む教育学部授業「社会教育演習」を通じて，受講生は，実習前後の学習のほか，「ファストフード店での客の行動を観察」といったフィールドワークのほか，井上ひさし『吉里吉里人』（新潮文庫。さらにそれをもとにした『吉里吉里人異聞』の創作），神野直彦『人間国家』への改革―参加保障型の福祉社会をつくる』（NHK ブックス）の講読などを行ってきた。

例年のことだが，受講生には，とらえどころのない社会教育というものへの戸惑いもあったように感じられる。しかし，それぞれの疑問や課題意識に，報告書執筆を通じて向き合ってくれた。

毎年受講者のカラーによって，また同じ実践をとりあげてもその実践の深まりによって，書かれる内容も変わってくる。今年は，飯田の内部での交流，また内部と外部との交流，様々なつながりの形，といったことに，話題が多く集まったように思う。その結果，飯田以外の自治体との比較についての記述も，例年以上に多くなされたように思う。

内と外との関係という意味では，本項で記した風越高校の生徒達の声も，広い世界にのりだそうとしながらも身近な地域を大切にしたいという思いが込められた，貴重なものであった。本文中に記した飯田 OIDE 長姫高等学校，飯田高等学校の生徒達の様子とあわせ，飯田の未来は明るい，と感じている。

地域は，四季折々，あるいは数年単位での短い周期から，一人の人間の生命をはるかに越えた長い周期まで，様々な周期のなかで変わっていく。数年前には夢物語のようであったリニアも，徐々に現実のものになりつつある。飯田がこれからどう変わっていくか，また今回お世話になった高校生たち，受講した大学生たちが今後どう変わっていくか，楽しみに見守りたい。

本稿執筆にあたり，お世話になった飯田風越高等学校の生徒の皆さん，先生方，飯田市職員の皆様に御礼申し上げます。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

結び

佐々木 雄大

この論集を読んでくださった皆様には，“飯田”というコミュニティが，いかに多様なアクターによって形成されているかを，おわかりになっていただけたかと思います。そして，“飯田”というコミュニティの根底にある「地元を大切に思う気持ち」が，はっきりと見えてきたのではないでしょうか。

一口に「飯田市民」といっても，その一人ひとりを一様に語ることはできません。生まれた場所，経歴，職業，趣味，将来の夢，……といったさまざまな要素が，その人の人生を形作ります。それ故に，多様な考えを持った人々が，多様な場で，多様なやり方で，自分や同郷の人々の「よりよい暮らし」を実現しようとしている，そういった「小さな島宇宙」が重なり合ってできたのが，“飯田”というコミュニティのありのままの姿なのだと，私は思います。

“飯田”について語る上で，特筆すべき点が三つあります。

一つ目は，「地域のためにやらねばならないことだから，自分たちがやろう」「こんなことをやると面白そうだから，自分たちでやろう」という，「地域住民の主体性」です。「行政に強制されて」といったネガティブさは極めて薄く，また仮に始まりは強制されたものだったとしても，次第に参加者が「主体的に取り組むだけの魅力」を見出していけるようになっているのが，飯田の活動の特徴だと私は考えます。行政は裏方のサポートや活動の土台作りに徹し，活動自体はあくまでも，「自分たちがやろう」という，住民のポジティブな精神に支えられている。この構造が，飯田のまちづくり（ハードだけでなく，ソフトにおいても）の原動力となっているのではないでしょうか。

二つ目は，多様性を尊重し，自分の「島宇宙」の在り方を絶対視しないという「寛容性」です。飯田を好きになること，飯田に留まること，自分たちの活動に参加することを強制せず，また，自分たちに同調しないものを排除することもない。飯田の方々の意識には，そういった「柔らかさ」があるように思われました。

三つ目は，自分の住むまち・飯田のことを，心から大切に思う方々が，本当に多いということです。自分のまちに価値があると思えるからこそ，「自分のまちをよくしたい」と考えることができるのだと，私は思います。

飯田では，強力なリーダーが中央集権的に改革を進めるというよりは，さまざまな地域住民の方々が，自主的に取り組みを始めています。また，先述のように，自分たちの思想や手段に同調を強いたり，同調しなかった者を排除したりする空気も，かなり薄いようです。それ故に，“飯田”というコミュニティの形は曖昧かつ複雑であり，私たちは当初，“飯田”の実態を上手くとらえられずにいました。しかし，各自が追加調査を進めていく中で，それぞれのアクターの特性が明確になりました。そして，各報告書を論集として一つにまとめたときに，多様なアクター同士の関

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

係，“飯田”の人々の中に共通しているものが見え，“飯田”の全体像が浮かび上がってきました。

“飯田”というコミュニティがこのような形を持つに至ったのは，「住民が知恵を出し合うことで，幾多の困難を乗り越えてきた」という歴史によるところが大きいようです。このことから「結局，“飯田”というコミュニティは，他所では再現不可能なのではないか」と考えることもできます。しかし，「“飯田”というコミュニティの完全再現」を目指すのではなく，“飯田”の良さを取り込みつつ，足りないものは違った形で代替し，その地域独特の良さも組み込んで，その地域に合った「ここにいたい」と思えるコミュニティを創っていく，そういったアプローチも可能なのではないでしょうか。“飯田”をめぐる今回の研究は，この新たな可能性を示唆しています。

最後に，それぞれの生活や仕事がある中で，外からやってきた何も知らない我々学生を快く出迎え，学びの機会を与えてくださった飯田の方々に，改めて感謝の言葉を述べさせていただきます。本当にありがとうございました。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

飯田を訪れての感想・メッセージ

浅沼百合美

飯田は豊かな自然や美味しい野菜，お肉，りんごなど多くの魅力がありますが，私が最も印象深かったのは人でした。夏に訪れた時も冬に訪れた時も，飯田の方々のあたたかさや元気の良さからは言葉にできないようなパワーをいただきました。飯田に生きる様々な方との出会いから，社会教育や地域福祉といった学びのみでなく，自分はどう生きたいかということを考えてしまうような貴重なお話しを伺うことができ心に残る思い出となりました。多くの飯田の方々にたくさんお世話になり，本当にありがとうございました。

石原江理

飯田を訪れて感じたことは，当たり前のことかもしれませんが，まちづくりに答えもなければ正しい方法があるわけでもないということです。多様な価値観を持つ人々が集まってまちを作り上げていくには，あらゆる側面からのアプローチが必要で，「理論」では説明できないけれどもそれらがうまく組み合わさって飯田のまちができているのだと思います。体験活動でお世話になった方々，インタビューに応じてくださった飯田市役所の方々，本当にありがとうございました。農家民泊で作った苔玉は今も元気です！

大野公寛

一昨年度のフィールドスタディ以来，もう何度も飯田を訪れていますが，飯田へうかがうたびにとてもわくわくします。それは，飯田で出会った方々に会えるから，飯田の方々からいい刺激を受けられるから，元気をもらえるから，なのですが，そのように飯田のみなさまとかかわることできたことを私はとても感謝しています。これからもそのわくわくを楽しみながら飯田とかかわっていきたいと思っています。ありがとうございました。

小澤五敬

自分は，はじめはなんとなく旅行のような感覚で飯田にお邪魔したのですが，日本の一地方にこんなにも頑張っている人々がいる，それも辛くても歯を食いしばってというよりは自分たち自身が楽しみながら様々な活動を行っているという事実を学んでとても感銘を受けました。なかでも自分が関心を持ったのが飯田 OIDE 長姫高校で行われている地域人教育プログラムです。飯田の次世代を担う高校生たちに地元と触れ合う機会を与え，自信を持って飯田出身だと言えるように共同体意識を育みつつも地域における自分の役割を意識し自己肯定感を得ることで自己実現にもつながっている教育プログラムであり，このために奔走している先生方にお話を聞いてとても勉強になりました。本当にありがとうございました。実は先日，彼女と飯田を観光したのですが

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

彼女も楽しんでいました。またぜひ近いうちに伺いたいと思います。そのときはまた宜しくお願いいたします。

亀岡恭昂

飯田という街でもっとも鮮明に記憶に焼き付いているのは，学び合う人々のコミュニティが存在していたことだ。りんご並木まちづくりネットワークを紹介してもらったときに出逢った高校生と翌日に高校で再び出逢ったかと思えば，行政の方が至るところに顔を出し縁の下の力持ちとなっていることも随所で見られた。主体的にプレイヤーになる人を取り巻くコミュニティがあり，プレイヤーも謙虚に他者から学ぶ姿勢がある光景は，とても美しいものであると感じた。

河北有紀子

夏のフィールドワーク，そして冬の追加調査では，多くのみなさまに大変お世話になりました。本当にありがとうございました。貴重な学びの機会を得て，とても充実した時間をすごすことができました。飯田では新しい発見ばかり，学ぶことばかりで，自分の世界が大きく広がったように思います。

私は飯田にゆかりはありませんが，そんな私が訪れてもほっと落ち着くことのできる，不思議な包容力を持ったまちだと感じます。美しい景色やりんご並木，そしてなによりも，活動的で，楽しそうで，あたたかい人々のことを思い出すと，今でも自然と笑顔になります。
飯田が，これからもずっと，素敵なまちでありますように。

熊谷理人

社会関係資本や地域のつながり，などといったことがしきりに大事だと言われている昨今，私はそれらの実態についていまいち実感できていませんでした。ですが，飯田において当事者の取り組みやお話を見聞することで，以前よりリアリティをもってそれらを理解することができたと思います。もちろん今回の飯田実習ではポジティブな側面を中心に触れてきたということはありますが，大都市圏からはバスで数時間かけなければ来られないこの土地では，確かに有機的な人間同士のつながりが存在し，それに基づく豊かな人間形成がなされているという印象を受けました。

と同時に，どことなく幸せそうな雰囲気を漂わせているこの土地の人々の生き方は，今まで自分が生きていたものとは対極に位置するものであるということにも気づかされます。ずっと私立の進学校に通い，地元への帰属感もあまりないまま受験勉強に勤しみ東大に入学する…という，メリトクラティックな価値観からすればそれを追求した生き方を送ってきたとも言え，それはそれで誇るべきものであるのかも知れません。しかしその一方で，そのような人生とは対極に見える飯田の方々の生き方に羨ましさを覚えるというのも事実です。言い換えれば，飯田実習がこれまでの自分の生き方に対してアンチテーゼとして現れているとも言えそうです。この実習を通じ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

て，自分のこれまでの人生を否定し，相対化することで生きる上での幸せとは，目的とは何なのかということを改めて考える貴重な契機となりました。実習に関わってくださった飯田の方々には深く感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

櫻井美果

飯田への来訪は8月の実習が初めてだったのに,1月に改めて調査に伺った時には「帰ってきた」「懐かしい」という感覚を味わいました。それだけ，飯田には全ての人を受け入れてくれる“あたたかさ”があったのだと思います。初体験の農家民泊は特に印象的でした。

我々が目の当たりにした“飯田”は無論飯田の全てではありません。ですが，飯田の方々がそれぞれの立場で飯田について考え，楽しく日々の生活を送っている様子を垣間見ることが出来ました。見ること聞くこと全てが珍しく，大変貴重な経験になったと思います。お世話になった全ての方々に心から感謝の意を申し上げたいです。ありがとうございました。

佐々木雄大

「自分たちのまちのことは自分たちで」という意識，それが他ならぬ飯田というまちの素晴らしさであり，アイデンティティなのではないかと，私は思います。

私の実家が岩手県の小さな地方都市にあるので，飯田を訪れた時には，飯田市内の景観，まちづくりに関わる人々の意識，その根底にある風土と文化を，地元と比較しながら過ごしていました。そして，先程述べたような「強い地元意識」の存在に驚くと共に,「飯田を飯田たらしめる地元意識」に関心が芽生えました。

「学校教育を通して，地域を豊かにできる力を持った人を育てる」というのが私の目標です。そのため，今回は飯田 OIDE 長姫高校の地域人教育に的を絞って研究しました。しかし，飯田の一歩進んでいる点は，地域人教育のような学校発の教育活動に留まらず,「学校教育」の枠を超えた「生涯学習」によって自治意識が育まれ,「好きな地元をよりよくしたい」という思いの元に，多様なアクターが関わっているというところではないでしょうか。今後，より広い視野で「教育」を捉え，地元も含めたたくさんの地方を豊かにしていくために，飯田というまちの在り方には引き続き注目していく所存です。

今回の調査では各所でお世話になりました。特に，追加調査でお邪魔した飯田 OIDE 長姫高校の先生方，高校生の皆様には感謝してもしきれません。至らぬ点も多々ございましたが，この報告書を以てお返しとさせていただければと思います。本当にありがとうございました。

志津田萌

今までずっと東京にいて，夏休み田舎に帰る習慣もなく，かろうじて隣の家の人となら挨拶を交わす程度，という私は今まで，地元に関わりたい，地元を愛するという感覚が持てずにいました。飯田から帰ってからは，自分が住んでいる自治体のイベントや他の地域で行われるプログラ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

ムにも興味を持つようになりました。飯田で感じた，ひとくくりの言葉では表せないあたたかさも違和感も，自分の足元や他の地域をみることできちんと相対化したいと思います。自分が「当事者」（マジックワードかもしれませんが）になることの重要性というのが，ようやく実感できるようになってきたかもしれません。あたたかく迎えてくださった飯田の皆様，ありがとうございました。

末光翔

飯田は，なんというか，訪問すればするほど味が出るスルメのような街な気がします。来るたびに発見があるというか。なんでなんでしょうね。有機的な街というのか，変化し続けているというのか。飯田出身の学生や若い人がいろんな活動をしていたり，その一方で変わらず大事にされていることもなんとなく共有されていたり。一人ひとりの方々がやりたいことをやっているんですけど，どこかまとまった方向性があるような気もする。それらを共有可能な言葉にしていくのが自分たちの役目なはずなんですけど，なかなか難しいですね。

そんなこんなな，僕も含めて外部の学生たちをいつも快く受け入れてくださる飯田の方々に，改めて感謝しなければな，という思いです。今回の調査実習にご協力いただき，大変ありがとうございました。また個人的にも，引き続き飯田に遊びに伺いたいと思いますので，ぜひよろしくお願いいたします。

田川由希子

私が飯田市を訪問させていただいて感じたことは，市民の皆さんが飯田市を愛し，積極的に地域のイベントやコミュニティに関わっていらっしゃるということでした。中学生が大事に育てたりんご並木を地域の皆さんが大切にしている姿には感動すると同時に驚きも感じました。地域の大人が地域の子どもの活動をあたたかく見守るということは当然のことかもしれませんが，あるコミュニティに属す人数が増えれば増えるほど難しいことになります。それを一つの市が可能にしているという背景にあるのは，飯田市の皆さんの地域を大切にする気持ち，活性化させたいという気持ち，そして次世代の子どもたちにも地域を愛して欲しいという気持ちだと感じました。

また，今回の実習では高校を訪問させていただきましたが，将来飯田市に何かを返したいという気持ちの強さと，それを実行する能力の高さに感心させられるばかりでした。実習を終え，私の地元である三重県伊勢市の両親に飯田での経験を話したところ，現在飯田市と伊勢市が姉妹都市であるということを知らされました。長期休みにお互いの市の子どもたちがそれぞれの市を訪問しているということを知り，飯田市は内部のコミュニティだけでなく，外部に対しても積極的に影響を与える立場にあると感じました。現在，地方から都市への人口の流入が進み，多くの地方都市のパワーが弱くなっています。そのなかでも地域づくりに成功されている飯田市の取り組みの例は各地に良い影響を及ぼすと思います。これからも飯田市をはじめとして，飯田市から知恵やパワーをもらった各地方都市が活性化していくことを願っています。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

武田周平

夏の飯田でのフィールドワークは，非常に貴重な体験を数多くさせて頂き，印象深いものでした。中でもやはり，まちおこしに対する飯田の皆さんの熱意が強く伝わってくる様々な取り組みの紹介が興味深く，強く印象に残っています。

追加調査・調査書執筆を通じて地方の高校生の地域意識など実習では触れることのできなかった部分に踏み込むことができ，新たな発見を得ることができました。

フィールドワーク・調査にご協力してくださった飯田の皆様，飯田高校の塩野入先生，生徒の皆様，ありがとうございました。

竹本涼太

再調査の際，数時間ですが１人で観光しました。どうするか考えていた私に観光案内所，人形美術館の職員の方に話しかけていただき楽しい時間を過ごせ，またバスに遅れそうな時には和菓子屋の方や道行く方が親切に道を教えてくださいました。どなたもとても気さくであたたかさを感じました。市役所職員の方がとても真摯に対応してくださいました。お世話になりました。ありがとうございました。

丹田桂太

地方出身の私にとって，飯田はどこか懐かしさを感じる場所でした。そこで出会う方々がみな熱い思いを持って楽しみながら活動されているのが印象的でした。今回お世話になったみなさんの「生き方」は本当に魅力的で，それはまた，これからの社会をつくっていく可能性を持つもののようにも感じられました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

永野恵

飯田に住んでいるわけではなく，数回訪れた私たちがその姿を描き出すということはとても難しい作業でした。ですが，実際自分の目で見て，感じそして外からではありますが自分なりに考えることができたということは，私にとって大きな財産となりました。

なによりも，初めて行った私を快く受け入れてくださった飯田の方々に出会えたことを幸せに感じています。調査に関わってくださった方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

名倉早都季

ゼミ合宿と，追加調査と，二回，飯田に行くことになるのかなと思っていた昨年８月の私はどこへやら，来月は二回飯田に行く予定があることが驚きです。初めは自分の関心あるところをただ「調べてみたい」という気持ちだったのが，飯田を訪れそのあたたかさにふれるうちに，いつ

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

しか飯田の方々に何か恩返しをしたいという気持ちが強くなりました。

イベントに来た生徒がなんやかんやで片づけを手伝わされていたり，ひょんなことからどんどん飯田の人とつながってしまったりと，人をあたたかく，ゆるく，でもぐっと引き込む力が飯田にはあるのではないかと思います。

お世話になった方々に心から感謝します。

林恵里香

飯田で一番感じたことは，なぜそこまで財政に余裕があるように見えるのか，そして地方にはまだビジネスチャンスが多く転がっているのだ，ということです。前者については，あの施策を他の自治体で真似することができるかといえば，それは難しいと感じました。エネルギーと能力を両方持った市長がいて，土地を基盤として生活が成り立つため社会的活動に時間を割くことのできる市民がいてようやく成り立っているものと感じました。ゆえに，地方創生を考える上で自治体の構成員が大きな要因となるとともに，恵まれない自治体においてどのようなモデルが有効かは，検討すべきことと思いました。

後者について，最近ではスタートアップが乱立し渋谷や六本木ではビジネスの重複も起こっているように感じますが，地方ではまだ新しいビジネスの起こし甲斐があると思いました。現に手を加えられていない分野が多くあるため，新たに IT 分野でアイディアを出すよりはよっぽど簡単に成果が出ると思います。既得権益についてなど，課題はあると思いますが。

福田満里子

飯田市を訪問したことで，新たな価値観を得ることができました。私は生まれも育ちも東京で，その他の土地で生活をしたことがなかったので，地方での暮らしがどういうものなのか，故郷への思いがどういうものなのかなどを理解できていなかったからです。調査では野牧専門官に大変お世話になりました。率直な質問に真摯に答えて下さったことを感謝しております。もし，希望どおり役人になることができたら，地域に住む人々の声に耳を傾けながら仕事ができる人間になろうと思います。

福森敏也

今年度でフィールドスタディへの参加は 2 回目となり，これまで計 6 回飯田市に伺う機会がありました。一昨年の夏に初めてお伺いした際には，まだ飯田のことについてほとんど何も知らず，初めての場所に行き初めてのことを知る面白さがありました。あれから 1 年半が経って，飯田のことはかなりよくわかるようになり，地図を見なくとも街中を歩けるようにもなって，あのときの新鮮味に関しては，残念ながら少し薄れてきてしまいました。しかしその代わりに，飯田の皆さんにまた会いに行ける喜びを今は感じており，「また来たのか！」と僕のことをあたたかく迎え入れてくれる人もどんどん増えてきて，初めて行ったときよりもさらに楽しく飯田に足を運んで

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

います。大学でこんなに素敵な第二の故郷との出会いがあるとは思っておりませんでした。また来年度もきっと飯田へ行きますので，みなさんまたお会いしましょう！

片野幹

当初は地域おこし町おこしというものに懐疑的でしたが，今回の実習を通して今までの価値観がいい意味でひっくり返されました。ありがとうございました。

堀菜保子

徳島という地方出身の私にとって，地域の活性化のために大きく尽力されている飯田の皆様の取り組みは大変興味深いものでした。

若者の地方離れが進んでいて，そして私もその一員という中，高校生が真剣に地元飯田の将来を見据え，飯田のために何かをしたいと考えている様子には，特に心をうたれました。自分の未来も少し考えさせられました。

民泊もとても良くしていただき，飯田への愛やご夫婦の素敵な馴れ初めを聞けたり，素敵な時間を過ごせました。

お世話になりました。本当にありがとうございました。

三浦真尚

飯田について最初に持った印象は，どこか懐かしさのようなものを感じつつも正直少し寂しいものでしたが，お話を聞かせていただいて，地域全体での取り組みの活発さに驚かされました。特に高校生など若い世代の方々も何かしら地域のことを考えているのが印象的で，地道な活動が根付いていることを感じました。お世話になった飯田の方々，本当に貴重な経験をありがとうございました。

水谷七海

飯田の町の中で，大人同士だけでなく，高校生など若い人とも交流があることが印象深く，心に残っています。そんな環境がうらやましいなと思いました。実際に訪れて，お話を伺ってはじめて気づいたこと，わかったこともたくさんあったと感じています。お世話になりました飯田市の皆さま，ありがとうございました。

武笠真実

私が飯田への訪問を通して一番感じたのは,【まちの人が元気ならばまちも元気になる】ということです。誰かがまちを良くしたいと思う気持ちは周りの人へも伝わり，それが結果としてまちというカタチとなって表れているところに魅力を感じました。まちというものは，ハード面よりもソフト面で形作られていく部分が多いと思います。飯田の場合，例えば，りんご並木に，まち

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

のひとみんなの「りんごはまちのシンボルだ」という気持ちの面での価値が加わることで，その場所がより素敵な場所になっているように感じました。

村上友理

飯田に伺うのは初めてでしたが，もしかしたらずっと昔にも来たことがあるのではないかと思わせるような，あたたかい方々に出会うことができました。そんな心地良さと，農家民泊でいただいた美味しい五平餅が，とても良く印象に残っています。大学の教室では学ぶことのできないたくさんのことを教えていただきました。お世話になった飯田の皆様，本当にありがとうございました。

八木舞子

8 月に実習で初めて飯田を訪れました。豊かな自然や田舎の祖父母のような農家の方のあたたかいおもてなし，市民の方の多彩な活動など飯田のたくさんの魅力に触れました。しかし，帰途につくころ，私のなかにはたくさんのもやもやしたものが残っていました。飯田の社会教育の何が優れているのか，その秘訣は何なのか，なぜ楽しそうに活動することがまちおこしにつながっているのか，地域人教育は地域の外で活躍するという自己実現を阻むものではないのか…この報告書ではその「もやもや」について，自分なりに考えを深めてみました。
調べるうちに，飯田のよさをじわじわと感じるようになってきました。どこにいても山に見守られているような，穏やかで文化の香り高い飯田のまちが，外から来た私たちにもあたたかく接してくださった飯田の皆さまが，これからも元気であってほしいと思います。

実習でお世話になりました飯田の皆さま，追加調査にご協力いただいた木下副館長にお礼申し上げます。

ありがとうございました。

山崎恒宇

正直なところを申しますと，飯田でフィールドワークを行うことに対して最初は「わざわざ訪問して学ぶことそんなにあるの？」と思っていました。地方のことなんて書籍とか論文とかで学べば問題無いだろうという気持ちがありました。

しかし，夏に訪問して多くの方のお話を聞いたり，体験活動をしたりする中で，具体的な取り組み事例の詳細や飯田の人の思い・情熱といったものを実感しました。その後の追加調査も含めて，書籍や論文といった文字情報だけでは捉えられない情報を学べたと思っています。

今回の飯田実習では多くの方にお世話になり，様々なことを教えていただきました。本当にありがとうございました。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

若林陽子

私は今回の実習で初めて飯田というまちを訪れました。行政や美術博物館，学校関係者の方，農家民泊やりんご並木まちづくりネットワークの方々など様々なかたちで飯田の地に関わる人々の活動を，飯田の全体像の中に位置づけ，地域社会がつくられる姿を時間的あるいは空間的広がりに従って眺めることを体験したように思います。

地域の姿を捉えることはやはり容易ではありませんでした。ある地域の特徴について部外者である私がストーリーを描くことへの違和感も抱きましたし，ましてやリニアの通るこれからの飯田の理想像など少し飯田を訪れた程度で描けるものではありません。

しかし，地域で暮らす人々の動きや意識への観察はあくまで冷徹に現実的に，でも理想や人々のあたたかい笑顔を忘れず，絶えず今とるべき針路を見定める飯田は，これから私が地域を眺める視点に大きなヒントを与えてくれたことは間違いありません。今回の調査にご協力頂いた方へ感謝を申し上げるとともに，全ての出会いが実習参加者や飯田の人々にとって何らかのかたちで実を結ぶことを願います。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

伊那谷の風にふれて：飯田実習の感想

松山 鮎子

今年の実習でとても印象深かったのが，立秋の青空に高らかと聳える風越山の光景です。風越山は，信濃国の歌枕で「かざこしやま」とされ，その名は，山頂のくぼみを風が吹き越えるところに由来するそうです。また，この山は，私たちが実習でおとずれた風越高校をはじめ，市内の小中高校の校歌に歌われています。そのようなところから，飯田の方々にとって，風越山が地域を象徴する山であると伝わってきます。

この話とかかわって，滞在中のある日，移動の車中で風越高校出身の方に，母校の思い出話をうかがったことがありました。校舎から一望できる風越山の絶景，夏でもクーラーいらずという，山から教室へとどく心地よい風。これが，その方にとって母校の一番好きなところだったそうです。

思い返してみれば，飯田ではこの「風」にまつわるエピソードにふれる機会が多い気がします。たとえば，市内の滝の沢公園に隣接する権現山白山社では，毎年 9 月に風神祭がおこなわれます。ここにもやはり，風が関係しています。山々にかこまれた伊那谷で暮らしをいとなんできたことが，土地の方々の「風」にたいする感性のするどさを育てたといえるかもしれません。

風といえばまた，飯田には，「風土」という地域の特性をあらわすことばがあります。風土の「風」は，地域の外からの来訪者，「土」は，風がはこんでくるものとともに踏み固められた土地に暮らす人々。この両者の出会いによって，飯田の風土が生まれるというのです。これは，実習をとおして現地の方々の旺盛な好奇心と，よそ者をあたたかく受け入れてくれる心持にふれるたびにふと思い出される，私の好きなことばです。

現在の伊那市のあたりは，江戸時代，高遠藩によって治められていました。徳川家光の実弟で，後に会津藩の名君と謳われた保科正之が 2 代藩主をつとめていることから，高遠藩の治めた伊那は由緒ある土地柄だったと考えられます。それゆえ，当時は学者や文化人が多く逗留し大いに栄えていたといいます。これに加えて，伊那谷は天竜川を中心に東西南北の街道が交差する，人や物資の往来がさかんな地域でした。ゆえにそこは，いわば文化の十字路といえる場所で，今でも各村に伝わる郷土の祭りには，全国各地の文化的影響が色濃く残っているそうです。

この土地の風土をかたちづくる上で，古くから，客人によりもたらされる知識や文化が大切にされてきたこと，それをよくあらわすのが，伊那谷と井上井月をめぐるエピソードです。「漂泊の俳人」と呼ばれる井月は，芭蕉に心酔し，その生き方や思想を実践しようとした人物です。そして，幕末から明治にかけおよそ 30 年，彼は伊那谷を放浪し，この地で生を終えました。

井月は，雨露をしのぐ家はもちろん，妻子ももちませんでした。着の身着のまま乞食のような風体で，あの家この家と泊まり歩いたといいます。また，彼は無類のお酒好きだったそうです。「酒を飲んでは一二句書き，また飲んでは寝てしまふ」[1]，「春になると，道々ノビルを摘んで，

COPYRIGHT © 東京大学・大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース・社会教育研究室

タモトに入れてくる。裏口からあがりこむが，昼間はみんな野良に出て誰もいない。子供にいって，ミソとトックリを持ってこさせる。ノビルにミソをつけて，陽溜りの縁側で呑みはじめる（中略）夕方家のものが帰るころには，出来上がって座敷で寝こんでる。そのうちにむっくりと起きて，また呑んでまた寝る」[2]。回想のなかの井月の姿からは，お酒に目がなく，自由気ままに生きた彼の人柄が想像されます。

みすぼらしい身なりで，ときに村の子どもたちから石を投げつけられ，からかわれることもあった井月。門前払いされてもおかしくない彼を，伊那谷の人たちはどうしてあたたかく迎え入れ面倒をみたのでしょうか。その理由の一つとして考えられるのが，芸や学問を尊重する人の気風です。

＊春の句	翌日（あす）知らぬ身の楽しみや花に酒
＊子どもの誕生	直ぐなるを見る竹の子の育ちかな
＊西行の命日によせて	今日ばかり花も時雨よ西行忌

これらの句は，いずれも井月が詠んだものです。彼はこのように，四季折々の伊那の風土や自然をはじめ，訪問した家を寿ぐ句や死者への追悼句，自身の生活や人のいとなみを俳句にしてきました。また，井月は学識が深く，書も巧みであったといわれます。その達筆な書は，彼が人知れず世を去った後も，それぞれの家に大切に保管されていました。それが大正期になって，伊那出身の医師であり俳人だった下島空谷によって句集としてまとめられ，出版されます。今日私たちが彼の俳句を目にすることができるのは，まさにそのおかげといえるでしょう。

今回，伊那谷と井月のことを調べていてたまたま知りましたが，「ほかいびと-伊那の井月」（2012 年公開）という映画があります。井月役の舞踊家の田中泯さんは，どことなく浮世離れした雰囲気なので，俗世とかかわりながらも別の次元で生きている主人公を演じるに，まさにはまり役だと感じます。自分がどこで生まれどこから来たのか，井月はその境涯についてほとんど語りませんでした。そのため，北村皆雄監督によれば，現在の井月像はどれも事実なのか作者の想像なのか，判然としないところがあるといいます。ただ，だからこそ「井月は，自分にひきつけた分だけの井月が浮かび上がってくる。そこがまた井月に接する楽しみであり，魅力」なのだそうです[3]。

学芸を重んじる風土にはぐくまれた住民たちの目に，井月の存在がどのように映ったのか。映画において描かれたのは，訪問した家へ幸をはこぶ客人，「ほかいびと」としての彼の姿でした。このように謎めいた井月の生涯を想像することは，また，彼を受け入れその才能を愛した，伊那谷の人たちの生き方にふれることでもあると思います。自然環境としての風のめぐみを敬い，同時に，来訪者のもたらす風，つまりさまざまな人のつながりによって生まれるもの，それを敏感に感じとり土地に根づかせる感性。これまでお会いしてきた飯田の方々にも，そうした感性がどこか受け継がれている気がするのです。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

以上が，3 回目の実習を終えてみて私が学んだことでした。おとずれるたびに，新たな発見の喜びを与えてくださる現地の方々と飯田の風土に，心からの感謝の気持ちをこめ，筆をおきたいと思います。

［注］

1. 瓜生卓造『漂鳥のうた：井上井月の生涯』牧羊出版，1982，p.67
2. 同上 p.71
3. 北村皆雄・竹入弘元監修『井上井月と伊那路をあるく：ほかいびとの世界』彩流社，2011，p.16

［おもな参考文献］

・北村皆雄『俳人井月：幕末維新　風狂に死す』岩波書店，2015
・三隅治雄『芸能の谷〈伊那路〉第 2 巻・芸能のパノラマ』新葉社，1986
・飯田市美術博物館編『伊那谷の文化財：飯田下伊那の特質を探る』飯田市美術博物館，2002

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

謝辞

李 正連

今年度も牧野市長のご講義で幕を開き，農家民泊，五平餅づくり体験，飯田風越高校及び飯田高校の高校生たちとの交流会等の体験も適宜挟みながら，飯田市公民館及び美術博物館等の行政による取り組みをはじめ，通学合宿，地域人教育，人形劇を通じたまちづくり，オーケストラと友に音楽祭，りんご並木ネットワーク等の住民による様々な取り組みについて勉強させていただきました。

今回初めてプログラムに組み込まれたこともあってか，今回の実習では飯田 OIDE 長姫高校の「地域人教育」に惹かれた学生が多くいました。また，今回紹介された取り組みや活動とつながりにくい，もしくは孤立しやすい人々（例えば，外国人や独居高齢者世帯，貧困世帯など）にも目を向けるべきだという学生が多くいたのも印象的です。このような学生たちの多様な関心テーマに合わせ，今年度も調査実習時のみならず，報告書づくりのための追加調査にまでご協力いただいた飯田の皆様に心から深く御礼申し上げます。

農家民泊の方々とお別れの時の名残惜しがる表情，ごんべえ邑で五平餅やソーセージづくり，魚の塩焼きに夢中になっていた真剣な表情，高校生たちと交流していた時の楽しそうな表情，行政や住民による様々な取り組みを興味津々に傾聴する表情など，普段大学では見られない学生たちのいろいろな表情が見られるのも飯田実習の醍醐味の一つです。今年度も飯田の皆様のおかげで学生たちの豊かな表情を見ることができました。本当にありがとうございました。

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室

執筆者一覧

牧野　篤	教授
李　正連	准教授
新藤　浩伸	講師
松山　鮎子	特任助教
浅沼　百合美	教育学部実践・政策学コース 3 年
石原　江理	同上
小澤　五敬	同上
河北　有紀子	同上
櫻井　美果	同上
佐々木　雄大	同上
志津田　萌	同上
武田　周平	同上
竹本　涼太	同上
名倉　早都季	同上
福田　満里子	同上
水谷　七海	同上
八木　舞子	同上
山崎　恒宇	同上
若林　陽子	同上
福森　敏也	教育学部実践・政策学コース 4 年
大野　公寛	教育学研究科生涯学習基盤経営コース 1 年
末光　翔	同上
丹田　桂太	同上
永野　恵	同上

（2015 年度ティーチングアシスタント：大野 公寛，末光 翔，丹田 桂太，永野 恵）

COPYRIGHT © 東京大学･大学院教育学研究科･生涯学習基盤経営コース･社会教育研究室